

---

# 蒼空への扉.GGM

とー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼空への扉・GGM

### 【NZマーク】

N9761W

### 【作者名】

とー

### 【あらすじ】

あつとそこにあるはずの情け。この作品は『蒼空への扉・M DP』の続きとして書かせていただいております。まずは、前作をご覧になられることをお勧めいたします。

## 諸事情がありまして

その部屋は、ピンク色だった。

ピンク色と言つても、すべて淡いピンクで統一されていた。壁紙も、飾られているぬいぐるみも、かわいらしさな目覚まし時計も。そして、テーブルクロスもピンク色だった。

しかし、その部屋には、一点だけ淡いピンクではなく、黄色が存在していた。意図的にあるわけではなくて、その黄色には意志があった。その黄色は、綺麗な姿勢で、淡いピンク色の椅子に、腰掛けていた。

対面には、ピンク色が似合つ少女が、その黄色に目をついていた。かわいらしい部屋に一つ、場違いなほどに、少しばかりかわいらしいとは無縁の生き物がいた。淡いピンク色が似合つ少女は、こうやの黄色に言つた。

「そろそろ学園祭なんだけどね？」でも、中間試験も近いの。どちらを優先した方がいいと思つ？おうりゅう『黄龍…』

少しばかり楽しそうに、悩みとは無縁の笑顔を浮かべて、その少女は、黄龍と呼んだその黄色に言つた。

黄龍は、姿勢だけはいいものの、背中から蝙蝠のような翼が生えて、しなやかな尻尾があり、全身は黄色の鱗で埋め尽くされていた。顔は、鰐のように顎が前に引き伸ばされている。その眼の瞳孔は、軽く縦に割れている。

黄龍は、言い換えればその名の通り、龍だった。もつと言つなら、ドラゴンだった。

普通、ドラゴンなんでものは存在しない、と言つのが一般的だ。しかし、ここにはその例外がある。でも、『ドラゴンがいる！』なんて言つても世間からは何も認めてもらえない。それは、黄龍がその場にいてもいなくても、だ。

一般人には、龍と言つ存在を認識する事が出来ない。そう、逆を

言つと、ある特殊な条件をクリアした人物のみが、龍と言つ存在を認識できる、ということだ。

龍は、器と呼ばれる類と、術師と呼ばれる類でないと、認識する事が出来ない。その少女は、器だった。黄龍は、どこまでも龍だった。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり目をつぶつて、少女の方に視線を向けた。

「私に聞かれても困るけど…」

小さく言うと、その少女の方に視線を向ける。少女は、遠くの方にまで染み渡る笑顔を、黄龍の方に向けている。

「私だつたら、中間試験にも力を入れる。そして、学園祭を満喫する。その方がいいと思う」

はつきりと、黄龍は言った。

聞いた少女は、「そうね！」と答える。もしかしたら、こういう場合はどんなことを言つても、「そうね！」と答えるのかも知れない。黄龍は考えた。

「やつぱり、両立が大切よね！」

どこか明るそうな、そんな声で言つた。それを聞いた黄龍は、少しばかり腕を組んで、そして小さく視線を向けた。

「でも、香奈<sup>かな</sup>」

黄龍は言つた。

その少女、香奈はそれを聞くと黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、香奈の方へと視線を向けている。

「言つておくけど、私はこつちに来てからまだ一ヶ月くらいしか経つてないし、まだよく分からないわ。香奈の言つてる試験が、どれほど大切なものなのかは分からないわ。それだけは言つておく」

黄龍は淡々と香奈に告げた。

それを聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は真面目な視線を、香奈の方に向けている。

黄龍は、夏休みごろにこつち（人の世）に来たのだ。居候するこ

とに決めた、ともいえる。

香奈、春潮 香奈は、黄龍とはそれ以前の知り合いだった。黄龍は常に冷静で、周りの物事を把握する。そこが、なんとなく香奈は好きだった。そして、香奈は器だ、勿論黄龍以外の龍も見える。

「でも、黄龍の言つ通りよ！」

香奈は、楽しそうにそう言つた。そんなに楽しそうに言われても、逆に黄龍としては困るだけなのだが。

黄龍は聞くと、香奈の方に視線を向ける。

香奈はこう答える。

「だつて、文武両道つて言つじやない？だから、その武が祭に代わつても、きっと大丈夫よ！」

香奈は楽しそうにそう告げた。そんな風に言われても、黄龍には困る。そもそも、黄龍には学園祭と言つ物がなんなのか、ちゃんと把握し切れてはいけない。

「…、そななのかもしれないけど、とりあえず、それは私の考えよ」最後にそう言つておかない、責任逃れが出来ない。そんなことは考えていないが、黄龍は、あくまでも自分の考えだということを強調した。

それを聞いた香奈は、「分かつてるわよ」と楽しそうに黄龍に言った、それを聞いた黄龍は、それが本当に分かつていいかは別として、少しばかり、心の中で安心した。

「それに、高校に上がれるようにしないとねー」

香奈は言った。

香奈の学校、天野下学園中学高等学校（正確には、天野下学園大学付属中学高等学校）は、中学高校と言つよつに、中学と高校が一貫になつてゐる。つまり、中学生の成績次第で、高校に上がれるかどうかが決まる。殆どが上がるが、やはり、上がれないケースもあるらしい。話でしか聞いたことがないが、それは本当だった。黄龍が聞いた限りの知識はこの程度だ。それが何なのか、なんて聞かれてお、はつきり言つて答えられない。そもそも、黄龍には学

校の定義すらあいまいだった。その状態でそれを詳しく説明しろだなんて言われても、まず無理だ。つまり、そう言つことだ。

「がんばりなれ!」

香奈は、笑顔で黄龍に言った。

それを聞いた黄龍は、一それが一番」と、小さく香奈に言った。  
その時だった。

その時、香奈の携帯電話が鳴った。携帯電話は、テーブルの上でバイブレーションを響かせる。

ブルルルルルルルル

学校で、携帯電話は電源を切るか、マナーモードである」と、と  
いう校則がある。それにしたがつて、香奈は常に携帯電話を、マナ  
ーモードにしていた。

それを聞いた香奈は、「あら？」と小さく詫びた。

「このハイアレー・シミンの長さ、メートルか」  
貴様が、専用車の車幅を問うておつた。

黄龍た博識をへた口説で言つた  
「おれを聞け」

それを聞いた香奈は、『やあ、慣れてる感じ、ない』と笑顔で黄龍に言った。この音に、黄龍は初め慣れなかつた。何の音かと思つて聞いていたら、それが『携帯電話』とか言う滅茶苦茶な機能を持つた物体だと知り、そして、バイブルーションが一体何を意味しているのかも、大体黄龍は把握した。

「おめでたす！」

黄龍は小さく言つた。流石に、このくらい覚えていられなければね。黄龍はちいさくおもつた。

「それで、誰から…？」

黄龍は聞いた。

それを聞いた香奈は、  
「ちょっと待って」と言いながら、携帯電話を開いた。

香奈の携帯電話に、そのメールの文章が展開された。

添付  
なし

件名 夕食

本文 まだ?』

それを見ただけで、なんとなく香奈は、羽並の言つたがつてゐることが分かつてしまつた。ただの憶測ではあるが、その可能性は、かなり高いものだつた。

「羽並からみたい」

香奈は言つた。

それを聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は楽しそうに、携帯電話の画面を見つめている。そんなに携帯電話は、楽しいものなのだろうか。たとえ見つてゐるだけでも、楽しいのだろうか。

黄龍は、見つてゐるだけで楽しいという概念が、よく分からなかつた。

「羽並…? 何でこんな時間に」

黄龍は言つながら、部屋にかかつてゐる淡いピンク色の時計を見た。その淡いピンク色の時計は、香奈の女子寮の部屋の中で、着実に時間を刻んでいた。

現時刻、二十時五十一分。

つまり、もう夜だ。夜なのに、メールが来るなんてどうこうことなのか。それが、黄龍には分からなかつた。

羽並、個岬 羽並は、以前はD E P (Dragon Erase Project)の一員だつたが、今ではごく普通の、香奈の友人だ。術師で、黄龍を見る事が出来る。

香奈は、黄龍の方に視線を向ける。

「夕食まだ? だつて」

聞いた黄龍は、更に訳が分からなくなつた。

こんな時間に、しかも夕食まだ?なんて聞くのはおかしい。黄龍は思つた。そもそも、そんなことを聞くこと自体おかしい。黄龍はそう思つてゐる。そもそも、二十時に食事をとつていいなんてことは、香奈の部屋の中では、ほとんどありえない話だつた。

「何でそんなことを…?」

それを聞いた香奈は、「多分ね」と黄龍に言った。  
聞いた黄龍は、少しばかり首をかしげた。

「また、パスタの残りを食べてほしいんだと思うの」

香奈は言った。

その人物は、ただ単にベッドの上でうなだれていた。

中間試験なんて言うただでさえ面倒くさいものがあるといつに、  
その前に学園祭なんて言う閑門があるから、だからその人物はうな  
だれていた。

その人物の部屋は簡素で、ベッドとテーブルと椅子、それからテ  
レビが置かれている以外、リビングにはほとんど何の変哲もない場  
所だった。しかし、そんな簡素な部屋にも、やはりおかしな部分が  
あつた。

そこには、赤がいた。

その赤は、椅子の上でピタピタと、自分の手に持っているゲーム  
機『○○○』で遊んでいた。だから、うなだれていたのかもしれない  
。今になつて、その人物はそう考え始める。

「おい、赤龍」

その人物は、その赤、赤龍に言った。

その赤も、いわゆるドラゴンだった。蝙蝠のような翼、真っ赤に  
全身を覆っている鱗、頭からちょこんと畠立たない程度に生えてい  
る角、すべてが龍そのものだった。つまりは、ドラゴンだ。

「何じゃ、東海林」

その人物は、東海林と呼ばれた。

聞いた東海林は、赤龍に言った。

「一つ聞くんだけどさ、お前、これまでやつてきた勉強、一通り頭  
ん中に入つてんだろ？」

それを聞いた赤龍は、ゲーム画面から視線を逸らさない。東海林  
の方になんて、絶対に視線を向けたりしない。つまりは、そういう  
ことだ。

「うむ…」

「どこか中身がない返事だった。赤龍は、ゲーム画面の中の視線と、指に集中していた。

聞いた東海林は、「よかつた、」と赤龍に呟いた。聞いても赤龍は、全く何も言つてはこない。そもそも、何かを考えられるほど、赤龍の行動に余裕なんてものはない。

「なら安心だ…」

東海林は言つた。しかし、赤龍は全く何でもなことのように、ゲームにだけ集中を費やしている。

「…、」

何も言わない。

東海林はそんな中、赤龍へと声を向ける。

「これで、また中間は赤龍に頼めるな」

東海林は言った。

赤龍は聞いているのかいないのか、そもそもその声に気付いているのか、返事さえしていなかつた。そんなことは無いも同然で、赤龍はただ、自分のゲームにだけ集中していた。それだけで、赤龍の中はいっぱいだつた。

「でも、数学はどうだ？お前、数学は基礎がないからなんとかつて

…

東海林は言いながら、赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、そんな声には反応も見せず、ただゲームの中に飲み込まれている。

それを見た東海林は、一瞬答える言葉を忘れる。その代りに、思考が東海林の頭の中を巡る。さつき、全部聞いてなかつたのか？

そう考えると、東海林は思わずため息を吐いた。

その時だつた。

「東海林、ため息はするでないぞ」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、もう一度ため息をするかしないか考える。さて、

どうしようか。そんなことを考えて、またベッドの上でうなだれる。なんとなく、面倒くさいような、面倒くさくないような感覚が、東海林の中に広がっていた。

東海林、寺山 東海林は、器であり、天野下学園中学高等学校の生徒であり、トライブルにいつも巻き込まれている。そして、いつも図々しい赤龍の面倒を見ている、面倒見のいい器ともいえる。

「赤龍、」

東海林は言った。

聞いても赤龍は、ゲームの中に吸い込まれていく。

「聞いているか？」

東海林は赤龍に聞いた。

それを聞いた赤龍は、面倒くさそうに「何じゃ」と東海林に聞いた。聞いた東海林は、赤龍へこつと言った。

「5 + 1 3は？」

数学、と言うか算数。

赤龍は、算数の基礎が出来れば、絶対に数学も楽々こなす。東海林はそう考えている。しかも赤龍は、こう見えて非常に飲み込みがいい。教えたことはすぐに頭に入る。しかしその代りに、図々しいともいえる。

「十…、」

それ以降、赤龍の声が聞こえなかつたのは、きっと東海林の気のせいではない。

聞いた東海林は、赤龍の方に目を細める。

「赤龍、お前、わざとそう言つてないか？」

東海林は聞く。

赤龍は、ずっとゲームをしている。東海林の声を聞いているのかいないのか、赤龍はさつきから、ゲーム機をかちやかちやと弄つているだけだ。

返答はない。

東海林は目を細める。

「赤龍、聞いてるか？」

東海林は聞いた。

聞いた赤龍は、少しばかり田を細めて、画面から田を離れず、東海林の方へと言った。

「うむ…、鬱陶しいの…」

それは、赤龍の中では正論だった。東海林の中では、ただの抵抗にしか見えなかつた。「は…」と東海林は小さく呟いた。どうしようか、また赤龍のゲーム機（本当は東海林の物）を取り上げて、またゲームを強制終了させようか…。

思ったその瞬間だつた。

負けのBGMが、東海林の部屋に鳴り響いた。その音源は、勿論赤龍の持つているゲーム機だつた。

「あー…」

赤龍はどこか不憫そうに、ゲーム機に言つた。東海林は、ベッドの上でうなだれている。

「東海林のせいで、気が散つてしまつたぞ」

しかも、東海林のせい。

一瞬、反論しようか迷つが、東海林はしないことにする。こんなところでそんなことをしても、はつきり言つて向にもならない。それが、東海林の中でははつきりしていた。

東海林は赤龍に言つた。

「ちゅうどいい、5 + 13は?」

尋ねた。

聞いた赤龍は、東海林の方に田を丸くする。「ちゅうどいいとはなんじやちゅうどいいとは」と東海林へ言つてくる。そんな事、東海林にはどうでもよかつたりする。

「赤龍、答える」

東海林は言つた。

赤龍は言つた。

「嫌じや」

反応に困る反応だつた。

東海林は赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、どこか怒つているような、そんな雰囲気で東海林から目をそらしている。何なんだろう、としか、東海林には捕えられない。赤龍は、摩訶不思議、と言うか、よく分からぬ。

赤龍は続けた。

「東海林のせいで、赤龍のゲームが滞つたのじや。あと少しと言つところで、東海林は自分の計算の事ばかり」

聞いた東海林は、赤龍に目を細める。

「それだつたら、お前のゲームはどうなるんだよ」

東海林は赤龍に聞いた。

聞いた赤龍は、「これは、」と即答する。

「赤龍の娛樂じや。赤龍は東海林に様々なものを提供しておる。じやから、赤龍の娛樂の時間ぐらい、与えてはもらえないかの」

聞いた東海林は、「それじやあ俺がまるで何もお前にやつてないみたいじやないか」と声を張らせた。「東海林は赤龍の辛さが分かつていなかつだけじや。もつと赤龍のことも考慮してほしい物じやな」

赤龍は悠然と言つ。「お前な、」東海林は目を細める。

「それじやあお前は、俺に本当にそんなにいろんなことを提供してゐるのか?」

聞いた赤龍は、即答した。

「勿論じや。はつきり述べるが、赤龍がここにいなかつたら、東海林はもうとつぐに殺されておつたぞ!」

赤龍は声を張り上げる。

「もともとお前が来たからそんなことになつてゐるんだろ!お前の気まぐれで来さえしなきや、こんな事にはならなかつたんだ!」

それを聞いた赤龍は、「な…ッ」と声を詰まらせた。

「赤龍がいなければこんなことにはならなかつたじやと…、ふざけたことを!赤龍がいなかつたら、試験でさくに点数も稼げなかつた分際で何をほざいておる!」

聞いた東海林は、ベッドから起き上がって赤龍に言った。

「お前だって、普段はぐーたらして、俺の手伝いなんて何にもしないのに、何そんな口利いてんだよー！」

東海林は怒鳴った。

「分かつていいのは東海林の方じゃー東海林は赤龍がいなかつたら、何も出来んくせにー！」

赤龍も怒鳴つた。

聞いた東海林は、赤龍の方に顔をしかめる。赤龍は立ち上がり、東海林の方に睨みつけてくる。

「もう一回言つてみやがれーー！」

東海林は言つた。

赤龍は言つた。

「何度も言つてやるぞー東海林の木偶の棒ーー！」

「何だとテ前エーー！」

東海林と赤龍の視線がぶつかりあつた。にじみ合つて、お互いがお互いを罵り合つた。

東海林は叫んだ。

「お前なんて、出でつちまえーー！」

一瞬、

赤龍の視線が揺らいだ。しかし、赤龍は「フン……」と鼻で東海林を罵つた。

「言われるまでもなく、出で行つてやるぞーー！」

そして、赤龍は窓の方に足を運ばせる。開き、ベランダの方に行く。そして翼を広げる。一瞬、東海林の視界が揺らぐ。

「…赤龍は出て行くぞーーー！」

赤龍は言つた。

聞いた東海林は、一瞬声に詰まつた。しかし、「…ツチ」と舌打ちで搔き消した。

「どうえなりと行つちまえよーー！」

言つた。

そして赤龍は、更に顔を歪めた。

翼を広げて、一瞬四肢を着けると、赤龍は涼しくなつてきた秋の夜の空へ、大きく羽ばたいた。

部屋には、東海林だけになつた。なんとなくだが、東海林はベランダの方に視線を向けていた。それ以外に、何もできなかつた。

東海林は、一瞬言葉に詰まつた。そして、その代わりに、ため息を吐いた。「はあ…」と言つて、それをとがめる声なんてものはなかつた。

どーしょ。

東海林は思いながら、窓を開けっぱなしにしていた。

一瞬、何か声が聞こえたような、そんな気がした。

その人物は、バスーンを吹きながら、外の音に耳を傾けていた。その音が、何か今までの音とは異様で、どこか、引っかかつていて。その人物は、寮の一室で、ただバスーンを吹いていた。テーブルと椅子とベッドしかない、それ以外に何もないリビングで、その人物は、ただバスーンを吹いていた。

途中で、その人物はバスーンから口を離した。

その人物の椅子の近くで、綺麗な姿勢で『おすわり』の格好をした、青い龍がいた。その龍に、その人物はこう言つた。

「何か、聞こえなかつた？」青龍

聞いた青龍は、その人物の方に視線を向けた。どこかその人物の顔に、心配そうな色がうかがえた。

青龍は、その名の通りドラゴンだ。つまり器にしか見えない。それが術師。青龍は赤龍よりもほつそりとした体型をしていて、どこか、冷たい感覚を雰囲気に入れていた。常に、その雰囲気は保たれていた。

その人物を見た青龍は、小さく言つた。

「…、どうした、雄大」

聞いた雄大は、青龍の方に視線を向ける。そして小さく、「うん」

と青龍に言った。

「何か、誰かが叫んだような、何か、そんな声が聞こえたり聞こえてなかつたりゲシユタルト崩壊してたり鼻血ドラゴンだつたり…」はつきり言つて、後半のゲシユタルト崩壊の意味が、青龍には全く分からなかつた。しかし、雄大の中で、その言葉に意味がないことを知ると、少しばかり考える。

「…、珍しい」

小さく青龍は言つと、雄大から視線を逸らした。

それを聞いた雄大は、青龍の方に視線を向ける。「それどういうこと？」と、青龍に尋ねる。しかし青龍は、特に何も言わない。

雄大、沖田 雄大はこの学校、天野下（略）の生徒だ。天野下の吹奏楽部に所属していて、雄大は見ての通り、バスーンを担当している。学校でも一、二を争うほどうまく、この調子で練習すれば、プロにもなれる気が本人にはしている。雄大は、東海林や香奈と同様、器だ。

雄大は面倒くさそうに、青龍から視線をそらす。そしてただ、バーンのボーカル（吹き口）を咥える。

譜面通りに、雄大は演奏し始める。内容は、『The Year Of The Dragon』だ。和訳すると『ドラゴンの年』、第三樂章のFinalだ。非常にテンポが速く、非常に指がせわしなく動く曲。しかし、雄大はそれを悠々とこなしている。その曲は、聞いている客も鼻血を吹きそうなくらい速い、と言つことで、『鼻血ドラゴン』とも、世間では呼ばれている。

そこまでは分かるのだが、その作者の名前が、どうも読めない。雄大には、はじめの一文字すら読めない。

「…、雄大が」

青龍が言い始める。

雄大は、そもそも演奏を中断する気がない。

青龍は、バスーンの音の中で、雄大に言った。

「…人のことを心配すること」

聞いた雄大は、何を言つ氣も起きなかつた。そもそも、雄大にとつて今は、バストンタイムに他ならなかつた。それ以外の時間ではなかつた。バストンを吹くためだけに、その時間が存在している。そんな雰囲気だつた。

青龍は、雄大がバストンを止める氣がないということを、分かつていた。

だから青龍は、ただ眼を閉じた。

最近、ポータブルプレイヤーの電源の持ちが悪いと、その人物は思う。

そもそもその人物は、ポータブルプレイヤーなんて使う機会は少なかつた。しかし、最近になつて急に使い始めた奴がいたから、段々と電源の持ちが、悪くなつてきていたのだ。

その人物は、コンビニ弁当を箸でつまみ、白いご飯を口の中に放り込む。唐揚げに少し塩を振つて、ご飯と一緒に食べる。それがうまくてしようがないと思っていた。その人物の向かいにいる緑も、その人物と同じ意見のはずだ。

しかしその緑は、弁当にではなく、そのポータブルプレイヤーに視線を向けていた。画面の中では、主人公やらなんやらが、中で大活躍を繰り広げている。

その人物はそれを見ると、小さく言つた。

「お前本当にそれ好きだな、緑龍」りょくりゅう

それを聞いた緑龍は、「うん…」と小さく答えるだけで、その後はポータブルプレイヤーの中に意識をゆだねて行つた。見たその人物は、少しばかりため息交じりに、その緑龍に言つた。

「食事の時くらい、普通に食えないか…？」

聞いた緑龍は、「うん…」と答える。

ここはもう恒例の、あれを質問するしかない。その人物は心の中で、笑う準備を整えた。

「緑龍、」

その人物は言った。

「1 + 1は？」

聞いた緑龍は、「うん…」と期待を裏切らない。

つまり、緑龍の意識は、今その人物の目の前にあるわけではなくて、今日の前にあるポータブルプレイヤーの中にあるということだ。なのに、緑龍の箸は、どんどんと進んで行く。それがどこか、おかしいようなそうでないような、そんな気がその人物にはした。

緑龍は、その名の通り緑色の龍、ドラゴンだ。赤龍や黄龍や青龍と同じく、龍だ。赤龍よりも少し大柄で、最近はポータブルプレイヤーでの映画鑑賞にはまっている。

つまり、今その人物の目の前で起こっていることだ。その人物は思いながら、緑龍の方に視線を向ける。そして、箸を進める。弁当の唐揚げがなくなっていく。

少し経つた時だった。

急に緑龍は「はー！」と言いながら、箸を持ったまま伸びをした。「終わつた…」

どこか満足げな表情で、その人物に言った。それを聞いたその人物は、「面白かつたか？」と緑龍に聞いた。

「うん、とっても。でも最後がなー…、何だかしつくりこないというか…」

緑龍は言いながら、どこか考えるような視線で、その人物に言った。

「大介はどう思う？」

緑龍はその人物、大介に聞いた。

大介、風戸 大介は、天野下（略）の生徒の一人で、器だ。つまり、緑龍を見たり、緑龍とコミュニケーションを取つたりできる。しかし、そんなことはどうでもよくて、今どうでもよくないのは、緑龍のポータブルプレイヤーの事だった。

「俺もあのシーンはちょっとあれだったと思うな。何か、一気に俺たちを否定されたような、そんな感じ」

聞いた緑龍は、「だよね」と相槌を打つ。

「でも大介もそう思うんだね。やつぱり僕とおんなじ意見」  
それを聞いた大介は、「まあ、お前はセンスがいいからな」と、  
緑龍に言いながら箸を進めた。そして、箸を止めてテーブルの上に  
ある緑茶を、一口呷る。緑龍も、同じように緑茶を呷った。  
「でもよく飽きないよなー、お前」

大介は言った。

聞いた緑龍は、大介の方に視線を向ける。

「へ？」

緑龍は、大介に聞いた。

それを聞いた大介は、緑龍の方に、箸を進めながら言った。  
「その映画見るの何回目だよ、緑龍」

聞いた緑龍は、同じように箸を進める。鱗まみれの手で、器用に  
箸を進めていく。「うーん」と緑龍は考える。  
そして、緑龍は言った。

「多分、二十五回くらいだよ」

聞いた大介は、「だろ?」と緑龍に聞いた。緑龍は、「うん」と  
一度、大介の方に頷いた。頷く必要はないかもしれないが、一応頷  
いておく。

「普通そんなに、同じ映画何度も見ないって」

大介は言った。

それを聞いた緑龍は、「そうかなー……」と首をかしげる。そして、  
箸を進めながら考える。大介は、テーブルの上に置いてある緑茶を  
一口呷る。

「普通だよ、このくらい」

聞いた大介は、なんとなく緑龍と言つ物を、理解出来たような気  
がした。つまり、こういうことなのかもしれない。

「お前、ヲタクだったのか……」

聞いた緑龍は、大介の方に視線を細める。

「そんなわけないよ」

少し面白くなさそうな声で、緑龍は大介に答えた。それを聞いた大介は、そうか？と思おう。

ある一つの映画 ある一人の人間あるいはある一匹の龍（映画を見る 映画を見る 映画を見る 映画を見る 映画を見る）×5 執着 ラタクだとおもう。

「いや、そんなことある。と言つかお前、何で最近その映画しか見ないんだよそれじやあ」

大介は聞いた。

それを聞いた緑龍は、「だつて、」と大介に言った。

「この映画好きなんだもん」

それは、緑龍の率直な意見だった。これ以上にないくらい、緑龍は綺麗に表現した。

それを聞いた大介は、「ほらな？」と緑龍に言った。少しだけ緑龍は、顔を赤くして俯いた。そして、色々と考えてみる。

緑龍は顔を上げる。

「で、でも、それは好きだからでオタクってわけじや…」

それを聞いた大介は、「それじやあよー」と言う。大介は、テレビの近くに山の様尾に積んであるディスクの箱を指さす。それを見て、緑龍はよく分からなくなる。

「あの映画は嫌いってわけか？」

聞いた緑龍は、思わずはつとなつた。

言葉に詰まって、口から声が出にくくなる。どこか酸っぱいような、そんな感覚が口の中に広がっていく。大介は、どこか悪魔的に笑っている。

「そ…、そんなことは…、無いんだけど…」

ぼそぼそぼそぼ、緑龍は呟いた。

聞いた大介は、「ほらなー」と緑龍に言った。緑龍は、口をむにゅむにゅと歪め、少しだけ俯いた。

「つまり、お前はラタクってことだ、分かったか？」

それを聞いた緑龍は、「…、」と言つ。

「分かりたくないけど…、分かつたような分からぬ…」  
それを聞いた大介は。「それじゃあもう一回言ってやるつか？」  
と緑龍を脅す。

聞いた緑龍は「理解しました十分わかりました完璧に把握しました」と、片言で大介に言った。

「そう、だろ？」

緑龍は、悲しそうに視線を沈めた。

大介は楽しそうに、弁当に箸を進める。そして再び、緑茶を一口呷つた。

「でもよ」

大介は言った。

緑龍は、悲しそうな、素直な視線を大介に向ける。大介は、からあげ弁当の最後の唐揚げを、口の中に入れれる。

「……」

緑龍は、少しばかり涙ぐむ。

「俺だつてヲタクだから、」

一瞬、

世界が変わった。

そんなように、本氣で緑龍には感じられた。まるで、ひっくり返つたものが、普通に戻るような、そんな感覚。

「え…、」

緑龍は、ぐすんと小さく涙ぐんだ。そして、手で軽く涙を払った。大介は、「ほら」と言いながら、箸で自分の後ろを指した。大介の後ろには、天井までもう既に届いている本の山が、三つか四つほどあつた。ここまで山のように積んでもると、どこか、爽快感に似たものがある。

「ああ…」

と緑龍は、気付いてはいたが、改めて知らされる。大介は本好きだ。

あれ？

ちょっと待てよ、と緑龍は自分の思考に一回歯止めをかける。そして、改めてさまざまことを考えてみる。

緑龍 映画ヲタク（特にこの映画に関して） cf 大介 山の  
ように積まれた本が大好き。

つまり、大介もヲタク？  
本人も言っている。ヲタク。

「そつか…」

どこか、大介に恍惚感を覚えた。緑龍は、目を見開いた。大介は、ただ単に、弁当に箸を進めていただけだった。

「大介は、ヲタクだつたんだ…」

今まで気づかなかつた、そつか、大介つて、本が大好きなだけな  
じやくて、ほんのヲタクだつたんだ！

悟りに近い感覚を、緑龍は感じた。そつか、これが理解つてもの  
なんだ！

「そつか…」

緑龍は、いつまでも笑っていた。

大介は、どこまで行つても普通に弁当を食べていた。

## 友人との帰り道

「どこか気持ち悪いような、そうでないような感覚が、香奈と黄龍に取り巻いていた。どこか、妙な気分とも言えるし、ただ単に気持ちが悪いだけ、とも言えなくはなかつた。

朝だつた。香奈は、必ず朝食をとると決めている香奈も、その日の朝は、どこか朝食を食べる気がなかつた。それは、朝食を食べる癖のない黄龍にも、同じことが言えた。つまりは、そういうことが言つた。

香奈は、少しうなだれながら、床でとぐろを巻いている黄龍に言った。

「なんだか…、私、ちょっと気持ち悪い…」

聞いた黄龍は、「…うん」と香奈に言つた。

「私も…」

いつもの大人びた口調はなく、そこには、重々しく倦怠に満ちた声が、代わりにあつた。どこか、香奈はつられたように、気持ちがさらに悪くなつた。気がした。

「昨日の、ペペロンチーノソース…」

香奈は小さく言つた。

それを聞いた黄龍は、「…」小さく黙つた。

「あれ、何だか怪しい気がしたのよ…、賞味期限もぎりぎりだったし…」

それを聞いた黄龍は、「ぎりぎりなんでしょう…」と、息が詰まつたような声で話す。香奈は、その日のことを思い出す。昨日の夜、羽並の部屋の台所で見つけたペペロンチーノソース。賞味期限は、ぎりぎり。

香奈はそれを見て、まだ食べられると思つた。

だから、羽並には新しい方を渡して、香奈は、自分には賞味期限が早いペペロンチーノソースが来るよつにしておいたのだ。

そうしたら、じつはなつた。

本当にそうか？と香奈は考える。そして、更に思考を巡らせる。気持ちが悪くなつたのは今日の朝、つまり昨日の夜食べたものが悪かつたということ。もしかしたら、パスタの方に原因が？

香奈は思い、少しばかり羽並のことが心配になる。

「もしかしたら、ソースじゃなくて、パスタの方に原因があるのかも…」

黄龍に言つた。

それを聞いた黄龍は、「…本当に…？」と香奈に聞いた。香奈は答えようとした。

その時だつた。

ピーンポーン

ドアベルの音だつた。

それは、香奈の部屋に響き渡り、倦怠に包まれた香奈の耳に、突くようにして響いてきた。香奈は面倒くさそうに、視線をインター ホンに向ける。

そこに映つてゐるのは、羽並の顔。しかも、どこかすがすがしそうだ。

真反対だ。

見た香奈は、少しばかり怠そつた表情をして、玄関の方に歩み寄つた。そして、どこか動きが鈍い手で、玄関の施錠を解く。玄関を開ける。

「おはよー！」

元気な声で、香奈に挨拶する羽並。

それを聞いた香奈は、怠そつた口調で羽並に言つた。「おはよつ

…」「どこかくらい、そんな口調に、必然的に口が動く。

それを見た羽並は、少しばかり目を丸くする。「じつしたの？」と、心配そうな視線で香奈を見つめる。

黄龍は見た時、確信した。原因はパスタじゃない。ペペロンチーノのソースだ。パスタだつたら、羽並は今こんなにぴんぴんしてい

るわけがない。

「なんだか、ちょっと気分が悪くて…」

香奈は言った。今日の笑顔は、いつもより光がなかつた。

「大丈夫、香奈？今日の香奈、何だか神々しい光がドロドロした闇になつたみたいよ」

香奈には、よく分からない。

「まさに不調ね」

そう、つまりそう。

香奈は思った。一度、羽並に頷くと、香奈は腹のあたりをさすつた。

「おなかの調子がね…、何だか悪くつて、気持ちもちょっと、悪いの…」

香奈は言った。

それを聞いた羽並は、少しばかり考える。「何か悪いものでも食べたの？」と、羽並は聞く。聞かれても、香奈は答えない。

「…、分からないわ…」

と言つておく。

それを聞いた羽並は、「そう、」と小さく言つと、顔を上げた。

「それじゃあ、いいものあげる！」と羽並は言つ。

聞いた香奈は、少しばかり視線を細める。「いい物？」と、羽並に言つ。

羽並は自分のバッグの中をあさる。そして、小さな一つのポーチを取り出すと、その中から、小さなクリアケースのようなものを取り出す。そして、その中に入っているものを、「はい」と言つて香奈に差し出す。

香奈は手にそれを持って、すぐにそれが丸薬だと知る。

「それ、効くのよー結構。十八種類の漢方成分が入つてて、お腹からくる倦怠感を取り払つてくれるのよ」

それを聞いた香奈は、羽並の言つことに不信感を覚える。これが本当かどうか、ではなく、これの使用期限が過ぎているのかいない

のか、だ。つまりは、そういうことだ。香奈は考えた。

「…、せつかくだし、飲んでおくわ」

香奈は言つと、羽並に言つた。

「これ、水なしでも飲める…？」

聞いた羽並は、「うん」と答える。そして続ける。

「軽く飲めるわよ」

香奈は、少しばかり考える。もうよく分からなくなつてくる。それならこれを飲んだ方がよさそうだ。確かに、漢方成分が十八種類の腹からくる倦怠感を取り払ってくれる丸薬、だつたはずだ。

香奈は思うと、息を止める。そしてそれを一気に飲み下す。

瞬間だった。

香奈の気分が、一気に爽快になつて行つた。今までにない倦怠感が一気に取り払われて、そして、それが一気に爽快感に代わつていく。

「あ…、」

小さく香奈は言つた。

香奈の雰囲気が、すこし光を取り戻した。

見た羽並は、ちょっととした笑顔で、香奈にこう質問する。

「どう？」

聞いた香奈は、すぐに一度頷いた。

「とつてもいい気分！ ありがとう！」

香奈の本音だった。

それを聞いた羽並は、「いえいえ、どういたしまして」と笑いながら言つた。

「そうだわ！」

香奈は言つた。

羽並は一瞬、それを聞いてきよとんとする。香奈は、羽並の方に向いて、少しばかり説明した。

「黄龍も私とおんなじなの、だから…」

そこまで聞けば、十分理解できた。

それを聞いた羽並は、「はいはい」と笑いながら言つと、「おじやましまーす」と言いながら上がり去つてくる。そして、床には黄龍が、  
氣急そうごとぐろを巻いている。視線が、どこか鈍い光を放つてい  
る。

「あなたも？」

羽並は聞いた。

聞いた黄龍は、小さく目を閉じる。そして一度、小さく頷いた。  
見た羽並は、「オッケー」と言つと、再びバッグの中から、さつ  
きの丸薬を取り出した。そしてそれを、黄龍の方に手渡した。黄龍  
は、ふらふらとした視界にそれをとらえる。そして、手を差し伸べ  
る。

「これ、よく聞く薬なのよ。漢方の成分が入つてね、十八種類、  
それで、すぐにお腹からくる急さが消えちゃうの！」

そう、それは劇的に。

香奈は、心の奥底からそう思った。今、香奈の腹の中は、爽快感  
であふれています。

羽並はその丸薬を、黄龍の手の上に軽く置いた。黄龍はそれを軽  
く眺め、少しばかり目を細める。そして、臭いをかいだり、よくよ  
く観察する。

「…、消費期限は…？」

黄龍は聞いた。一瞬、香奈は黄龍のことをすゞしく想つ。それを  
ストレートに聞く、と言つのが、ますますいいと思つた。

それを聞いた羽並は、「へ？消費期限？」と言つながら、目を遠  
めて考え始める。

「薬に消費期限なんてないわよ、それに漢方よ？漢方は長持ちする  
のよー」

そうなんだー。

香奈は初めて知つた。

聞いた黄龍は、少しばかり視線を細めた。そして、頭の中で、氣  
怠い思考を巡らせた。それは遅く、あまり煌めいてはいなかつた。

漢方 人参や木の実やキノコなど 生物 なまもの 傷み易い。

つまり、そう言つことになるのではないだろうか…。と考えてみる。

「…、本当に…？」

現に、ペペロンチーノの賞味期限は、切れていなかつたのに、こんなに腹に来ている。つまり、そう言つことになるんじゃないだろうか。黄龍は考える。

「本当よー！」

羽並は言つた。

黄龍も、そこまで詳しい知識を持つてゐるわけではない。だから、勝手な憶測で、物を判断するわけにもいかない。

黄龍は思い、少しばかり目を細めた。

「…、分かつたわ…」

どこかけだるやうに、その丸薬を飲んだ。黄龍は、少しばかり目を細めた。

香奈は、ドキドキとしていた。黄龍がどんなふうに、爽快感を示すのか、見てみたかつたからだ。

香奈は目を輝かせた。

黄龍は、固く目をつぶつた。

そして、開ける。

香奈の視線が、きらきらと輝いた。

「…、何も」

黄龍は言つた。

羽並は一瞬、「え…ッ」と驚いた。香奈は、不思議で仕方がなかつた。

「何で?私は一瞬で治つたのに…」

香奈は言つた。

羽並はそれを聞くと、少しばかり考える。「まあ、個人差つてものがあるしね」と羽並は言つた。本当にそれだけなのだろうか。

香奈は、少しばかり不思議で仕方がなかつた。

「それじゃあ、行くわよ！」

羽並は言つた。

聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、床に突つ伏してまだ。ただ、その状況を保つてゐる。

「黄龍は？」

香奈は聞いた。

最近、黄龍も学校に行くようになつてゐた。黄龍も一緒に学校に行つて、他の龍と同じように、少しばかり勉強するような勢いで、香奈と一緒に学校に通つてゐた。しかし、学校と言つ物にも限度がある。勉強よりも、個人の体調を重視しなければ、それは本末転倒だ。それが人であれ、龍であれ。

「…行くわ」

黄龍は言つと、立ち上がつた。一足で立ち上がると、少しばかり視界がふらふらと揺れるのを感じた。倦怠感は、さつきよりも取れた…、のかな？

そんな雰囲気。

「大丈夫…？」

香奈は心配そうに、黄龍に聞いた。黄龍は聞いても、「このくらいいならね」と答える。

羽並は、「頑張るわねー」と黄龍に言つた。

聞いた黄龍は、小さく鼻で笑つた。

「こんな程度で寝込んでるようじや、龍として失格よ」

本人がそう言つといふことは、つまりはそう言つこと、と聞つことだらう。

羽並も香奈も、そう思つた。

はあ、どうしよう。気分が、それ以外になかつた。はあ、どうしよう、天井が真つ白だ、日の光がまぶしい、窓は開け放しなのに、かの一匹も入つて来ない。東海林は思つた。ましてや、赤い龍なん

て、入つてくるわけもなかつた。

「…、どうしよ…」

東海林は言いながら、小さくため息を吐いた。はあ…、と言つても、言い咎める奴はいない。いつもそのことで言い咎められていると、逆に妙な気分になつてくる。そもそも赤龍が、自分勝手だからいけないんだ。東海林は考える。しかし、だからと言つて、東海林は赤龍との別離を望んだわけではない。つまり、こんなことは、誰も望んでなんかない、と言うことだ。それは、簡単なことだつた。東海林は思うと、ベッドでうなだれながら、ソファーの方に視線を向ける。そこにはベージュと、一部黒しか見えない。赤なんて、ベージュからしたら浮いた色は、配色されているわけもなかつた。東海林は床を見る。そこには茶色一色のフローリングが広がつてゐるだけで、赤い、ぞらぞらした鱗なんて、広がつてはいなかつた。ため息をしても、それを言い咎められることもない。

食事をねだられる事もない。そして、まだ眠いとか言つて、眠たがる奴もない。つまり、東海林は一人、と言うことだ。それは、この部屋においてだ。いつもにおいてではない。

「…腹が減つたら、帰つてくるか…？」

思ひたかつただけだ。

出もはつきりと考へる。

赤龍と顔を合わせて、東海林はどうする?考へる。俺は、どんな顔をして赤龍と向かい合えばいいんだ?

考へても、思いつけない。頭の中だけで考へられる領域を、とうに超えているような気分がしてならない。

東海林は、小さくため息をしようとした。

言い咎める奴はない。

しかし、東海林はため息をしなかつた。だから、東海林はため息をしなかつた。代わりに、東海林は目を閉じた。そして、小さく咳くだけだつた。

「どこにいるんだよ…」

心配だったことは、否定できない。しかし、それ以上に東海林は、心のどこかに、何か大切な空白があることに気が付いたような、そんな気がした。

帰つてくるのか？」の空白は。

東海林は思いながら、簡単な朝食を済ませた。そして、残りの一つが、何故か東海林の感覚を鈍化させた。どこか、強制できない何かが、飛んで行つてしまつたかのような、そんなサムズアップだつた。

東海林は小さくため息をすると、リビングに放り投げられているバッグを取つた。そしてそれを肩にかけると、思わず、東海林はベランダの方に視線を向けてしまう。そこには、何も存在しない。

赤いものはない。

赤い龍はない。

赤龍は、いない。

思いながらも、東海林は視線を沈めた。そして、少しばかり口を紡ぐ。東海林は振り返り、玄関の方から寮を出て行く。

声が、空に響いていた。どこか陽気で、どこか何も考へていらないような、そんな声が、響いていた。

「だんだん涼しくなつてきたねー青龍」

それは、雄大の声だつた。

それを聞いた青龍は、雄大を背中に乗せながら、空を翼で扇ぐ。青龍の、大きな翼が、空に浮き彫りになつてあらわされる。どこか、それには美しさがある。

「、涼しいのはいい」

青龍は言つた。

それを聞いた雄大は、「だよねー」と青龍に言つた。そして雄大は、目を閉じて、小さく息を吸つた。この爽快感がいいね。雄大は心の底から、本気で思つた。

「このいい空気、いい感じだねー」

雄大は言った。

訳が分かるような、分からぬような。雄大の言葉には、どこか一重の意味を兼ねているような、そんな気が青龍にはしなくなかった。

青龍は少しばかり視線を細める。そして、「……」ただ沈黙を保つ。

「……でも」

青龍は口にした。

「ん?」

雄大は青龍に言った。青龍はそれを聞くと、ただ飛びながら、雄大の方に声を放つた。

「……寒いのは……」

言つた。

聞いた雄大は、少しばかり考える。確かに、青龍は寒いところが苦手だったはずだ。雄大は思う。それじゃあ、冷蔵庫の中になんて、絶対に入れないじゃん!

「それって、ブリザードよりもひどいじゃん!」

雄大は言つた。

青龍は、小さく目を細めた。全く意味が分からぬ。と言つたか、その言葉に意味を持つているのかすら、青龍には分からぬ。

「……かもしけない」

そう答えておく。

それ以外に答えられない、とも青龍には言える。そもそも、そのブリザードが、一体何なのか、それがそもそも、青龍にはよく分かっていなかつた。

「でしょ? やつぱりはなぢドラゴンだよねー」「もう分からぬ。」

青龍は思うと、少しばかり視線を細めた。ただ、そこにはすがすがしく、青々しい世界が広がつてゐる。ただそれだけのようにも見える。

「…、まあ…」

言つてみる。

はなぢドラゴン 鼻血ドラゴン 『ドラゴンの年』。つまり、ドラゴンの年はいいなー。

訳が分からぬ。

「でもさ、その曲作つた人、他にもいっぱい曲出してるんだよね」  
聞いた青龍は、視線を細める。雄大は、楽しそうに青龍の背中の上に語る。ただ、ペチャくちゃと語るだけだ。

「で、聞いてみたんだけどさ、それが壮絶で、まさにフィボナッチ数列つて感じだつた！」

雄大は言つ。

青龍には意味が分からぬ。そもそも、雄大にはフィボナッチ数列の意味が、ちゃんと理解できているのだろうか。青龍は思いながら、少しばかり頭の中で考える。1 1 2 3 5 8 1 3 2 1 …。考えて、すぐに飽きる。

「…、それは…、いいこと」

なのか？

青龍は考へない。もつ、それは過ぎたことだ。過ぎたことは考へても仕方がない。そんなことは、もう分かっている。

青龍は思いながら、空を翼で扇いでいた。

その時だった。

何かが、青龍の感覚に引っかかった。龍の感覚に引っかかる何か、それが青龍には、よく分からぬ。しかも、これはどこか、歪んだような、そんな感覚だ。

何だろ？。青龍は思つ。

そして、その方向に視線を向ける。その方向は、地面だ。アスファルトの上で、じょとじょと歩く一足歩行の生き物。

つまり、人間。

あれは…

青龍が考へ始めた、その時だった。

「東海林…？」

雄大は、地面の方を見ながら言った。  
そこには、東海林が一人で、裏道を歩いている光景が、静かにがつていた。

「…、」

妙な感覺。

青龍は思いながら、少しばかり視線を細める。そして、その方向に沈黙する。「ねえ、」と雄大が言う。

青龍は、雄大の方に耳を傾ける。

「東海林の方に行こうよ…」

意味が分からぬ。

そもそも、何故今東海林のところに行く必要があるのか、それすら青龍には分からぬ。しかし、雄大が行きたいというのならば、青龍は飛んでいくしかない。雄大が青龍の食費と寝床を提供してくれているのだから、そのくらい当たり前だ。

青龍は、空中で体を傾け始める。そして、東海林の方に体を近づけて行つた。

その感覺は、殆ど唐突と言つても過言ではなかつた。東海林は思ひ、その空を扇ぐような音に気付く。

そして、視線を上に向ける。一瞬、東海林の視線が輝く。

太陽で、よけい輝いたようだつた。

そこには、青龍と、背中に乗つた雄大がいた。

青龍はアスファルトの上で四肢を突くと、雄大は元気よく、青龍から降りる。そして東海林の方に走つて行く。

「おはよー」

どこまでも元気な返事が、東海林の耳の中に響いてきた。

それを見た東海林の目は、どこか冷めてきたような、そんな、いつもではありえないような雰囲気を見せていた。

「…、ああ、雄大か。おはよ…」

東海林は言った。

雄大は目を丸くする。「どつたの…？せんせー」と雄大は東海林に聞く。青龍は、東海林の方に視線を向ける。

「あ、ちょっと、な」

東海林は言った。

雄大は、「ふーん」とつまらなさそうに言った。それ以上追及する気はなかつたし、それ以上、何かを言つ氣はなかつた。

青龍が、東海林に聞いた。

「…、赤龍は」

一瞬、

東海林は驚いた。これが、龍の鋭さ、と言つ物なのだろうか。龍は、色々な意味で鋭い。感覚的にも、感情的にも。

「、流石青龍」

東海林は言った。

雄大は、「へ？」と小さく声を出す。そしてあたりを見回してみる。

「そう言えば、赤龍いないねー」

言った。

聞いた東海林は目を細める。「今更かよ…」と、少しばかり呆れたような声を出した。

青龍は、少しばかり、東海林を睨み様な視線で言った。東海林は、どこまでも活氣がない、いつもとは全く違う視線を放つていた。

「…赤龍は」

青龍は言聞いた。そして、一足歩行に戻す。

聞いた東海林は、「あ、まあ…、その…」声を詰まらせる。

そして、東海林は少しばかり考える。どうしよう、ここで赤龍と喧嘩したって言うべきなのかな…、どうかな。でも言いたくないような気もしなくはないんだよな。でもな、どうしよう、どうすればいいんだろう…。

「どつたの？」

雄大まで、東海林にそう聞いてきた。

それを聞いた東海林は、少しばかり目を細めた。あーあ…、言わないときつと納得してくれないぞ、これは。

東海林は思った。

そして、東海林は小さくため息を吐いた。「はあ…」今までよりも数段粘っこい、そんなため息だつた。それは。

「ちょっと、赤龍と喧嘩した」

東海林は言った。

それを聞いた雄大は、「おー」と声を出す。何が「おー」なのかは分からぬ。

「…、今どこに」

それを聞いた東海林は、きっと赤龍のことだと頭の中で考える。そして、東海林は青龍に言った。

「知らない…、あいつ出て行つちゃつて、ちょっとつまんないことで喧嘩してさ…、はあ…」

ため息の頻度が、一気に高くなつた。それを、東海林自身理解していた。青龍は、少しばかり視線を細めた。

「ふーむ、それはいけませんなー」

雄大が、どこか分かつたような分からぬような、そんな口調で東海林に言った。聞いた東海林は、雄大の方に視線を細めた。雄大は、どこか誇張するように、笑みを顔に浮かべている。

「喧嘩は、よくありませんわケがあるんですけどー」

つまり、喧嘩はよくない。そう言うことだらうか。

東海林は考えた。雄大は口でそう言つてはいるが、それが本当に雄大の真意かと聞かれると、それは東海林にもわからない。

「…、赤龍は、何て…」

雄大の隣で、青龍が言った。

聞いた東海林は、昨日の夜のことを思い出す。うまく思い出せない。赤龍がなんて言つて、東海林の寮を飛び立つていつたのか、そ

れは、覚えてもないし、思い出したくもないことだつた。

東海林は聞くと、青龍に言った。

「ごめん、あんまりよく覚えてない…」

聞いた青龍は、少しばかり視線を伏せた。

雄大は、「それって、」と東海林に聞く。雄大の口調は明るいが、東海林は今、沈んだような、そんな気分だ。

「赤龍がなんで怒つてるのは分からないってこと?」

聞いた東海林は、少しばかり視線を俯ける。はつきり言つて、理由は分かっている。これかなー、程度だが、赤龍が起こつてている理由は分かっている。

でも、それをどう表現していいのか分からない。

「…いや、でも、俺にも言い分がある」

それを聞いた雄大は、「ふーん」とつまらなさそうに、東海林のほうに言つた。

「それに、よく考えるとあいつが悪いんだ。あいつが、あんな図々しいことばっかり俺にするから…」

東海林は言いかけた。

その時、青龍の視線が、東海林の方に突き刺さつた。そんな気が、東海林にはした。

「…、きっと」

青龍が言つた。どこか穏やかな視線だつた。

聞いた東海林は、青龍の方に視線を向ける。青龍はどこか堅実で、どこかまともそうな視線を、東海林の方に向けていた。

「…、赤龍も、同じことを言つ」

東海林は、一瞬言葉を失つた。

確かに、でもそんなのは間違つてゐる、でも、確かになんか…。ジレンマ。

「で、でもやつぱり…、でも…」

東海林は、自分の中で話が完結しないことを理解する。東海林は、頭の中で、色々なぐちゃぐちゃとしたものを整理しようとする。整

理しようとするだけで、何がどうなっているか、東海林自身、よく分からなかつた。

赤龍　図々しくつてわがままでなんだかいつも偉そつて頭に来るやつ　いつも？　いつも！　本当に…？　…、

あーもうやんなつてくる。

東海林は思い、思わず目をつぶつた。小さく吐息をついた。「はあ…」

そして、東海林は空の方へと視線を向けた。その圧倒的な青の中に、赤い龍は飛んでいるだろうか。思いながら、東海林は視線を空の方へ仰ぐ。

青龍は、東海林の方へと小さく黙つてゐる。それが、今の東海林のためだ、そう分かつてゐるからだ。

雄大は、どこかよく分からぬ、と言うような視線で、東海林の方に視線を向ける。東海林は、ただ茫然と、その蒼の中にあると思いたくなる赤を、目を動かして探してゐた。少しばかり、変な気持ちになつた。

どうやら、遅刻気味らしい。大介は、時計を見て確認した。  
現時刻、八時五分。

まだ急げば間に合つうが、そもそも、大介は急ぐ気なんてさらさらなかつた。そもそも、大介が今急いだところで、全く何も起こらない。それを大介自身が、よく理解していた。

「もうすぐ学園祭かー…」

緑龍は、どこか遠くを見るよつに言つた。そして、片手に持つてゐる箸で、弁当をつまむ。せつと買つてきたばかりの、出来たてほやほやのコンビニ弁当だ。これ以上においしいものはない、と緑龍はある意味の確信を持つてゐる。

「どうしたんだ？　急に」

大介が、緑龍に言つた。

それを聞いた緑龍は、大介の方に視線を向ける。緑龍は、どこか楽しそうな視線を、大介の方に向ける。

「だつて、僕そんなのはじめてだもん！」

緑龍は言った。

聞いた大介は、少しばかり頭の中で、色々と考えてみる。そして、緑龍にこう聞いた。

「龍の世界には、学校つてないのか？」

聞いた緑龍は、少しばかり大介に目を丸くした。そして、緑龍は

小さく笑い、大介にこう言った。

「そんな、学校は人間特有のものだよ。勿論、いくら僕らが龍であつても、学校はなかつたよ。それに、学校があつたところで、誰も来ないと思うし」

聞いた大介は、緑龍に目を見開く。

「どうしてだ？」

大介は聞く。

聞いた緑龍は、近くのペットボトルの緑茶を一口呷る。そして、大介にこう言った。

「 unnecessary からだよ、僕らには」

聞いた大介は、どこか納得できたような、そんな感覚に埋もれた。 そうだ、確かに、龍つていう物が自給自足の生き物なら、そんな学校なんてもの、かえつて足かせになるだけだもんな。確かに、学校つて、人間特有つて言われれば特有な気も、うーん…。

少し、難しいところだ。

「それに、」

緑龍は言った。

聞いた大介は、俯かせた視線を、緑龍の方に向け直した。

「龍は他の物を持つてたしね」

どこか、意味深だつた。

しかし、それを詳しく聞いたところで、大介には、理解できるような気が微塵も起こらなかつた。

つまりは、そういうことだ。

聞いた大介は、「ふーん」と小さく言いながら、弁当を箸でつまむ。そして時々、テーブルの上に置かれている緑茶を、口の中へと流していく。

そして、大介は満腹になる。弁当の箱は空になる。

「ふー、満腹…」

大介は言った。そして、寮の壁に掛けられている時計を、小さく見つめてみた。そこには、こう表示されていた。

現時刻、八時十七分。

普通なら、こんな時間に出て、八時半の学校に間に合うわけがない。しかし、大介は余裕だつた。殆ど八時三十分に出ても、間に合うかもしれない。ただ、タイムラグが生じるかもしれないが。緑龍も、どこか満足げに、自分の腹をさすりながら、小さくこう言つた。

「ふー、満腹満腹…」

どこか、幸せそうな顔をしていた。

それを見た大介は、「緑龍、」と声を上げる。聞いた緑龍は、大介の方に視線を向ける。大介は、少しばかり光のある視線で、緑龍に言つた。

「そろそろ、行こう」

緑龍は聞くと、自分の後ろの壁にかかっている時計を見た。時刻は、八時十九分を指している。今二十分になつた。

ダッシュをしても、駅に着くからそこで待ちぼうけだ。

つまり、今から普通に行つたところで、間に合うわけがない。しかし、大介は確信していた。これは、絶対に間に合つ。と言うか、こんなで遅れていたら、それこそ奇跡だ。

見た緑龍は、「もうそんな時間だね」と大介に言つた。

緑龍は、弁当の包装を元に戻す。大介も同じことをする。そして、それらを勢いよく、ごみ箱の方へと捨て去る。

緑龍は立ち上がり、大介はベランダの窓を開ける。

緑龍はベランダへ先に出て、四肢をベランダの床につけて、翼を広げる。大介は、「いいか？」と緑龍に聞く。「いいよ」と緑龍は、いつものように返事をする。それを聞いた大介は緑龍の横に立ち、そして跨ぐ。

大介は緑龍の肩を持ち、緑龍は足に力をためていく。勿論翼にも。「いい？」

緑龍は聞いた。

聞いた大介は、「ああ、いつでも」と緑龍へ言つた。

聞いた緑龍は、四肢に力を込める。

空を縦に割らんばかりに、緑龍は勢いよく舞い上がる。そして、青い空に、緑色の点が浮遊した。

やつぱり英語は大切だと、香奈は思った。英語ですべてを稼いでいる人だつているくらいだし、やつぱり英語って大切なんだな。本当に、そう思える。

香奈は思うと、黒板に書かれている文字を、必死に頭の中で和訳する。黒板には、『I have been sick since yesterday.』と書かれている。和訳をすると『私は昨日から病氣である』だ。これなら簡単な文章だ。

香奈は思いながら、その和訳をノートの下に書く。

黄龍は、小さく香奈のノートを覗く。香奈は必死に、こまごまとさまざまなことを書いている。先生の言つた重要語句、関連話などが、綺麗に色分けされて書かれている。しかも字が非常にきれいだ。

「…す」「…、きれい…」

黄龍は言つた。

それは、香奈を小さくほめるものでもあつた。しかし、その声は香奈には届かなかつた。届くといつよりは、反響される、と言つた方が近い。

黄龍は、その香奈の集中力を見て、思わず驚いてしまう。香奈つて、意外と人の中ではすごい部類に入るのかもしれない。

そんな雰囲気を見せてしまつような、そんな真剣で真つ直ぐな視線だった。

黄龍は、どこか鼻が高いような、そんな気分になった。

だめだ、何も頭に入つて来ない。これなら保健室に行つて、色々と考え事をしていた方がましかもしれない。

東海林は考えた。それ以外に、考えられることがなかつた。なんとなく、どことなく眠い、と言つ感覺を持ちながら、東海林は黒板の方に視線を向ける。黒板には、『I have been sick since yesterday.』とかなんとか書かれてゐる。はつきり言つて、読んでも読まなくともどうでもいい。そもそも、『have』の後に『been』て何だ? そもそも、『been』って何だ? マメか?

東海林は考える。そして、どうでもよくなつてくる。

机に突つ伏して、どこかのなにかに打ちひしがれる。いつも後ろで聞こえてくる、かちやか茶と言つゲーム音が、全く聞こえてこない。これがいつもの、日常の枠なのかもしれない。そう考えるが、いきなり戻つて来られると、逆に非日常が恋しくなる気がする。そんなもんな気がする。

「つまり、この『since』が『から』と言つ意味なので、この後の『yesterday』にかかるて、『昨日から』と言つ風な文になる。と云つことは、この文は……」

英語の先生のペちゃくちゃ攻撃。

東海林にスリープの呪文がかけられる。東海林は、頭の中で今の感覚を思い描いてみる。東海林は耐えた。

眠くなつてくる。東海林は本気で思う。どんどんと、眠りへといざなわれていくような、そんな雰囲気が東海林にある。

「…」

机に突っ伏しているからか、黒板がさっぱり見えない。はつきり言つて黒板が見える見えないはどうでもよくて、東海林にとつては、別の何かがないことが重要だった。それを否定するかどうかは、東海林が考えられる範疇を越えている。

「、赤龍…、いない…」

東海林は、小さく呟いてみる。それでも、後ろから聞こえてくるはずのないゲーム機のかちやかちやと言づ音は、やはり聞こえてこない。

妙に、息が詰まるような、そんな雰囲気が東海林にはあった。その息が詰まる雰囲気は、何があるから息が詰まるのか、そんな難しいことを、東海林が知っているわけがなかつた。

…、

考えてみる。

考えても、よく分からぬ。

考えて、それでも答えがない。

仕方がないと思う。思いたいが、それは通用しない、と言づことを東海林は知つていてりする。

もしそこで妥協したら、恐らく、いや絶対に、東海林は赤龍に会えなくなるような、そんな気がする。

東海林は思つ。

そして、少しばかり体を起こす。そこにある、黒板の封家を、真っ白なページに埋め尽くしていく。

このページを埋め尽くすには、赤龍は帰つてくるだろうか。このノートを使い切るころには、赤龍は帰つてくるだろうか。何のフラグを立てれば、東海林のもとに赤龍が帰つてくるフラグが立つのだろうか。

考えて分かるものだつたら、そんなものは苦労しない。

そういえば、青龍がいないなー。雄大は思った。いつも授業中でも雄大の隣にいるのに、今だけは違う。どこか別の場所に、この時

間帯は行つてゐる。いつもの事ではない。これは今日が初めてだ。雄大のもとを離れる時があつたが、部活中のたつた一回だけだ。授業中に離れるなんてことは、今日が初めてだった。

「えー、この『have』は勿論、主格によって変わるから、もし主語が『I』じゃなくて『He

』だつたら…」

正直、雄大は英語なんてどうでもよかつた。雄大にとつて、英語なんてものは二の次でもなんでもなかつた。ただそこにある言語だつた、日本語と同じだ。日本語だつて、雄大にとつてはただの道具に過ぎない。といふか、それ以上でもそれ以下でもないと、本氣で思つてゐる。

そんな事より、バスーン吹きたいなー。

本氣で、雄大は思つてゐた。

学園祭が近いから、と言つことで、最近の文化部は何氣に忙しい。鉄道研究部はいつもの倍以上のスピードと丁寧さでジオラマを作つてゐるし、美術部だつて、完成してゐる展示品の何を展示しようか、色々と考えてゐる。

雄大たち、つまり吹奏楽部も、それは同じだつた。夜までずっと演奏を続ける。つまりは、そう言つことだ。

雄大は、小さくあくびをしようか迷つ。英語の先生は、長々と説明をしている。続けてゐる。雄大からは目を外してゐる。

雄大は、小さくあくびをした。

それを言い咎める人なんてものは、勿論いなかつた。そして、それを言い咎めようとする龍も、そこには存在しなかつた。

バスーン吹きたーい、青龍どーー。

青龍は、バスーンの次だつた。

青龍は、中庭にいた。

「…、話は聞いた」

その声は、いつも通り淡々としたものだつた。その口調そのもの

が、青龍を表しているよつた、そんな感覚もあつた。

青龍は続けた。

「…、どうするつもり」「

青龍は、赤龍に聞いた。

中庭にいるのは、青龍と赤龍、一人（一匹）だけだつた。サボつている生徒何ていう物はいないし、ぼつと空を見上げている人物なんて言つのも、悪と戦つているヒーローもない。いつも通りの中庭だ。

「うむ…」

赤龍は、少しばかり困ったよつた、そんな表情で小さく言つた。困つてているのは、赤龍も同じだつた。赤龍も、はつきり言つて、こんなものはすぐにでも終わらせたいと思つていて。と言うか、思わないほうが変だとも思つ。こんな感覚は、赤龍は嫌いだつた。つまり本当は、東海林と席の後ろについて、そこでゲームをやりたかつた。そして、いつも通りに、ただ時間を浪費するだけのほうが、赤龍にとつて好ましかつた。

しかし、なんとなく、出来ない。

なんとなく出来ないものは、出来ない。東海林のことを考えると、喉の奥が妙に酸っぱいような、苦いような感覚になる。

「…、」

青龍は、そんな困り果てた、悲しそうな赤龍の顔を見ながら、ただ淡々と視線を送つていて。そこにあるのは、いつもの赤龍ではなかつた。いつもの赤龍は、もっと明るくて、元気があつて、図々しい。ここにいる赤龍は、何か黙りこくつているだけが取り柄の、空氣みたいな存在だつた。

「…、うむ…」

赤龍は、更に困り果てる。赤龍は、少しばかり考える。そもそも、東海林がいけないんじや。東海林が赤龍のゲームを邪魔するから、こんなに変な感覚になるのじや。でも…、いや、そんな、でも…。分からなくなる。そして「ちちや」になれる。嫌になつてくる。

「…、どうすれば、いいのじゃ…」

赤龍は青龍に言った。

聞いた青龍は、赤龍の方に視線を細める。赤龍は、視線を細めているだけだ。地面へと向けて、息を少しばかり詰まらせていく。大きく吸うと、それがため息になりそうで、赤龍は怖かった。

「…、どうすれば、って…」

青龍は言った。

赤龍は、青龍の方に視線を徐に向ける。青龍は、少しばかり黙りこくれている。ただ、黙っているだけだった。

「じゃから、赤龍がこれからどうするべきかと言つ」とじや…」

言つた。

しかし、青龍は答えない。赤龍は、自分の中にもやもやとなつている感覚があることに気が付く。

「…、」

青龍は、答えない。

赤龍は、まるで問いただすかのよつて青龍に聞く。

「どうするべきなのじや、赤龍は…」

赤龍は声を張り上げる。

青龍の目が、冷たく赤龍に当たる。赤龍は、小さく口を紡ぐ。何も言えなくなる。考えは出来るが、どうしても、妙な気分になつてくる。

「…、仲直り」

青龍は言つた。それしか言えなかつた。

「そんなことは分かつてある…、」

赤龍は声を、床の方に向かつて張る。声が、中庭にだけ響いていく。教室には届かない。少なくとも、東海林がいまいる教室には届かない。

「…、分かつてゐるのじやが…」

赤龍は言つた。

青龍は言つた。

「…分かつてない」

はつきりと。

聞いた赤龍は、青龍の方に声を張り上げる。赤龍の目が、いつも  
よつうるんでいる。秋風が、吹きつけてくる。

「どこが分かつてない」というのじゃ！」

赤龍は、青龍を見張った。青龍が、一体何と答えるのか、それは  
赤龍には分からなかつた。だからこそ、青龍に視線を張る必要があ  
つた。

それを聞いた青龍は、赤龍に言つた。

「…、全部」

意味が分からなかつた。

そもそも、赤龍の今の気持ちを理解できるのは、赤龍本人だけだ。  
つまり、青龍に分かるわけがない。

しかし、青龍の言葉は、どこか自然と、信じ込んでしまいたくな  
るような、そんなものがあつた。

「ぜ、全部じゃと…、」

赤龍は、小さく言つた。聞いた青龍は、赤龍の視線をまっすぐに  
覗く。赤龍は、田を背けたくなる。そむけられるなら、の話ではあ  
るが。

「…、そう」

青龍は静かに言つた。

赤龍は、口を紡いだ。視線を下して、青龍の声だけを聴く。声が、  
赤龍の中に響いてくるようで、少しばかり気持ちが悪かつた。

「…、ここにいる時点で、まだ赤龍には、分かつてない」

はつきり言つて、青龍が言つている言葉の意味が、よく分かつて  
いなかつた。ここにいる時点でダメ？どういふことぢや？それ…。

赤龍は考える。考えてどうにかできる」とでもない。

赤龍は、青龍に言つた。

「どういう、ことぢや。もつと、分かりやすく言わんか…」

喉が渴いてくる。

赤龍の中で、どんどんと水のようなものが失われていくことを感知する。何故だかは分からないが、赤龍は、水がほしいと思っている。

青龍は、赤龍に言った。

「…」

青龍は黙る。何故かは分からない。ただ、青龍の中で、思考が渦巻いているような気がしたのは、確かだつた。だから、赤龍は何も言わなかつた。何を言つても、無駄だつたからだ。ここでは、何を言つても無駄だ。

「…、赤龍が、東海林の隣にいなーから」

青龍は言つた。

意味が分からなかつた。

分からなければ、東海林の隣にいられないのだろうか。

赤龍は考えた。考えるだけで、赤龍にはそれ以外、何かができるわけではなかつた。赤龍は、ただ黙つてているだけだつた。

昼食の時間になつた。昼食と言つたら、勿論弁当だ。香奈は専ら、弁当派だつた。勿論、自分で作ったお手製だつた。

「昨日のおかずの残りね」

香奈の隣で立つてゐる黄龍が、香奈に言つた。聞いた香奈は、「うん」と声を明るく張り上げた。

昨日、羽並に食事を誘われる前、軽めにとつた夕食の残りだ。その時は満腹で、香奈は食べきれなかつたおかずを、明日の弁当の分に回したのだ。つまり、今香奈が笑いながら持つてゐるそれだ。

香奈は、楽しそうに弁当を箸で食べていく。美味しいのか美味しいのか、と聞かれても、はつきり言つて困る味だつた。自分が作つたから、と言つもあるかも知れない。

「ただけど、これしかなかつたしね」

香奈は言つた。

聞いた黄龍は、少しばかり視線を細めた。そして、「確かに…」

と小ちめに呟いた。

香奈は食べながら、「やういえば」と黄龍に呟いた。聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、黄龍に聞くよつて呟いた。

「今日つて部活よね?」

聞いた黄龍は、少しばかり田を細める。「ええ」と、黄龍は軽く答える。

「学園祭が近いからって、もうみんな学園祭に向けてまつしげりじやない」

黄龍は呟いた。

聞いた香奈は、「だつたら」と黄龍に呟いた。

「今日は帰りも遅くなっちゃうだし、どこか、食べて帰っちゃう?」

それを聞いた黄龍は、少しばかり田を細める。「夜間のコンビニ以外の飲食店の出入り禁止は…?」呟つても無駄だと分かっていながら、黄龍は呟いた。

それを聞いた香奈は、

「大丈夫よ、ね?」

やはり、呟つて無駄だった。と黄龍が思つような、そんな言葉が返ってきた。

黄龍は小さくため息を吐きながら、香奈は笑いながら弁当をつまんでいる。楽しそうに、弁当を食べていく。

その時だった。

香奈の机の上に、急に手が現れた。

手は、まるでドアをたたく辰みみたいな、そんな形に整えられて、香奈の机を軽く数回、叩いた。

コンコン…

聞いた香奈は、その腕の主に視線を向けた。そこにいたのは、女子だった。

「あら、畔ちゃん」

顔立ちが整つた女子の名前は、火蔵 ほりくら 畔 ほりだつた。畔は、香奈の班

と同じ班で、香奈とそこそこの関係を持つた人物だった。別に、香奈は嫌いではなかった。勿論、畔もきらいではない。それを聞いた畔は、香奈の方に声を放つた。何処か微かで、しかし芯がしつかりしたような声。

「香奈ちゃん、今日一緒に帰ろうよ」

「いきなりだつた。

はつきり言って、香奈は驚いてしまつた。

黄龍も、畔の存在は知つていた。しかし、中がそこそこのいいだけで、そこまでいいというわけではなかつた。つまり、いきなり「一緒に帰ろう」なんて普通言わないものだつた。しかも、この頃は学園祭ムードだ。畔だつて、学園祭が吹奏楽部にとつて、大変ではないはずがないことは、重々承知のはずだつた。

しかし、そこであえて聞いてくる。

何だろう、香奈は思つた。黄龍は、驚いただけで、それ以外の感情は特になかつた。

「えつと、いいけど……、」

香奈は言いかけた。小さく、香奈は黄龍の方に視線を向ける。黄龍は首をかしげる。

聞いた畔は、嬉しそうに「やつたー！」と言つた。目を開く。その眼は、まっすぐかなをとらえている。目の中に、しつかりと香奈が映つている。

「でも、私今日部活よ？だから一緒に帰るとなると……」

香奈は言つた。

そこまで言えれば、普通は分かる。香奈はそう思つたからだ。そして、普通ここまで言えれば、自信の損得勘定で、先に帰ると待つを天秤にかける。そして普通なら、ここでその天秤が、先に帰る方が傾く。

それは、あくまで香奈の経験だつた。しかし、それは常に事実だつた。

「いいわ」

その事実が、今覆された。

一瞬、何なのかよく分からなくなつた。一瞬、畔が何を考えているのか、よく分からなくなつた。先に帰るよりも、一緒に帰ることを畔は選んだ。それほどの仲なら、まだ分からなくもない。東海林に同じ台詞を、畔と同じ境遇だつたら素直に喜んでいたはずだ。しかし、香奈はその言葉に、喜びを感じることは少なかつた。

疑問。

それだけだつた。

黄龍は、少しばかり意外そうな顔で、畔の方に視線を向けている。畔には黄龍が見えるはずがないから、黄龍が見ているだなんて、畔には想像もつかないはずだ。

「私、香奈を待つ」

それを聞いた香奈は、さつきチャイムが鳴つたような、そんな気がして、黒板の上にかかっている時計を、視界に入れた。まだ、チャイムが鳴る時間には早かつたことを、香奈は覚えていた。

「部活でしょ、知つてるわ」

畔は言つた。

聞いた香奈は、少しばかりよく分からなくなつてく。何故畔が、今香奈にこんなことを言つているのか。全くと言つていいほど、分からなかつた。

「でも、私香奈ちゃんと一緒に帰りたいわ」

聞いた香奈は、少し困つた。

ここでどう答えようと、香奈の勝手だ。そもそも、いいけど、と言つたばかりだ。それに、その考えは今でもわかることは無かつた。変わつたのは、何か全く別の物だ。香奈は、それを全ては理解していなかつた。

香奈は、少し困つていた。

しかし、今聞かれているものが何だかを思い出すと、香奈は言つた。

「…、いいわよ」

聞いた畔は、「それじゃあ、」香奈に嬉しそうな表情を向ける。

「待ってるから、帰るとき教えてね、教室にいるから」

何か、香奈はその台詞に取っ掛かりのようなものを感じた。何だらうか。考えてみる。分からぬ。

まあ、いつか。

香奈は思った。

畔はどこか満足げに、香奈の方へと視線を向けた。そして、少しばかり楽しそうに、香奈に言った。

「それじゃあ、一緒に帰ろうねー」

言いながら、どこかに行く。

香奈はそれを見ながら、畔に声を張つた。

「うん、待つててねー」

どこか、力のない声だった。香奈自身、その声に力が入つていなことを、重々承知していた。

聞いた黄龍は、畔の方に視線を向ける。香奈は、顔では笑つてゐる。顔でしか笑つていない、と言つべきだらうか。

「なんだか、妙ね」

黄龍は言った。

聞いた香奈は、少しばかり笑いながら、若干目を細めた。誰にも分からぬ程度に、しかし黄龍には、しつかりと分かる程度に。

「…うん」

小さくではあるが、呟いた。

さっぱりと言つていいほど、香奈には分からなかつた。畔は、ただの班員だ。香奈にとつては、それ以上でもそれ以下でもない、ただの班員。畔にとつても、それは同じではないだらうか。考えてみたが、途中でよく分からなくなつた。

途中で、妙な考えが浮かんできた。

「そつか！」

香奈は納得したように、声を張り上げた。

それを聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、目に確

信を持ちながら、黄龍の方に声を張り上げた。

「畔は、実は私と仲良しになりたいのよ！」

…？

黄龍は、沈黙した。

香奈は、明るそうに語った。

「だから、まず第一歩として、一緒に帰ることを選んだのよ。いいと思つた、それ」

香奈は自分から、ひとりでに語つて行つていることを知らない。

黄龍は、香奈にただ語らせているだけだった。

香奈は、黄龍の方に真っ直ぐな、よどみのない視線を向けた。

「私も畔と仲良くしなくちゃね！」

香奈は言った。

黄龍には、意味が分からなかつた。

しかし、明るいといふことがいいことだといふことは、黄龍には分かつっていた。だから、黄龍は何を言い咎めるでもなかつた。

黄龍は、少しばかり香奈へと笑顔を向けた。

香奈は、笑顔だった。いつものように、輝かしい笑顔を放つていた。

吹奏楽部は、そんなに変わつたところはなかつた。学園祭へ向けて、曲をただひたすら練習して、そして駄目な部分を指摘される。そして、一つ一つ、修正がなされていく。一つ一つ、みんなの意志が一つになつて行く。そこに、雑念なんでものがあつたら、天野下の吹奏楽部は、きっと金賞なんて取れないだろう。香奈は思つた。香奈は、思いながらあたりを見回した。楽器を持って規則正しく並べられた椅子に、みんなは座つていて。きらきらと光るものから、厳かな輝きを放つものまである。楽器は、そういう物だ。消耗品のシャーペンとはわけが違つ。

「それじゃあ、もう一A、から」  
撥を持った顧問の先生、下滝先生が、中学生と高校生の部員に言った。部員たちはまじめそうに、『はい』と声を落ち着かせながら響かせる。勿論香奈も、返事をしている。

それは、練習番号だった。いちいち、この小節は何小節だから、なんて数えていられないから、共通の区切りとして、練習番号が設けられている。しかし、その中でA、見ることは初めてだった。それは香奈にとつても、恐らくみんなにとつても同じだった。

しかし、まだ分からなかつた。

香奈は、自分の手の中にあるテナーサックスを見ながら、小さく思つた。近くには黄龍がいて、香奈の演奏を聞いている。そしてたまに、「こうした方がいいんじゃない?」と言つよつなことを言つてくれる。そしてその通りにしてみると、香奈にとつて、音楽がより良い方向に行くような、そんな感覚がある。黄龍は、「私の感性を言つてみたまで」と、どこか謙遜したような様子で言つ。

テナーサックスが、妙に氣急く感じられた。

香奈は、音楽室の窓から、自分のクラスの方に視線を向ける。クラスにはまだ、電気がともつている。この学校は設備がよく、人がいる部屋には明かりがつき、いない部屋は暗くなるという機能がついていた。つまり、明るいということは、まだそこに、誰かが残つているということだ。

下滝先生の撥が、空中を横切つた。  
みんなは息を吸つた。

香奈は出遅れた。しかしそれでも、香奈は演奏を続ける。その曲は、香奈は結構好きだった。ノリがよくて、非常に吹きやすい。少し早いのが難点ではあるが、それでも、ノリの良さは、いあつまでの曲よりは、一番よく思えた。吹奏楽の曲だからって、別に陰気くさい音楽や、あまり知らない音楽、と関連付けられるのはただの偏見で、実は様々なジャンルがあった。そこにあるのは、どちらかと言つと、J-POPに近かつた。

「そこ、」

下滝先生は、いつもは寡黙な先生だ。寡黙で、どこか厳かで、どこか暗いような、そんな印象を持つ先生だ。しかし、いくら寡黙だからとはいって、合奏中に何も言わないというのは、問題がある。

「そのスタッフカート、もう少し」

スタッフカート 区切る。

確かに、そんな意味があつたはずだ。香奈は思い出す。そして、音楽的なスタッフカートは、やはり他の音とよく区切る、と言つことになつてている。

『はい』

みんなの声が、音楽室に響き渡つた。

どこか、香奈は乗り気ではなかつた。しかし、そんな気分は、すぐには香奈の中で吹つ飛んで行つたのを覚えている。

「だめだ、ため息をしてもし甲斐がない……。何処にいるんだよ……、本当に。」

東海林は思いながら、バスクラリネット（バスクラ）を持ちながら、少しばかり目を細める。いつもなら、音楽室の壁に寄りかかって、腕を組んでそこにある音楽をひたすら聞いているだけの赤龍が目につくはずなのに、音楽室の壁には、白や茶色と言つた標準職しか目につくことは無く、そもそも赤の要素なんてそこには全く存在しなかつた、と言つことは、答えは簡単だ、と東海林は思う。

赤龍が、まだいない。

それは、簡単な結論で、それ自体結論になつてほしくない結論だつた。赤龍がいないというのが、こんなにも違和感があるものだとは、東海林には想像もつかなかつた。

「そのスタッフカート、もう少し」

スタッフカート 切り離す 今の東海林と赤龍。

つまり、そう言つことだ。

スタッフカートこそが、今の東海林と赤龍の関係だ。それ以外に、

何があるわけでもなかつた。空と言つてもいいような、そんな空白を東海林は、スタッフカードに持つていた。

『はい』

声が、一斉にその音楽室に響く。東海林は小さく返事をする。そして隣にいる雄大は、バスーンから口を離そうともしない。問題あり、と言つても過言ではない。そもそも、下滝先生の声が聞こえてもなお、雄大はすつと、バスーンの練習をしている。つまり、下滝先生の言葉は聞く気がない、ということだ。それはいろいろな意味で問題ありだ。

「それじゃあ、もう一A、から

さつきと同じ場所だ。

東海林は思うと、下滝先生の方に視線を向けた。下滝先生は、タクト代わりの撥を片手に、右手でそれを上げる。みんなは一斉に、その撥の方に視線を向ける。流石は吹奏楽部、東海林は思う。

そして一気に奮われる。

東海林は、簡単なメロディーを吹きながら、隣にいる雄大を見る。雄大は、いつもよりかはゆっくりめな指の動きで、バスーンの音を奏でていた。いつもはもっと速い。速すぎて、みんな驚いてしまうくらいだ。

それを吹いているうちに、いつの間にか曲が後半になつた。譜面の半分まで行くと、クラリネットのソロになる。そこは、東海林の所属しているクラリネットパートでも、もっとも腕が立つと言われている憶羅先輩おくらがやつている。憶羅先輩は、それを軽々と吹きこなす。ソロのはずなのに、そこにただ風が吹いているだけかのようだ。そんな爽快感がそこにはあつた。

「…、流石だな…」

小さく、東海林の隣で声が聞こえた。その声は、雄大の物ではない。雄大の方ではない東海林の隣の、先輩の声だった。

秋沙汰あきさた先輩ちかだった。

秋沙汰あきさた千華先輩ちかだった。

秋沙汰あきさた

実力で、学校に一つだけあるバセットホーンを、その実力で勝ち取った、クラリネットパートの先輩だ。つまり、秋沙汰先輩が言う「流石」がどの程度の物なのか、はつきり言つて東海林には分からなかつた。

下滝先生にも、何を言われることもなく、曲が進んで行く。ソロは全て終わり、みんなと合わせ、そして曲は、いい雰囲気で閉じた。それでも、東海林の心が晴れることは無かつた。その部屋には、赤の要素が少なすぎた。からだ。

楽器を片付けている最中だつた。その声が聞こえたのは、その声はどこか軽快で、それでいて、どこかおどけたような、そんないょうな口調だつた。

「だいいすけ」

大介は、ピッコロを演奏している。吹奏楽部の中でピッコロの存在は、はつきり言って大介は、あつてもなくともどちらでもいいような気しかしない。特定の曲には必要だが、それ以外には、別に対しても必要がない物。だとおもう。

それは、雄大の声だつた。

雄大は、もうバスーンを片付け終えたのか、大介のもとにやつて来ていたのだ。大介はそれを聞くと、「お前もう片付け終わつたのか」と少しばかり驚く。簡単に、「うん」と雄大は答える。

聞いた大介は、少しばかり考える。そして、少しばかり雄大の方に視線を細める。雄大は、少しばかり意外そうな表情で、大介のを見る。

「お前、もしかして適当に片づけてるんじゃないだろうな」

適当 テキトー ちゃんとしてない感じ。

楽器に適当なんて、そんなことは許されない。

大介は思った。大介はそもそも、ピッコロのプロを目指していた。だから、楽器の手入れには、人一倍敏感だった。

「そんな事ないよ大介」

雄大は、はつきりと大介に言った。雄大の目は、まっすぐ、大介の方に向いている。大介はそれを見ると、少しばかり目を細めた。雄大は、楽しそうに微笑んでいる。何が楽しいのかは、全く分からぬ。

「どうだかな…」

大介は、雄大に言った。

「そういえばさ、」

雄大は言った。

聞いた大介は、雄大の方に視線を向けた。雄大は、大介に続けた。「青龍知らない？」

聞いた大介は、一瞬、何のことかよクラからなくなる。

「青龍？」

考えても、分からぬ。

「が、どうした？」

大介は言った。

それを聞いた雄大は、「だから、青龍！」と大介に言う。聞いても、大介にはよく分からぬ。理解できないのではなく、情報が少なすぎる。

「ちょっと待て、」

大介は雄大に言った。

聞いた雄大は、大介にじつと視線を向ける。

「青龍だけじゃなんだかんないから、ちゃんと答えてくれ、青龍がどうしたんだ？」

聞いた雄大は、「あのね」と笑いながら言う。

「青龍がどつか行つちゃつたんだよねー」

笑つて言えることではない。

大介は小さく、そう考える。しかし、雄大に常識と言う物が通用するかという点を考えてみると、それは限りなく、否、と言うことになるかもしねりない。

「どつか行つたんならどつか行つたらしく、ちゃんと慌てる」

大介は雄大に言った。

聞いた雄大は、少しばかり視線を細める。そしていろいろと考える。

「…、何で？」

そう聞かれるのは非常に困る。

大介は思うと、少しばかり目を細める。「だつて、普通はな、」と大介は、語り始める。

「そう言う、失踪みたいなことが起こつたら、慌てるもんなんだ。分かつたか？」

大介は聞いた。

雄大は言った。

「分かんない」

元気がいい返事だつたことは認める。それ以外は断固却下する。大介の心の中で、雄大に思つたことだつた。

「…、まあ、お前だもんな」

雄大は、そう言われても笑つてゐる。そして雄大は、大介に言つ。「それで、大介…、じゃなかつた、青龍知らない？」

雄大は、間違えた部分を訂正した。

大介はそれを聞くと、少しばかり目を細めた。「青龍か…」と、自分の記憶を手繰つてみる。

緑龍が、水伸び場から帰つてくる。そして、「あれ、」と雄大に言つた。雄大は、その方向に視線を向けた。

「雄大さん、どうも」

緑龍は、礼儀正しくそう言つた。

聞いた雄大は、「うん、どうも」と等閑だつた。

「どうしたんですか？こんな時間に」

緑龍は言つた。

聞いた雄大は、緑龍に返した。

「ちょっと、部活に来ててね」

雄大は言つた。

緑龍はそのサイクルに、若干の違和感を感じた。しかし、「まあいつか」となる。そして、大介の方に視線を向ける。

「お前、青龍がどこにいるか知らないか?」

大介は、緑龍に言った。

聞いた緑龍は、「へ?」と、よく分からぬ、と言つよつた表情をして、大介の方を向いている。

「青龍が、どうかしたの?」

聞いた大介は、こう答えた。

「いなくなつたらしいんだ」

聞いた緑龍は、目を大きく見開いた。口の中に、無意識に空気がたまつていくのを、緑龍は感じた。

「えー!」

大声だつた。

それを聞いた大介は、「お前、つるさいぞ」と緑龍に言った。

「それで、知つてる?」

雄大が、緑龍に聞いてきた。

聞いた緑龍は、「うーん……」と自分の記憶を手繰つてみる。確か、

青龍は無言で、どこかに行つたはず。

「合奏中に、どこかに行つたのは覚えてますけど……」

聞いた雄大は、「場所分かる?」と緑龍に聞く。

場所、場所、場所……。

緑龍は考え始める。しかし、どうしても分からぬものは、分からぬ。考えて分からぬのなら、その道筋が必要だ。

「ちよつと、やってみます」

緑龍は言った。

聞いた大介は、なんとなく緑龍が、何をしようとしているのかわかつた。

緑龍は、目を細めた。

あたりの音が、風を伝わつて、緑龍の耳に、どんな些細な音でも届く。みんなの声、楽器の音、先生のキーボードのタイピングの音、

外で走っている車の音、木々が奏でる葉の音。風が、揺れた。

声だ。

緑龍の耳に、一組の会話が、聞こえてきた。はつとなつた。

『『じゃから、どうすればいいんじゃね？』』

それは、赤龍の声だった。

非常に小さいが、それは赤龍の声だった。赤龍の声は、多分どこに行つても聞き間違いはしないと思う。緑龍は思った。

『……、東海林のところに行けばいい』

それは、青龍の声だった。

よく分からなかつた。しかし、緑龍はその会話をよく聞いていた。

『でも、東海林に会つて何をすればいいのか、分からんのじゃ……』

赤龍は、どこか不安そうに、青龍に言つた。

青龍は、少しばかり呆れながら、赤龍の方に声を放つた。

『……、話せばいい』

言い放つよくな、そんな適当に近い言葉だった、そんなよくな気が、緑龍にはした。

赤龍と青龍は、暗い裏道に立つていた。そもそも、龍は器か術師でないと、見ることは出来ない。だから、そもそも龍がいるなんて認識はされず、ただそこは、普通の道として処理される。普通の人には。

「何を『じゃ……！』」

困つたような表情で、赤龍が青龍に言つた。

青龍は、少しばかり顔をしかめる。言つことなんて、決まつている。

「……、謝罪の言葉」

聞いた赤龍は、「何で赤龍が謝らなくてはいけないの『じゃ！』」と言い始める。青龍は、小さく吐息を吐く。

「そもそも、東海林が赤龍のゲームの邪魔をしたから悪いの『じゃ！』」

東海林がそんなことで赤龍を責めてきたりしなければ、赤龍は普通に過ごせたのじゃーじゃが…、赤龍は何故、東海林の寮から飛び出して行つてしまつたのじゃろうか…」

赤龍は考え始める。

「…、」のは、勝手に考えさせるのがいい。

青龍は、分かつていた。だから何も言わなかつた。何を言つても、ここでは雜音になるだけだ。

「…、うーむ…」

赤龍は唸る。

「…、」

青龍は沈黙する。

街灯だけが、そこにある光だつた。そこにある光は、そんなに明るくなく、しかし不十分ではない光だつた。

赤龍は、「うーむ…」とうなつた。

「…、」

青龍は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、どこか全く別の方向を向きながら、違う方向を見て考へていて。

「…、つまり、どういうことじや…？ 東海林が悪いのかの？ それとも、勝手に出て行つた赤龍が悪いのかの…？」

赤龍は言つた。

そんなことを言われても、はつきり言つて青龍には困るだけだつた。そんなことは、個人の勝手だと思つ。青龍は少なくとも、そう考へていた。

「そもそも、何がこの場合悪いことなのじやう…？」

赤龍は小さく言つた。

聞いた青龍は、「…、」と沈黙した。

「…、東海林は悪い…」

青龍は言つた。

その雰囲気は、肯定ではなく、疑問だつた。

聞いた赤龍は、青龍の方に視線を向けた。青龍は、一つの日に、

しつかりと赤龍を映し出していた。

「う…、む？」

赤龍は、小さく青龍に言った。

青龍の目に、引き込まれていくような、そんな感覚に近かつた。

「…、それとも、赤龍がわるい」

青龍は言った。それも、肯定でなくて、疑問に他ならなかつた。それ以外の、何でもなかつた。

赤龍には、よく分からなくなる。

青龍は、少しばかり目をつぶつた。

「…、赤龍には…」

小さく言いかけた。そして、赤龍は小さく口を紡いだ。

青龍は、赤龍にこう言つだけだつた。

「…、俺からすれば、」

言つ。

「…、二人とも悪い」

赤龍は聞くと、青龍の方に目を少しだけ丸くする。青龍は、どこまでも冷淡で、それでいて、どこまでもまっすぐな、そんな視線をしていたことは、確かだつた。

「それは、赤龍も…、と言つ」と、かの…？」

赤龍は聞いた。

それを聞いた青龍は、一度目を閉じる。何も言ひはしない。言つだけ無駄だ。

赤龍は、少しばかり俯いた。そして、街灯に体を寄せた。小さく吐息を吐いた。ため息ではない。

「…、うむ…」

青龍は、更に赤龍に言つた。

「…、どうするつもり」

疑問だつた。

そんなことを言われても、今の赤龍に、それをどういできるほどの物がないことは、重々承知していた。赤龍自身も、青龍もだ。

「…、どうする、と言われても、の…」

赤龍は小さく言つた。

目を遠くしながら、少しばかり東海林の顔を思い浮かべてみる。喉が、妙に、乾いたような感覚と同じような、そんな感覚になつてくる。

「…、どうする…、と言われても…、の…、」

赤龍は、小さく呟く。

考えたりない。

まだ、納得し切れていない。ともいえるかもしれない。

赤龍は思うと、飛び立つた。

ただ、それだけだつた。

青龍は、それをただ、見据えているだけだつた。ただ、沈黙がその場に残つて、その場に、青龍が残つただけだつた。

聞こえた音は、それだつた。

ただ、それをどう解釈するかは、緑龍自身の勝手かも知れなかつた。だから、緑龍は口を紡いだ。

「どうだ？」

大介が、緑龍に聞いてきた。

どう答えればいいかは、よく分からない。しかし、その後の音に、羽音のようなものが二つ聞こえた。一つは遠くへ行つて、もう一つはこちらに向かってきた。

赤龍か、青龍かは知らない。

しかし、あの会話の内容を考えてみると、もしかしたら、青龍の方が確立としては高いかも知れない。

緑龍は思つた。

「…大丈夫です」

緑龍は雄大に言つた。

聞いた雄大は、何が大丈夫なのかよく分からない。

緑龍は、雄大の方に、続けて言つた。

「青龍は、今こっちに向かってきているようですから、  
口が、妙に乾燥してくるような、そんな感じ。

「おー、帰つてくるかー」

雄大としては、帰つて来ても帰つて来なくても、そんなに生活自体に支障はない気がする。しかし、やはりいないと、何か違和感がある。

「よかつたな、雄大」

大介は雄大に言った。雄大は、いつもどおりの表情をしながら、「うん」と空返事をする。別に雄大は、青龍がいてもいなくてもすることは変わらない、と思っている。実際そうだし、そもそも、生活で青龍に影響されていることなんて、ほとんどない。

「やつと帰つてくるよー」

雄大は言った。

緑龍は、さつきから妙な気がしてならなかつた。妙な気分で、何か、おかしな気分がする。あの会話の内容が、何か引っかかるような、そんな気がしなくもないから、だろうか。

青龍 雄大 良好。

赤龍 東海林 …?

東海林に、色々と聞かなければいけないことがありそうだ。

緑龍は、少しばかり考えた。

教室に寄つた。そしてやはり、そこにいるのは畔だつた。それ以外に、誰もいなかつた。

畔は、少しばかり暗くなつてゐる教室で、一人本を読んでいた。光が、畔だけに照らされてゐるような、そんな風にも香奈は見えた。

そこまでして、一緒に帰りたかつたの？

香奈は考える。しかし、考えたところで分かることは少ない。

香奈は教室の中に入る。がらがらがら、と、ガラス張りのドアが

開く。

畔はその音を聞くと、すぐに香奈の方に視線を向ける。「香奈ちゃん」と言いながら笑い、本にしおりを挟む。本をバッグに入れて、それを肩にかけると、すぐに香奈の方に近寄つてくる。違和感。

「それじゃあ、一緒に帰りましょ」

畔は言った。

聞いた香奈は、一瞬黄龍と視線を合わせた。

「ええ」

どこか、力のこもっていない声で、香奈は返事をする。畔は一人、元気そうに廊下をリードする。

まあいいか。

そう思いながら、香奈は畔の方に近寄る。別に、本人が何かをたくさんでいるわけでもないし、別に、何か悪いことをしようとしているわけではない。ただ、一緒に帰りたがっているだけだ。

大丈夫。

香奈は思つ。

「…、何なのかしらね、畔つて」

黄龍が言った。流石に、畔の前で黄龍と話すことは出来ない。そんなことをしたら、怪しまれるだけだ。

香奈は思い、畔に言った。

「ところで、何で私と帰りたいと思つたの?」

聞いた畔は、学校を出る。香奈もそれに続き、ドアから学校を出る。

「それは、もう少しあつたら教えてあげるね」

愛想がいい。ただそれだけ。

それだけで、十分な気がする。

香奈は思い、小さく疑問げに笑いながら、畔について行く。黄龍は、何か引っかかるような、そんな気分しかしない。

一人（と一匹）は校門を抜けて、裏道に入つていく。夜の裏道は、

どこか暗くて、薄気味悪い。香奈も、何回かこの道を通りて帰ったことがあったから、道を知っていた。

「いっし、」

畔は言いながら、香奈の先を行く。

香奈は、あれ?と一瞬思う。あんな道、通ったっけ?思つが、聞いた話を思い出す。

裏道からだと、ある程度天野下のことを知つていれば、どんな道を行つても、すぐに天野下学園前駅に着く。

そつか、と香奈は思う。

そして、香奈は畔について行く。

街灯が少なくなる。

そこは、川だった。小さな川と、小さな橋がある、そんな場所だった。

こんな場所があつただなんて、香奈は知らなかつた。夜だからか、水はほとんど見えない。街灯が、極端に少なくなる。しかし、かろうじてそこには、街灯があつた。申し訳程度に、それは光つていた。

「こんな場所があつたのね……」

香奈は言つた。

畔は立ち止まる。「うん、」と、さつきと同じ声で香奈に言つた。畔は香奈に振り返つた、笑いながら、香奈の方に視線を向けている。どこか、全く別物を見ているような、そんな気が香奈にはする。

黄龍は目を見開いた。

「香奈! 伏せて!」

瞬間。

「それじゃあ……、」

死んで。

?

一瞬の出来事だった。

黄龍が、香奈の体を川の方へと倒した。その後、さつきまで香奈がいた場所に、青白い閃光が、通り抜けて行く。

何…？

「あら…、随分と鋭いのね…、て、」

香奈は、上に乗っている黄龍の、更に上に顔がある畔の表情を見る。手に持っているものを、香奈はしつかりと見た。

畔は、香奈を睨んでいた。

手には、ペン型のスタンガンを持つていた。

「何…、これ」

畔は言いながら、黄龍の方に視線を向けた。

雄大と青龍は、寮にいた。寮には明かりがともつていて、いつもならそこで、バスーンの音が聞こえてきてもいいはずだった。しかし、聞こえてきたのは、ただの声だった。

雄大は青龍に言った。

「どこ行つてたんだか」

聞いた青龍は、何を答える氣も起きなかつた。しかし、何も答えないわけにはいかなかつた。

「…、散歩」

嘘だ。

雄大は聞くと、青龍に笑つた。

「だうとー」

雄大は言った。

ダウト doubt 疑念。

つまりは、どういうことだ。青龍が、すぐに察しがついた。

「どこ行つてたのー」

雄大は言った。

聞いた青龍は、更に考える。ここは、何と言つておくべきだらうか。考える。まあ、考えてみると、本当のことを言つても、別に支障はない。

か。考える。まあ、考えてみると、本当のことを言つても、別に支障はない。

青龍はあきらめる。

「…、赤龍に、会っていた」

聞いた雄大は、「だーかーらー」と青龍に言った。  
「そんなことはどうでもいいのーどこ行ってたのー！」

青龍は、もうよく分からなくなつててくる。

「…、裏道の方…」

青龍は言った。

雄大はそれを聞くと、ふーん、と思う。それはどうでもよくて、  
やつぱり青龍がどこで何をしていようと、雄大はどうでもよかつた。

「ふーん、」

雄大は言った。

青龍は、雄大の顔色をつかがう。だめだ、何も分からぬ。  
「まあなんでもいいやー」

雄大は言うと、すぐにバスーンの準備を始める。青龍は、目を少  
しばかり雄大に凝らす。雄大は、本当にいつも通りの、何でもない、  
と言つような表情しかしない。それ以外、何も読み取れない。

「…、」

青龍は沈黙する。

雄大は、バスーンを組み立てながら、ボーカルでチューニングす  
る。いつも通り、チューナーの針は緑色を表している。チューニン  
グは、完璧なようだつた。

青龍は、少しばかり目をつぶつた。そして、床の上でどぐろを巻  
いた。

雄大は、何時もの夜と同じで、バスーンを吹き鳴らしていた。た  
だそれだけだつた。音が、雄大の部屋に飽和した。

訳が分からなかつた、としか言いようがなかつた。

そもそも、こんな状況をいきなり目の前で見せられて、訳が分か  
る方がどうかしている。そう香奈は考えた。  
考える余裕もなかつた。

「この子が、あなたのお付きで訳ね」

スタンガンを片手に持った畔が、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、香奈の上からじくと、畔の方に振り返る。視線はもちろん、睨みだつた。

「あなた、私が見えるのね」

黄龍は、畔に言った。

香奈は、何がどうなつてゐるのか、全く分からなかつた。そもそも、畔が黄龍を見るといふこと自体、信じられない話だつた。畔は器? 一瞬、香奈は考える。いや、そんなはずはない、と香奈は思う。もしそうなら、黄龍が学校に来る前から、龍と言つ存在に気付いていたはずだからだ。

しかし、今、少しばかり意外そうな、そんな視線を黄龍に、一瞬だけ向けていた。

つまり、黄龍を見るのは、初めてかもしれない、と言つことだ。

「ええ、見えるわよ」

畔は言った。

つまり、術師…?

香奈は考えた。そう言つことかもしれないが、香奈は考えを巡らせた。だめ、何も考えられない。

畔は一步、香奈に近づく。正確には黄龍に近づく。黄龍は、畔の方を見て、少しばかり歯をむき出す。小さく唸る。

畔の持つているスタンガンが、若干青みを帯びている。バチバチと、嫌な音を立てている。

「でも、そんなことはどうでもいいの」

畔は言った。

黄龍は、じつと畔の方に視線を向けている。

香奈は、視線を畔から離すことが出来なかつた。実際の状況にならないと分からぬが、恐怖心が煽られる物に対して、目をそらすことが出来ないのは、何かの本能からかもしれない。

畔は、香奈の方に、スタンガンの端を向ける。もし、さつきみた

いな電撃が来たら、ひとたまりもないかも知れない。

香奈は思つた。

「私はね、あなたを殺せつて言われてるのよ、」

畔は言つた。『残念ながらこれは仕事ね？』とも、畔は言つた。

黄龍は、畔の方から田を離さなかつた。

『理由は言えないし、誰からの命令かつていうのも、はつきり言つて言つ』とは出来ないわ。でも、これだけははつきり言つておける

畔は言つと、目を細めた。

スタンガンを持つている指先に、少しばかり力がこもる。

『私は、あなたを殺すために、一緒に帰つたつてこと』

どこか笑つてゐるような、睨んでいるような、そんな表情。

畔は、香奈の方に視線を向ける。突き刺さるようにまつすぐで、それでいて冷え冷えとした視線が、香奈へと突き刺さつていた。香奈には、それ自体に耐えられるかどうか、頭で考へても分からなかつた。

『でも、私腕が立つのよ』

畔は言つ。

スタンガンが、香奈から逸らされることは無い。ずっと、まつすぐと、香奈はスタンガンに狙われている。ボタンを押せば、香奈はたちまち電撃を直で受けることになる。

香奈は考へる、それしかできなくなる。そもそも、何で自分が狙われているのか、そんなことは分からない。分かつていたらこんなに苦労はしないし、そもそも、こんな状況でそんなことを考へもない。香奈自身、恨まれるようなことをしたような覚えはないし、もし相手にとつて不愉快なことをしてしまつたとしても、そこまで執着を抱く人物がいるとは思えない。世の中は確かに分からない。些細なことで、何かのスイッチを入れたかのように、所構わぬ怒り散らす人物だつている。しかし、そんなのは比ではない。ここまで恨みを抱かれるような、そんなことを、香奈がしたとは、自身でも思えなかつた。どうしても、それは分からなかつた。どう考へても、

分からることは分からなかつた。

それを前提にして考えてみる。もしかしたら、誰かが香奈に恨みを抱いていて、誰かが畔に、香奈を殺すように言つ。仕事として畔は受け、そして香奈の近くに寄つて、それから香奈をスタンガンで殺す。そこまでは単純な氣がしなくもないが、どう考へてもおかしい。どうしてその誰かは、わざわざ自分で香奈を殺そうとはせず、依頼として、仕事として畔にその仕事を言い渡したのか。それはつきり言つて、考へてもわからない氣がする。もしかしたら、その誰かは、非常に非力なのかもしれない。香奈ひとり、女子一人殺せないほどの非力な人物なのかもしれない。

一つを組み合わせて、可能性を考へてみても、おかしいと思えるものはやはり井岡氏以外の何物でもなかつた。

畔の視線が、香奈の方に向いている。

「だから、」

畔は口を開いた。

一瞬で灰にしてあげる…ッ！

ボタンが押される、  
その須臾。

黄龍が、ものすごい勢いで、畔の近くに潜り込んでくる。畔は一瞬目を丸くすると、黄龍の方に視線を向ける。

黄龍は、畔の鳩尾に、一発、殴りを入れる。グルギ、と畔の鳩尾から、嫌な音がする。しかし、黄龍は気に留めている暇もない。

ほんの一瞬の出来事、と言うのはまさにこのことで、何が起つたのか、香奈にはさっぱりわからなかつた。そもそも、スタンガンのボタンが押されたのかさえ、香奈には分からなかつた。

畔は気を失う。悶絶すると、アスファルトに体を崩す。スタンガンが地面に落ちると、畔も一緒に、地面に衝突する。バン！という嫌な音が、そこに響き渡る。

黄龍はそのスタンガンを取ると、まず、スタンガンの電源を切った。バチバチと唸るスタンガンが、静かに光を失つていつた。

何が起こっているのか、本氣でわからなかつた。分からぬ、と言つレベルではない。そもそも、理解に及ばないレベルだつた。

「…何が、どうなつてゐる…？」

香奈は小さく言つた。

畔が、答えるわけもなかつた。ただ、畔は地面に体を崩しているだけで、香奈に、何かを語ることは無かつた。

スタンガンと言い、畔と言い、訳が分からなくなつてくる。

思い出す。

仕事として、香奈を殺しに來た。

つまり、これは仕事であり、これは業務であり、これは任務。

「…それは、分からぬわ」

黄龍が、香奈に言つた。

片手に持つてゐるスタンガンが、妙に重々しく感じたのは、黄龍だけではないような気がする。黄龍だけではなくて、それは、空気を伝わつて、別の誰かにも伝わつてゐるような、そんな気が、黄龍にはあつた。

「でも、」

黄龍は言つた。

「一つ、行つてみるべきところがあるわ」

黄龍が言つた。

聞いた香奈は、涙目だつた。黄龍の方に視線を向けて、ただその方向を、凝視していつた。そこには、黄龍の確信に満ちた表情が、広がつていた。

その日は、香奈が初めて門限を破つた日になつた。そもそも、門限を破つたことのない生徒は、ほとんどないとされている。香奈はその中の一人としてあり続けたい、と考えていた。しかし、それは無理な話だつた。

そもそも、門限なんて氣にしていられる場合でもなかつた。

香奈は、少しばかり沈みながら、ホテルの一室にいた。そこはスイートルームで、非常に豪華なつくりで、しかしどこか質素と言えなくもない雰囲気をまとつた場所だつた。

現時刻、八時三分。ホテルグランドセンチュリー 1050号室。天野下には、何故かたくさんのホテルがある。そのホテルの一つに、香奈はいた。そしてその横には、黄龍もいた。それはあたりまえと言えば、当たり前な話ではあつた。

椅子の方に、畔はガムテープでがんじがらめにされている。動けない状況にある。しかしそれは、香奈にとつてみれば、少しばかり心休まるものだつた。

目の前には、ドイツ系の顔立ちをした、栗毛の人物が座つていた。

「この子が、急に……？」

その人物は、香奈に聞いてきた。一見外国人に見えるが、その口調は流暢な日本語だつた。

「はい。それで、他に頼れる人もいなくて、友達に、こんな事言えるわけもなくつて、だから、ハンスさんに、お願ひしたんです。ハンスさんなら、何かわかると思つて……」

嘘ではない。ただし、用意していた台本ではある。

香奈は言つと、ハンスの方に視線を向ける。ハンスは紅茶を一口、カップから小さく呷つた。香ばしいにおいが、香奈の方にまで伝わつてくる。

ハンス、ハンス・シュローツは、術師の友人だつた。もともとは

DEPに所属していて、東海林たちといざこざを起こしたが、今ではとてもいい関係になっている。ハンス自身も、それを求めている。

「でも、これは…」

ハンスは言いながら、テーブルの上に置かれているスタンガンを見る。

横から、そのスタンガンに手が伸びる。それは、ピンク色の髪をした、十行くか行かないかくらいの、少女だった。

「これ、歪んでるな」

少女は言った。

聞いた香奈は、その少女の方に言葉を向けた。

「ユーカちゃん、何かわかる?」

ユーカはそれを聞くと、そのスタンガンを片手で持ち、少しばかり視線を細める。そして、目を閉じて行く。

「…、よく、分からぬ…」

ユーカは、少しばかり弱気に答えた。

ユーカ、ユーカ・ドリーは、ハンスとずっと前から一緒にいた少女で、術師なのか、器なのかは分からない。しかし、龍を見ることが出来るのは確かで、それでいて、ピンク色が印象的な少女だ。目までピンク色をしている。

聞いた香奈は、少しばかり視線を潜ませる。「そう…」と、少しばかり悲しそうな、そんな声でユーカに言った。

ハンスの隣にいる、もう一人が言った。

「それ、何かを纏つてる」

それは、青い狼だった。正確には、洋服を着た、椅子に座つている狼だった。

聞いた黄龍は、その青い狼の方に視線を向ける。ユーカは、その狼にスタンガンを渡す。狼は、目を細める。

「何か、分かるのかい? ライカン」

ライカンはじっと眺める。そして、ボソッと呟く。

「何かの半分だと思つ」

意味が分からぬ。

しかし、ライカンが意味のないことを言つとは思えない。つまり、スタンガンは、何かの半分なのだ。

そう思うと、黄龍は少しばかり視線を細めた。

「半分だけじや、何だかわからないわよ」

それを聞いたライカンは、「だったら」とガムテープで椅子に固定されている畔の方に視線を向ける。ライカンは直立一足で立ち上り、その椅子の方に足を向ける。重々しい足取りが、ライカンの中で響いていく。

ライカンは、スタンガンをいろいろと眺めまわす。そしてスイッチを見つけると、力チッと電源を入れる。

スタンガンが、青白く光を帯びる。

ライカンは、それを迷うことなく、畔の方へと向ける。

「この方が簡単だよ」

誰も、ライカンを言い咎めることはしなかった。

ライカンは、どこまでも真っ直ぐな目をしながら、畔の方へと視線を向けていた。畔が起きているのか気絶しているのかなんて、ライカンには分からなかつた。

「…荒いけどね…、それは」

ハンスは、乗り気でない雰囲気で、ライカンに言つた。

ライカンはそれを聞くと、スタンガンを床の方にあおした。そして、ハンスの方に視線を向ける。

「あくまで、手段の一つだよ。速い方法だと思つけど」

ライカンは言つた。

それは決して間違ひではない。そう香奈も、ライカンに同意した。

どこか、さびしいような、何と言つが。

東海林は、もどかしい気持ちを整理しながら、一人でカツプラーメンを食べていた。カツプラーメンは、いつもならうまいと思える味のはずなのに、今日は、どこか味気ないようを感じる。それもそ

のはずで、つまりは東海林はさびしかった。

一人で食べる食事は、やっぱり味気ないんだな。

東海林は本気で思った。

最近は、一人で食事をとるなんてこと、ほとんどなかつた。大介や雄大と一緒に食べるか、そうでなくとも赤龍が、ほぼ常に一緒にいた。食事を一人で吃ることが、最近なかつた。だから、いきなり一人になると、味気なく感じるものだ。

東海林は思いながら、タイマーなんて気にせずに、ラーメンを啜つていた。それだけで、それ以外に何もなかつたと言つても、東海林にとつては過言ではなかつた。

ため息を吐こうとしても、どこか途中で、喉の奥で止まつてしまふ。言い咎められてもそうでなくとも、東海林はため息をする気が、どこか失せてしまつたような、そんな気分に等しかつた。

少しばかり目をつぶつて、ラーメンのにおいを嗅いでみる。そこから連想されるのは、赤い龍。

赤龍…、

東海林は思う。そして、小さく吐息を吐いた。わざと、吐息だと自分で中で思つてから、吐息を吐いた。

どこにいるんだよ…、

東海林は、ラーメンをかきまわす。ラーメンは、さつきよりもいつそうふやけてきている。それ以外、何も起こつていない。早くしないと…、ラーメン伸びちまうよ…。

東海林は、自分のラーメンが伸びていてことに、気付かなかつた。

それでも、東海林はラーメンを食べ続けた。ラーメンの良し悪しが、今の東海林には、変わらないようにしか思えなかつた。

赤龍の存在が、東海林の中でここまで大きなものだとは思わなかつた。つまり、よくある言葉の通りだということだ。そこにあるときには、それが大切なものだとは気付かない、しかし、それがなくなつた時初めて、それが大切なものだと気付く。

はあ…、と思う。

だから、はあ…、と言い咎める。

そして、はあ…、と返す。ただそれだけのプロセス。

東海林は、ラーメンの汁を、一気飲みした。気持ちが悪くなつた。気にしなかつた。もうその前から、東海林は妙に突つ掛るような気持ち悪さに、さいなまれていたからだ。

東海林は、ソファーの上にうなだれた。

ベランダの外に、小さな影があつた。その影は翼を持ち、少しばかり悲しそうに目を細め、東海林のことを見守るよつな、そんな影。赤龍だった。

赤龍に、勇気なんてものはなかつた。持ち合わせていなかつた。つまり、赤龍は何もできなかつた。せつかくベランダにまで来られたのに、そこからの行動に、踏み出すことが出来なかつた。そもそも、赤龍には、それからの行動と言う物が、全く分からなかつた。おそらく青龍に聞いても、きっと「…」だけ返つてくることだろう。

赤龍は思い、ベランダの死角に隠れる。まるでこれだと、赤龍が東海林から隠れているみたいにも見えなくはない。

そもそも、東海林が悪いような、そんな気が赤龍にはする。それだけを赤龍は考える。そう、そもそも赤龍は悪くない。悪いのは東海林じや。

考へても、どこか納得がいかないよつな、そんな感覚にさいなまれる。

暗さと、寮の中の明るさが、どこか入り乱れた場所のよつな、そんな気がしてならなかつた。そこには赤龍しかいない。そこにいるのは赤龍で、東海林は寮の中にはいる。

ガラス一枚、窓が一つ以上の壁が、赤龍と東海林の間に立つてゐるよつな、そんな感覚に近い。その厚さが、何ミリ、何センチ、何メートル、それか何キロメートルあるのか、そんなどは分からぬ。はあ…、と赤龍は吐息を吐く。赤龍はそもそも、ため息と言う物

が嫌いだった。だから、自分で中で、これは吐息だと思えば吐息になる。赤龍はそう思いながら、吐息を吐く。そもそも、吐息を吐くようになってしまったのも、東海林のせいではないか。赤龍は考えた。

はあ…、とか思う。

だから、はあ…、とか帰つてくる。

そして、はあ…、と言つ氣分になる。そんなのは当たり前で、赤龍の中で今の気持ちを表すなら、はあ…、以外の何物でもなかつた。もしかしたら、

赤龍は少しばかり考える。ゲームがしたいとは、今は思えなかつた。それ以上に、何か空腹なよう、そんな氣分だつた。

さつきの吐息は、

赤龍は、秋の星空を眺めようとした。そこにあつたのは、星空と言つよりは、満月に近い空だつた。どこか、赤龍の意見とは合わない、そんな空だつた。

ため息だつたのかもしけんな…。

これは東海林の影響だ。

東海林の影響は、すべて悪い影響だ。

違う、赤龍は考える。それは間違いだ。それでいて、赤龍もどこか間違つてゐる。赤龍は、心の中で思つた。

何ががもどかしくなつてくる。

もどかしいよりもたちの悪い何かが、赤龍の中で渦巻いて行く。

空腹かもしれない、と赤龍は考える。

赤龍は仕方がなく、飛んでいく。

大介は、緑龍と一緒に弁当を食べていた。緑龍の最近のマイブームは、映画を見る事だ。つまり、緑龍は映画をひたすら見ていた。大介は、仕方がなく緑龍と一緒に、ポータブルプレイヤーで映画を見ていた。何故テレビにつながないのか、それは、大介にもわからぬ。ただ、大介たちはポータブルプレイヤーで、映画を見なが

ら黙々と弁当を食べていた。

息をのむ。

お茶を飲む。

喉に少し食べものを詰まらせる。

息を詰まらせる。

その繰り返しだった。とことんせわしなく、二人は映画を見ながら弁当を食べていた。

その時だった。

コン コン：

音が、ベランダの方から聞こえてきた。

それを聞いた大介は、「ん？」と思ひながら、ベランダの方に視線を向ける。緑龍は、映画に釘付けになつていて。

窓には、カーテンが閉まつていて。誰がベランダをたたいたのかは、座つているだけだを分からなかつた。

仕方がない、大介は立ち上がる。そして大介は、カーテンを開けた。

そこにいたのは、窓ガラスに張り付いた赤龍だった。

「うわ…ッ！」

大介は、一瞬驚いた。

赤龍は、コンコン、と窓ガラスをたたきながら、大介の方に視線を向ける。緑龍は、さつきからポータブルプレイヤーから、視線をそらそらとしなかつた。

大介は、窓の鍵を開ける。そして、外にいる赤龍に、こう聞いた。

「ど、どうしたんだ…？こんな夜中に…」

大介は聞いた。

聞いた赤龍は、「ちょっと、頼みごとがあつての…」と、どこか小さく、大介に言った。

聞いた大介は、少しばかり赤龍の方に、視線を細めながら言った。

「何だ、その頼みごとつて…？」

聞いた赤龍は、大介から少しばかり、目を逸らした。

「その、食料を…、分けてほしいと、思つての…」

「どこか、たどたどしい口調だつた。

大介は、少しばかり目を丸くする。しかし、明日の分の弁当が、まだ大介の冷蔵庫の中に入つてゐる。一食分くらいなら、分けることもできた。

「…今日一食でいいんなら」

大介は言つた。

赤龍は、元気がなさそうに、こう、小さく大介に呟いた。

「礼を…、言うぞ…」

赤龍は、どこか俯き気味だつた。

赤龍は大介の寮に上ると、すぐに大介から、弁当をもらつた。しゃけの弁当だつた。赤龍はどこか、申し訳なさそうな視線を、大介の方に向けていた。大介は、赤龍の方ではなく、ポータブルプレイヤーの方に向けていた。

赤龍はしゃけ弁を食べる。その間に、テープルの向かい側では、ポータブルプレイヤーの、映画らしき音が聞こえてくる。

赤龍は、少しばかり不思議になる。しかし、あえて何も言わないでおく。

再生されている映画が、終わつたよつた、そんな雰囲気になつた。

「ふー、終わつたー」

大介は、椅子の上で伸びをする。緑龍も、大介とまるつきり同じしぐさで、椅子の上で伸びをした。

「やつぱりこの映画は面白いねー」

緑龍は言つた。

どこか赤龍は、蚊帳の外のよつた、そんな気分で仕方がなかつた。それは、確かに蚊帳の外、とも言えなくはなかつたかもしれない。

大介は緑龍のその言葉を聞くと、「甘いな緑龍、」とかなんとか言つてくる。緑龍は少しばかり顔をしかめる。

「まだ世の中には、面白い物語がたくさんあるんだぞ！」

大介は、誇張するように、そう緑龍に言い張つた。聞いた緑龍は、少しばかり驚いた表情で、「え！」と大介の方に視線を向ける。大介は、にやにやと笑いながら、緑龍の方に視線を向ける。緑龍は、大介に聞いた。

「それって、どんなの？」

赤龍は、どこか傍観的に、しゃけ弁を食べているだけだった。塩つ辛いような、味が薄いような、そうでないような。

「それはな、例えば…」

とか言いながら、大介は、自分の椅子の後ろにある、山のようだ積み上げられたほんの一つを、緑龍の方に取り出して見せた。

「こんなのとか、それとか、こんなのとかな」

次々と、大介は本を取り出していく。その一つの本の題名が、『The Blue Of The Sky』とか書かれている。

「面白いの？」

緑龍は大介に聞く。どこか、緑龍の目はいつになく、きらきらと輝いている。「ああ」と大介は即答する。

「切なかつたり、笑えたり、悲しかつたらり、もう多種多様だ！」

言い張つた。

緑龍は、「おー」と言いながら、その本の山を見つめている。赤龍は、箸でしゃけ弁を食べ進めて行く。  
しゃけが、どんどんしょっぱくなつていて。

「どんなのがおすすめ？」

緑龍は、本を読む意欲にあふれていると言わんばかりの口調を、大介の方に放つ。聞いた大介は、「どれもお勧めだけどな、」と言いいながら、一つの本を取り出した。

「この『ジムノペディ』なんてお勧めだぞ！」

緑龍は、「おー…」とどこか、恍惚感を覚えたような、それに似た感覚を得る。そして、本の方に視線を向ける。緑龍には、本が輝いているように見える。

「これが…」

緑龍は言つ。

大介は頷く。

そして、赤龍はただ食べ進めて行く。

食べ終わる。

赤龍は、一言も口を出さない。と言つたが、出せない。この会話に、赤龍はついてこれなかつた。来れる方が、これはすごい、とすら赤龍は思つた。

ジムノペティ、どこかで聞いたような。

赤龍は思いながらも、しゃけ弁のふたを閉める。一人は、何かを熱く語つてゐる。

「今度読んでもいいぞ」

大介は言う。

緑龍は、「やつたー！」と、どこかわざとらしいような、それでいてそうでないような歓声を上げた。

赤龍はそれを見ながら、「あのー…」と大介に呴く。「ん？」と大介は、赤龍の方に視線を向ける。

聞いた赤龍は、少しばかりたじろぐ。

「…、今日、ここに泊めてくれんかの…？」

どこか謙虚そうに、赤龍は大介に言つた。赤龍の、謙虚と言つこと自体、大介にとってはおかしなものに見えなくもなかつた。しかし、どうでもよかつたのも事実だつた。

「いいぞ」

大介はそれだけを答えると、赤龍から目を離した。

「今から読んでいい…？」

どこか、胸を躍らせながら、緑龍は大介に言つた。聞いた大介は、「ああ、いいぞ」と緑龍に言つ。「やつたー！」と再び、緑龍は喜ぶ。

「ただし、」

大介は言った。

聞いた緑龍は、大介の方に視線を向けた。大介は、緑龍の視線を

探るように、こつこつと歩いていた。

「本は静かに、読むんだ」

どこか、暗示的な一言だった。

赤龍は、どこか居心地の良さを感じなかつた。

香奈が寮へ帰るのは、別にそんな苦労はなかつた。ただ黄龍に乗つて、ただ帰ればいいだけなのだ。それがホテルからだらうと、学校からだらうと。

夕食は、昨日の作り置きだつた。  
作り置きではあるが、そんなにまずくなく、それでいて、別にそんなにおいしくないものだつた。

香奈はただひたすらに、考えた。沈黙しながら、どこか深く、そして、大きなことを考える。

何故、畔が香奈を襲つたのか。それは、仕事と言つていて。つまり、仕事は仕事だ、それ以外のなんでもない。

と言つことは、必ず何かを成し遂げようとする意志が、どこかしらにあるといつことだ。そして、その仕事の一ついに、香奈の抹殺と言つ物があつた。

と言つことは、香奈はその何かのたぐらみに、非常に邪魔な存在だといつことになる。となると、それはいつたこづこづことなんか、と香奈は更に深く考え始める。

寮の部屋には、食器の音しか響かない。

つまり、香奈は何かに狙われている、と言つことだ。しかも、龍が見える人物を派遣した、ということは、とにかく普通ではない物だということしか分からぬ。しかし、香奈自身、そんなことをされる覚えもない。誰かの恨みなら、こんなに回りくどい方法はしない。

畔は、龍を見ることが出来た。

つまり、他の龍も見ることが出来る。

龍関係で、何かあるかもしない？

考えて行く。その思考は、どんどんと自分で広がっていく。  
しかし、途中で押しと泊まる。

つまり、香奈は狙われている。つまり、香奈が動けば狙われると  
いつこと。つまり、香奈が狙われるといつことは、周りに危害が加  
わる可能性も十分にある、と言つことだ。周りに危害が加わるかも  
しないといつことは、つまり、友人も、先生も、

東海林君も。

考えた瞬間だった。

箸を、テーブルの上に落としてしまつ。ビニカ、ぼうつとしている  
ような、そんな雰囲気だつた。香奈は小さく、あ…、と言つと、  
テーブルの上に落ちた箸を少しばかりティッシュで拭いて、それから  
食べ始める。

「…、大丈夫…？」

黄龍は聞いた。

聞いた香奈は、返事をした。

「うん、平氣」

空返事。

中身がなかつた。それどころか、それを隠そうともしなかつた。  
ただ、香奈は言つただけだ。言葉なだけだ。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり視線を細めた。

香奈が、いつもと違うのは仕方がないかもしない。しかし、何  
かを心配している風にも見えるし、でも、怖がつてている風にも見え  
る。

少しばかり、黄龍は情けなかつた。

「…、私、」

香奈は言いかけた。

聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、黄龍に「…、  
はつきりと言つ。

「戦わなくちやいけないと思つ」

黄龍は、一瞬目を開く。

香奈は、まっすぐ黄龍の方に視線を向けていた。黄龍は、少しばかり沈黙を紡いだ。

「だつて、私が頑張らなきや、だめな気がするの。それに、私が襲われたつてことは、もしかしたら、また襲われるかもしれない」

香奈は言つ。

「その時に、私は他の人を巻き込みたくない。だから、私は戦う、手伝つて、くれる……？」

黄龍に、聞いた。

聞いた黄龍は、一瞬口を紡いだ。

香奈が何を言つてゐるかは分かつてゐた。そうではなく、黄龍は、どこか自分が情けなくなつてくるような、そんな気分になつてきたような、そんなよく分からぬ、つんとした感覚にさいなまれていく。

「……」

黄龍は、香奈と目を合わせていられなかつた。しかし、はつきりと黄龍は、香奈に言つた。

「当たり前よ」

それが、黄龍の答えた。

聞いた香奈は、安堵した。それが、香奈の率直な気持ちだつた。それ以外に、何もないような、そんな気分さえあつた。

「……ありがとう……」

香奈は、少しばかり涙目になりながら、黄龍に言つた。食事が、ほとんど進まなかつた。

眠い、いや眠くない。眠いと眠くないを、足して二で割つたような、そんな感覚だつた。つまりは、そういうことだ、と東海林は納得した。

つまり、赤龍がいなといところにも、自分は腑抜けなのだ。自分

が眠いのか眠くないのかすらわからない、そんな腑抜け。

東海林は天井を眺めた。天井は、外から入つてくる街灯の光で、少しばかり明るく、薄暗く光を纏つていた。落ちてきたりなんてことは、しそうにもなかつた。

東海林は、ベッドの上でうなだれていた。つまり、そういうことだ。どつちにしてもうなだれるのだ。赤龍がいようといまいと。しかし、何かが違つた。

東海林の中で、大切な何かがなくなつたような、このままだと、それを失くしたことすら忘れてしまいそうな、そんな気分だつた。もうどうなるかなんて、東海林には分からなかつた。分からぬと言つのは違う。分からぬのではなく、分かりたくない。分かつたら、本当に自分が何をしたいのか、分からなくなりそうだつた。それに、考へると何か、頭のどこかがもによもによと、くすぐつたくなるような、そんな辛さがある。

東海林は目を閉じたり、開けてみたりする。東海林の見ている明暗が、ほとんど変わらない。違つ、ほとんど何も起こらない。聞こえる音は、外の道路を車が通つたりするそんな音だ。ガチャガチャとボタンを押したり、詠嘆をしたりなどの声ではない。

悲しい、か？

初めて考へた。

そう言へば、最近一人でいることなんて、ほとんどなかつた。食事だけではなかつた。そうだ、最近はずつと、一人になることなんて何もなかつたんだ。つまり、そう言つことなんだ。

東海林は思つた。

考へて、分かるようなことでもなかつた。東海林は少しばかり考へて、再びベッドから、ソファーの方に視線を向ける。そこに誰かがいるわけでも、ゲームが置かれているわけでもない。東海林はため息を吐く。はあ…。だめだ、うまくため息が出来ない。

東海林は、視線をベランダの方に向ける。ベランダに、影なんてものはなかつた。

東海林はベッドから起き上がり、窓の方に近づいていく。寮に据え付けのカーテンを、東海林は開ける。

そこに、何がいるわけではなかつた。

東海林は一瞬落胆する。そして、その落胆に、妙な怒りを覚える。何に対しても怒つていいのか、はつきり言つて東海林には分からぬ。

東海林は窓ガラスを、小さく叩いた。拳だった。

「…、畜生…、バーヤロ…」

東海林は言つた。

外にあるのは、街灯と、それ以外の鬱陶しい光だけだつた。何も、そこにはなかつたような、それと全く同じと言つてもいいような、そんな空氣。

東海林は落胆した。

何にそう言つたのかすら、東海林にはもう分からなかつた。

そこにあるのは、どうでもよくなつてくるような、そんなよく分からぬ、もやもやとした空氣だけだつた。

何か、起きたりない、と言つか、遊び足りないような気が、赤龍にはしていた。明らかに、赤龍の中で望んでいる何がが、その部屋にはなかつた。大介の部屋にはなかつた。

真つ暗で、寝息が一つ聞こえてくる。一つはベッドの上、もう一つは赤龍の隣辺り。

赤龍は、少しばかりあぐいをしてみる。そして、とぐろを再び直し、少しばかり目を沈ませた。意識は全く沈まなかつた。それは、もしかしたらこの辺りは、赤龍の寝心地に会わない場所なのかもしない。赤龍派の奴には、合わない場所なのかもしれない。赤龍は考える。考えるが、ろくな考えが浮かんでこない。

唸つてみようかどうか、考えてみる。

赤龍は、隣で気持ちよさそうに眠つている緑龍の方に視線を向ける。緑龍は、どこかぐつすりとしたような、そんな表情で夢の中で浮かんでいた。

少しばかり、うらやましくなつてくる。

馬鹿らしくもなつてくる。どうして赤龍が、こんな場所で眠つていなければならんのじや‥。

思つが、今さら東海林のところに行つて寝に行くだけだなんて、赤龍はなんとなくではなく、かなり嫌だつた。そもそも、赤龍は今、東海林の顔なんて見たくもなかつた。

見たくもない？

赤龍は、目をつぶつて見せた。真つ暗だが、そこに何があるのが見える。まぶたの裏だらうか。

赤龍は思った。

ただ、闇に似たものが目の前に広がつてゐるような、そんな感覚だつた。一寸先は闇で、歩いたら、電柱にぶつかりそうな、そんなよく分からぬ恐怖感が、そこにはあつた。

もとはと言へば、東海林のせいなのじや！

赤龍は考える。それは赤龍の中では、正論でしかなかつた。それ以外の何物でもなくて、それは、赤龍の中でただ、正しいだけだつた。簡潔で、どこか空しくなつてくる、そんな正論だつた。

赤龍は、眠くはなかつた。

むしろ、まだ赤龍は疲れたりなかつた。一日中、東海林に対して怒つてはいたが、それほどの物でもない、と赤龍は自分で理解してゐた。つまり、簡単に言うと、赤龍は遊びたかつた。

この部屋には、本が山のようく積み重なつてゐる。そして、映画のポータブルプレイヤーなんもある。

そう言つ問題ではなくて、と赤龍は思つ。

赤龍は、本を読みたいわけでも、映画を見たいわけでも、アニメを見たいわけでも、ましてやドラマを見たいわけでもなかつた。ゲームがしたかつた。

赤龍は、無性にゲームがしたいような、そんな気分だつた。それ以外の何も、赤龍には無かつた。

確かに、この部屋にはゲームがある。テレビもある。しかし、赤

龍はやる気が起きなかつた。そもそも、今やつてているゲームと違うことがあることもあるし、赤龍がやりたそうなゲームでもない、と言つのは一つ、理由として存在している。

たかが理由だ。

赤龍は、赤龍のデータのゲームを、心からやりたかつた。それがかなうなら、もしかしたら、赤龍は何でもするかもしかなかつた。喉が渴くみたいに、赤龍はゲームがしたくなつていつた。そこに、赤龍のデータがあるゲームは、無かつた。

あるわけもなかつた。

赤龍のデータがあるゲームは、今、東海林の寮のどこかだ。つまり、一度東海林の部屋に戻らない限りは、ゲームをすることが出来ない。

赤龍は、心の中の靄のようなものを、どこかもどかしく思つた。鬱陶しくて、どこか、何でもないような、頭に来て、それでいて、ただそこにあるだけの靄。

「…、はあ…」

赤龍はため息を吐いた。

赤龍は呆れて、自分の尻尾で、軽く自分の顔をたたいた。痛くはなかつた。それだけで、重々しく尻尾の音が、赤龍の中で響くだけだつた。ただ、それだけだつた。

どつちなんじやろう、な。

赤龍は、妙な感覚に陥つていていた。無限連鎖にも似た、その妙な感覚。

赤龍は目を閉じて、明かりを自分の中から遮断した。そして、小さくあくびをした。それ以外、赤龍に何かできるかと聞かれても、赤龍はきっと、はつきりとこう答えただろう。

ない、それにあつたとしても、やりたくない。

やる気文でもない。

それだけのことだ。

気が乗らなかつた。気が乗らないだけで、赤龍の中では、妙な靄

が広がつていいだけだ。たつたそれだけだつた。

赤龍は、呆れかけていた。

赤龍は、眠いような、眠くないような、そんなよく分からぬ感覺を持つていた。

だから、あぐびをして、意識を床の方に集中する。なんとなくではあるが、床に沈んでいくような、そんな感覺がそこにはある。赤龍は、自分でも眠つたのか、よく分からなかつた。

変な歪みに似た、それでいて、じれつたいような、そんな感覺だつた。

青龍は、とぐろを巻きながらベッドの近くにいた。ベッドの上には珍しく、雄大が入つてゐる。もちろんバスターんを持つたり、バスターんを吹きながらベッドの中に入つてゐるわけではない。

雄大も、ただ眠いだけだつた。眠くて仕方がなくて、それでただ眠つた。珍しいことだ、青龍はつくづく思つた。

雄大が寝るなんてこと、最近はめつたになかつた。そもそも、青龍には雄大が、別に眠らなくてもいいのではないかと思えてくるぐらい、眠らない時は眠らなかつた。授業中はよく眠つてゐるが、それでも起きているときは起きてゐる。

とても不思議と言えば不思議だつた。

しかし、不思議ではなくて、それは何でもないような氣がしなくもなかつた。

青龍の耳は、緑龍ほどよくはなかつた。だから、違和感だけで済んだ。しかし、赤龍の声と、東海林の声が今日は聞こえてこない。つまり、まだ仲が直つていない、と言つことだ。じれつたいような、歪んでいるような、それとも、ただ何でもないことなのか、青龍には分からなかつた。

雄大に何かを言つ氣はなかつた。言つたところでは、雄大の反応が薄いことぐらい、青龍には分かつてゐた。言つ氣を削ぐ、そして、眠いという感覺にのまれていく。

もしかしたら、今の赤龍もそんな感覚なのかもしれない。青龍は思つた。

しかし、問題はそんなことではなかつた。

「…、」

音が、そこに全く何もなかつた。夜だから、ヒヒの声もある。夜はみんなが寝静まる時間帯だ。つまり、そう言つことだ。

青龍は思つた。そして、どこか妙な感覚で、青龍は目をつぶつた。そこに、音が一体何を意味したものになるのか、少しばかり、青龍には興味があつた、あくまで、興味があるだけで、それ以上ではなかつた。たつたそれだけのことだつた。

青龍は、自分のしたいように、ただ目を閉じて行つた。

まだ、

なんとなく、そんな感覚になつて、青龍は目をぱちりと開ける。そして少しばかり体を起こす。そして、耳を立てる。赤龍の声は聞こえてこない。しかし、どこかからではあるが、小さく声が聞こえてきた。

ため息。

青龍は面倒くさそうに、立ち上がりと、ベランダの方に歩み寄つた。ベランダのドアを開けて、青龍はベランダの真ん中に立つ。小さく呼吸をすると、「はあ…」と小さく息を吐いた。

青龍は、大介の寮の部屋まで、飛んで行つた。

## これから君は、海の底を覗くことになるよ

目を覚ましたのを見ると、ハンスは少しばかり、その人物、畔の方に視線を向けた。その視線は、決していいものではなかった。畔は、少しばかり目を細める。そして、自分が今どういう状況にされているかを把握すると、自分にまとわりついているガムテープをはがそうと試みる。しかし、そんなことは無駄だった。無駄に終わった、と言つた方が、この場合は正解かも知れない。

「やあ、起きたかい？」

ハンスは、優しそうに聞いた。

畔はその声を聞くと、目を細めて、ハンスの方に視線を向ける。

ハンスは、にこにこと笑いながら、畔の方に視線を向ける。

「…、」

もともと、畔が何かを言つ氣があるとは、ハンスとしても思つてはいなかつた。

ハンスは一瞬、視線を細めた。鬱陶しそうに、畔の方に少し睨みつけた。しかし、それは本当に一瞬で、畔は気づかなかつた。

「すっかり夜になっちゃつたけど、門限は、確か八時だつたよね？」

ハンスは言つた。

話して、そして交流を深める。それが、ハンスの方法だつた。もう誰も傷つけたくないし、ハンスだつて、傷つけられるのは嫌いだつた。痛いし、辛い。それを、ハンスは嫌つていた。

「…、」

何を言つともない、と言わんばかりの表情を、畔はハンスに向けてくる。

ハンスはどんどん困つていぐ。そもそも、どうして何も答えてくれないのかすら、ハンスには分からぬ。

こういう場合は、

ハンスは少しばかり思つと、畔に言つた。

「畔ちゃん、だつたね？」

ハンスは言った。

畔は、否定も肯定もしなかった。

「聞いたことに答えてほしいんだけど、いい？」

ハンスは言った。畔は、ずっと黙り続けている。「…」ハンスの耳に、その沈黙が重々しい響きを立てる。

「…、言つておくけど、僕らはフェアじゃない」

ハンスは言った。

嫌だつたが、もうやるしかなくなつた、と言つ感覺に近かつた。

「僕らは、君とは平等じゃない。それは、理解してもらえるかな」

「…」

畔は何も言わない。ただ、現実から目をそむけている様には、到底見えない。違う、そうではなくて、何かもつと別の、特別な感情が畔の中に渦巻いている。それを読み取るなんてことは、ハンスには出来ない。

それを見たハンスは、小さくため息を放つた。「はあ…」と言つと、畔の方に言った。

「聞いたことに答えてもらいつよ、何ででも」

ハンスは言った。

どうするべきか、なんてことは、ハンスには分からなかつた。ハンスに分かるのは、自分のしなければならないことが何かだけだ。

「…」

何かを見据えるでもなく、何をするわけでもなく、ただそこに存在しているような、そんな存在だつた。畔は、何を考えているわけでもなかつた。

「何で、香奈を襲つたのかな」

ハンスは、畔の目をじつと見つめた。

見つめた先にあつたもの、それが何だか、ハンスには分からない。しかし、声もない。そこには、歪んだ光が映し出されている。

「…」

答えることなんて、何もない。

畔は確信していた。

ハンスは少しばかり目を閉じると、「どうしても、答えてくれない…？」と畔に聞いた。何を聞かれても、畔が何を答えるわけでもなかつた。つまり、何でもなかつた。畔は、ただそこに流れている時間を、過ぎて行く風に眺めているだけだった。

「…、そう言うことだね」

ハンスは、少しばかり悲しそうに、そう小さく呟いた。

ハンスは立ち上がり、畔の方に視線を向ける。畔は、何もない場所をただ淡々と見つめている。ハンスにはそう見える。少なくとも、ハンスには。

ハンスは畔に近づいていく。一步一步の足取りが、重かつた。

ハンスは、畔の目を間近で見つめる。そこには、歪んだ光もないような、そんな闇に引き込まれた、真つ暗な空間が広がっているよう見えた。

「これから君は、海の底を覗くことになるよ。容赦は、しないからね…」

息苦しかつた。

ハンスだつて、こんな事をしたいとは思わなかつた。そもそも、ハンスは穩便に解決したいとだけ、考えていたのだ。

それがかなわないのなら、仕方がない。

ハンスは両手を、畔の手にそつと触れた。

## ちよつとした心配事

次の日に、畔が来ることはありえなかつた。なんとなく、心の中が辛いような、そんな気が、香奈にはしていた。少なからず、自分は畔に危害を加えてしまつたことになるからだ。直接的にではないにしても、やはりそれは、気分のいいものでは決してなかつた。

察した黄龍は、授業中、香奈の方に視線を向けていた。香奈は、いつもどおりノートを取つてはいるものの、それをいつも通りに理解している様には、見えなかつた。

「だから、この『 $y = x^2 + 4x - 2$ 』のグラフを平方完成すると、  
『 $y = (x + 2)^2 - 4$ 』と言うことになつて…」

淡々と進んでいい。それだけだ。ただそれだけで、香奈の頭の中に、その式の意味や、その黒板に大きく書かれているグラフの意味が、分かつてはいるわけがなかつた。

香奈は、少しだけではあるが、罪悪感のようなものを感じていた。罪悪感、とは少し違うような、そんなよく分からぬ感覺。しかし、しつかりと香奈に違和感を持たせる、そんな厄介な物。

香奈は少しばかり、目を細めていた。いつの間にか、ノートに向かつて目を細めていた。睨みつけるような、そんな感覚に近かつた。

黄龍はそれに気づくと、目を丸くした。

「…、大丈夫…？」

香奈に聞いた。

聞いた香奈は、一瞬はつとなつた。そうだ、平方完成しなきや…。

「香奈、」

その声は、黄龍の声だった。

聞いた香奈は、少しばかり驚くと、その黄龍の方に視線を向ける。

黄龍は、心配そうに香奈の方に視線を向けている。

「…疲れてるんじゃない…？」

黄龍は聞いた。

香奈はそれを聞くと、少しばかり目を沈ませた。確かに疲れている。疲れているだけで、他は何もない、と言つと嘘になる。

「…、ええ、多分…」

小さく、香奈は言った。

聞いた黄龍は、悲しそうな、心配そうな視線で香奈を見つめる。香奈は、淡々としているだけでなく、いつも明るそうな雰囲気すら、どこか削がれているような、そんな感覚があった。黄龍の不安感と、心配をあるだけだった。

黒板に、数字が書かれていく。

黒板に、世界が広がっているわけではない。香奈の「するべき」とが書かれているわけではない。ただ、そこに香奈がいるだけで、香奈は、ただやるべきことがあるだけで、しかし、香奈には、罪悪感に似た何かがあった。

知らない、なんて思えない。

畔は、まがりなりにも、香奈の班員の一人なのだ。その一人がかけただけで、一体どれだけ掃除が大変になるか。一体どれだけ、これから班員行事が大変になるか。いつたいどれだけ、心がしめつけられることか。

香奈には分からなかつた。

気持ちが悪くなってきた。

それは、嘘でもなんでもなかつた。ただ、香奈が今思つていていたとだつた。

やつぱり、おかしいと思う。東海林は思つた。赤龍がいないといふことに違和感を感じつつ、さつきの黄龍の台詞も、少しばかり気になるものはあつた。

最近赤龍の事ばかり考えているからか、少しばかり、心配することには慣れてしまった。赤龍が今どこにいるのか、東海林は昨日一晩で考えた。もしかしたら、赤龍は新しい器をどこか別の場所で見つけて、そして、そこで楽しく暮らすのかもしれない。それを考え

ると、なんとなくではあるが、東海林の心の中が締め付けられ、また軽くなつた。赤龍は、赤龍が幸せだと思えば所に行けばいい。たつたそれだけのことだ。

東海林は思つて、少しばかり目を細めた。赤龍の事ばかり考えていても、つまり、仕方がないということだ。

東海林は視線を、香奈の方に向けていた。黒板の方を見ても、面白くない。そもそも、東海林には黒板に書かれていることの大半が、意味不明で終わつてしまふ物だつた。

香奈は、見た目はいつも通りに見える。しかし、さつき黄龍が言った言葉、「大丈夫？ 疲れてるんじゃない？」と言つのが、東海林の中では引っかかつていた。

疲れてる？

何で。

東海林は思つ。もしかしたら、昨日の部活中に何かあつたのか？ 東海林は考えた。香奈が部活で疲れるなんてこと、東海林は知らなかつた。香奈はいつも闊達で、明るい先輩だと、後輩からも結構な支持があつた。男でも女でも、その意見は変わらない。

そう聞いていた。

しかし、その香奈が疲れている、となると、一体東海林はどうなるのだろうか。考えてみる。疲れているじゃなくつて、過労死しそう、つて感じだろうな。東海林は思つた。

東海林は思つて、なんとなく心配になつてくる。いろいろな意味で東海林も疲れてはいるが、頑張ってはいる。だから、香奈も頑張れるはずだ。東海林は考えた。

あーもういやになりそつ。

考えることが多すぎて、東海林には、また別の意味で心配事が出来そうだつた。もう少し、分かりやすいものが現れないだろつか。

東海林は思つて、黒板の方を見つめた。

黒板には、よく分からぬ式と、グラフがあちらこちらに書かれていた。もうよく分からぬ以前の問題で、不明、としか東海林に

は分からなかつた。

東海林は思うと、小さくため息を吐いた。はあ……。

今頃赤龍、いいやつ見つけられたかな……？

東海林は考える。もしかしたら、赤龍は言葉であたふたしているかもしない。しかし、ある人物が中国で、一週間中国語が分からないまま他の人とずっと話していく、それで中国語をマスターしたという話を聞いたことがある。

それぐらいなら、赤龍にもできる気がした。そもそも、赤龍は龍だ。人とは違う。だからさらに、言葉のマスターが早いかもしない。そう考へると、赤龍に言葉の壁なんてものは、ほとんどないも同然なようだ、そんな気しかしなかつた。

考えながら、ため息を吐いた。

「そして、この放物線の解が、以前やつた『 $b^2 - 4ac$ 』で求まる、と言つことは、この放物線が $x$ 軸と交わる、その交点こそが、この放物線の解、と言つことになるから……」

やつぱり、意味が分からぬ。

違う。今分かる気がしないだけなのかもしない。

もしかしたら、やううと思えば理解できるのかもしない。東海林は考へた。赤龍には出来なかつたが、もしかしたら、東海林には出来るかもしない。考へた。

少しばかり考へるが、考へる材料がそもそもなかつた。

ノートが、白紙だつた。

考へる考へない以前の問題で、ノートに何が書かれているわけでもなかつた。それを見た東海林は、すこしづかり、自分の怠慢さを呪つた。

そして、怠くなつてくる。

はあ……。とかため息を吐いてみる。

そして、結果的に空の方を眺めやる。青々として、少しばかり乾燥したその透き通つた空気は、どこか、東海林の中で悲しげなものに、置き換わつて行つた。それが何故かは分からぬ。しかし、東

海林にはやる気もない。

中間試験、俺駄目だらうな…。

東海林は心の底から思った。

全く別の場所に、赤龍はいた。

赤龍は、未だに大介の寮にいた。大介たちには、東海林には自分の居場所を伝えないでほしい、と言うことを伝えてある。つまり、そう言うことだ。赤龍は、一人だけで寮の中を「じろじろ」として見る。やはり、大介の部屋に、赤龍のやりたくなるようなゲームはない。つまり、言うことだ。しかし、赤龍がやりたいゲームとなると、今東海林の部屋にしかない。

そう考えた時だった。

今なら、東海林は丁度外出中じやから、見つからんかもしれん。考えただけで、少しばかり尻尾と翼が揺れた、うれしかったといふことなのかもしれないが、赤龍には、自分の心が何よりだった。尻尾が揺れているとかは、その次の、後付の話に過ぎなかつた。

赤龍はベランダの方に出ると、東海林の部屋の位置を考える。そして少しばかり翼を広げて、赤龍は小さく飛ぶ。そんなに強く羽ばたいていいからか、巻き付くような風も、そんなには強くなかつた。

赤龍は、東海林の部屋のベランダに付くと、軽く翼をたたむ。そして窓から、初王子の部屋の中を覗こうとする。

カーテンがかかっている。

…、うーむ。

赤龍は少しばかり考える。もついい、どうせ東海林はいなはずだから、このまま中に入つても変わらない。

思い、赤龍はベランダのドアに手をかけた。  
がちや…。

その窓は、開かなかつた。

…、うむ?「

一瞬、赤龍にはどうなっているのか分からなかつた。手元を見て、その窓を見つめる。そして、もう一度その窓を引いてみよつとする。がちや…、ガチャガチャガチャ…、ガチャ…。

どれだけやつても、乾いた金属音しか、そこにはそん座愛しなかつた。

赤龍の耳に、その音が、妙な風に響いてきた。

赤龍は考えた。

つまり、窓が開いていない。そう言うことだ、と赤龍は思つ。つまり、東海林はそもそも、赤龍をベランダから入れるつもりはない。つまり、東海林は赤龍が、帰つて来ようが帰つてこまいが、関係がない。それどころか、赤龍がいないほうが、食費が浮く。

そう言つ存在なのかもしれない、と初めて、赤龍は無言で実感した。無言の圧力が、窓から赤龍へと、掛けられていた。

一瞬、その窓を割ろうか、本気で赤龍は考えた。その窓を割つて入つて、ゲームだけ取つて帰る。いろいろな意味で最悪だ。おそらく、それは赤龍にも被害がある、と赤龍は考えた。だから赤龍は、特に何もしない。

ジレンマ。

「うううううううむ…」

赤龍は、妙な気分を自分の中で蓄えながら、ただ唸つていた。それ以外に何かをするとしたら、おそらく、窓を割る、くらいだろう。赤龍は思つた。

帰るしか、無いのか…。

赤龍は考えた。少しばかり、癪だつた。今ここで帰つたら、東海林に負けたような、そんな気分になりそうだった。もしここで窓の中に入れたとして、そしてそこからゲームだけを取り出して帰つてきたら、きっと東海林は悔しがるはずだ。しかし、このままだと赤龍が悔しいだけだ。

赤龍は思いながら、色々と考える。そして、あるものにビンとくる。

外には、ハンガーがかけてあった。

そのハンガーは、ワイヤーだった。

見た赤龍は、「うむ…？」と小さく呟いた。そうじや、確かハンガード、こう言つた鍵を開けることが出来ると聞いたことがあったの。

思うと、赤龍は一本の、青いハンガーを手に取つた。それだけで警報なんて鳴つたりはしない。

赤龍は、そのハンガーを少しばかり睨みつける。そして、窓に据え付けてある鍵に、一瞥をくれた。

よし…。

赤龍は頷きながら、鍵の方にハンガーを向かわせた。ハンガーは、隙間を通して鍵のところまで到達する。しかし、到達するだけだ。何もできない。

思いながら、赤龍は少しばかり目を細める。

一度赤龍はハンガーを取ると、入れ方をいろいろと変えてみる。ななめ、横、縦。

赤龍は、目を細めながら、ハンガーと鍵と窓の間を、延々と睨んでいた。ただそれだけだった。

休み時間になると、東海林はすぐに、香奈の方に足を運んだ。香奈はそこで、静かそうに本を読んでいた。一体何の本を読んでいるかは分からぬ。ブックカバーがかかっている。きっと、知的な本なんだろうな。東海林は勝手な考えを巡らせた。

「やあ、香奈さん」

東海林は言つた。

聞いた香奈は、少しばかり驚いたような、そんな表情で東海林の方に視線を向ける。しょっぴじは、香奈の方ににこやかな視線を送っている。そんなににこやかになれる状況でもないが。

「…あら、東海林君」

違和感。

口調に、東海林は違和感を持った。しかし、いつもの香奈はいつもの香奈でしかなかつた。いつもの香奈はいつもの香奈で、その隣に黄龍がいた。

黄龍も、どこか雰囲気が違つような、そんな感覚だつた。東海林は見ていて思つた。

東海林は少しばかり、照れくさそうに香奈へと言つた。

「あのさ、さつきちょっと聞いたんだけど」

…。

一瞬ではあるが、

香奈が、凍るような沈黙を紡いだ。なんとなくではあるが、東海林にも少しほは理解できた。

東海林は、あえて話を続けた。

「最近疲れてるつて…、香奈さん、部活でも疲れない体质だつたのに、どうしたのかなーつて…、ちょっと心配になつて」

東海林は言つた。

言葉が紡げなかつた。

香奈は、自分の口の中が、どんどんと乾いていくことを実感した。今までにないような、ぱさぱさとした、そんな不快感が口の中に広がつていた。

「…」

東海林は、小さく心配を持つ。

「…だ」

大丈夫?と東海林が言いかけた、その時だつた。

「平気よ」

そう答えたのは、どこか大人びた口調をした、黄龍だつた。

東海林はそれを聞くと、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、まつすぐとした、しかしどこかあわただしいような、そんな雰囲気を醸しだして、少しだけ、目を泳がせた。

「…最近、ちょっと寝不足なだけよ…。中間試験がもうそろそろだし…」

聞いた東海林は、「あ、そっか…」と小さく言つた。

どこか、東海林は納得してはいなかつた。

こんな理由で、納得できるわけがないと、東海林は思つた。

「だから、ちょっと疲れてるのよ…」

引っかかるような、突つ掛り。

それを東海林は、今大いに感じていた。それが一体何なのかは分からないとして、しかし、それがあるということは確かに実感があつた。

東海林は、少しばかり考えた。

もしかしたら、香奈さんは何か、俺のために何かをしてくれてのかもしない。もしかしたら、自分自身のためよりも、俺のために、何かを言わないでくれているのかもしない。

考えると、さらに東海林はもどかしくなつた。

喉が渴くような、そこにイガイガとした、そんな不快感。

「…、ほどほどに、ね」

東海林は言つた。

聞いた香奈は、何も言わなかつた。ただ一度、軽く会釈をした程度だ。

中間試験は、学園祭の後だ。学園祭の丁度一週間ほど後。何でこんな時期に学園祭をやるのか、正直言つて東海林には不思議でたまらない。しかし、それが学校の仕様なのだ。仕方がない、と言つてしまえばそれでおしまいだ。

東海林は思いながら、自席に戻るうとする。戻つていいのかすら、東海林には分からない。もしかしたら、ここで戻つたら何か、大切なことが出来なくなるかもしれない。何か非常に大切なことが、出来なくなつてしまふかもしない。

考えるが、それだけだ。

東海林は、自席に戻つて行つた。

せめて、赤龍がいてくれたら、もっといろいろと話せたのにな…。

東海林は頭の中で、そう考えた。しかし、そこに赤龍がいるわけ

ではない。そこに赤龍はいなくて、そこにあるのは、ただの東海林の願いだつた。

席に座つた。

次の時間が何だか、東海林には分からなかつた。

どことなく、辛かつた。

チャイムが、乾いた音だつた。

赤龍は、そんなに物理が得意と言うわけではない。はつきり言って、ハンガーを入れて鍵が開くか、何で考えても、開くかどうかすらわからない。ただ話に聞いたことがあるだけで、そのハンガーで鍵を開けた人は、もしかしたら数学が出来たのかもしれない。赤龍は考える。数学と言つよりも、物理。

物理が出来て、摩擦やら力の方向やらが、頭の中でいろいろと計算出来て、その上で、もしかしたら効率よくハンガーを使ったのかもしれない。

赤龍は、適当にハンガーを入れるだけだ。

ため息が出そだつた。しかし、赤龍はもう十分、ため息を出したと思つてゐる。赤龍は、一生のうちに一度、ため息があれば多い方だと思つてゐる。だから、東海林なんて論外だ、論外。

赤龍は思ひながら、頭をひねつた。どうやつた、このベランダ用の鍵が開くのか、それは全く分からぬ。しかし、ハンガーを使って開けたという話は知つてゐる。たかがそんな程度だつた。

赤龍は、ただハンガーを使つてゐるだけだ。ただ、既存をなぞつてゐるだけだ。ただそれだけだつた。

思ひながら、赤龍はハンガーを見る。ハンガーの先の塗装が、少しばかりはがれかけている。それを見ると、赤龍は少しづかり、目を細めた。

呆れてくる。

赤龍は思つた。

本氣で、呆れてくるの。

どこか、泣きたくなるような、そんな気分だつた。たかがそれだけなのに、そんな気分になつてくる。

何故、赤龍は東海林の寮の部屋に入るために、こんな姑息な手を使わなければならんのじや…。

思つて、呆れてくる。

改めるわけではない。ただ、呆れているだけだ。

どうすればいいかなんてことは、分かつていて。

ただ、残念ながら赤龍には、行動力がなかつた。

赤龍は、その青いハンガーを元あつた場所に掛けると、どうしようか迷う。

ベランダは、以前赤龍が見たままだつた。そこには洗濯物がほしていなくて、それでいて、東海林の部屋には洗濯物がたまつていて、東海林は面倒くさがつて、なかなか干そつとはしない。

その繰り返し。

ふつりと、その繰り返しがなくなつたような、そんな気分だつた。

「…、」

赤龍は、ただ沈黙するだけだつた。悲しいような、そんな気分に、赤龍は打ちひしがれていつた。

たかが、それだけしかないともいえる。

もしかしたら、赤龍は東海林に、結構な迷惑をかけているのかもしけんな。色々な面で…。

どうしようか迷う。

しかし赤龍には、まだ行動するための決断が、足りていなかつた。だめだつた。どうしても、赤龍には踏み出せないものがあつた。

怖い、かの…？

赤龍は自問自答した。それ以外、出来ることがなかつたともいえる。赤龍はただ、自分で、自分に出来る限りの自問をした。

怖い…、かの…？

答えることすら、赤龍は怖いのかもしない。

つまり、それが答えかも知れない。不本意だつたが、それが答えなようだつた。

赤龍は翼を広げる。赤く、被膜と鱗が張った翼があるのに、赤龍は、自身でどこに行けばいいのか、全く分からぬ。それが、赤龍だつた。

「……うーむ、」

赤龍は、どこまでも正直ではなかつた。

赤龍は四肢を着くと、翼を思いつきり羽ばたかせた。

その日は生徒総会の様だつた。そう担任の清原先生が言つていた。清原先生は、担任の先生でもあり、吹奏楽部の顧問でもある。いい人と言つうか、どこか飛んだような、そんな雰囲気の人だ。生徒総会だつたが、東海林は香奈の方に視線を向ける。香奈は俯きながら、何か、思いつめたような、そんな表情をしていた。東海林には、それが酷く、悲しいような、そんな風な印象を受けた。

「と言つことで、号令」

清原先生は、香奈に言つた。いつもなら口ひで、香奈が、起立、気を付け、礼、の三段階の挨拶をする。三段構えだ。

しかし、教室は、静かだつた。

一瞬、東海林も何が起こつているのか分からなかつた。東海林は、数秒経つても号令がかからない教室の中心を見た。

香奈が、俯いていた。

それを見た清原先生は、少しばかり目を丸くした、しかし、すぐに香奈に言つた。

「号令よ、春潮さん」

聞いた香奈は、はつとなる。そう、春潮は香奈の上の名前だ。

すぐに香奈は、少しばかりあわてながら、「き、起立」とおぼつかない声で言つた。

その声は、さつきの沈黙よりも、響かなかつた。

「気を付け」

声が東海林に届いた、あくまで、届くだけだ。

東海林は心配そうに、香奈の方に視線を向けた。香奈は、何かを思いつめたような、そんな雰囲気を醸しだしながら、最後の構えの号令をかける。

「礼」

そして、『や…よ…』としか聞こえないみんなの挨拶。東海林は小さくではあるが、ちゃんとあいさつをしている。雄大は勿論、何も言つていない。

東海林はすぐに、香奈の方に足を運んだ。香奈はどこか、物を詰まらせたような、そんな風な表情をしていた。

東海林は香奈に聞いた。

「どうしたの？香奈さん、やつぱり、具合が悪いの…？」

聞いた香奈は、一瞬細い視線を、東海林の方に向ける。東海林は、それを見なかつたことにする。

「…少し、風邪気味みたい」

香奈は言つた。

聞いた東海林は、「えッ…」と小さく声を張る。香奈は、何か辛そうな表情で、どこか遠くを見つめていた。その遠くと言つのが、東海林の手に届きそうな場所ではないことは、確かにようだつた。

「…そう、なの？」

東海林は香奈に聞いた。

聞いた香奈は、小さく答えた。「ええ…」それ以外に、きつと答える言葉はない。

思つと、東海林は少しばかり考へる。

風邪、ということは、本人もかなり辛いはずだ。それなら、さつきの雰囲気も何となく理解できるし、今日の少し気分が落ち込んでいる理由も納得がいく。つまり、香奈は風邪なのだ。正確には風邪気味。

「だから、東海林君に風邪をうつしたくないから…」  
「ドキッと、

一瞬んではあるが、東海林の胸が擬音を放つて、大きく脈動したのを、東海林は実感していた。

「… どうか、香奈さんは俺の事、心配してくれてるんだ…。」

思つただけで、天にも昇りそつな、そんな気分にはなつた。

東海林は聞くと、胸の中がカツと熱くなるのを必死に抑えて、なるべく静かに、東海林は香奈に言つた。

「分かつたよ、香奈さん。と言つことは、部活は出ないの?」

胸がどんどん熱くなつていぐ。

顔が、どんどんとほてつてくる。

「…ええ、そう言つことになるわね」

「… どこか残念そうな、そんな雰囲氣で香奈は言つた、つまり、残念そつとこつひとは、みんなと一緒に楽しく出来なくて、と言つことだ。

なんて堅実なんだ…。」

東海林は心の底から思つた。思つて、東海林はぼつと、温かい気持ちになつて行つた。何だか、それ以外のことが吹つ飛びそつな、そんな気分になつて行つた。

「それじゃあ、俺が、香奈さんの事言つとくよ。だから香奈さんはそのまま、寮に帰つて休んで」

東海林は言つた。

聞いた香奈は、少しばかり目を丸くしていだ。しかし、どこか悲しそうな視線で。

「… ありがとう」

中身があつたのかどうかは、東海林には分からぬ。

聞いた瞬間、東海林の中で、何かが冷めたような、そんな気分に見舞われた。東海林は、どこか気分が、静かになつて行くような、そんな気分になつた。

「… うん」

気づいたら、そこに香奈と黄龍がいなかつたのを、東海林は覚えていた。

一体、何だつたんだろう、さつきの妙なの。

東海林は、本気で考えた。考えるだけで、それ以外、何も思つてはいなかつた。

ここまでは来られる。あくまでここまで。

赤龍は思いながら、田の前に広がる学校を、どこか遠くの物に見ていた。手を伸ばせば、すぐ近くに学校がある、そんな距離だつた。あくまで、自分で手を伸ばさなければ、手が届くわけがないのだ。赤龍は思いながら、どこか、口の中が酸っぱくなつて行くのを感じた。どうしても、赤龍の中で赤龍は、素直になれないような、そんな感覚があつた。しかし、その反映された表情が、赤龍の本意だと、赤龍自身理解できてしまつた。

つまり、赤龍は今の自分が嫌だということだ。今の気持ちを考えると、そう言つことになる。

なんとなく、東海林がため息ばかり吐く理由が、分かつたような気がする。

赤龍は思いながら、東海林のクラスの窓の近くまで飛んでいく。すこしづかり息を潜めながら、その教室の中に視線を向ける。

一瞬、

東海林と目が合いそうになつた。

咄嗟に、赤龍は身を屈め、東海林の視界から外れる。東海林は座つてゐる。その教室から、担当の先生の清原先生の声が聞こえてくる。

『と言つことで、号令』

東海林はそれを聞くと、清原先生の方に視線を向ける。赤龍は、すぐに視線が外れたということを認識すると、少しづかりの視線を、東海林の方に向けた。東海林は赤龍と、ま反対の方向を向いている。

『号令よ、春潮さん』

再び、清原先生の声。

それを聞いた香奈は、どこかおぼつかない口調で『き、起立』と

教室に響かせる。聞いた赤龍は、一瞬視線を細める。

「つむ…？」

赤龍はおかしいと思う。本氣でそう思ひ。

いつもの香奈なら、先生の言葉を一言一句聞き逃さない、秀才のよつな雰囲気を思わせる行動をとる。つまり、こんな、先生の話を聞き逃すよつなことはまずしない。それが顧問の先生で、担任の先生の清原先生なら尚更だ。

赤龍は思った。

思ったが、すぐに東海林の方に視線を向ける。東海林は赤龍に気付いていないのか、全く別の方向を向いている。

うれしいよつな、どこか緊張するよつな。

または、悲しいよつな、そんな気分。

そして、教室に号令が放たれた。

『礼』

そして、例によつて例の如く、『わ…よ…』しか、他の生徒の挨拶が聞こえない。東海林は小さいながらも、ちゃんとあいさつはしている。青龍はそもそも、礼すらしない。

東海林はそのあいさつを終えるとすぐに、赤龍ではなく香奈の方に足を運ばせる。赤龍は、どこか、もやもやとした気分を覚える。しかし、東海林に謝る機会を、赤龍は求めていたよつな、そんな気分でもあつた。

東海林は、香奈に何かを呟く。流石の赤龍でも、それを聞きとるることはかなりの困難だった。

そして、東海林は香奈に対して、よく分からない、としか言いようのないリアクションを取り始める。急におどおどしたり、それでいて、急に静かになつてみたり。

そして、顔がどんどんと赤くなつていぐ。

…、  
…む…。

赤龍は思った。そして、頭の中でだけではあるが、赤龍は、自分

の考えを自分なりに、展開させてみた。

東海林 香奈に顔を赤らめる 東海林は香奈のことを大きく考えている。

赤龍 香奈のことを考えている東海林 あまり考えていないかも  
しない いや、もつと悪いかもしない。

香奈のことを考えている東海林 赤龍 × それだけのとこ。  
東海林と赤龍 大したことではない 東海林にとつて。

赤龍 怒る。

赤龍は目を細めた。あたりまえな話だつた。東海林は赤龍よりも、香奈のことにも心を動かされているように、赤龍には見えるからだ。

赤龍は、また呆れてくる。

これも、自分に対してもう一度呆れてくる。赤龍は、自分に、さつきと同じような、似たような意味で呆れてくる。

似ているが、全然違う理由。

それを見た赤龍は、一瞬だけ、ほんの一瞬、悲しそうに俯いて見せる。それを東海林が見ていたら、きっとまだ、許せたかも知れない。

い。

赤龍は、東海林の方に視線を向ける。

東海林は、香奈の方に視線をぼうっと向けている。アホみたいに、香奈の方にたたじつと、視線を向けている。

赤龍は納得した。

これが、東海林の答えと言つことだ。赤龍は納得した。

つまりは、東海林は赤龍の存在よりも、香奈の存在の方に心を動かされている。赤龍は解釈する。

そして、悲しくなつてくる。

あたりまえな話だ。人間が人間に心を動かされる。たまにではあるが、自然にも、人間の心は動かされる。しかし、人間同士よりも、影響力は小さい。

それは、人間と龍でも同じだ。赤龍は思った。

東海林が、香奈に対してもう一度心を動かされるのはあたりまえな話だ。

東海林が人間で、香奈も人間なのだから、それはどこまでも、当たり前な話だ。それ讓人間同士の方が、きっと話も通じやすいんだろう。

赤龍は、本気で悲しくなつてくる。ゲームのセーブを忘れるなんて目ではないくらい、赤龍は悲しかつた。

仕方のない話なのかもしれない。

思った。考えた。それが、いたつた結論だつた、ということなのだから、赤龍は、それに納得しなければならない。あくまで、自分でもとめた答えなのだから。

赤龍は、否定しなかつた。むしろそれは、赤龍自身よりも正論だつた。

赤龍は翼を広げた。そして、赤龍と東海林の見えない場所へ、赤龍は飛んでいくことにした。それがどこかは、赤龍には分からぬだ。

今日、生徒総会に出るわけがなかつた。香奈はそんな気分でもなかつたし、そもそもいまするべきは、そんな事でもなかつた。そう、いまするべきなのは生徒総会ではなく、ハンスのところに行くことだ。

「やつぱり、行くのね」

黄龍が、どこか心配そうに香奈に聞いた。

当たり前だつた。

「だつて、畔ちゃんが、どうしてあんなことをしたのか分からぬと、私だつて、どうしたらいいか分からぬもの」  
確かに、それは正論だつた。

正しかつた。

本当にすべてが正しいかは別として。

「…確かにそうね」

黄龍は言つた。

香奈は屋上のドアを開く。そこには、誰かがいるわけではなかつた。いつも通り、そこには誰もいない。誰かがいるわけがなかつた。

天文部も、今日は外での観察をする様子はなかつた。つまり、ここにいるのは香奈だけ、と言つことだ。

「飛ぶわよ、」

香奈は黄龍に言つた。

黄龍は、どこか乗り気ではない雰囲気で、四肢を着いた。香奈はベンチのようすに黄龍に座り、肩をしつかりと握る。

「…、本当に、」

黄龍は、香奈に聞いた。本当に、小さな声で。

聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、どこか迷つたような、それか、どこか思いつめたような、そんな表情をしている。「香奈は、ハンスのところに行くのね？ その前に、行く場所はないのね？」

念を押しているような、そんな感覚。

聞いた香奈は、少しばかり目を見開いた。何を、黄龍が言いたいのか、そんな事、香奈には分からなかつた。あれ？

香奈は一瞬思つた。

黄龍の思つてていることが、分からぬ？

考えてみる。それは、いつもならありえない話だつた。

香奈は少しばかり黙る。黄龍の思つていることを、少しばかり考へてみる。もしかしたら、まだ、行くべき場所があるかもしれない、と言つことかもしれない。

しかし、香奈には分からぬ。

だから、いつも言つしかなぬ。

「…、私には、それ以外にやるべきことが何か、分からぬから」

黄龍は、少しばかり俯いた。そして、小さく言つた。「私は、あくまで香奈の居候。それに、私は自分の意志で、香奈について行きたいの」

聞いた香奈は、別に目を細めるでも、見開くでも、何にもしなかつた。

「だから、私は香奈が言った道に行くわ」

黄龍は、迷わずとんだ。ただそれだけだった。

「風邪か？」東海林は思った。思いながら、バスクラリネット（バスクラ）を片手に、どこか空しいような気持ちで、それを吹いていた。

東海林は吹奏楽部の、クラリネットパートに所属していた。クラリネットパートのリーダーは、この人だ。

「ショウジン、何かいつもと、足りなくなない？」

そう聞いてくる、この人物。

聞いた東海林は、座りながら、バスクラを片手に持っている。そのリーダーは、東海林の方に視線を向けてくる。

聞いた東海林は、「まあ、はい」としか答えようがない。

「やっぱり」

そのリーダーの先輩は言った。  
聞いた東海林は、そのリーダーの先輩に、少しばかり細目を向ける。

「それで、憶羅先輩、練習は…」

聞いたその瞬間だつた。

「今日は何か、疲れたから自主れーん」

そう言う先輩が、憶羅先輩だ。

東海林の隣に座っているバセット・ホーンの秋沙汰先輩が、どこか呆れながら、憶羅先輩の方に、小さく言った。

「全く、等閑なんだからな」

そう言いつつ、勝手に練習を始める。

秋沙汰先輩は、どこか眠そうに、バセット・ホーンを吹き鳴らし始める。

東海林はそれを聞くと、バスクラのマウスピース（吹き口）を咥えようとした、その時だった。

「ショウジン」

その声は、憶羅先輩の物だった。

ショウジン 東海林 + 君 東海林 + ン 東海林。

聞いた東海林は、憶羅先輩の方に、視線を徐に向けた。少しばかり力がこもつていないうとな、そんな表情。

憶羅先輩は、東海林に手招きする。それを見た東海林は、少しばかり視線を泳がせる。そして、バスクラを静かに床に置くと、立ち上がり、憶羅先輩のいる前のリーダーの席まで歩いていく。

「何ですか……？」

聞いた憶羅先輩は、東海林に聞いた。

「赤龍君はどうしたの？」

聞いた東海林は、一瞬きょとんとなつた。しかし、確かに憶羅先輩が、それを気にしないとは思えなかつた。

これはある意味、当たり前な質問なのかもしれない。

東海林は思いながら、「ええつと……」と言いながら、少しばかり考へる。どこから説明すればいいのかな……。

思つたが、東海林は言つた。

「ちょっと、喧嘩しちゃいまして」

聞いた憶羅先輩は、少しばかり目を大きく見開くと、「喧嘩……、ねえ」と東海林に、意外そうに言つた。何が意外そうなのかは、東海林にはさっぱりわからない。しかし東海林は、そのまま続けた。

「それで、赤龍怒つて、どつか行つちゃつて」

その時だつた。

「ちょっと待つた

そこで、東海林の説明に歯止めがかかつた。

少し歯止めをかける場所が違うような、そんな気もしなくはないが、東海林は特に何も言わなかつた。

「それつて、今ショウジンは赤龍君がいる場所を把握してるのでこ

と？それともしてないってこと？」

聞いた東海林は、頭を横に振った。

「いいえ、知りません」

聞いた憶羅先輩は、「……」驚いたような、意外なような、それか、ありえない、とでもいうような表情を、東海林の方に向けていた。そんなに驚かれるようなことでもない気が、東海林にはしていた。

「それって、携帯電話とかでも応答がないってこと？」

憶羅先輩は俺に聞いた。

聞いた俺は、憶羅先輩に答える。

「赤龍は携帯電話を持つてません」

聞いた憶羅先輩は、「あ、そうなの」と言いながら、少しばかり悩み始める。東海林は、どこか心の中で、突っ掛けのようなものを覚える。

憶羅先輩は、少しばかり息を詰まらせながら、東海林の方に視線を向ける。

「でも、ただの喧嘩、だよね」

憶羅先輩は、心配そうに東海林に言った。

少しばかり、目を遠めた。「だと、思います」と東海林は、自分で思っているのかそうでないのか、よく分からぬ言葉を放つ。

憶羅先輩は、「ふーん……」と小さく息を吐く。

「それじゃあ、なるべく早く、仲直りしないとね」

憶羅先輩は言った。

聞いた東海林は、少しばかり目を見開いた。床に、憶羅先輩の顔はなかった。

「早くしないと、どんどん隔たりが大きくなるだけだよ」

憶羅先輩は言った。

聞いても、東海林には分からなかつた。分からなかつたし、分からなくなつた。それに、東海林にとつては、それが重要な意味を持つだなんて、思えなかつた。赤龍は確かに重要かもしれない。し

かし、いなくなつたからつて、そこまで東海林の生活に支障が出るわけでもない。確かに、成績は少しばかり落ちるかもしれない。しかし、その代わりに食費が浮くのだ。

つまり、東海林はかなり、金に余裕ができる。そのはずだ。

少しばかり、どうすればいいのか分からなくなつてくる。

俺は、何を天秤にかけるん?

東海林は一瞬、心の中で問いただした。そこに東海林がいるとは思えなかつたが、東海林は、問いただした。

俺は、何を天秤にかけるんだ、金と赤龍を天秤にかけるのか?

思つた。

どうしよう。

それは再び、思つたことだつた。

思つただけで、東海林は何をすればいいのか、全く分からなかつた。

「ショウジン」

憶羅先輩の声が、東海林の中で、はつきりと澄み渡つたような、そんな響きを持つた言葉に思えた。

東海林は聞くと、憶羅先輩の方に視線を向けた。憶羅先輩は、東海林の方に、まっすぐと、しつかりとした視線を向けている。東海林は、少しばかり息をのんだ。ただ、それだけだつた。

「それが、悩むほどの事ではないと思うよ」

「どこか、

とてつもなく、優しい響きを持つた、そんな声だ。

聞いた東海林は、憶羅先輩の方に視線を向けた。憶羅先輩の声が、クラリネットよりも、はるかに響き渡る、そんな声に聞こえたのは、きっと東海林の気のせいなはずがない。それはきっと、この部屋の中で、一番きれいな音、かもしれない。

「俺は、ショウジン信じてるよ」

「俺は、聞こえた。

憶羅先輩の声だつた。

もう外は、暗くなりかけていた。秋だからと言つことがあるのか  
もしれないが、どんどんと、昼の時間が短くなつてきていた。

香奈は、昨日行ったホテルグランデセンチュリーに、再び足を運  
んでいた。

1050号室。そこは、ハンスの泊まつてゐる部屋だつた。

香奈は少し黙りながら、ハンスの方に、静かに視線を向けていた。  
ハンスは畔の方に視線を向けながら、少しばかり黙りこくる。

近くには、ユーカとライカン。そしてもう一人、黄色の髪をした、  
ユーカと顔立ちがそつくりな女の子。

その子は、見事なオーボエを持つていた。そこらにある普通のオ  
ーボエではない。見た限り、特注品の、高価なオーボエだつた。オ  
ーボエも、黒一色ではなく、木の温かみが残つた、茶色に近い黄色  
をした色をしていた。その黄色の髪に、よく似合つた色をしていた。  
キーも、金でメッキをされているような、輝かしい光沢があつた。

ハンスは言った。

「耳をふさいで」

静かな声だつた。

聞いた香奈は、一瞬なんのかよく分からなくなる。しかし、ハ  
ンスとユーカ、ライカンはもう既に、耳をふさいでいる。

ふさいでいないのは、香奈と黄龍だけだ。

二人（一人と一匹）は目を合わせると、お互ひの疑惑を行き来さ  
せた。しかし、ハンスが何か妙なことを企てるとは思えなかつた。  
それは、香奈の勝手な解釈、とも言えなくはない。

香奈は耳を、両手でふさいだ。

それを見た黄龍も、香奈に続いて耳をふさいだ。そこから、全く  
音がなくなつたわけではなかつた。

すると、ハンスが一度、黄色の髪をした少女に会釈をする。何か  
の合図の様で、黄色の髪をした、ユーカに顔立ちがそつくりな女  
の子は、オーボエのリードを、厳かに、軽く口に咥えた。それだけだ。

息を、軽く入れる。

音が鳴るのは、勿論のことだった。

ただ、それはどこか、オーボエなのか、それともそういうのか、よく分からぬ響きだったことは確かだ。確かにオーボエではある。しかし、耳をふさいでいてもわかる。いつも聞いているオーボエの音とは、どこか根本的に、音の質が違う、まるで、本質的に似た音のする楽器、のようだ。

畔が、充血した田を見開いた。

苦しそうに、ガムテープが巻かれたままもがく。それ以外に、出来るようなことは無むさうに見える。しかし、それが香奈には、少しばかり息が詰まるような、そんな風に感じられる。

そつか。

香奈は思った。簡単な話だ。

あのオーボエの音が、畔を苦しめているのだ。

普通なら、きっと香奈はここで「やめて！」と叫んだはずだらう。それがいつもの香奈なら、の話だ。

しかし、香奈は何も言わなかつた。何も言えなかつた。そこにあるのはあくまで、香奈を『一度襲つた』畔でしかなかつた。

香奈にとつても、畔はいろいろな意味で、厄介だつた。だからつて、あんなに苦しんでいる畔を、ただ眺めるだけでいいの？ただ、オーボエの音を聞かないために、耳を手でふさいでるだけ、本当にいいの？

香奈は思う。

答えなんて、帰つてこない。

香奈の心にあるのは、今は、どこか空ひで、虚ろな空白だけだつた。

畔が、すうい顔でもだえ苦しんでいる。口からは涎が垂れ始め、田はどんどん乾いていき、そして、さつきよりも体の動きが激しくなつてくる。ガムテープは、それでもはがれる気配がない。

香奈は、咄嗟に田を離した。

もう見ていられなかつた。見ているこつちにも、畔の、そんな痛々しさが伝わつてきそうな、そんな感覚があつたからだ。

黄龍は、それをどこか、心配そうなまなざしで見つめていた。

それしかできなかつた、とも言い換えられる。

東海林は、寮で、一人で食事をとつていた。テレビをつけたいとは思わなかつた。そもそも、テレビなんてつけても、きっと東海林は聞き流すか何もしないか、その一つのどちらかで、きっと無駄になるだけだから、なるべく電気代は削減したくなる。貧乏性だからなのかは分からぬが、東海林には、もつたいないことではない、と言う感覚が身に付いていた。

一人で食事を食べることにも、段々慣れて来たな。

東海林は思つた。そして、思いながらカップの中のラーメンを啜つた。ラーメンは、最後の塩味だつた。

まあ、赤龍が来る前あたりも、俺は一人で食べることに慣れてたか。

東海林は考えて、それから再びラーメンを啜る。そして、テープルの上に置かれている、水の入つたコップを一口呷る。再びラーメンを啜る。その繰り返しだ。

東海林は食べながら、そこに音が乏しいことに気が付いていた。音が乏しい、と言うよりは、そこには全く、音なんものが存在しなかつた。そもそも、音なんものは、東海林の部屋には必要なくて、必要なものは、食事とテレビと、ソファーと椅子と、ベッドだけだ。東海林はそもそも、部屋の付属品ではない。赤龍は、もう既に東海林のもとにはいなない。

それが、悲しいのか悲しくないのか、東海林には分からなくなつていた。昔にも、こんなようなことがあつた気がしてしまつ。何故かそこで突つ掛つて、そして東海林は、いつも通りのよう、そんな雰囲気に戻つていく。もしかしたら、赤龍が帰つて来ても、俺は同じ行動しかできないんじやないか？東海林は思わず思つた。

赤龍が、その部屋にいるわけがなかつた。そもそも、赤龍なんてそこに、いるわけがなかつた。

東海林は思いながら、最後の塩ラーメンを啜つていた。小さくため息を吐きながら、携帯電話の方に視線を向ける。

憶羅先輩が、早く仲直りした方がいい、と言つていた。

しかし、と東海林は思つ。そもそも、早く解決する問題のラインは、軽く超えた問題になりかけている、そんな感覚。

東海林は、携帯電話を使おうかどうか迷いながら、小さくため息をしようとする。しかし、東海林はやめる。どうせ、それは音になつて空中に消えるだけだ。詰まるような雰囲気にはなりはしない。それが、分かっているからかもしれない。

東海林は思いながら、左手に携帯電話を持ち、右手で箸をつかんでいた。東海林は携帯電話を開けて、メールを作成しようとする。その時だつた。

ピーンポーン、と言つのは、ドアベルの軽い音だ。その音は、さつき東海林が思つた通り、空中に音になつて、そして消えて行つた。簡単な話だつた。

東海林は聞くと、箸をラーメンのカップの中に入れる。東海林は立ち上がり、玄関の方に足を運ぶ。どこか重々しいような、重々しくないような、どちらでもないような、そんな足音だつた。

東海林は玄関の、のぞき穴を覗く。そこにいるのは、緑龍と大介だつた。

見た東海林は、そこから目を離し、すぐに鍵を外して、そしてドアノブを外す。

ドアノブを下げて、玄関を開いた。

そこには、見た通り、一人（一人と一匹）がそこにいた。つまり、大介と緑龍だ。

「…、どうしたんだ？」

東海林は言つた。そして今の時間を、頭の中で思い出そうとして見る。確かに、八時を過ぎていたことは確かだ。しかし、寮内の移動

は、午前零時まで可能なはずだ。東海林は思つと、一人の方に視線を向ける。

「いや、それが、」

大介が言つた。

聞いた緑龍は、その大介の後の言葉を継ぐ。

「消えたんです、忽然と」

聞いても、東海林には一体何の話なのか、全く分からなくなつてくる。どんどん話が見えなくなつてくる。

「…、消えたつて、何が？」

東海林は緑龍に聞いた。

緑龍は、どこか申し訳なさそうな表情で、東海林から視線を離す。その代りに、東海林に突き付けられたものは、別の物だつた。

それは、一枚の紙だつた。

と言うよりは、一通の手紙だつた。字が下手ではあるが、読めなくはない文字で、そこには書かれていた。

『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行つてしまつぞ…』

怒つているのか、そうでないのか、よく分からぬ口調、としか言えない手紙だつた。

東海林はそれを見ると、少しばかり目を細める。これは、何か最近はやつてる、ブラックジョークつてやつか？

東海林は思うが、すぐに違うと思う。

この二人（一人と一匹）が、東海林に對して、そんなことをするはずがなかつた。そもそも、他人に對してそんなことをする人物ではなかつた。大介と緑龍はどういう奴らだ。真つ直ぐで、そして相手に對して謙虚な部分があつて、必ず尊敬を忘れない。大介だつて、少なからずはそれを心掛けているはずだ。

思いながら、東海林はその手紙を、軽く手に取つた。

「…、何だ、これ？」

東海林は、少しばかり声を詰ませた。

あたりまえな話だつた。つまり、それはそのままを意味していた。

「…」

緑龍は、口を紡いだままでいた。言葉と言つ物を、緑龍は放つていなかつた。そもそも、そんな気が、無いようにも思えた。

「俺たちが今日、帰つてきたときに置いてあつたんだ」

ふーん。

東海林は思う。そして、一瞬引つかかる。あれ?となる。  
「何で赤龍は、俺じゃなくてお前たちの方に、この手紙を送つたんだ?その方が絶対に確実だらうに」

考えてみれば簡単な話だ。

赤龍 居候 東海林の部屋。

緑龍 居候 大介の部屋。

赤龍 居候? 大介の部屋 緑龍? ? 赤龍。

つまり、そう言つことだ。

赤龍がこの手紙を見せたいのなら、東海林の部屋に送れば簡単なことなのだ。しかも、紙をどこで手に入れたか、と言うことだつて、問題に上がつてもいい話題だと、東海林は心から思つた。

「えつと…」

大介の目が、泳いだ。

緑龍の方に向いた。

それを見た緑龍も、どこか困つたような、そんな風な表情をしながら、大介を目を合わせていた。

東海林は、少しばかり視線を細めた。

大介は「その…」と言いながら、東海林の方に視線を向けた。

「…」

東海林は、冷ややかな視線で、一人の方に視線を向けていた。それは、色々な意味であつたりまえな話だつた。

「…、多分、俺たちの部屋の窓だけ空いてたからだ!」

大介は言つた。

それを聞いた緑龍は、「あ、そう言えばそうだつたね！」と、強引に大介へとついて行く。しかし東海林は、大介たちについて行こうとは思えなかつた。

「それなら、ポストから入れればよかつただろ」

「そう、考えれば簡単な話。

それを聞いた大介は、「そう言えば…、そつだな」と、脂汗をかく。手が、汗で滲み始めている。額に、汗らしき水玉が、浮かんでいた。

緑龍は、再び大介の方に視線を向ける。

「…た、多分な…」

大介の、再び破綻しかけた論が、東海林の耳に突く。

「多分、これを書くために俺たちの部屋に入つたけど、でも東海林の部屋の窓が開いてなくて、風が強かつたから、面倒くさくて、俺たちの部屋にこれを置いてつたんだ」

「お前のその考えには矛盾点がたくさんあるな」

東海林は言つた。

一つ一つあげていくときりがない。東海林は思つと、少しばかり目を細めた。

核心だけを、東海林は告げた。

「それに、何でその部屋が大介の部屋だつて、窓を見ただけでわかつたんだ？本がたくさんあつたからか？それだけで、大介の部屋だつて、本当に確信が出来るのか？」

赤龍の鼻がいいのは、ないしょ。

聞いた大介は、更に勢いを増して、脂汗を輝かせる。だらだらと、襟の中に、汗の水玉らしきものが入つていく。

「…」

大介が、緑龍と目を合わせようとした。

緑龍は、俯いていた。ただ、床の方をじつと見つめていたとも、東海林には見えなかつた。

「…、いいでしょう」

そう、緑龍は言つた。

聞いた東海林は、少しばかり視線を緩和させた。

大介はそれを聞くと、少しばかり焦る。「おいおい、あの約束は……」言いかけて、緑龍は小さく言つた。「仕方がないじゃないか。それに、」

言うと、緑龍は東海林の方に、顔を上げる。「もう嘘は、通用しないよ」

それは本当の事だつた。

聞いた東海林は、ただ口と沈黙を、無意味に紡ぐばかりだつた。東海林は、少しそつかりとした視線で、二人（一人と一匹）を見つめた。

「やっぱり、何か知つてるんだな」

東海林は言つた。

聞いた大介は、もう何も言つことは無い。ただ、口を紡ぐばかりだつた。それだけだつた。

緑龍は、「はい」と東海林にはつきりと言つた。

「本人からは口止めされていたんですけど……」

少しの前置きをすると、緑龍は、大介の方に視線を向ける。大介は、どこか居心地が悪そうな、そんな雰囲気をあたりに醸し出していた。少しだけではあるが、そんな大介に、緑龍は小さく、目を細めた。

「……」

少しばかり、東海林は黙つた。

二人は、小さくおこつているのか、呆れているのか、反省しているのかよく分からぬ顔色で、ただ沈黙していた。または、お互を見あつていた。

東海林が、沈黙を裂くように言つた。

「あ、……あのさ」

その声は、音のなかつたその場所に、じんと染み渡る。

二人（一人と一匹）は、東海林の方に視線を向ける。東海林は、

一瞬口をふさいだ。しかし、言葉を続けた。

「…立ち話もなんだから、部屋に入つて、話さないか？」  
常套句みたいなものだった。

オーボエの音がなくなつた。

黄色い髪をした、オーボエを持った少女が、さつきまで吹いていたそれを口から離し、ハンスの方に一度、軽い会釈をした。

それを見たハンスは、ふさいでいた耳を、すぐにゆつくりと、開いていく。ハンスは、そこに何も害のある音がないと知ると、香奈たちの方に一度、軽く頷いた。それを見た香奈は、少しばかりの疑念を押しとどめて、外の音を聞いた。

音が、そこにはなかつた。

確かに、小さな音なら聞こえてきた。外でなつている車のクラクション、水道管に水が流れる音、ほんのかすかではあるが、音はあつた。

しかし、異質な音は何一つなかつた。  
たとえば、オーボエの音。

「…、今のは…？」

香奈は、ハンスの方に、真剣なまなざしを向ける。ハンスは聞くと、一度、考えるように、小さく頷いた。

「うん、畔ちゃんがね、どんなことを聞いても、どんなことをしても、自分のことを殆ど何一つ明かさなかつたんだよ。殆ど何一つね。だから、さつきのオーボエで、音の魔法、音魔おんまを使って、畔ちゃんの頭の中を読み取ろううつてものだつたんだけど…」  
ハンスは言った。

ちよつと待つた、と香奈は思つ。

「あの…、何をしても何も言わないつて、何をしたんですか…？」

聞いたハンスは、少しばかり視線を逸らした。ライカンは、そんなハンスをただ見据えている。ただ、それが本当にただ見据えているだけなのは、分からぬ。

「ユ一カも、視線を少しばかり逸らしたことは、事実だ。  
「…、聞いちやいけないこと、聞いたかしら…」

香奈は小さく呟いた。

聞いたハンスは、少しばかりため息交じりに、にいつはつきと、  
香奈に言った。

「…、海の底を、見せてあげたんだ」

ハンスは言った。

香奈は「え…？」と小さく声を放った。海の底を見せてあげる、  
その意味が、香奈には理解できなかつた。

香奈は黄龍の方に視線を向ける。それを聞いた黄龍も、少しばか  
り疑問を浮かべながら、視線をハンスに向けていた。黄龍も、その  
意味が分かっているわけではなさそうでいた。

見たライカンは、淡々と言つた。

「海の底に行つたら、どうなるかわかるよね

それは、疑問ではなかつた。

聞いた香奈は、ライカンの方に視線を向ける。「海の底に行つた  
ら…」小さく、ライカンの方に言つた。ライカンは、ただ真つ直ぐ  
で、どこまでも真つ直ぐな視線を、香奈にやつしているだけだつた。  
「どうなるの…？」

香奈は言つた。

それを聞いたライカンは、少しばかり皿を締めた。

「分からぬの？」

ライカンは、香奈に聞くようにそう言つた。

それを聞いた香奈は、再び少しだけ考えてみる。海の底に行つた  
ら、どうなるのか。

そんな事、実際に行つてみないと分からぬと思う。でも、そも  
そもいけない、と香奈は思つた。そもそも、そんな海の底になんて  
いけない。海の底に行つたら…、  
底に行つたら…？

香奈は、納得した。

黄龍は、香奈の方に視線を眺めやつていた。

それを見た香奈は、黄龍の方に聞いた。「分かつた…？」と、小さく、不安げに。

黄龍は、頭を横に振った。

香奈は、沈黙するだけだつた。

「…」

沈黙しながら、香奈はライカンの方に視線を向ける。しかし、ライカンから視線を逸らせ、香奈はハンスの方に視線を向ける。ハンスは、どこか落ち込んだような、そんな雰囲気で、床の方に視線をやつていた。床に、何が落ちているわけでもないと、香奈は見ないで思つた。ただの勘だ。

「もしかして、」

香奈は言つた。

ハンスは、目を静かに閉じた。

「ハンスさんは、畔を」

殺そうと

「したんですか…？」

ハンスは聞くと、少しばかり息を詰まらせた。

ユーカは、目を逸らせた。

リビングのドアが開き、ワゴンが押されながら、きゅつきゅきゅつきゅと音を立てて、香奈の座つている横まで来た。それを押しているのは、私服の、長身の女性だ。

「セイロンティーです」

そう言いながら、その人物は香奈の方に、紅茶の入つたカップを、温かいソーサーの上に置いた。黄龍にも、その人物は入れる。

「…、ありがとう…、春香」

ハンスは言つた。

聞いた春香は、ハンスの方に視線を向ける。どこか張りつめたような、そんな雰囲気だつた。

春香は同じように、ハンスにもカップを、温かいソーサーの上に

置いた。ソーサーは、無意味に白くて、無意味にきれいだった。

「……すまないけど、今は下がつていってくれるかな……？」

ハンスは言つた。

それを聞いた春香は、ハンスの目をじっと見る。ハンスは、目を下の方へ向けている。ただ、今は前が真っ直ぐ見ることが出来ない、と言つだけの話ではあるが。

一  
瞬  
た  
け

目が見えた。春香には、その眼が見えた。いつも以上に張りつめた、悲しそうな、仔犬のような目をした、そんなハンスの目。見二番目は、二度言つてしかなかつた。

「分かりました」

さゆつきゅきゅつきゅと、ワゴンのタイヤから音が聞こえる。ただ、その音が嫌な音には聞こえなかつた。不思議なことに、妙な満足感に似た、どこか、虚ろな音だつた。

ハンスは、床の方に視線を向けるだけだ。

「殺そうとはしない。でも、それに近いことはした。だから、そ

ハンスは言った。  
木の向かいに木がない。  
僕は

そして、ハンスは更に沈む。「僕が、畔ちゃんから話を聞きだせ

なかつたから  
瞬間だつた。

ちまえ!! お前らは、邪魔なんだよーーー!!

それは、畔の声だつた。目を充血させた、狂つたような、そんな表情をした畔の声だつた。悍ましく、おどろおどろしい、叫ぶような、そんな、よく分からぬ強引な声だつた。そんな畔だつた。

しかし、と香奈は思った。

何を言いたいのか、それは香奈にもよくなは分からなかつた。

そんなことは、きっと誰にもわからぬ気がした。

別の、ユーラソツクリの声が聞こえてきた。それは、ユーラの声ではなかつた。

「…一つだけ、」

それは、黄色の髪をした、そのオーボエの少女の声だつた。

聞いた香奈たちは、その方向に視線を向ける。オーボエを持つた少女は、小さくではあるが、確實な声で言つた。

「それを、聞けばいいのよ」

その少女は、はつきりとそう言つた。

ハンスに渡された地図には、新宿と書かれていた。この場所を、香奈は知つてゐるような、そんな気分に見舞われていた。

ただ、飛んでいた。香奈は黄龍の背中に座りながら、その地図を見つめていた。地図の目的地の場所に、五芒星らしきものが書かれている。それが何を意味しているのかは、香奈には分からぬ。

「黄龍、」

香奈は言つた。

聞いた黄龍は、「ん？」と香奈の方に声を張つた。「この地図に書いてある場所なんだけど、」と黄龍に言つた。

ハンスは、この地図を素早く書いて、香奈に渡したのだ。簡単な地図ではあるが、はつきりしてて、簡素な地図だつた。しかし、そんな中に一つ、似合わぬマークが書かれていた。そのマークは、誰もが一度は目にしたことのある、そんなマーク。しかし、地図で

はめつたに見かけないよつな、そんなマークだ。何故、丸やバツではなかつたのかが、香奈には不思議でたまらなかつた。

「この地図を渡すとき、ハンスは言つていた。『この場所に行つて、この地図を、店長に渡せば、きっと言つたいことがすぐに伝わるはずだ』と。

店長、と言つたのは店のはずだ。

「どんなお店のかしらね」

香奈は言つた。想像としては、服なんかが売つているショッピングモールだ。

黄龍は言つた。

「ゲーム屋よ」

はつきりとした、簡潔な答えた。

聞いた香奈は、少しばかり驚く。黄龍は、全くなんでもない、と言つた風な雰囲気で、ただ翼で空気を扇いでいる。

「ゲーム屋…つて、」

香奈は言いかける。そして、少しばかり考える。

「香奈も一度、言つたことがあるはずよ」

黄龍は言つた。

そんなことを言われても、香奈は知らなかつた。少しばかり驚いた。「私も、行つたことあるの…？」と、少しばかり声を張り上げた。

聞いた黄龍は、小さく香奈に答えた。

「今年の入学式」

それを聞いた瞬間だつた。

聞いた香奈は、「あー、」となんとなくではあるが、全貌を思い出したような、そんな雰囲気を持つた。確かに、入学式の夜に、東海林の家に行つて、それから今日みたいに飛んで行つて、そしてそこが、ゲーム屋だつた。

あのゲーム屋？

香奈は、疑問しかわからなかつた。

「あのビール張りのゲーム屋さん？」

聞いた黄龍は、少しばかり思い出す。ビール張りとまでは覚えていないが、しかし、確かにそんなような雰囲気もあった、気もしないではない。

「多分だけど、そう」

黄龍は言った。

聞いた香奈は、少しばかり息が詰まるのを感じた。そうだ、これはあくまで、自分自身の息が詰まる感覺だ。

そう考えると、少しだけではあるが、安らかに近い、そんな気持ちになつて行つた。つまり、その気持ちは、香奈だけの物であつて、他人の物ではない。つまり、こうともいえる。

この苦しみは、香奈だけの物だ。

黄龍の物ではない。

つまり、香奈の物なのだ。

それだけが、慰めなかもしれない。香奈はすこし、悲しそうに、しかしどこか満足げに、思うしかなかつた。

やはり、気になると思えるものが、そこにはあつた。気になる、ではなく、気にしなければならない物。

東海林は、赤龍のメッセージを片手に持ちながら、テーブルの上に置いてあるコーラを呷つた。反対側には、大介と緑龍がいる。三人（二人と一匹）とも、あまりいい表情をしているとは思えなかつた。

東海林は二人（一人と一匹）に聞いた。

「それで、赤龍がどうして、このメッセージを、お前たちに残したんだ？」

それは、話の核のようなものだつた。核すぎて、大介には少しばかり、重いような響きを持つた声に聞こえる。

「実は、」

緑龍は言った。

聞いた東海林は、緑龍の方に視線を向ける。緑龍は、東海林に真っ直ぐな視線を向けている。少なくとも大介よりは。

「赤龍が、一度僕らの部屋に来たんです」

一瞬ではあるが、東海林の思考が停止した。

「…、何？赤龍が、大介の部屋に来た…？」  
東海林はそれを聞くと、大介の方に視線を向ける。大介は、さつきのまま、俯いているだけだ。東海林とは、目を合わずに合わせられないような、そんな雰囲気を持っていた。

これは、多分本当だな。

東海林は思うと、小さく吐息を吐いた。ふう…。

「そりやまた、何で」

東海林は聞いた。あくまで緑龍ではなく、一人（一人と一匹）に。聞いた緑龍は、「さあ、」と答える。そしてこう、東海林の方に続ける。

「そこまでは知りません。赤龍はいきなり来て、それで一晩だけ泊まつていつただけですから」

東海林は、少しばかり視線を細める。そして、赤龍が残したらしき、そのメモを見つめる。メモには、さつきと同じ言葉が書かれている。赤龍の殴り書きが、そこに大きく展開されている。

「全く…、世話焼かせる奴だ…」

東海林は小さく、ぼやくように言った。

「それで赤龍は、僕らが学校に行つてから、出て行つたようなんです。その伝言だけを残して」

聞いた東海林は、「これな」と小さく言った。

つまり、この伝言に、俺の名前があつたから、俺のところにわざわざ來たつて訳か。東海林は思った。そして、大介の方に視線を向ける。大介は、どこか張りつめたような、そんな視線を床に向けている。ただそれだけだった。

「…、全く」

東海林は小さく、本当に小さくこう呟いた。「馬鹿つて何だよ、

馬鹿」もしかしたら、緑龍には、聞こえたかもしぬなかつた。

大介は、少しばかり東海林の方に、申し訳なさそうな、そんな口調で言つた。

「すまない東海林……！赤龍に口止めされて、言えなかつたんだ……ツ！」

何だか悪者扱いだな、赤龍。

東海林は思うしかなかつた。それ以外に、思つべき」ともないような、そんな気もしたのだ。

「大介……」

緑龍は、少しばかり緩やかな、そして穏やかな視線を大介に向けた。大介は、深々と東海林の方に頭を下げている。東海林は、別に大介に対して、何を思つてているわけでもない。別に謝つてほしいわけでもない。

「いいんだ、大介。お前は別に悪いことしてないんだ」

東海林は言つた。

続けた。

「……悪いのは、赤龍なんだよ」

とても小さな声で、もしかしたら実際行つた訳ではなくて、途中からは、心の中で思つただけかもしぬなかつた。  
しかし、そうではないようだつた。

「……東海林さん」

その声は、真つ直ぐとした、緑龍の声だつた。東海林は緑龍の方に視線を向ける。緑龍は尋ねる。

「……もしかして、なんですけど……、赤龍と、何があつたんですか……？」

それは、東海林の核をついていた。

さつきの、大介の気持ちが、少しばかり分かつた気がした。東海林は重々しい響きを持つてもいないその言葉に、小さくせき込んだ。

「……赤龍と、か」

東海林は言つた。

そして、顔を上げる。そこには、真っ直ぐな視線をした緑龍と、光がいつもより籠つていらない目をした大介がいた。

二人は、正直に話してくれた。なら、こっちだって正直に、話さないとな。

東海林は思つた。

「実は、赤龍と、喧嘩したんだ」

東海林は、しつかりとした声で言つた。視線は、どこを向いていたのか分からぬ。目が、合わせられなかつた。

大介はそれを聞くと、小さくため息を吐く。東海林には、その音自体が、重々しく感じられた。重々しい響きを持つた、重々しい音。なるほど、と東海林は思う。赤龍が何であんなにため息を嫌うのか、少しではあるが、分かつた気がする。

「道理で、赤龍の様子が、少しおかしかつたわけだな。しかも夜なんかに尋ねてきて……」

聞いた東海林は、「面倒かけたみたいだつたら、謝つとく……。ごめん」小さく言つた。それしか言つべきことを、見つけられなかつたような、そんな気が東海林にはする。ただ気がするだけだ。もしかしたら、他に言つべきことがあつたのかもしれないが、もう東海林は、口に出して謝つてしまつた。もう、一度口で謝つてしまつたことは、いくら戻したくても、それは戻つては来ない。

「……」

一瞬、大介は啞然となつた。東海林が小さく謝つたのだ。普段間違つたことをしない代わりに、全くと言つていいほど謝ることがないから、こんなことを言われるのはレアだ。

大介は思つた。

「いや、お前は謝る必要ないだろ」

大介は言つた。

聞いた東海林は、どこか息を詰まらせのような、そんな感覚に見舞われながら、体を起こすだけだつた。ため息を吐きたい気分だつたが、東海林は我慢した。

「…でも、俺たちのせいだ、迷惑かけたことになるんだし…」

東海林は言った。

聞いた大介は、「お前な」と、東海林の方に軽く言った。東海林はどうも、軽くなれそうにはない気分だった。

「確かにそうかもしないけど、でもそう言つよりも、考えた方がいいぞ」

大介は言った。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。大介は、真っ直ぐな視線を東海林の方に向けている。

「そうです、東海林さん。まずは考えなくてはいけませんよ」

緑龍が、東海林に言った。

緑龍の視線と、大介の視線が、ぶつかるよつな、そんな感覚に近かつた。東海林は小さく咳払いをした。

「考えるつて、何を」

東海林は言った。

聞いた二人（一人と一匹）は、声を張り上げた。

「赤龍と同よりを戻すか、」

「考えなくては、先に進めません」

聞いた東海林は、伝言の方に視線を向ける。赤龍は東海林のことを馬鹿と言っている。それは、俺が赤龍を止めなかつたからか？

東海林は考える。

そして、考えるよりも、口に出した方が早いかもしない、と言ふことに気が付く。東海林は思つたことを口に出す。

「それじゃあ、何で赤龍は、俺を馬鹿なんて言つたんだ…？」

東海林は言った。

それは、この部屋にいる二人（一人と一匹）が、答えられるはずもないものだつた。答えられるのは、赤龍だけだ。つまりそう言つことだ。

東海林は、少しばかり目に力を込める。その力は、どこか何もなくて、虚ろなような、そんなものがあつた。しかし、虚ろはうつろ

なりに、そこにはちやんとした、力のこもった眼と言つ物があった。

「でも、」

東海林は言った。

続ける。

「俺も謝らなきゃいけない」とがある  
確証だった。

さて、どうしたものかの…。

赤龍は思つしかなかつた。あの伝言を書置きして、そして今は、よく分からぬ場所にいる。

よく分からぬ場所と言つのは、文字通りよく分からぬ場所だ。信号もなければ表札もない。何もない場所だ。あえて言うなら、そこには水が、山のように存在していた。違う、そこは海だった。ただの海でしかなかつた。

海の上に近い、どこか暗い、そんな場所に、赤龍は飛んでいた。そこはどうも、赤龍がさつきいた場所ではなさそうで、なおかつ、見た限りでは、日本を通り過ぎてしまつたようだつた。赤龍は思つ。思いながら、赤龍はため息を吐くかどうか迷つ。

ため息を吐いたところで、たつた一回なら、この大きな海が吸い込んでくれるはずじや。

赤龍は思つた。海はどこまで行つても海で、それ以上でも、それ以下でもなかつた。広くて青い海は、たつたそれだけ、と言つてしまえばそれだけなのかもしけない。所詮は海、と言つことになるのかもしけない。

しかし、赤龍にとつては、海はいい破棄捨て場にはなるかもしけなかつた。

「……はあ……」

赤龍はため息を吐いた。いつもなら絶対に吐かない、そんな単調な音だつた。

赤龍は、少しばかり気分を落ち着かせると、海の方を向かずに、

翼をはためかせながら、考えていた。

さて、これからどうしたもんかの。

考える。頭を働かせる。

もしかしたら、日本以外にも器がいるかも知れんな。

赤龍は思った。思う以外、他がなかつた。あんな手紙を書いてしまつて、もう東海林には顔向けできない。赤龍は、小さくではあるが、顔向けしたくとも心の中では思つた。たつたそれだけのことなのかもしけないが、それは赤龍にとつて、大きな意味をなしていた。

東海林から離れる、と言つことは、食料確保をちゃんとしなければ、死ぬ、と言つことだ。赤龍は思つた。

ただ、そこに何がが流れしていくのと同じよつな流れが、そこにはあつた。海面に、少しではあるが、漣が立つていた。これと同じだろうか、赤龍は考えてみる。分からぬ。しかし、それが無意味と同じくらいな意味を成していることは、赤龍にも理解が出来た。ただそれだけのことだ。

赤龍は考える。

海外に行けば、もしかしたら他の器がいて、それで交友関係が、結べんこともないかもしれん。

それはおそらく確かなことで、赤龍も、少しではあるが、確信を持つていた。赤龍にとつて、器は器でしかない。そう、赤龍は、赤龍が見える人間に出会いたかつた。しかし、器は器に過ぎない。

東海林は器に過ぎない？

赤龍は、頭がもやもやしていることに気がつき、考えるのをやめてしまつた。面倒くさいと怠いの中間ぐらゐの感覚が、赤龍を苛んでいた。

ただそこには、暗い海が広がつていて。ただそこには、赤い龍がぽつんと、一匹だけで飛んでいた。ただそれだけだった。

あれ、と雄大は思った。バストーンを吹きながら思つたことだが、

バスーンのキーが、少しだけではあるが、妙に違和感のある押し心地になつていた。さつきまで、こんな風ではなかつたような、そんな気が雄大にはする。しかし、もう一度押してみると、そのキーがそつあるべきなのか、雄大には分からなくなる。

雄大は、バスーンを口から離す。そして、ピアニッシモキーを押してみる。

「……？」

雄大は顔をしかめる。

青龍は、床に寝転がりながら、雄大の顔を見つめている。雄大は、どこか心配そうな表情をして、バスーンのキーを押していた。

パコ…パコ…パコ…

音は同じだ。いつもと同じ。押したときの音は、いつもこの音程の、この音色だ。雄大は分かつていた。

しかし、押し心地と言つて、感触が違つた。

「…どうした」

青龍は、とぐろを巻きながら雄大に言つた、淡々とした口調は、どこかその部屋には、透き通るように響き渡つた。

「ん？ あのさ、何か変」

だけで分かるわけがない。

青龍は目を細め、雄大に言い放つた。「…、何が」

雄大は、別のキーをパコパコと弄りながら、青龍に、親指のピアニッシモキーを見せる。そして、パコパコと、押して見せる。

青龍は、目を細める。

「…、」

はつきり言つて、雄大が言いたいことは、「じくたまに、意味不明なことがある。それがどんな時であれ、青龍を困らせることに変わりはなかつた。

青龍は、雄大の顔を見る。雄大は、真剣そうにピアニッシモキーを押す。

「…、それが、どうかした」

青龍は言った。

聞いた雄大は、「うん」と声を張り上げる。「だつて、何か変な感じがするー」と、青龍に言う。そして、雄大は青龍に、ピアーツシモキーを空ける。青龍は、そのピアーツシモキーを押してみる。

……パ」…

分からなかつた。それはいつも、聞く側に回つてゐるからかもしない。青龍は思った。はつきり言つて、この感触が変と言われても、そんなことは青龍に分かるわけがなかつた。分かるのは、ちょっとばかりキーの感触が、こりこりとしている、と言つことだけだ。こりこりしてて、少しばかり雄と気持ちがいい。

「でしょ？」

雄大は言った。

聞いた青龍は、「……このままの方がいい」と呟く。勿論、雄大は反対するだらう。青龍は思った。

「やだよ、だつて変な感じー」

雄大は言った。

ほらね、やつぱり。

青龍は思いながら、小さく呆れる。そして雄大の方に視線を向ける。雄大は、ただピアーツシモキーを弄つてゐるだけだ。ピアーツシモキーと言うのは名前だけで、別に、押したらピアーツシモになる、なんて代物ではない。音を変えるときに必要なもので、全くピアーツシモは関係ない。

しかし、ピアーツシモな感覚が、そのキーにはなかつた。ちょこんとしている割には、親指にフィットする変な感覚があつて、それはそれで嫌なものがあつた。

「でもさ、何か変なんだよなー」

雄大は言った。

青龍は視線を細めた。

「なんかさ、こう、ピアーツシモつて感じが出ないんだよなー、ど

うしたらピアーチシモつて感じが出るんだろう……」

言つた。

聞いた青龍は、目を細めた。そして、雄大のバースーンに目をやつた。

「知らない」

答えた。

簡単なものだった。

黄龍は覚えている。そこは以前と、何も変わっていない。黄色いビニールが張られていて、雨風をただ避けるだけに見える、簡素なビニールハウスとも取れなくはなかつた。

新宿の裏。

限りなく『アンダーグラウンド』と呼ばれる世界に近い場所。そして、限りなく白と黒が行きかつて、灰色が実にシビアに映し出されるところ。

今日の香奈は、白でも灰色でもなかつた。おそらく、黒だ。それは本人でも、理解が出来ていた。自分で来たくてこんなところに来たわけじゃない、と言つたら嘘にはなるが、来たかつたわけでもない。こんなことが起こらなければ、きっと行きたいとすら思わなかつたし、そもそもこの店の存在すら、覚えていなかつたかもしれない。香奈は考えた。

「(イ)Jのお店の、店員さんね」

香奈は言つた。

それを聞いた黄龍は、記憶をたどつてみる。

「まあ、いるのはたつた一人だけだけどね」

それでも、香奈は入るしかなかつた。足取りを重くして、香奈はその店の中に入る。黄龍も、ただそれに続く。それに、ただ続くだけだ。

そこは、黄色と白に近い世界だつた、としか言いようがなかつた。

そこは、ただ異様で、どこまでも異様な物しか存在しない世界のように思えた。ガラスケースの中にはすらりと入っている、どこかで見たことのあるようなフィギュア。普段見かけないような、ちょっとおかしなゲーム。それからゲーム機本体に、ハッキングツールまで売っているように見える。

香奈は見ると、少しアバカリ、何か恍惚感に似た、そんなものを覚えた、美しいと異様の間を、香奈はどこまでも見つめているような、そんな気分があつた。そこはまだ、入り口に過ぎないような気も、しなくはなかつた。

「ほら、あそこ」

黄龍は言つた。そして、店の奥にあるカウンターを、指で指した。カウンターと言つよりも、それは長机に近かつた。この店にはどう見ても似合わない、似つかわしくないような、少し洒落た木製の長机。

その奥に座つているのは、少しばかり胴回りが太い、すごいTシャツを着た、三十代半ばの人物だつた。何かの本を読んでいるようにも見えたが、そばにあるラジオを聞いているようにも見えた。聞いて驚いたが、そのラジオは、オーケストラだつた。たしか、『L a Gazz a Ladr a』だ。確か日本語訳があつたよな、そんな気もしなくはないが、しかしそこに流れているのは、間違いなく管弦の音だつた。それはか打楽器。

普通、この手の店だと、香奈のイメージでは、何かのアニメの曲とか、ゲームの曲とかを聞いている人の方が普通だと思う。その方が、まだ違和感だらけの中の違和感で、あり違和感がない。しかし、この違和感だらけの中に、際立つた優美な音楽で、違和感と優美が生み出すのは、少なくとも、香奈の中では、妙なものしかなかつた。それ以外に、何があつたわけでもなかつた。

「あの音楽正在する人？」

香奈は聞いた。

それを聞いた黄龍は、一度小さく頷いた。

「そう、ほら、早く」

黄龍は言った。

それを聞いた香奈は、少しばかりおぼつかない足取りで、「え、でも……」とか言いながら、少しずつではあるが、カウンターに近づいて行つた。やはり、龍の方が人よりも力が強い。それは、攝理のようなものだつた。

そのカウンターに座つている人物が、香奈の方に目をやつた。ラジオから流れてくる音楽が、その場に、異様なまでに優美に漂つていた。

「あ、あの……」

香奈は、おぼつかない口調で言つた。

ただ、真っ直ぐな視線で、その店員は香奈を眺めているだけだつた。香奈は、少し口の中を乾かしながら、「えつと……」と言葉を紡ぐ。

まつすぐとした視線に感じられたのは、ただの視線だつた。

香奈は、地図をポケットから、綺麗に折りたたまれた状態で出すと。それを広げる。手のひらを一つ並べたくらいの、メモ用紙ぐらいの大きさに、それは広がつた。

「……これを……」

その人物は見ると、少しばかり目を細める。香奈は、カウンターには置かずに、手で渡すことにした。カウンターに、置きたいとは思えなかつた。そこは、人がいるにもかかわらず、埃が積もつていた。

その人物は、その紙をただじつと、見つめている。ここまで地図が描かれているだけなのに、それを、その人物は凝視した。もしかして、あの地図に何か、暗号のようなものでも隠されていたのだろうか。香奈は考える。しかし、思い当たる節がない。あのメモに、妙なことが書かれていたかどうか。

いた。

香奈は思った。思いつきり書かれていた。そうだ、地図に似つか

わしくない、お気に入りの場所でもないのに、五芒星のマークが書かれた場所。

もしかしたら、あの近くに、細かく何かが書かれていたのかもしれない。香奈は思った。

「、」

その人物は、小さく息を吐く。そして、香奈の方に視線を向ける。

「いらっしゃい」

どこか、実務的な声が聞こえてきた。その声は、黄色いビニールシートには、あまりにも似合わない声をしていた。その声は、通りもしないし、別になんでもない声だった。ただ何でもないわけでもなく、その声は、軽いようなものが、含まれていた。それを、香奈が理解できるわけがなかつた。

その人物は、香奈の方に視線を向ける。そして、呟いた。

「春潮香奈、だね」

その人物は言った。

香奈は、目を丸くするしかなかつた。

「と言うことは、黄龍も近くに？」

その人物は言つた。香奈は、黄龍の方に、小さく横目を向けた。

「いるんだね」

その人物は言つた。

「この人が、ハンスが言つてた情報屋よ。以前より肥えてるみたいだけど」

黄龍は、小さく呟いた。香奈が、小さく黄龍の方に小さく笑つた。

「すこしだけね」

香奈は驚いた。黄龍は、ただその人物をまっすぐ見つめている。

「…私、何も言つてないのに」

香奈は言つた。

黄龍は、少しばかり目を細めた。

「貴方も、術師なのね。ごめんなさい、知らなかつたわ」

小さく言つた。

もう、はっきり言ってそれだけだつたら、香奈は驚かないかもしない。むしろ、それを聞いたら納得してしまつ。ああ、なるほど、だからか。

「知つてゐる」

簡単な返事だけが、帰つてきた。

聞いた香奈は、小さく息をのんだ。そしてこう、その人物に尋ねた。静かな口調で、とても慎重に。

「あの…」

香奈は言つた。

聞いたその人物は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、少しばかりたどたどしく、しかしあつりと、こう言つた。

「貴方の、名前は…？」

その人物はそれを聞くと、つまらなうに立ち上がる。さつきからラジオから流れてくる『La Gazzala』が、後半の華々しい音楽を演奏している。何度も同じものが繰り返されるような、そんな感覚がそこにはある。

「俺の名前は、ながみや長宮<sub>しゅうみや</sub>秋冷<sub>あきうれい</sub>高貴<sub>こうき</sub>」

よく分からぬ名前であることは、確かだつた。

黄龍は、少しばかり視線を丸くして、長宮の方に視線を向ける。長宮は、ただ淡々と、物を口にするだけだつた。

「こつちに」

長宮は言つと、店の奥に足を向かわせた。

それを見た香奈は、言葉を慎みながら、得体のしれない場所へ、足を運ぶしかなかつた。

カウンターの奥は、段ボール箱でいっぱいになつてゐた。段ボール箱は山の様にあり、その中には、発売が思いつきり来月の物まであつた。ラベルに『11月発売!』と書かれている。つまり、こそこまで行つてもゲーム屋で、それ以上でもそれ以下でも、はたまた、それ以外の物でもなかつた。

長富は、段ボールの中から鍵を取り出すと、香奈の方にそれを見せる。鍵だ。テンプルキーでない、ごく普通の鍵。何処にでもあります、そんな鍵だった。

長富はそれを、更にその部屋の奥にある鍵穴へと差し込んだ。ガチャガチャ、と言づ音を立てて、開錠される。そのドアは、どう見ても黄色いビニールには不釣り合いの、木製の扉だった。ドアノブは、回すタイプの物。

長富はドアを開けると、ギギギギ、と嫌な音をドアが立てるのを気にせずに、香奈の方に視線を向ける。

「中へ」

長富は言つ。先に入る気配もない。

はつきり言つて、少しだけ困つた。どうすればいいのか、よく分からなかつた。しかし、長富が入れと言つているのだから、きっと入らなければ、ことは起こらない。香奈は、そんな事、起こつてほしくもなかつた。

しかしそれは、もう無理な願いだ。

もう既に、色々なことが起こつている。

香奈は一瞬、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、疑問を持つたような視線はせずに、ただ真つ直ぐな視線を、香奈の方へ向けていた。大丈夫。

そう、黄龍の目が言つているような、そんな気がした。

香奈も、大丈夫だと思う。

少しばかり詰まらせた息を、香奈は飲み下した。そして、めまいがしそうなほど、鼓動を早くさせた。

足を、そのドアの奥の、闇の方へと向かわせた。

もう、『La Gazzaladra』は聞こえない。

そこは、ただの暗闇ではなかつた。ただの暗闇なら、こんなに埃っぽいわけがなかつた。そこは非常に埃っぽく、それ以外に表現するなら、空気がこもつた場所だった。淀んでいて、暗くて、殆ど最

悪な場所。

長富も、その部屋の中に入ると、電気をつけた。

かちやつ

その音とともに、小さな裸電球が、天井の上で揺れた。そこは、絶対に黄色いビニールハウスなわけがなかつた。そこにあるのは、少し古風な壁と、長机と、椅子だつた。そして、ひどい埃。

それから、山のようにある本棚。

山のようにある本ではなくて、本棚が、その部屋にはたくさんあつた。列になつて、奥の方へと長々と続いている。それが、ここからではどこまで本棚が続いているのか、そんなことは分からなかつた。しかも、本棚にはぎゅうぎゅう詰めにされた本が、こじんまりと陳列していた。

長富はドアを閉めると、机の方に歩み寄る。そして香奈と黄龍に言つた。

「さ、座つて」

どこかやる気のないような、力のないような、そんな声だつた。

それを聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向けようとする。椅子は一つ。黄龍と座れないこともない。

香奈は思うと、慎重に、その椅子に腰かけた。

長富は反対側の椅子に腰かけると、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、小さくため息を吐きながら、椅子に座つた。

「それで、ハンスの紹介？」

長富は聞いた。

それを聞いた香奈は、「はい」と無機質に答えた。ただの他愛のない会話のような、そんな風にも思えなくはなかつた。

「それで、」

黄龍は言つた。

それを聞いた長富は、黄龍の方に視線を向ける。

「まず聞きたいことがあるの」

黄龍は言つた。

それを聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、真剣そうな視線を長富に向いている。

「何」

あくまで、長富の仕事と言えるのは、情報の管理だった。誰かにやめろと言われるまで、情報の管理をする。それが長富の仕事の一つだ。

そして、許された人に、情報提供することも、長富の仕事の一つだった。

「Jの部屋」

黄龍は言った。

香奈は一瞬、黄龍が何を言いたいのか分からなかつた。しかし、長富は別になんでもないといった風な、そんな表情で黄龍を見つめていた。

「空間が歪んでるわ。さつきのお店の近くじゃないわね」

聞いた香奈は、「え？」と小さく声を張つた。

「さすが龍、そこまで見抜かれるなんて」

長富は顔を上げる。そして、黄龍の方に言った。

「ここは確かに、あの店の近くじゃない。でも、その詳細を俺は知らされてない。調べようと思つても、多分ブロックされるだけ」

聞いても、黄龍にはよく分からなかつた。しかし、その内容が大切でないのは、黄龍には分かり切つたことだった。

「それで」

長富は言った。

小さな紙の地図を、長富は持つていて。向いている方向は、黄龍と言つよりは香奈の方にだつた。

「君は、襲われたみたいだね。火蔵…、畔、かな？」  
きつと、その地図に書かれていく内容を読んでいるんだろう。

香奈は思つた。

「はい…、急に襲つてきて、何とか応戦したんですけど…」

香奈は言った。

黄龍は、香奈の方に目を向ける。香奈は、どこか息苦しかつた、そんな雰囲気で語つているだけだった。

「でも、聞いたところだと、何かの集団『らしくて』

長富が、視線を変えるわけがなかつた。

息が詰まる。香奈は思つて、少しばかり気管の方に、埃が吸い込まれたことにせき込む。「ぐふ、ぐふぐふ…」

長富は聞くと、「なるほど」と小さく答えた。そのなにがなるほどなのが、香奈にはよく分からなかつた。

つまり、その情報が欲しい、と言つわけだね

力がこもつていらない、どこか無感情に近い、そんな声。

一度、香奈は頷いた。

「とりあえず、」

黄龍が長富に言つた。

聞いた長富は、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は続ける。「畔に関するすべての情報が欲しいの。特に、」

一体畔が、どんなものに関与しているのか。

黄龍は、香奈の代わりに言つた。

それを聞いた長富は、少しばかり目を細める。「分かつた」と小さく呟くと、椅子から立ち上がり、体の向きを変えて、その本棚の間の、闇の中へと消えていく。

静寂も何も、そこには何もなかつた。何があるとすれば、それは埃程度だった。そんなものは、お話にも何もならなかつた。ただ呞るような、そんな苦しさと気持ち悪さを、そこはあわせもつていただけだつた。

どうしても、プレッシャーに似た何かが、香奈の中でどどまつてゐる。そんな気分だつた。それが、ただ何もないに近い、そんなものだつたことは言つまでもない。しかし、中身のないプレッシャーは、香奈を圧迫するような、そんな感覚しか生み出さない。声が、聞こえた。

「香奈」

それは、黄龍の声だった。

聞いた香奈は、若干空の視線で、黄龍の方に視線を向ける。香奈は、いつもよりも格段に、光と言う物を放つてはいなかつた。

「どうしてそんなに、思い悩んだみたいな顔をしてるの…」

心配そうな、そんな声だつた。

それを聞いた香奈は、小さく呼吸を整える。肺の中に溜まつた重々しい空気が、香奈の中で循環される。

「…、私」

小さく、香奈は言つた。

黄龍は、何を言つわけでもなかつた。

「…、ちょっと、プレッシャー感じてるのかもしない。いつもなら、そんなの何にもないんだけど、でも今は、何だか違うの。いつも全然違くて、それに、あんなことがあつたの、初めてだつたら。それで、もしかしたらきっと、私の近くにいる人が、もしかしたらみんな畔ちゃんみたいなかも知れない、って思つて。だから、いつもたつてもいられなくなつて。その中で、一人だけになつたみたいで、もしかしたら、違うかもしれないけど、でも可能性はあるでしょ。だから、怖いのよ。プレッシャーなのよ。とつても」

香奈は言つた。

黄龍は、黙つてゐる。

「でも、でもね。ちょっと違うかもしれないの」

香奈は続ける。

「もしその逆だつたらつて、思つてるの。もしかしたら、私の近くにいる人たちが、もしかしたら畔ちゃんみたいな人たちに、けがをさせられちゃうんじやないかつて思つて。もし私が狙いなのならだけど、でも一度狙つてきたつてことは、そう言つことなんでしょ？だから私、もしそうだつたら、私のことにみんなを巻き込みたくないの。だつて、みんな痛かつたり、そういうたの嫌いだから。だから、私も嫌なの。みんながもしそうなつたら、つて思うと。だから、プレッシャーを感じてるのかもしれない。でも、私は、みんなに痛

い思いをしてほしくない。だから、みんなから離れるの。今日みたいに。ハンスさんには、本当に申し訳ないと思うわ。でも、あの人は強いて、羽並から聞いたことがあるから。だから、ね？」

それはおかしなことだった。

聞いた黄龍は、香奈に言つた。これは言ひしかなかつた。

「それじゃあ何で、香奈は」

東海林を

「頼りにしないの？」

言葉に困る質問だつた。

確かに、それはそうだつた。羽並から聞いたことは、ハンスも東海林も強くて、もしかしたら東海林の方が強いかもしない、と言つ物だつた。だから、一番目のハンスを頼りにするのは、少しおかしな話だ。

香奈は小さく口を紡ぐ。そして、小さく言葉を紡げり出す。

その時だつた。

「バサン！」と、机の音から音が聞こえた。それと同時に、ひどい埃が、香奈の方に舞い上がって行つた。

「これ」

長宮は、どこか力のこもつていらない、感情的でない目を、香奈たちの方に向けていた。香奈は、少しばかり視線を上げる。そこには、ファイルのようなものがたくさん、積み上げられている。

長宮は椅子に座る。ギイ、と言う音が、椅子から聞こえてくる。椅子は、相当古い様子だつた。そして、無感情そうな視線が、香奈たちの方に向けられた。

「何から知りたい？」

疑問符は、しつかりした声だつた。

それを聞いた黄龍は、どこか不満そうに、しかし、どこか仕方なさそうに、長宮の方に視線を向ける。「何の資料があるの？」と、黄龍は静かな口調で尋ねた。「ええっと」と言いながら、長宮は数個のファイルを取る。そして、田を細めてそれを読み上げる。

「まずは、表向きのプロフィール。それから裏向きのプロフィールと、それに関する資料もろもろ」

聞いた黄龍は、すぐに長富に言った。

「裏向きのプロフィールから、聞かせて」

聞いた長富は、少しばかり目を細める。一つのファイル以外を、さつきの資料の山に返した。そして、その中身を取り出した。

「この中にも、いろいろとあるけど」

長富は言った。

黄龍は、少しばかり香奈の方に視線を向ける。香奈は、さつきから一言も口を利いていない。何か、さつきとは違う、落ち込んだような、それとは全く違うような、そんな表情をしていた。黄龍には、それが何なのか、どのみち分からなかつた。

「…、それじやあ、なるべく概要が分かる奴をお願い」

黄龍は言った。

それを聞いた長富は、「了解」と小さな声を放つた。そして、そのファイルの中から、紙の資料を取り出した。そこに、たくさんの文字で埋められていた。一文字一文字に、意味がなさそうな文字だつた。

「『火藏 畔 天野下学園中学高等学校に通つ中学二年生。本職は…』『つわ…』

長富は言った。

聞いた黄龍は、顔を上げる。さつきまで無感情そつだつた長富の視線が、少しばかり丸く、大きく開かれていた。

「どう、したの？」

黄龍は、長富に尋ねた。

長富はそれを聞くと、「…うん」と小さく言いながら、その紙の方に視線を向ける。そして続ける。

「『…、殺し屋』

しつかりとしていない声だったといつことは、言つまでもない。

## いい出合いでない

結局、分かつたことは、畔が殺し屋だったということだ。つまり、何かからやとられて、香奈を殺せと言わされたから、香奈を殺そうとした。そう考えるのが筋だと、香奈は考える。考へたくないのだが、それを考へざるを得ない状況になっている。それが今であることも、香奈は十分理解している。

結局、また門限を破りそuddた。これで減点は免れない。香奈は思いながら、重々しい空気を、体の中へ吸い込んでいた。どこか、排気ガスに似た、そんな息苦しくて、咽かえるような、そんな感覚に近かつた。

「…、」

何を語ろうとも思つてはいなかつた。

しかし、そこは明らかにおかしかつた。

ゲーム屋のビニールハウスから出て、通りに出た、その時だつた。まだ今は、七時半ごろだ。この時間帯は、まだ人々が活発で、そのあたりを歩き回つていてもおかしくはない。

むしろ、いつちの方がおかしいのだ。

香奈でなくともそれは分かつた。

「…、嫌な予感がするわ」

それは、あながち間違つてはいなかつた。

その道には、そもそも人なんてものが存在しなかつた。普通、そんなことはありえなくて、誰かしらがこの道を通るはずだ。そのはずなのに、そこには香奈たち以外、誰もいなかつた。つまり、そう言つことだ。

普通じやない。

「とにかく、普通じやないわ…」

黄龍は言つた。

少しばかり、怖くなつた。

香奈は、怖くなつた。はつきり言つて、怖くならないわけがなかつた。プレッシャーでもあつて、それが何だかも、よくはわかつていなかつた。得体のしれない物を怖がらない人なんていない。香奈は考えた。

黄龍は、辺りに視線を向ける。気配が、どこからかするのは確かに、その気配が、あまり友好的でもないことを、黄龍は察知していた。

「また何か、出るわね」

黄龍は言つた。

香奈は、困つてしまつた。困つたことは困つたことで、黄龍にも関係があるが、それを言つことも、香奈には出来なかつた。もしかしたら、ビニールハウスの中にいる長宮だつて関係があるのかもしれないし、それは分からぬ。

しかし、なんとなく分かつてゐた。

「あら、随分と余裕なのね」

その声が、聞こえてきていた。

聞いた二人（一人と一匹）は、はつと顔を上げた。通りの向かい側だ。

さつきまでいなかつたはずの人が、そこに佇んでいた。

香奈は、困つたような視線を向けていた。

「貴方は？」

黄龍は、警戒を崩さずに、その人物の方に視線を向けていた。その人物は、どこか強気そうな顔をしていて、どこか笑つていて、嘲るような、嘲たような視線をしていた。

「私はジエーン、ジエーン・エリザリータ」

黄龍は、ジエーンを視界から離はしなかつた。そんなことをするわけがなかつた。そもそも、そんなことをしたら命とりだつた。歩幅は小さく、少しばかりテンポが速い歩調で、香奈たちに近づいてきた。

「貴方が、もしかして畔が連れ損ねた、春潮香奈？」

黄龍の方に、ジョーンは尋ねた。

困った。

それを勘違いしているとは、黄龍は思えなかつた。そもそも、香奈の名前を知つてゐる時点で、この場合、顔まで知つてゐる、と考えた方が賢明だ。つまり、ジョーンはわざと、黄龍に尋ねてゐる。

「貴方が、畔をよこしたのね」

聞いたジョーンは、歩調を緩やかにしながら、少しばかり距離を取る。間は、およそ十メートルほど。

「もしかして、貴方は香奈が連れてゐつていつ奴の方……？」

ジョーンは尋ねた。

なにかをとぼけてゐるような、そんな口調だつた。そんなことも分からないと思えるところとせ、つまづ、つまづを見下している、と言つことだ。

「馬鹿にしないで」

黄龍は言つた。

聞いたジョーンは、「あら、馬鹿に何でしてないわよ？」と黄龍の方に返した。

「私はあなたたちを馬鹿にするために、ここに来たんじゃないのよ？私はただ、私がやるべきことをしに、ここに来ただけ」

黄龍は、少しばかり身構えた。

香奈は、視線を上げた。

「……あの」

香奈は言つた。

黄龍は、香奈の方に視線を向ける。勿論、ジョーンの視線も、香奈の方に向いてゐる。

「何かしら」

ジョーンは言つた。

聞いた香奈は、少しばかり、喉が渇いてきたことに気が付く。声が、うまく出なくなつていく。それは、確かなことだつた。

「……貴方は、何で私のことを狙つてくるの……？」

香奈は尋ねた。

一瞬、ジョーンは目を丸くした。「あら、知らないの?」ジョーンは軽く、香奈の方に言つてくる。香奈は聞くと、ジョーンが何を言いたいのか、よく分からなくなつてくる。

「…知らないって、何を」

香奈は、ジョーンの方に視線を向ける。

黄龍は、警戒を解いてはいない。

「あら、本当に知らないのね、貴方の両親の事」

え?

両親の事?

香奈は考える。両親の事なら、いくらだつて思いつく」じがある。むしろ、今ここで会つた奴に、そんなことを言われたくはなかつた。と言つたが、何でそんな、初対面の人物が、自分の両親を知つているのかすら、香奈には分からなかつた。自分と同じ年ぐらいに見えるから、おそらく、十五、六歳辺りだらう。香奈は見ていて思う。それなら、両親と仲がいい関係、と言つ」とでもないだらう。それじやあ、何?

香奈は考えた。

「…、何よ、それ」

香奈は尋ねた。

黄龍は、足に力を込めた。

「うーん、教えてあげなぐもないけど、でも、一つだけ条件があるわ?」

聞いた香奈は、「何?」ヒジョーンの方に声を放つ。

どこか、ひんやりとした冷たい笑みが、ジョーンの方から、香奈の方に降り注がれた。それは、恐らく気のせいではない。

ジョーンは、どこから取り出したのか、銃を片手に持ち、それを香奈に向けた。一瞬の出来事だったが、黄龍はそれに反応した。

「私に勝つたら、教えてあげる」

その銃は、どこまでも黒光りしていた。

黄龍は叫んだ。

「下がつて！」

黒光りしたそれが向いていた方向は、香奈だつた。

香奈の方に、銃口が向けられていた。女性でも扱えそうな、そんな小柄な銃ではなかつた。

それに、香奈は反応できなかつた。

ジョーンは、ただ引き金を引いた。装填をしていなかつたところを見ると、自動装填式のように見える。だから、引き金を引いただけ、ただそれだけだつた。ジョーンの持つている銃の銃口から、弾らしきものが飛んでくる。

それは、緩やかな、しかし殆ど角度のない放物線を描いて、香奈の方に押し寄せてくる。香奈は、見てはいたが、それをよけることは出来なかつた。そこに、時間なんでものがあつたのかすら、香奈には疑わしかつた。

バン！

音が、遅れて聞こえてきた。

香奈の胸部に、弾が当たつた。

否。

「え…」

小さく、香奈はつぶやいた。

目の前にいるのは、ジョーンとか言う銃を持つた女ではない。黄龍の、黄色い背中だつた。黄色い背中と、大きな黄色い翼。

黄龍の前が、見えなかつた。

「香奈、私が何とかするから、動かないで」

嫌だつた。

そんなことを言つ暇はなかつた。

ジョーンはすぐさま走り出す。黄龍の後ろにいる香奈を、確実に狙うためだ。

黄龍は、香奈とジョーンの直線上にいた。そこにいるしか、黄龍には出来なかつた。

ジョーンは、自分がいくら走つても、香奈が見えなくなっていることを知る。「あら」と、どこか滑稽そうに、黄龍に言った。

「貴方、そんなに香奈を守りたいの? それとも、ただ殺されたいの?」

ジョーンは、平然と言い切つた。

聞いた黄龍は、何も答えない。目が、口で言わない分の物を、ジョーンへと言い切つていた。

「…まあいいわ」

ジョーンは言つと、視線を細める。そして、銃口を黄龍の方に向ける。黄龍は、何も言わずに、ただ香奈の前に立つてくる。

引き金が弾かれた。

黄龍の腹部に、それは命中する。その弾は、龍の皮膚を突き破ることとは無く、しかし、確実なダメージを、黄龍に与えていく。

黄龍は考える。

銃は、必ずいつか、リロードをしなければ弾が打てなくなる。弾切れになるから。その一瞬さえあれば、何とか行けるかもしれない。

黄龍の体に、数個の弾が食い込んでいく。それは、確実に黄龍をむしばんでいく。黄龍の体のあちこちから、血のようなものが流れ始める。息苦しくはない。ただ、目の前にやるべきことがあるだけだ。

ジョーンは視線を細める。黄龍の目は、どこまでも真つ直ぐと、ジョーンの方に向いている。

背中で、何かが寄り添うような、そんな感覚が黄龍を包む。そして、次の瞬間、胸のあたりに痛みが走る。

「もう、もうやめて…」

しゃがれた声だった。

それは、香奈の声だった。

黄龍は、一瞬何かが、自分の中で揺らいだような、そんな感覚に包まれた。温かくなつた瞬間、冷たい感覚が黄龍を襲つ。その振動は、寄り添つてゐる香奈にまで伝わつてくる。

「黄龍が私の代わりに傷つくなんて…、だめ…！」

プレッシャーが、吐き出されていく。そして、それと同じか、それ以上のプレッシャーが、香奈の中であふれだしていく。どこまでも。

「私、黄龍が傷つくところなんて、見たくない！」

搖らぎはしなかつた。

それが、自分の守っている物なんだと思つと、黄龍は逆に、安心感に似た何かに包まれていつた。そうだ、香奈はこんなにもあたたかくて、こんなにも、自分のことを思つてくれるれる。

そんなことは、当たり前だつた。

「香奈…」

黄龍は言つた。

ジョーンは引き金を引き続ける。

「私も、」

香奈には傷ついてほしくない。

何がどうなつたのか、香奈には分からなかつた。

しかし、黄龍が言つことは、香奈の中で、プレッシャーに近い物になつて、それは重く沈んでいく。

香奈は、涙を流す。

「…ツ、頑丈ね」

ジョーンは言つと、マガジンを地面上に落とす。

今だ！

黄龍は思つ。そして、痛みなんでものを忘れて、ジョーンの方に勢いよく走る。このスピードを、人がとらえられるとは思わなかつた。

あの銃さえ壊せれば…ツ！

黄龍は思いながら、マガジンが抜かれたその銃に、自分の爪を突き立てようとした。

ジョーンが、うれしそうに笑った。

黄龍は、一瞬何だかわからなくなつた。

ジョーンは、その銃口を香奈の方に向けた。マガジンの入つてい  
ない拳銃を、香奈の方に向けたのだ。

黄龍は考える。あの拳銃は自動装填式のはず、だからマガジンが  
銃に入つてないと、弾倉には弾も、何も入つていなければ。それ  
じやあ、一体ジョーンは、何をつとつとしているのだろうか。

黄龍は考えた。

引き金が引かれて、打ち出されたものは、弾ではなかつた。  
弾ではない、何かの、力の塊のようなもの。  
はつとなつた。

バン！

乾いた破裂音のような音が、その場所に響いた。

その『弾』の直線状にいるのは、香奈だつた。香奈以外の誰でも  
なかつた。黄龍は、それが簡単に分かつた。

！

言葉を発さなかつた。

黄龍自身、自分がこんなに走るのが速いだなんて思わなかつた。  
しかし、黄龍は走つた。拳銃から出た弾を追い越して、香奈の前に  
立つ。

肩に、弾が食い込んだ。

「…ツ」

声は、出さなかつた。

ただ、そこに痛みが走つただけだつた。

ジョーンは、「あら」と黄龍に、少しばかり皮肉そうに言つた。

「残念だつたわね、弾がないと思つたから、大丈夫とか思つたんで  
しょ？でも残念でした。この銃に弾なんてものは必要ないのよ。い  
るのは銃本体と『私』だけ」

向けられる。

はつきり言つて、黄龍にはどうするにも出来なくなつてくる。

そこにあるのは、さつきまでと同じ現状。ただそれだけだった。つまり、何も変わってはいなかつた。

ただ、黄龍は撃たれるだけで、ジェーンはただ撃つだけ。たつたそれだけだ。それだけで、それ以外何もない。

「、」

でも、いいかもしない、と黄龍は思つ。

私は、私の守りたいものを守るだけでいい。私と一緒に暮らしてくれて、一緒に食事をしてくれて、温かい言葉をかけてくれる、香奈を守つていいだけでいい。

そう、一瞬思えてしまう。

それなら、死んでもいいかもしない。

その瞬間でもあつた。

足の方の痛みが走つた瞬間、黄龍はさつきの、香奈の言葉を思い出す。香奈は言つていた。

『私、黄龍が傷つくところなんて、見たくない！』

つまり、黄龍と同じと言つことだ。

香奈は、今も黄龍の背中で、息を潜めて、しかし力強く、黄龍の心をつかんでいる。ただじつと、待つていいだけだ。

このいざこざが終わるのを。

黄龍は、目を見開いた。

それだけでよかつた。ただ、それだけでよかつたのだ。

「、？」

ジェーンは、黄龍の目が変わつたことに、すぐ気が付いた。そして、引き金を引くのをやめて、黄龍の真つ直ぐとした視線を、ただ覗きこんでいた。

「私は、」

守る。

そう言葉にした。

黄龍に、もやもやとした、しかし重苦しいものではない物が、取り巻いた。それは、黄龍の気持ちと同じように、自在に動いた。た

だそれだけだつた。

それは地面にしみわたり、黄龍の一部のよつに、地面を揺らぎ動かしていく。

ジョーンの立つている場所のアスファルトが崩れ始める。

「、」

ジョーンはそれにすぐに気付く。アスファルトは、ジョーンを落とせるぐらいに、大きく口を開く。そこにあるのは、土と闇だ。

「あら…」

ジョーンは軽く言うと、その闇の中に落ちて行った。

そもそも、黄龍がジョーンの死を望んでいるわけがなかつた。そのアスファルトの口から、高い塔のように地面が盛り上がりしていく。そこには、バランスを保つているジョーンが立つている。

黄龍は走り出す。

さつきと同じじか、それ以上のスピードで走る。そして四肢を着いて、飛び上がる。大きく、翼が宙を扇ぐ。

黄龍は、盛り上がっていく地面の上に立つているジョーンを見つける。ジョーンは黄龍の方に、うまく狙いが定まらない黄龍へ銃口を向ける。乱射するが、それは黄龍にかすりもしない。

黄龍はジョーンに飛んでいく。そして、手の中にある銃を、一瞬にして粉々に碎く。爪が、銃を碎く感覚が、黄龍には確かにあつた。

「あら」

ジョーンは言つた。

黄龍はただ、満足感に包まれた表情で、空中を飛んでいく。ジョーンの立つている地面が安定して地面に近づき。香奈は黄龍の方に歩こうか迷う。黄龍がその前に、香奈の前へ戻つてくる。

ジョーンの足場が、普通の高さにまで戻る。そして、地面は動かなくなる。

黄龍は、ジョーンの方に睨んでいる。

「、貴方、案外面白いのね…、つて…」

ジョーンは言つて、辺りを見回す。黄龍は、少しばかり目を丸く

する。

「あの黄色のドリドロン、どうか行つちゃつたわね」  
黄龍には、意味が分からなかつた。

しかし、簡単に答えが出た。

つまり、ジョーンは、あの銃がないと龍を見ることが出来ない、  
と言つことだ。それだけ理解出来れば十分だつた。

それは、香奈も同時に理解できことだつた。

「今日はもう攻撃手段がないから、帰るわ」

ジョーンは、少しばかり残念そうに言つた。「貴方は、簡単に引  
き下がれるの……？」香奈は、ジョーンに言つた。

それを聞くと、ジョーンは「うーん……」と考へる。どこかまじめ  
でないような、そんな表情で、ただ冗談めいた風に、考へていた。  
そして、冗談めいた口調で、香奈に「うづついた。

「私はあなたを殺したいと思つてゐるわけじゃないのよ？わたしはた  
だ、貴方に興味があるだけ」

意味が分からなかつた。興味があるんだつたら、そもそも殺そ  
とはしないのではないだろうか。

香奈は考へる。しかし、考へても考へたりない。それに、どう考  
えていいのかすらよく分からない。

「だから、それじゃあね？」

そう言つと、ジョーンは歩いて、どこかに行つてしまつた。道を  
ただ歩いて行つただけだ。追いかけることもできだし、殺そうと思  
えば、殺すことじだつてできた。

でも、と香奈は思つ。

ここでそんなことをしても、意味がない。

それを、香奈は十分理解してゐた。

東海林は、一人でうなだれていた。そもそも、東海林には問題が  
多すぎた。赤龍とは喧嘩をしてしまうし、香奈は風邪気味だとい  
う。東海林には、どちらも重要なことに思えた。そして、東海林に

はどちらも、無視できない問題だつた。特に赤龍は。

赤龍は携帯電話を持つていらない。以前ハンスからもらったGPSも、赤龍は持つていなかつた。調べてみると、この部屋のどこにある、と言つことは分かつた。だからなんだ、とも東海林は思った。はつきり言つて、東海林にはもう既に、問題が多すぎて、困るべきことがよく分からなかつた。うなだれながら、天井を見つめているだけだ。そう言えば、そろそろ試験もあるな。東海林は思った。これで考えるべき問題が三つになつた。

はあ、と東海林は小さくため息を吐きたくなるが、やめる。東海林が今、ため息を吐いたところで何も解決はしない。それに、東海林はため息を吐く気分ではなかつたし、ため息を吐く氣にもなれなかつた。ため息が、こんなに野暮つたく感じられたのは初めてだつた。

東海林は少しだけ目を閉じる。少し疲れた気もするし、少し心配な気もする。そして少し、考えるだけで疲れそうな気もする。

東海林はベッドの上で横になり、天井でもなんでもなくて、まぶたの裏をじつと見つめていた。そこにあるのは、真っ暗闇ではない。さまざまなことが、浮かんでは消えていく。

そこに、香奈が現れた瞬間だつた。

今日は風邪気味。

風邪気味、と言う言葉が、東海林には引っかかつた。確かに、香奈はどこか怠そうで、どこか気持ち悪そうな、そんな表情をしていた。それに、東海林にあまり近づいてほしそうではなかつた。移したくないから、と香奈が言つていたことを覚えている。

結構大変なはずだ。

東海林は考える。

しかし、東海林はそれを心配するだけで、それ以外に何ができるかと問われると、何もできないとしか答えられない。つまり、今の東海林には何もできない。残念なことではあるが、東海林に、香奈をどうにかするだけの力はなかつた。つまり、風邪を治す力も何も

ないということだ。そう言つことだ。

東海林は黙りこみながら、少しばかり吐息を吐く。

「はあ……」

これはあくまで吐息だ、吐息以外のなんでもない。

東海林は自分にそう言い聞かせ、腕を目の前で組み、まぶたの裏に飛び込んでくる光を遮断した。今の東海林には、何もかも、野暮つたく感じられた。それは事実でしかなくて、それ以外、東海林にとつては何もないような、そんな気しかしなかつた。

バスーンの音は、聞こえない。流石絶対防音と学校が謳っているだけはある。何も聞こえない、と言うわけではないが、その部屋では、何も聞こえない。窓からも、音が聞こえてくるなんてことはなかつた。

こんなことは言いたくなかった。しかし、それ以外に表現方法が見つからない。

東海林は仕方なく、心の中でほんの少し、小さな感覚で思つた。  
…さびしい。

赤龍がいなくなつただけで、こんなにも何もない空間が広がるだなんて、東海林には想像もできなかつた。東海林に想像できたのは、喧騒がなくなることだけだつた。

心の突つ掛けが、東海林の心の中で突つ掛け、どこか突つ掛けたようなため息を、突つ掛けた吐息だと思つて吐き出すのが、なんとなく東海林の中では突つ掛けっていた。

思つと、東海林は空腹も忘れていた。思つても、空腹感が戻つてくるなんてことは無かつた。あるのは、ただの虚無感。

赤龍、大丈夫かな……？ 東海林は思つた。  
中間試験、やだな……。 東海林は思つた。  
香奈さん、風邪大丈夫かな……？

そう思つた時だつた。

赤龍には連絡が取れない、中間試験も今さら何もしようがない。しかし、香奈のその疑問なら、何とかすることが出来る。

東海林は、不本意ながら目を開ける。そして、枕の近くに無造作に置かれている携帯電話を見る。充電器にも刺さっていない。

東海林はそれを手に取ると、すぐに新規メール作成を選択する。

東海林はすぐに、こうメールを打つた。

『宛先 香奈さん

添付 なし

件名 風邪

本文 大丈夫?』

内容が何も無いようで、それでいて酷く重苦しいような、そんな気分になった。でも、すごく軽いような風にも見えた。結局どちらでもないのかもしれないが、東海林はそれを、送信するしかなかつた。

東海林は、送信ボタンに親指を押し当てる。

蒼空にあるのは暗い、底のないような闇で、そこには何もなくて、その部屋にも、何もないような、そんな風にしかとらえられなかつた。

携帯電話は、ならなかつた。

そもそも、夜中に携帯電話が一度もならないなんてことは、その人物には初めてだつた。朝起きたら、まずダイレクトメールを削除して、そして再び寝るか、学校の準備をするかである。

土曜日だつた。その日は土曜日で、空は晴れ渡つてているように見えた。カーテン越しからでも、それがよく分かる光が差し込んでいた。その人物は、携帯電話をベッドの上で開くと、メールボックスを開く。そして、少しばかり目を細める。

#### 受信メール。

その中には、未読メールなんてものはなかつた。その方がその人物にとつては珍しいことで、そこには、読んでいないメールなんてものは存在しなかつた。つまり、昨日送つたメールの返信も帰つて来てはいない。それは、火を見るより明らかだつた。

その人物は思いながら、少しばかりため息を吐こうとする。ため息が、妙に野暮つたく思えて、喉の奥で詰まつたような感覚になり、その人物はため息が出来なくなる。

その人物は、部屋にあるソファーを見る。ソファーには誰も、何もない。そこにあるのは、昨日と同じ、同じすぎる、虚ろな空間でしかなかつた。それは、その人物にとつてはあたりまえのことだつた。

その人物は、土曜日も授業がある学校に通つていた。普通の学校なら土曜日ないはずなのに、その人物の学校には、明確な土曜日、と言う物が存在した。それ自体、その人物にとつては、どこか重々しいものに他ならなかつた。

その人物は、昨日送つたメールの内容を考える。そして、少しばかり目を細める。光が、天井に注いでいる。天井は、朝の太陽の光に映えている。しかし、その人物はどこか、重苦しいものに包まれ

ている。

簡単な話だつた。

その人物は思つた。

もしかしたら、俺はやばい間違いをしたのかも知れないな。  
考へても見る。はつきり言つて、それ以外の答えが見つからない。

親友を失い、風邪で疲れている友人に何をすることもできない。最悪だ。しかも友人。

困つたもんだ、いやそれ以上だ。

その人物は思いながら、携帯電話を一度閉じた。そして、面倒くさそうなあぐびをすると、起き上がつた。ベッドが軋むような音がして、床がどうもひんやりとしていて、そして、どうも浮いたような感覚が、その人物にはあつた。それ以外に何もないんじやないかと思えるくらい、その人物にはそれ以外がなかつた。

つまらない、辛い、悲しい、以前の問題だつた。

その人物は、選択を完璧に間違えたのだ。その人物にとつての向かうべき場所が、一気にガラツと変わつたのだ。もうはつきり言つて、何でもよくなつてしまいそうな気分になつてきた。これからは、友人は友人のままだし、親友は失われたままなのかもしれない。ベッドのぬくもりが、徐々に失われていくのは避けがたい。これと同じかもしれない、

思いながら、メールボックスをもう一度見直してみる。そこに、何があるわけでもない。何もない、と言うわけではない。しかし、その人物にとつて、何があるわけでもない。つまり、何もないと同意だ。

その人物は、少しばかり目を閉じる。色々と考へるが、その考へは泡のように消えていく。泡のように消えて、そしてまた、ぶくぶくと、軽いものが浮かび上がつてくる。どれもだめだ。こんなのがりえない。

その人物は思いながら、テーブルの方に視線を向けた。テーブルには、一枚の紙が置かれていた。

不恵<sup>しょえ</sup>好<sup>す</sup>な文字<sup>じ</sup>で、こう書<sup>か</sup>かれていた。

『東海林の馬鹿、赤龍<sup>せきりゅう</sup>は本当にどこかに行つてしまつぞ！！』

東海林 その人物。

赤龍 親友。

困つたものだ。東海林は思つた。

赤龍がどこかに行つてしまつというのが、もしかしたら、東海林にとつて一番恐れていた結果なのかもしれない。今更だが、東海林は考えた。赤龍が、東海林の生活の中から、忽然と、唐突に消えてしまうことが、もしかしたら、東海林にとつて一番恐れていた結果なのかもしれない。

笑えて来ない。

しかし、どこか皮肉な笑いは浮かんでくる。

「…、はッ」

東海林は、東海林を皮肉<sup>ひじゆ</sup>そうに笑つた。

もう、一番恐れてたことになつてんじやないか。

東海林は思つた。

赤龍は、東海林の親友だつた人物、と言つよりも龍で、文字通り、赤い龍だ。赤いドラゴン。伝説の生き物でもなんでもなくて、東海林の親友だつたもの。蝙蝠<sup>ひふつ</sup>みたいな翼<sup>つばさ</sup>があつて、鱗<sup>うろこ</sup>がいっぱいあつて、それでいて、ちょっと前かがみで、口が鰐<sup>わい</sup>みたいで、瞳孔<sup>とうこう</sup>がよく見ると縦に割れて、それでいて、ラーメンが好きな、変な龍だ。龍は、器でないとみることが出来ない。また、術師と呼ばれる人間でないと、見ることが出来ない、らしい。これはただの受け売りだ。

東海林は、今さらもう何もならない、そんな思考を巡らせていた。もうどつちみち、悪い方に転んだものを、どうすることもできない。それに、悪い方に転がした要因が自分となれば、更にあたりまえな話だつた。

あたりまえな話で、そこには何もないような、そんな気分だつた。ソフナーの上でゲームやつてるか、ベッドの横でとぐろを巻いてい

る赤龍の姿なんて、ここには無い。ない以前の問題で、そもそもこの東海林の寮の部屋に、赤龍の存在すらなかった。

空っぽなんじやないかと思う。

空っぽ以外の何物でもないんじやないかと思う。東海林は、ただ赤の要素が、その部屋に少なすぎる」ことを、少しだけ悲しく思つてみた。

どうちみち、考えるべきことで頭がいっぱい、中間試験の事なんて考えられない。そう、これも考えるべきことの一つ。

もうやだ…。

はっきり言って、東海林はそうとしか思えなかつた。もうはっきり言つて、何もすべきことがなくなつたような、そんな気分だつた。吹奏楽部にも行く気が失せて來たし、そもそも、学校に行く気すら失せてきた。食事をとる気も失せて來たし、起きる気力も失せてきている。

もう一度ベッドの中に潜り込もうか、考える気力もないかもしない。

東海林は思つと、携帯電話を取つた。この携帯電話で、赤龍に連絡が取れれば、それだけでも謝れるかもしれないのにな。

東海林は考えた。

テーブルの上には、さつきと同じように、赤龍が書いた紙が置いてあつた。不恰好な文字が、東海林の心を締め付けるようだつた。東海林、寺山 東海林は赤龍と一緒に暮らしていた器で、今、一番恐れていたことと直面している人物だ。それでいて、東海林はラーメン好きで、何をする気力もない。

テレビをつける気力くらいなら、東海林にはあつた。もしかしたら、テレビに赤龍が移つているかもしれない。そんなわけのわからぬ期待が、東海林の中には存在していた。

東海林はテーブルまで歩いていく。面倒くさくて重々しくて、たどこまでも響かない足音を立てながら、東海林は歩く。そして、氣力のない手つきでリモコンの『電源』と書かれている少し形の違

うボタンを押す。それは押されて、テレビまで赤外線が行く。音もなく、薄いテレビが野暮つたく、光を放つた。

天気予報だつた。

『今日は一日、東京都は晴れの陽気で、セーターやカーディガンがなくても、なかなか過ごしやすいと思われます。洗濯物も、今日は湿度が低いので、乾きやすい一日です。明日になると、少しづつ天気が崩れ始めるかもしれませんので、お洗濯ものは今日の内に…』

そんなことを言われても困るし、そもそも東海林は洗濯物なんてどうでもよかつた。洗濯物がたまつていられないわけではない。しかし、洗濯をする気分でもない。明日天気が崩れるからなんだつていうんだ。嵐の中でも、俺は洗濯物を干してやるぜ。東海林は心にもないことを思つた。

東海林は、昨日打つたメールの内容を思い出す。

『宛先 香奈さん

添付 なし

件名 風邪

本文 大丈夫?』

風邪の友人だ。東海林にとつては、友人以上の関係を持ちたいとも思つてはいるが、それを実際にこなせるほど、東海林は器用ではなかつた。そもそも、香奈が風邪にかかるんだつたら、自分が風になつた方がよかつた、とか東海林は思つてはいるほどだつた。

それほどまでだつたのに、東海林には、こんなメールでしか励ますことが出来ない。風邪薬でもあれば、少しは喜んでもらえるだらうか。

東海林は自分の馬鹿さ加減に飽き飽きしてはいた。そんな事しか思いつかないのか?もつと気の利くものを思いつけないのか?俺は。あほらしかつた。

しかし、何もできなかつた。全てに対しても、中間試験に対しても、香奈に対しても、赤龍に対しても。

メールが返つてこないのと、東海林は赤龍がいないと点数を取れないことと、テーブルの上に置かれていた手紙が、そのすべてを物語っていた。三つが連携して、東海林の馬鹿さ加減とあほらしさを証明しているようなものだつた。

「、」

ため息は、出なかつた。赤龍がいるときは、あんなにため息が出来たのに、東海林は思う。赤龍がいた時は、赤龍が嫌がると分かっていてもため息が出来たのに。

今は赤龍がいないと、ため息が出来ない。

どこまでも、東海林は自分があほらしかつた。それでいて、馬鹿らしかつた。皮肉だと思つたし、ただの何もできないやつだとも思つた。

ただ、そこに虚ろな感覚が広がつていただけだ。ただそれだけのことと、東海林にとつては、それがこれから日になる、と言うことを東海林は理解していたはずなのに、それを東海林が望んだわけではなくて、そもそも何もないようなこの部屋の中で、すべてが終わつてしまつような、そんな気分しかなかつた。

嫌だし、嫌だし、そんな風になるのも嫌だ。

でも、と東海林は思つた。

この結果を招いたのはあくまで東海林であつて、それ以外の誰でもない。

東海林は、だからこそもつと、嫌になつてくる。いつそのこと学校をやめて、そもそも赤龍なんて自分の中でいなかつたことにして、新しい生活を始める。

それも悪くはないかもしない。

今の東海林には、そう思えてしまつた。

それ自体が、また東海林には嫌だつた。

「、」ただの沈黙に似た、ただのため息のよくな、そんなものだつた。

東海林は仕方がなく、学校に行く準備を始めたことにした。

こんな感覚は、殆ど久しぶりだつたと言つていいかもしない。はつきり言つて、学校に行きたくないだなんて思う日は、ほとんどなくなつていた。しかし、東海林の今日は、その碑には、最近のその感覚からは逸脱していた。

はつきり言つて、学校に行きたくなかった。

空気が乾燥していて、どこか過<sup>ご</sup>しやすくて、しかしまだ、少しばかり熱を持つてゐるような、そんな気候。

普段の東海林なら、きっとこの気候を、言い気候だととらえるはずだ。過<sup>ご</sup>しやすくて、何より暑すぎず、寒すぎない。最高だ。東海林は思つた。

しかし、東海林ははつきり言つて、寮から出たくなかった。なんとなくではなく、はつきりと、寮から出たくはなかつた。学校が、土曜日あるからつて、東海林は学校に行かなくてはならなかつた。それが、東海林にとつては少しばかり苦痛だつた。特に、電車で行くのは嫌だつた。気持ちが悪くなりそうだつた。最近電車に乗つていなくて、と言うかそもそも、最近駅から学校まですら歩いていなくて、それを昨日は別に苦痛とも何とも思わなかつたが、今は違和感どころの感覚ではない。むしろ、気持ちが悪くて、ぶつ倒れそうな感覚に見舞われた。

⋮、

何を言つ氣にもなれなかつた。

電車も足も、重々しかつた。それに、寮から駅まで行くバスも、重々しく揺れていた。

東海林はため息を吐こうとしたが、つかなかつた。ため息が、こんなに圧迫感のあるものだつたなんて、東海林には分かつていなかつた。

東海林はとぼとぼと、駅から学校までの道を歩く。道は長く、そ

れでいて長い。何処までも祖も道は続いていて、ため息が出るくらい長かつた。

裏道だつた。

東海林は表通りがあまり好きではなかつた。臭いし、うるさいし、そもそも人が多すぎる。東海林は、にぎやかなのは嫌いではなかつたが、うるさいのは好きではなかつた。しかも、車の音までする。ここには、聞こえてこない。

大通りとこの道が、まるで遠く離れた場所のような、そんな気が東海林にはした。それ以外、東海林には何も思うことがなかつた。今思うことは、そんな程度だつた。それしか東海林には、思うことが出来なかつたともいえるかもしれない。

「…、」

ただ何も言わず、何もせず、携帯電話も弄らずに、裏道をとぼとぼと歩く。

そんな雰囲気だつた。

少しばかりの風が、東海林を取り巻いた。優しい風が、そこに吹き抜けていった。東海林は、この風に覚えがあつた。後ろだ。

東海林は思いながら、振り返つて後ろを見る。そしてそこには、一人の人物と、緑色の龍がいる。名前は赤龍と同じような名前、緑龍だ。

「おはようございます」

緑龍は礼儀正しく、東海林の方に改まつて言つた。聞いた東海林は、少しばかりぼつとしながら「ああ…、おはよう」と言つた。ただそれだけだ。

緑龍は、心配そうに東海林に言つた。

「あの、赤龍は、帰つてきましたか？」

そう、緑龍も龍。勿論、東海林のところにいた赤龍も知つてている。龍はみんな仲が良くて、きっと俺と赤龍みたいに、喧嘩なんてしないんだろうな…。

東海林は考えた。

「…」

いや、と言いかけた時だつた。

その人物が、緑龍に言い咎めた。

「おい緑龍、今それを言つべきじやないんじやないか？」

それを聞いた緑龍は、その人物の方に視線を向ける。そして「でも、」とその人物に言つ。

「僕だつて、赤龍のことが気になるんだよ、大介。<sup>だいすけ</sup>それに、今赤龍がどういう状況なのかも、僕には知りたいんだ。でも、風は何も運んでこないんだ。赤龍の声も、赤龍の音も、赤龍の話題すら」

赤龍の話題は、そもそも赤龍が見える奴じやないと出来ない気がするには、東海林のせいだろうか。

東海林は思つた。

「でもよ、東海林は今否定と肯定の間にいるんだ、だからむやみやたらにそんな事聞くもんじやないぞ」

大介は言つた。

大介、<sup>かさと</sup> 風戸<sup>かど</sup> 大介<sup>だいすけ</sup>は、東海林と同じ学校に通つてゐる、東海林と同い年で、同じ部活に入つてゐる。そしてやはり東海林と同じ器で、東海林と同じく、緑龍を居候にしている。今東海林は、誰も居候にはしていなが。

大介はとこん否定が嫌いで、自分を『否定』と『肯定』ではつきり分けようとする。今の言葉みたいに。

「…、でも、大介」

緑龍は言つた。

聞いた大介は、緑龍に即答した。

「それじゃあ、お前は俺がいなくなつたら、その質問を誰かにされたいと思うか」

どこか怒つたような、そんな口調だった。大介は、そう言つ口調だつた。

こんな口調もあるんだ…。

東海林は少しばかり感心した。

「…、それは、ないけどさ…」

緑龍は、渋々そう言つしかなかつた。それがどこまでも正しいことだから、に他ならなかつた。

「だろ？それは東海林も同じだ、な？東海林」

そう言われるのがかなりきつい気がするのはきっと東海林だけではない気がするのは東海林の氣のせいだらうか。

東海林は一瞬、そう思つた。

「…、それを俺に振るのもどうかと思つけどな」

東海林ははつきりと、大介に言つた。

聞いた大介は、一瞬はつとなる。「あ…、「めんな…」大介はすぐには、東海林に謝る。

しかし、それはそれでまだ許せた。東海林はそこまで心が狭いわけではないし、そんな細かいことを気にしている余裕もなかつた。

「赤龍のことじで、お前は頭いつぱいだもんな…」

大介は、申し訳なさそうに東海林へ言つた。聞いた東海林は、少しばかり考える。確かに、七割ぐらい考えているのは赤龍だ。しかしもう三割は違う。

「いや、俺には赤龍以外にも、心配してゐることがある」

東海林は言つた。

それを聞いた大介は、少しばかり意外そうに、東海林の方に視線を向ける。そして、「え…、そなうのか？」と東海林に小さく言う。それつて、さつきの自分の台詞を否定したことにならないか？東海林は思わず考える。

「まあな」

東海林は言つた。

多分一割ぐらいは香奈のことじで、一割ぐらいには中間のことじだ。

「それつてどんなのだ？」

だから、さつき自分が言つたことをもう既に否定するんじゃないつて。

東海林は思った。

「大介、その質問つて…」

緑龍は、すぐに気付いた様子だった。

大介は、「あ…」と小さく声を潜めた。流石の大介でも、やつと気が付いた様子だった。東海林は小さく吐息を吐く。吐息に似たため息かもしれない物。

「べつにいいよ、俺はもう、考え慣れたからな」

東海林は言った。

二人（一人と一匹）は、少しばかり視線を顰めた。

東海林は二人に言い始める。

「香奈さんの、風邪のことも気になつてる」

聞いた大介は、少しばかり驚いたような視線を向ける。しかし、質問は自重している様子だった。

「何だか元気がなくて気になつてたんだ。それに、あんまりいい雰囲気じやなかつたし」

東海林は言う。

「それは…、

大介は、何かを言おうと必死に考えている。出ない。

「大変…、ですね…」

緑龍が、大介の代わりに俺に言った。聞いた俺は、少しばかり返事に困る。「まあね」なんて言える気に慣れない。

「それに、中間試験もあるし」

東海林は続けた。

それを聞いた大介は、「まあそれは、全員共通の悩みだからな」と、励ますように言葉を放つ。「そうですよ、大介だつて赤点取らないために必死なんですか…！」ど子か頑張った風に、緑龍が言った。

「まあ…、そうなんだけど…」

東海林は言う。

大介が、勝手に続けていく。

「それに、お前には赤龍がいるだろ？普通に満点ぐらい取れ……」  
緑龍は、大介の腕を肘で突いた。「へ……」と大介は小さく言つて、  
すぐに「あッ……」となる。はつとしたような顔になり、また口を紡ぐ。

「……まあ、そうなんだけ……」

東海林は、もうはつきり言つて何を言つていいのか分からなくなつてくる。

緑龍が、少しばかり怒ったような、そんな視線になる。  
「全く、大介つたら、自分で言つたことを行動で否定するんだから、  
何やつてるんだよ本当に、こっちが恥ずかしいよ」

緑龍は言つた。

大介は、それに反論が出来ない。

「……」

黙る。しかし、それが正しいことだと、東海林には思える。

「でも、まあいいや」

緑龍は言つた。「確かに、東海林さんには悪いけど、でも僕には、  
と緑龍は続けていく。東海林は、少しばかり黙る。

「そう言つの、大介つぽくていいと思う」

自然な笑みで、緑っぽい風が、吹きぬけていくような。  
そんな雰囲気だった。

「……」

一瞬、緑龍が何を言つてているのか、大介には分からなかつた。しかし、それを理解すると、大介にも、風が吹き抜けていく。秋の、  
そんなすがすがしい、いい空気をした風が。

「かもな」

大介は、少しばかり大きめに笑つた。それは、不自然なものではなかつた。

あーあ、と東海林は思つ。

いいよな、こういうの。本当に……。

思つしか、出来なかつた。それが、どこかもどかしかつたような

気が、しなくもない。

でも、と東海林は思う。

この状況だから思えるが、東海林は本当に、何もできない。赤龍が言った通りだ。そうだ、東海林は思う。

俺、赤龍いないと何もできないじゃん…。

東海林は、一瞬啞然となつた。

意味が、分かつたような気が、しなくもなかつた。

朝だというのに、そこにはバスーンの音があふれていた。バスーンの音は、その部屋には自然で、その部屋に、バスーンの音がない朝の方が、その方が気持ちが悪かつた。その部屋には、どこまでも、音楽が絶えなかつた。

その人物は、何も気にせずにバスーンを吹く。キーを変えて、そして指を変えて、そして、雰囲気を変えて。

それが音楽の楽しさだ。音楽は、作つていく楽しさと、それらを一気に崩して壊して、ゲシュタルト崩壊させるのが面白いと本人、その人物は思つてゐる。

「、」

傍には、ただひたすら、黙つてゐる青い龍がいた。勿論青い龍なのだから、青龍だ。それ以外の名前なんて、この龍にはありえない、と言うほど、その龍は青かつた。そんなことは全く気にも留めずに、その人物は、ただひたすらバスーンを吹いていた。ただそれだけで、それ以外のなんでもなかつた。

青龍は、少しばかり細めで、部屋に掛かつてゐる時計を見る。時計は、もう既に八時近くを示してゐる。普通なら、もう寮を出る時間だ。

青龍は、その人物に言つた。

「、雄大」

雄大は、バスーンをやめようともせず、ただ吹き鳴らしてゐた。しかし、視線はちゃんと、青龍の方に向いてゐる。青龍は、真つ直

ぐと雄大の方に視線を向けていた。雄大はそれを知つても、ただバスーンを吹き続ける。

「…そろそろ学校」

青龍は言った。

聞いた雄大は、バスーンを吹くことをやめない。吹いたまま視線を時計の方に向け、そして、少しばかり目を細める。時計は、八時くらいを示している。

「あ…」

雄大は言うと、バスーンを口から離した。そしてテーブルの上に置いてあるスワブ（布に紐をつけ、その先に重りをつけた物）を取る。バスーンの中に、それを通し始める。スワブは細長く、管の中に丁度納まってしまうほどの長さだった。

それが、いつもの雄大の朝だった。

朝と言えるかどうかは、それは微妙な線だった。

雄大、沖田 雄大は、天野下学園中学高等学校に通う人物で、龍を見ることが出来る器の一人だ。器の一人で、青龍を居候している。しかし、どちらかと言うと雄大は何もしていなくて、ただ雄大は、バスーンを吹いているだけだった。雄大は、出来ることならずつと、バスーンを吹いていたいとも思つていた。

はつきり言つて、雄大はその晩眠つていなかつた。と言うが、眠るという行動を、最近していなかつた、ともいえる。ただ、バスーンを吹くだけだ。それ以外に何もない。夜から朝、ずっとバスーンを吹く。ただそれだけだった。

雄大にとつては、それはただそれだけのことだつた。それ以外の何物でもなく、それ以外のなんでもなかつた。ただ、晩から朝までずっと、バスーンを吹くだけだ、ただ寝ないだけだ。

勿論雄大も人間で、少しは眠らないと、身が持たない。だから雄大は寝る。授業中。勿論ノートも取らないし、そんなことをする気にもならない。そもそも眠いだけで、雄大は勉強をする気なんでものが、まるつきりなかつた。そもそも、勉強意欲の言葉の意味すら、

雄大には危うかつた。

ただバスーンをずっと吹いていたいだけ、とも言えた。

雄大は思いながら、別に面倒くさそうではない雰囲気で、学校の準備をする。どうせ、雄大にとつては寝に行くだけだ。それだけの準備をすればいいだけなのだ。つまり、そういうことだ。それ以外に意味なんてない。

「…今日は、土曜」

青龍は言った。

聞いた雄大は、「あつそつか」と小さく言った。

今日は土曜日で、そもそも今日はいつもより一時間少ない時間割だ。その後は、ずっと部活のターン。

雄大は思った。

つまり、学園祭が始まりそう、と言つことだ。

そもそも、部活が急に多くなった理由がそれだ。学園祭前だから、部活が急に多くなつて、そして、聞かせられるものをつくろう、と言つ意志で作られている。雄大は、どちらかと言つと、ただ楽しければいいと思う。それだけだ。

つまり、学園祭だろうが何だろうがどうでもよくて、バスーンを吹いている時間がこの上なく好きだつた。恐らく、ほほ間違いなく、雄大はもうゲームをしないだろう。バスーンを吹きたいから。

そのくらい、雄大はバスーンが好きだつた。

雄大は、ただ学校へ行くための準備をして、そしてただ、青龍にこういうだけ。

「そろそろ行こー」

そう、そう言つだけ。

それを聞いた青龍は、雄大の方に視線を向ける。雄大は、靴を持って、ベランダの方に向かつている。青龍は少し面倒くさそうな視線で、雄大の方に立ち上がる。足を向かわせると、ベランダで四肢を着く。そして、青龍は翼を広げる。すがすがしい空気が、辺りに満ちていることが分かる。

雄大はベランダで靴を履くと、青龍にまたがった。そして、青龍は雄大の方に、ちらつとだけ視線を向ける。雄大は、青龍の肩をつかんでいる。いつも通りの事で、いつもこいつやっているだけだ。

雄大は言った。

「それじゃあ、行こーか」

聞いた青龍は、ため息氣味に翼を扇がせた。

東海林は大介に言った。

裏道だつた。喋つてゐるからかどうだかは知らないが、東海林の足取りは、いつもより数段遅かつた。

「てかさ、俺香奈さんに、どう聞けばいいんだろ、風邪大丈夫？なんてストレートに聞く氣にもなれないし、遠まわしに言つとかえつて何かな…」

東海林は悩んでいた。

さつきと同じだつた。

それを聞いた大介は、「そんなこと言われても俺が困る」と東海林に呴いた。それはどこまでも正論だつた。

「でも大介、」

緑龍が言つた。

聞いた大介は、緑龍の方に視線を向ける。

「少しごらいは考えてあげようよ、今東海林さん悩んでること多いんだし」

悩んでること、と東海林は考える。悩んでること、赤龍、香奈さん、そして中間試験。

確かに、悩んでることが多い。

東海林は思いながら、少しばかりため息氣味に、吐息を吐いた。

「そうか？でも俺、何て言えばいいか分かんないしな…」

大介は、どこか困つた風に言つた。

「何でもいいから、東海林さんの役に立ちそなこと考えてあげよう。東海林さんにはお世話になりっぱなしなんだし」

緑龍は言った。

それを聞いた東海林は、少しばかり苦笑いをした。「どちらかと言つと、俺の方がお世話されてるような…」東海林はつぶやく。

聞いた緑龍は、即答する。

「いいえいいえ、僕たち、東海林さんには結構ありがたいことしてもらつてるんです。だから僕たちも、東海林さんに何かしないと、僕たちの気が治まりません」

聞いた大介は、「僕たち…、な」と小さく、不満そうに緑龍に言った。それに緑龍が反応するわけもなかつた。

「たとえば、どんなこと?」

東海林は緑龍に聞いた。

それを聞いた緑龍は、「たとえば、」とすぐに言い始める。

「東海林さんに、あの時助けてもらいました」

あの時つてどの時だ?

東海林は思いながら、「いつのこと?」と緑龍に聞き直す。聞いた緑龍は、「ほら、あれですよ、」と東海林に言い始める。

「ホルンの人が急に来たときとか

聞いた東海林は、「あー、」と納得する。そうか、あの時か。東

海林は思い出す。

でも、と東海林の思考に歯止めがかかる。

東海林は、緑龍の方に視線を向ける。

「いや、あれは俺じゃないよ」

東海林は言った。

それを聞いた緑龍は、「あれ?」と東海林に言つ。「東海林さんじゃなかつたら、誰なんですか?」緑龍は言った。

大介は、さつき緑龍がしたように、肘で軽く、緑龍の腕を突いた。緑龍には、その意味が分かつていなかつたようで、やられた後、一瞬ぽかんと、大介の方に視線を向けていた。大介は、東海林のことが分かつていた様子だった。

「…、」

東海林は一瞬、言おうかどうか迷う。しかし、言わない気にもなれないことが、東海林を苛んだ。

「…赤龍」

大介は、ほらな?と言わんばかりの視線を、緑龍の方に向ける。その『ほらな?』は、決していいものではなかつたことを、緑龍は知つていた。

緑龍は、「…」「小さく沈黙を保つ。そして、東海林の方に視線を向ける。

「…、ごめんなさい…」

緑龍は言つた。そして、眞面目そうな雰囲気で、こう続ける。「僕が不謹慎でした…」

聞いた東海林は、「いや、いいよ」と、少しばかり咽かえつたような気分になる。よく分からぬすがすがしい空気が、東海林の周りに透き通りすぎて、気持ちが悪かつた。

「それに、俺が悪いんだし」

それを聞いた緑龍は、東海林の方に視線を上げる。東海林はどこか、一人な雰囲気で、それでいて、どこか途方もないことを抱え込んでいるような、そんな雰囲気にもとれた。どうしても、それは心地のいいものには思えなかつた。

「…、」

緑龍は息をのむと、大介の方に視線を向けた。「ねえ大介」と声を出す。聞いた大介は、緑龍の方に視線を向ける。

「やっぱり、僕東海林さんのために何かしたいよ。東海林さん、一人じやつらそうだしさ」

緑龍は、どこまでも緑龍だつた。

それを聞いた大介は、少しばかり面倒くさそうな視線を、裏道の樹の方へと向ける。樹はどこまでも樹で、それ以外の何物でもなかつた。それは、樹であると同時に、空氣でもあるような気がした。すがすがしくないのは、きっと氣のせいではなかつた。

「…はあ…」

大介は、小さくため息を吐いた。

それを聞いた東海林は「ため息はやめる」と大介に小さく言った。聞いた大介は、少しばかり意外そうな、そんな視線を東海林に向ける。しかし、それは以外でもなんでもなくて、もしかしたら自然の成り行きなのかもしれない、とも、大介は思った。

「ああ」

大介は言った。

そして、考える。

「お前、口癖移つたな」

大介は言った。

それを聞いた東海林は、「へ?」と一瞬、よく分からないと言わんばかりの視線を大介に向ける。大介は、少しばかり楽しそうな、そうでないような視線を東海林に向ける。東海林は、よく分からない気がする。

「…」

黙ると、なんとなく、考えがまとまってくる。つまり、そういうことなのだ、と東海林は納得する。

東海林は、大介の方に苦笑いする。それ以外、何ができるわけでもない、と言う雰囲気であることには変わりがなかつた。

「かもな」

少し憂鬱に似た、そんな気分だつた。それは確かに、寂寥感に似た寂寥感が、東海林の隣には存在した。

もしかしたら、どこにでもあるかもしれない。東海林はそれすら思つた。

もしかしたら仕方のないものに、東海林はため息に似た吐息を吐いた。そう心の中で、小さく思つた。

「はあ…」

そのため息は、東海林の寂寥感に響き渡つた。

「そんなんだつたらよ、」

大介が言った。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。期待なんて籠つてい  
ない、ただ向けているだけの視線に近い視線。

大介は言った。

「俺に出来ることなら、何とかしてやるよ

大介は言った。

東海林の目が見開かれた。

緑龍が、どこまでも緑龍なのと同じように、大介も、やはりどこまで行つても、大介の様だつた。東海林の中で、響き渡つたからなのか、少しばかり、寂寞感が薄れたような、そんな気がした。

あくまで、そんな気がしただけかもしない。東海林は考える。そんな気がして、しかし、隣には赤龍の姿は無くて、やはり、寂寞感は健在だつた。

しかし、薄れた気がしたのは、確かにことだつた。

「そうか？」

東海林は大介に言った。

それを聞いた大介は「ああ、勿論！」と東海林に声を張り上げる。すると緑龍も、大介の後に続く。「僕にも相談してくださいね」明るく、やる気に満ち溢れた声。

それを聞いた東海林は、「そうか…」と小さく、考えるように二人に言つた。そして、こう続けた。

「それじゃあ、早速」

東海林は言った。

聞いた大介は、「何だ？」とどこかやる気な声で、東海林に言った。緑龍は「何でしようか」と大介に続く。

「俺は、香奈さんのために何ができると思う？」

聞いた大介は、「香奈さん、な」と東海林の方に視線を笑ませる。

東海林は、少しばかり顔を赤らめる。

聞いた緑龍は、「たとえば、風邪薬をプレゼントするとか」と東海林に言つ。その声と顔は、いたつてまじめだ。視線は、東海林の方に真つ直ぐ向いている。その方が、東海林には困つた。

聞いた東海林は、「あ…、そつ…、か?」と困りながら言った。  
大介は緑龍に、「お前真面目にそつ言つんじゃねーよな」と緑龍に言つ。緑龍は聞くと、少しばかり顔をしかめる。

「え? 駄目?」

緑龍は言つた。

聞いた大介は、「ああ、だめだ」と決然と言つた。

聞いた緑龍は、どこか悲しそうな視線で、東海林の方に向いた。

「駄目…、ですか…?」

ここで東海林が、だめだ、と言つたら、色々な意味で緑龍が壊れる氣がする。きっとそれは間違いではない、と東海林は考へる。以前、雄大に『緑茶』とあだ名をつけられて、それで落ち込むほど心が纖細なのだ。

つまり、ここでそんなことは答へられない、と言つことだ。あくまで、緑龍のために。

「いや、だめじゃないけど、」

東海林は言いかける。

緑龍の視線が、東海林の方に食い入るよつに向けられる。東海林はどこか話辛くなつて行くが、それを口にしようとはしない。

「でも、俺今金ないし…」

それはいつものことだ。

東海林は思うが、はつきり言つて、今は金よりも重要なものがある氣がするのは、きっと氣のせいではない。それは氣のせいなんかではなくて、恐らく、本当の事だつた。

「そう、ですか…?」

緑龍は、少しばかり沈んだ声で、東海林に言つた。緑龍は、俯きながら、小さくため息を吐いた。

「はあ…」

ため息を吐くしかない、と言つ風な、そんな感覚だつた。

それは仕方がない、と東海林は思う。はつきり言つてそれは、出てしまう物だ。ため息は、あぐびと同じ、生理現象みたいなものだ。

東海林は思つた。そうそう、そんな感じ。

「でもよ、」

大介が東海林に言った。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。大介は、眞面目な視線を東海林に向ける。「ん？」と東海林が、大介に向かつて言つ。

「お前、香奈がどの程度風邪で大変か分かつてんのか？」

聞いた東海林は、少しばかり考える。氷枕を使う程度？医者の处方箋を使う程度？それとも、病院で隔離される程度？

分からぬ。

東海林は思つた。

少しばかり視線を落とし、東海林は一回、頭を横に振つた。

それを見た大介は、「なるほどな」と東海林に言つ。東海林に、大介の「なるほどな」の意味が分かるわけがなかつた。

「つまりよ、まず相手が何を欲しがつてるか知るべから。風邪薬でもなんでもいいけど、とりあえずな」

大介は言つた。

聞いた東海林は、少しばかりその説明に、納得させられるものが

ある気がした。大介は、さらに続ける。

「つまりよ、それにはまず、相手の状態を知らなきやいけないってことだ。例えば、ワクチンが必要とか、シアン化合物が必要とか」

東海林は納得する。そのシアン何とかとか言うのが何だか分からぬが、きっと体にいいものだろう。東海林は考える。

「な？」

大介は言つた。

聞いた東海林は「かもな」と、やはり大介の説明に、納得している部分があつた。もともと、大介は文系だし、そもそも大介は、本の虫と言つても言い足りないほどさまざまなものを知つてゐる。だから、東海林なんかよりも、きっと他人の気持ちと言つもを理解することが出来るのかもしない。東海林は考える。

「そのためには、まずどうするか分かるか？」

大介は東海林に聞く。聞かれて、東海林は答えられない。東海林の中に答えがないのなら、東海林はただ答えを待つことしかできない。それが、東海林にはどこか、もどかしかつた。

「つまりよ、まずは、香奈がどのくらい病気のかつてことを知る必要がある。だけど香奈は、東海林には移したくないとか言うものすごくかわいらしい乙女心で、東海林から、水から離れてる。てことは？」

東海林に話を振られても、東海林は困るだけだ。

緑龍は、さつきから「どうせ…、僕の意見なんて…」とかなんとかぶつぶつ言いながら、背中の方に黒いものを纏つている。まあ、いつものことかな？東海林は考える。

「…えっと」

東海林は考えて、言おうとする。

「遅い」

と大介に言われる。はつきり言つて、何だかよく分からぬ大介の発言。

「遅い…、何て言われてもな…」

東海林は困つたように言つた。しかし大介は、そんな事お構いなしに話を続けていく。話は、東海林の中に、ものすごい勢いで流れしていく。

「つまり、香奈の身近なやつだ」

大介は言つた。

聞いた東海林は、一瞬はつとなる。はつ！

「身近か！」

東海林は、納得したように言つ。大介は聞くと、少しばかり嬉しそうに、爽快そうに一、二度頷く。

「そう、たくさんいるだろ？女の子っていうのは、ネットワークが俺たち男子よりも広大だからな、しかもメールがものすごい、たまに読めないと氣がある」

それを聞いた東海林は、以前香奈から送られてきたメールの内容

を思い出す。確か、アルファベットしかなかつたような、そんな気がしなくもない。

「まあ、そうだな」

東海林は言った。

それを聞いた大介は、「だから、」と話をつなげる。

「まずは男子に近しい女子から、香奈の情報を聞き出すんだ。なるべく、香奈とも親しくて、男子とも親しいやつ」

一人、思い当たる節がいるのは、きっと氣のせいではない。

それは、きっと東海林の幸運の一つだ。東海林は、少しばかり思いながら、少しばかり、心の中で微笑んだ。

「なるほど、な…」

納得の嵐だった。

緑龍は、黒い物の嵐になりかけていた。

その部屋は、どちらかと言つて、淡い緑色で止められていた。淡い緑色で、どこかイタリアンな雰囲気が醸し出されている、そんな感覚。

「ヤバい遅刻！」

その人物が、声を放つ。髪に寝癖をつけて、携帯電話を片手に持ちながら、焦燥感に駆り立てられている人物。

「大変…」

とか思いながら、その人物は携帯電話のデジタル時計の方に視線を向ける。そこには『8：12』と表示されている。学校が始まるのは、今から約十八分後。

いくら一駅離れているだけだからって、それは難しいことだった。その人物は思った。はつきり言つて、それは不可能に等しいとさえ思つた。

その人物は面倒くさそうにテーブルの上に手をやると、そこから綺麗な、金属製の櫛を取り出す。上に乗っていたものを取るのではなくて、テーブルの成分の中の金属部分を抽出して、櫛にしたのだ。

その人物は髪を解かしながら、急いで脱衣所で着替えを済ませる。携帯電話に嘘はない。つまり、携帯電話の時間は、どこまでも正確だつた。

**個岬** 羽並、羽並は術師の一人で、『解凍』と言つ術を使う」とが出来る。さつきのようなく、物の中からある特定のデータ（物質）を抽出して、それを具現化するものだ。

羽並は急ぎながら、増えすぎた櫛を適当に放り投げる。そして朝食をすぐさま済ませると、すぐに歯を磨き始める。そして急いで、学校へ行く準備をする。今日は土曜日なのに、学校がある、と言つのはかなり辛い、と思つのは、きっと羽並だけではない。

羽並は思つと、携帯電話をポケットの中にしまおうとする。その時だつた。

ブー ブー

携帯電話の、バイブレーション。

それは、羽並の手の中で震え、そして、突然消える。いつものことだが、こんな時間に何かの着信が来ることは、珍しいことだ。長さからして、恐らくメールだ。羽並は思いながら、携帯電話のメールのアイコンをクリくする。

メールボックスから、メールを開く。

「…、え？ 香奈？」

思わず、羽並は呟いた。

『差出人 香奈

添付 なし

件名 今日は

本文 風邪で、学校に行けそうもないわ。だから、先生に伝えておいてくれないかしら…』

そのメールの内容から取れるものは、一つだつた。

香奈が、風邪ではないということだ。

羽並は思つた。そして、そのメールを見ながら、少しばかり視線を細めた。

香奈が、こんなにはつきりと、友人に大切なことを頼むことなんてまずあり得ない。自分のことは自分の事、他人のことは他人の事、でも分かちえることは分かちえること、それらを全て把握しているのが香奈だ。ある意味すごくて、殆ど真似すらできることだ。羽並は思う。

しかし、このメールの内容は、明らかにそれから逸している。羽並は思う。

この内容は、一方的に『伝えておいてね』という、ある意味命令形だ。いつもの香奈なら、こんなメールがあつたとしても、『伝えておいてくれる?』と打つはずだ。少なくともその前の文章に、『よかつたら』くらいを添えて。

この文章から読み取れたことが、羽並には手に取るようだ。たもしかしたら本人は、気付かない、と思ってこのメールを送ったのかもしれないし、十中八九そうだとも思う。だけど、とも羽並は思う。

きっと、それなりの理由がある、それを、羽並は理解しているつもりだった。

羽並は、一応ではあるが、香奈の友人だった。それに羽並は術師だ。他の人物では経験していないような経験をしていることだつてある。友人の嘘を見抜く程度だったら、羽並には出来た。ただそれが方便かどうかは別として。

羽並は思いながら、少しばかり面倒くさそうな、それでいておぼつかない指の動きで、香奈にメールを返した。

『宛先 香奈

添付 なし

件名 Re:今日は

本文 分かつたわ、きよはら清原先生に伝えておく。だから、ちゃんと用曜学校に来れるように、ゆっくり休むんだぞ

なんとなく気が進まないまま、送信ボタンを押した。

それが本当か嘘か、ではなかつた。問題はそんなところではなく

て、香奈が、どうしてそれを羽並に送ったかが、問題なのだ。

考えて分かるようなものではなかつた。そこまで単純で、簡単なものではなかつた。つまり、考へてもわからないかも知れない物、と言つことだ。羽並は、そう考へるしかできなかつた。それ以外の考へなんてなかつたし、それ以外の解決方法も思いつかなかつた。つまり、こうのことだ。

羽並は、その問題を解決できなかつた。

それは、どこまでもそうだつた。

羽並は、少しばかり考へながら、ため息を吐く。自分がここまで猜疑心を抱いていることに、なんとなく嫌悪したくなる。香奈は羽並の良き友だ。そもそも、疑う要素、なんてものがないはずなのだ。羽並は思いながら、自分の職業柄を、少しばかり疎ましく思つた。それ以外、何かを感じたような気分は、しなかつた。

東海林は、やはりどこか、戸惑つていた。

戸惑うのも当たり前だつた。東海林は、息をのみながら、その清原先生の言葉を耳に傾ける。

「今日、春潮さんは休みです。それから、火蔵さんも。二人とも風邪だそうだから、お見舞いに、こつそり行つてあげてね？」

とか言つて、誰かがお見舞いに行つたのを、東海林は見たことがなかつた。そんなことが起つるはずがない、とも東海林は思つていた。

つまり、そう言つことだ。

東海林は思いながら、少しばかりため息を吐きたくなる。やつぱり、休みなんだ、と東海林は思つ。もう一人の火蔵と言つのには、東海林は心当たりが全くなかった。確か、バドミントン部に入つたやつだつけ？

そんな程度だつた。

「と言つことで、今日は号令がないから…、私が号令をかけるわ  
そう言えば、清原先生の号令なんて、あんまり聞いたことがない  
な。

東海林は心の中で思いながら、清原先生の顔を直視しないようにする。直視したら、多分平常ではいられない。そんな気がするし、見なくても、少しばかり心の中で、もやもやと熱を持った何かが立ち込めていくのは間違いない。

現に、他の男子生徒の一部は、清原先生の方に視線を向けて、ただ茫然としている。東海林は部活の時も顔を合わせるから、慣れたと言えば慣れたということになるのかもしれない。東海林は思いながら、慣れつて怖いな、とか心の中で思おう。

「起立」

大きな声、しかも、かなりはつきりしたような、そんな声。

それを聞いて、立ち上がらない男子生徒はいない。そのくらい、男子と女子の間には、暑さの差があつた。温度差と言つよりも、これはもう、狂つているかそうでないか、と言つ分類が出来るかもしれない。東海林は少しだけ思つた。

氣怠そうに、雄大が立ち上るのは見える。雄大は別に、どうでもいいような顔をしている、それ以外、東海林には印象がない。大介は、平常を保っているように見えなくもない。東海林は隣を見る。緑龍がいる。

「気を付け」

そつか、と東海林は思う。

そう言えば、清原先生には龍が見えないんだ。東海林は思つた。はつきり言つて、それが何故かは分からぬ。何か不思議なようだ、そんな気がしなくもない。しかし、それを追求しようとも思うほど、東海林はそんなに好奇心が旺盛、と言つわけではなかつた。しかも、それはどうでもいいことで、東海林が今悩んでいるのは赤龍の事と、香奈の事と、中間試験の事だつた。それ以外に考えるべきなんてことがある方が、東海林には不思議な気もした。例えば、

恋愛がうまく言つてないとか、ゲームが進まなくて行き詰つてるとか、はつきり言つて、東海林にはそんなに、大きな問題には思えなくなつっていた。それは、東海林にとつてはどこまでも正論で、どこまでも正しいことには他ならなかつた。それがきっと、東海林にとつて正しいことだからだと、東海林は思う。

みんなが黙ると、清原先生の声が聞こえる。

「礼」

そして、男子生徒の声。

『ありがとうございます!』

非常に太く、どこか温かく、逆に蒸し暑苦しいような、そんな声でもあつた。東海林はそんな風には言つていなし、そもそも東海林は、清原先生には興味がない。興味があるのは、あくまで赤龍と香奈だつた。

清原先生、清原 美菜は、東海林の担任の先生もあり、吹奏楽部の顧問もある。つまり、音楽の先生でもあり、担任の先生でもある。こんなことはめつたになくて、担任の先生が、数学とかそう言つた教科ではない先生がやる、なんてことは珍しかつた。そもそも、珍しいだけで、少しならあるのかもしれないし、そもそもそれは、東海林の偏見かもしれないというのは、東海林には分かり切つたことだつた。東海林は思いながら、少しばかり目をこする。そして座る。

東海林は、香奈の席の方に視線を向ける。そこには、いつもあるはずの神々しさが、かけていた。

東海林の中の空白感、とも呼べる何か白い、何もない空間が、そこには広がつていた。ただそれだけのことで、それだけのことしかないとも割り切れなくはなかつたし、しかし、それが正当な方法だとは、東海林には思えなかつた。

大介が、さつき言つたのを覚えている。

まずは相手の周囲を知る必要がある。

それは、そう言つことでしかない、と言つことを、東海林は理解

していた。つまり、香奈の周りを理解していく、しかも、男子生徒と仲がいい方の、女子。

東海林は一人だけ知っていた。

今は次の時間の準備をし終えて、少しばかりの復讐<sup>レ</sup>をしている生徒。つまり、羽並だ。個岬 羽並。

東海林は思うと、立ち上がる。次の時間の準備をするために、口ッカーの方に歩み寄るような、そんな雰囲気でもあった。しかし、東海林には明確な目的があつた。つまりは、羽並だ。ただそれだけだ。

東海林は、次の時間の教科が、一体何なのかすら、知らなかつた。東海林は思いながら、羽並の方に歩み寄る。羽並は途中、東海林が近づいてきていることに気付く。東海林の方に視線を向けて、「あ」と東海林に言つ。聞いた東海林は、少しばかり声を詰まらせる。「おはよ、東海林君。どうしたの？」

羽並は聞いた。

それを聞いた東海林は、「あ、おはよつ、個岬さん」と、少しばかり改まった風な、そんな風な口調で言つた。

「あのさ、個岬さん、聞きたいことがあるんだけど…」

東海林は言つた。

それを聞いた羽並は、少しばかり視線を細めた。東海林は、少しばかり喉の渴きがいえないまま、声にした。

声にしただけだった。

「香奈さんが、何か雰囲気おかしかつたっていうの、知らない？」

聞いた羽並は、少しばかり黙る。

少しばかり、鼻で笑うような、そんな声を放つ。どこか皮肉なような、どこか、深いことを知つてているような。

「流石、東海林君」

どこか、感心しているような、しかしそれでいて、皮肉そうで、面倒くさそうな声。

東海林はきっと、その声を忘れないだらう。

どうしてだかは分からぬが、東海林はそう考えた。

いつもと同じ位置に、その人物は座っていた。いつもと言うのは語弊がある、その人物は、捕まつてからずつと、その椅子に座つてゐる。ガムテープのようなものでぐるぐる巻きにされて、それをはがせないでいる。

はがす気なんものはそもそもなくて、そもそも、海の底なんてものも、段々ではあるが、耐性が出来てしまつてきていた。海の底の息苦しさを、自分の物に出来たような、そんな気分だつた。しかしあれは、どこまで行つても苦しくて、ただ、自分の体が動かなくなつて行く感覺しかない。本当の海の底ではないことを、その人物は知つていた。

海の底に行けば、きっと誰でもわかる。

私は一度、海の底に行つたんだから。

その人物は思つた。

それを見ているのは、香奈と黄龍と、西欧系ゲルマン系外国人の容貌をした、ハンスだつた。それ以外に、ホテルのリビングにいる人物はいなかつた。あえて言うなら、もう一人が、椅子の上で、何かを思考の中で嘲笑つていた。もしかしたら、万物をあざ笑つていたのかもしれない、とその人物は、少しばかり考える。少しばかり考える程度で、それを完璧にものにすることは、きっとできない。香奈は、その人物を見ながら、少しばかり目を細めた。

「何か、あれから分かつたことはありますか？」

それを聞いたハンスは、少しばかり目を細める。考えるような、どこか、申し訳なさそうな、そんな雰囲気だつた。

「…いや、何もなかつた。彼女は、よっぽど海の底に、慣れきつてゐるようだね」

ハンスは言つた。

海の底に慣れきつてゐる、の意味が、香奈にはよく分からなかつた。しかし、よく分からなくてもいいような、分かつてはいけない

ような気がする。

「海の…、底…。畔が…？」

香奈は聞いた。

椅子の上に座っているのは、火藏ひぐら 畔ほとりだ。畔は、術師の一人だと思われるが、はつきり言つてよく分かつてはいなくて、香奈が知っている畔は、『殺し屋』としての畔でしかなかつた。それ以外に、考えられることは無かつた。

「そう、海の底」

ハンスは言つた。

香奈は、そこで沈黙をする。それが一体どういったものなのか、香奈には想像もつかなかつた。

「…、」

聞いたハンスは、説明する。

「海の底つていうのは…」

言いかけた。

それを聞いた香奈は、「いいです…」とハンスの言葉を止める。

聞いたハンスは、香奈の方に言葉を止める。香奈の方に一瞬視線を向けると、そこに、何かさびしいような、孤独なような、そんな雰囲気しかないことを知る。

少しばかり考えて、ハンスは畔の方に視線を向ける。畔は、ただ視線を下に向けて、ただ視界をうつろにさせて、そして、ただその場に存在していた。今の畔は音であり、何でもあるような感覚があつた。

「…、」

一瞬ハンスは言葉を止める。そして、小さく息をのむ。少しだけ、考えが伝わったような、そんな感覚でもあつた。そんな感覚で、ハンスは、少しばかり目を閉じた。目を閉じて、再び現実を見つめる始める。

「妥当な、答えかもね」

ハンスは重々しく、そう答えた。それはハンスの本意だった。

そしてハンスは、香奈の方に質問する。

「それで、そつちで得た情報は？」

それを聞いた香奈は、少しばかりはつとなつた。

そつか、確かに、まだハンスさんに調べた結果を言つてなかつたんだ。

香奈はそう思つて、少しばかり言葉を詰まらせる。どう言つてい  
いものか、香奈には分からなくなつてくれる。

「ちょっと、信じられないです……けど……」

香奈は、そう言つた。

それが一番、妥当だと香奈が思つたから、かもしれない。香奈は、  
本氣でそう思つた。

「信じられない？」

ハンスは言つた。

それを聞いた香奈は、ハンスの方に視線を向ける。そして一、二  
度小さく頷いた。ただそれだけだつた。

「だったら、君は黄龍君がいる時点で、信じられないと思わないか  
い？」

ハンスは言つた。

つまり、こういふことだ。

もう、それが常識か、一般的か、普通か、ことは関係がない。そ  
こにある現実こそが、そもそも全てを物語つてゐるのだ。それ以外  
なんてものは、必然的に存在しなくなる。確かにそれは莊だつた。  
それ以外のなんでもなかつた。つまり、この際そんなことは関係な  
いのだ。そんなことは関係なくて、関係があのは、今、田の前がど  
うなつてゐるか、と言つことだけだ。ただそれだけなのだ。

「…そうです、よね…？」

香奈は、どこか悲しそうに、ハンスに言つた。それだけが、その  
場では正論な気がして、香奈にとつては、それがどうも突つ掛りの  
ある者のようにしか取れなかつた。

「うん、そうだよ」

ハンスは言った。

小さく黙る。そして、沈黙だけが、その部屋を覆っていく。香奈には、畔のことはよく分からぬし、畔の義務なんでものもわからない。そんなのは関係なくて、畔が一体、何なのか、そもそもそれが、香奈には分からなくなっていた。

「…香奈」

黄龍が、小さく香奈に言った。香奈は聞くと、少しばかり黄龍の方に視線を向ける。悲しそうな、それでいて、どこか、何かを耐えているような、そんな視線。

「…大丈夫よ」

香奈は言った。

それが、本当の言葉なのか、それを黄龍が理解できることは、恐らく来ない。黄龍に出来ることは、香奈を守ることだけだった。それだけだったのだ。

少しだけ、もどかしいような気もしなくはなかつた。

「ハンスさん…」

香奈は言った。どこか、聞くよくな雰囲気で、ハンスにそう話しかけた。

聞くと、ハンスは「…」視線を香奈の方に向ける。香奈は、畔の方を見ているのか、それとも遠くを見つめているのか、どこかよく分からぬ風な視線で、ハンスに言った。

「…、ハンスさんは、誰かを守りたいって思ったこと、ありますか

…」

香奈は聞いた。

ハンスは聞くと、少しばかり驚いたような、そんな表情で香奈の方に視線を向ける。香奈は、どこか空ろなような、しかし、真つ直ぐな視線を、どこか遠くへ向けていた。真つ直ぐすぎる視線は、ハンスには、どこか痛いような、そんな気がしなくもなかつた。

「…、あるよ」

ハンスは言った。

香奈は、少しだけ心の中が、晴れ渡ったような、そんな感覚がしなくもなかつた。完璧に晴れ渡つたわけではないけれど、曇り空から、陽がさすほどには、なつていた。

「そんな時、」

香奈はハンスに聞く。

聞いたハンスは、香奈の方に、優しげな視線を向ける。

「ハンスさんなら、どうします？」

香奈は聞いた。

それを聞いたハンスは、少しだけ、視線を細めた。そして、香奈から視線を離した。少しだけ沈黙する。

そもそも、香奈にはその答えが、帰つてくるような気がしなかつた。そもそも、それに答えがあるのかどうかすら疑わしかつた。それは人それぞれの考え方で、人それぞれの動き方で、そして、ひとりそれぞれ、正解がある。だからそもそも、答えなんてものは存在しない。あるのは自分だけなのだ。

そんな気がしなくもなかつた。

分かつていいけど、不安だつた。香奈は本気でそう思つた。分かつてはいる。しかし、それが分かつたところで、香奈のこれからすべきことが、すべてわかるわけではない。つまり、そう言つことだ。それ以外のなんでもなくて、そう言つことに他ならないのだ。

ハンスが、次に言つた言葉は、これだつた。

「今日は、学校があるんじゃないの……？」

聞いた香奈は、少しだけ、うかない顔をする。浮かなくなるのは当たり前で、香奈には、その質問をされたいとは思わなかつた。

「……はい、」

香奈は言った。

ハンスは、視線を香奈の方には向けなかつた。ただ、どこまでも悲しそうな視線を見るのは、少し、心に来るものがあつた。

香奈は、ハンスに続けるように、こう言つた。

「ちょっと、休んじやいました……」

そのちょっと、と言つのが、ハンスには分からなかつた。

香奈は、自分で言つた言葉あの意味が、少し曖昧であることに、気が付かなかつた。気付いたところで、何かできるわけではない、と分かつてからかもしれない。

香奈は思いながら、少しばかり、目を細めた。

それ以外、出来ることがなかつたともいえる。

東海林は、少しだけびっくりした。羽並が、まるでその質問を、東海林からくるのを期待していたような、そんな言い草だったからだ。東海林は、さつき、この質問を羽並にしようと考えたばかりなのに、羽並は、その先を考えていた、と言つことになる。

そもそも、東海林が頼れる、男子に親しい香奈に近い女子なんて、羽並しかいない、と言つことも、容易に予想できなくはない。

「分かつてたの……？」

東海林は羽並に聞いた。

それを聞いた羽並は、「いいえ、」と東海林に答える。

その言葉に、東海林は一瞬戸惑う。どういうことだ？ 羽並は俺の質問を、前もつて予想してたわけじゃないのか？

羽並は東海林に続ける。

「私も、妙だと思ったのよ、

そう言いながら、羽並は自分のポケットから携帯電話を取り出す。そして、指をぱぱぱと動かすと、メールボックスの中にある一通のメールを、東海林に見せる。

「今朝、こんなメールが届いたのよ、

羽並は言つた。

東海林はそれを聞くと、そのメールの内容に目を通す。やつぱり、風邪、なのかな……？

東海林は思う。しかし、どこかこのメールの内容には、引っかかる部分があるような、そんな気がしてならなかつた。

「香奈さん、から？」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「ええ」と東海林に呟いた。そして羽並は、すぐに携帯電話を自分の方に寄せると、待ち受け画面にして閉じる。

「変だと思わない?」

羽並は、真剣な表情で東海林に聞いた。

一瞬、「え…」と東海林はつぶやく。確かに、変だと言えれば変な、そんな部分がないわけでもない。しかし、それとはまた違う、何か全く別の気分も浮かんでくる。

「…、引っ掛けりなら…」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「具体的に言える?」と東海林に聞く。さすがにそれは、東海林には難しいかもしれない。

「…、ちょっと、無理」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「まあいいわ」と東海林に向かう。「ちょっと変だつて分かったことだけでも、この際すゞごことだもの」

言つと、羽並は東海林の方に視線を向ける。

「ところで、赤龍君は?」

羽並は聞いた。

一瞬、

東海林の目が泳ぐ。

「あ…、えつと…」

東海林は言葉を詰まらせる。何と言つていいのか、東海林には分からなくなる。しかし、羽並の目は、東海林の方に向かっている。真つ直ぐ、東海林の方に。

「…、えつと」

東海林は言つ。羽並は、「もしかして」と東海林に言つ。

東海林は、少しばかり手が汗ばんでくることに気付く。

「喧嘩した…?」

「鋭すぎだ。」

東海林は、羽並に思つた。羽並はどこかいたずら気な表情が、東海林を少し情を東海林に向けている。そのいたずら気な表情が、東海林を少しばかり苦しめる。

「…まあ…」

東海林は言つた。

それを聞いた羽並は、「なるほどねー」とどこか納得したように言つと、すぐに真面目な顔で、東海林の方に視線を向ける。

「早く赤龍君と、仲直りした方がいいわよ？」

羽並は、はつきりとそう言つた。

聞いた東海林は、少しばかり目を見開いた。以前、おんなじことを言われたからだ。しかも、どこか焦つたような、そんな雰囲氣で。「…、何で…」

東海林は羽並に聞いた。

聞いた羽並は、真面目そうな顔で、ただひたすら東海林の方に視線を向けている。東海林は、少しばかり口を紡ぐ。

「東海林君、赤龍君と仲直りしたくないの？」

羽並は東海林に、質問で返した。

聞いた東海林は、少しばかり困る。質問を質問で返されるのは、少し困るものがある。

「…それは、…赤龍の好きだから…」

東海林は言つた。

羽並は視線を細める。しかし、まだ何かを言つ気配ではない。羽並は、東海林の方に視線を、ただじっと、まっすぐ向けているだけだ。

「…、赤龍が帰つてきたかつらつたら、帰つてくると思つ…」

聞いた羽並は、はつきり言つて、幻滅しそうになつた。

「…、まさに幻滅ね」

聞いた東海林は、「へ？」と羽並の方に声を放つた。羽並は、ただ自分の、本当の気持ちを口にしたまでだった。

ただそれだけだった。

「あなた、赤龍君と寄りを戻さないと、」

死ぬわよ？

「確實に」

その声は、冗談めいてはいなかつた。

「…」

東海林は、一瞬啞然となつた。その声が「冗談の様には聞こえなかつたし、きっとそれが「冗談ではない」ということを、東海林は少なからず、理解していた。

思考で理解していたのではない、感覚で、理解していた。

「どうしてだか分かる？」

羽並は聞いた。

聞いても、東海林から声が出るわけがなかつた。東海林よりも、羽並の方がそう言つたことに詳しいことを、東海林は理解していた。だから、東海林は何も言えなかつた。何を言つても、ここでは答えにならないからだ。それにそもそも、東海林にはその答えを持つていなかつた。

「…」

東海林は息をのんだ。

羽並は、はつきりと東海林に言つた。

「あなただけじや、非力だからよ」

はつとなつた。

赤龍が東海林に言つた、その言葉を、東海林が忘れられるわけもなかつた。

『はつきり述べるが、赤龍がここにいなかつたら、東海林はもうとつぶに殺されておつたぞ！』

そう、それは本当だつた。

「あなただけじや、きっと私にも勝てないわ」

本当だつた。

どこまでも、それが本当だった。それが本当のことすぎて、東海林には少し、息が詰まるような、そんなんかくしかなかった。しかし、本当の事だった。

「……」

東海林は、息をのむしかできなかつた。

情けないに近い、そんな感覚。忸怩たる思い、とはまた少し違つ。どちらかと言つと、寂寞たる思い。

羽並は東海林へ、無慈悲に続ける。

「帰つてくるのは赤龍君の好き、つて言つたわよね」

東海林は黙る。ただ、肯定したくないだけだし、否定できないだけだ。ただ、東海林は黙つただけだ。

東海林は肯定も否定もしていない。つまり東海林は肯いている。

「そんなこと言つて、本当に赤龍君が帰つて来なかつたら、どうするつもりなの？」

羽並は問いただす。

東海林は、何だかよく分からぬ物が、頭の中で低徊していくのが分かる。よく分からぬ考えが浮き出て、そしてよく分からぬ、暗い底へと落ちていく。音もなく、それは東海林の頭の中で、繰り返される。

もしかしたら、その途中で東海林は、何か大切なものを見落としたのかもしない。そんな事、東海林にはもうどうすることもできない。その思考は、低徊の深い奥底へと、沈んで行つてしまつた。

「東海林君、本当に赤龍君と寄りを戻したくないの？」

東海林はそれを聞くと、羽並の方に視線を向ける。

「……そこまでは言つてない、けど……」

言いかけた。

羽並が、東海林の言葉に割り込んだ。

「言つたのと同じよ」

東海林には、よく分からなくなつてくる。しかし羽並の視線は、東海林の方に、真つ直ぐ、突き刺さる。

「…」

東海林は、何と言つていいか分からなくなる。

羽並は、東海林に続ける。

「確かにそれは、赤龍君の意志でもあるわ。赤龍君が東海林君のところに帰つてきたくないつて言つたら、それは仕方がないつてことになるわ」

羽並は言つた。

そななんだろうか。

東海林は考へる。本当に、赤龍はそんなことを言つだらうか。考えたくもないし、そのことについて、考へる必要もない。これはあくまで仮定の話だ。しかし、東海林はその中に、妙な息苦しさを感じる。

もし、赤龍が帰つてきたくないつて、東海林に言つたら？

俺に、言つたら？

東海林は、あの紙に書かれていた文字を思い出す。不恰好だが、それが東海林の喉を、変に詰ませた物。

『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行つてしまつぞ……』

本当なのか、嘘なのか、冗談に似た本当。

東海林にとつては、そう言う存在に他ならなかつた。つまり、そう言つことだつた。東海林は思つた。

少しばかり、東海林は口を開ざす。羽並は少し、東海林の方に視線を細める。

「でもね、それは東海林君がそうさせたのよ」

羽並は言つた。

東海林は、喉の奥が渴くような、そんな感覚に似たものを、その言葉に覚えた。それが正確に、どんなもののかは、はつきり言つて東海林には分からぬ。はつきり言つて、東海林には、本当に分からぬ。

「俺が…？」

東海林は小さく呟いた。

羽並は、「そうよ」と東海林にはつきり言つた。考える。俺が？俺が何をしたつて言うんだよ、赤龍に。赤龍は勝手に…。勝手に、俺の部屋を出て行つた？

考えた時だつた。

「…あ…」

東海林の声が、思わず言葉に表れた。その「…あ…」は羽並の耳に届く。そして、羽並は東海林に続ける。

「覚えがあるのね」

やつぱり、と言わんばかりの口調だつた。

東海林はそれを聞くと、反論できないような、そんな感覚で視線を伏せる。仕方がないが、それが事実だつた。

「…まあ、ちょっと」

そつ、本当にちょっとだ、ちょっとだけ。考える。

「…、」

羽並は、東海林の視線をじっと見つめる。東海林は、何か妙な、靈のようなものを感じる。しかしそれと同じくらい奇怪なものも、東海林の中で立ち込めてくる。妙に、かゆくなつてくる。

「…、な…何…」

東海林は羽並に言つた。

聞いた羽並は、東海林の方から視線を外すと、「嘘ね」と東海林に言つた。

聞いた東海林は、言葉を詰まらせる。口の中が、狭くなつたような感覚になつてくる。

「東海林君は、赤龍君と離れる原因を作つたのよ」  
それは不定じやない。

事実だつた。

それと同時に、羽並の一言一句は、東海林の現実でもあつた。なんとなく、気持ちが悪くなつてきた。

「…まあ、そうかもしれないけどさ…」

東海林は言った。

あの時、東海林が赤龍に言った言葉を、おぼろげながら覚えている。

お前なんて、出でつちまえ！！

東海林は、そう言ったことを覚えている。勿論、赤龍に向かつて。それが意味していることは、はつきりとその言葉に表れている。つまり、『出て行け』と言つことだ。確かにあの時、東海林は赤龍にカツとなつていた。東海林の居候のくせに、東海林の言うこともろくに聞かずに、ただ自分のゲームの事ばかりだつた。しかし、考えてみると、赤龍は確かに、東海林のためになることをたくさんやつてくれて、なおかつ、東海林の命を救つてくれたと言つても過言ではないくらいのことを、東海林にたくさんしてくれている。東海林はもしかしたら、赤龍から、たくさんのことをしてもらつているのかもしれない。もしかしたら、東海林がただ、それに気づけなかつたから、と言つことなのかもしれない。そして、もしかしたら、東海林がそれに気づけるのを、赤龍は待つているのかもしれない。だから、あんな手紙をよこしたのかもしれない。

東海林は思う。

「……いや、そうだね」

東海林は言った。

認めるわけじゃない。

ただそれが、東海林に遭つた事実だ。

結局のところ、心配とも言えないけれど、その赤い龍、赤龍は、ただ世界を飛び回っていた。きっといつか、赤龍のことを見ることが出来る人物が赤龍を見つけて、きっと「ドラゴンだー！」みたいなことを言うに違いない。ただ、それがヘブライ語だつたら困ったことに分からぬが。

きっと、ニュアンスで伝わる。赤龍は考える。それに、赤龍は龍だ。町中で人の会話を聞いているだけで、日本語くらいは覚えられたのだ。だつたら、少し時間をかければ、すべての国の言葉を理解することも、赤龍には可能かもしだい。それは、もしかしたら、赤龍が思つておうそこでうまく暮らして、そして、東海林よりもうまくやつて行けるかもしだい。

しかし、赤龍にはそんな気がしなかつた。

そもそも、赤龍が知つてゐるのは、『あの国に器が六人いる』と言つことだけであり、それ以上の事なんて知らなかつた。そもそも、そんなことを知つてゐるわけもなかつた。ただ赤龍が知つてゐるのは、東海林が器であるということであつて、そして東海林が、どうしようもない馬鹿で、どうしようもなく素直でなくて、そしてどうしようもなくお人よしで、どうしようもなく自分勝手と言つことだつた。

どうしようもない、赤龍は思つ。今考へても、本氣でそう思つ。本氣で、しようもなく思えてくる。東海林は赤龍のことを理解しているわけではなくて、ただ、理解なんてものをそもそも必要としているなくて、あつたのはただの、意思伝達だけだつたような気もしなくなかった。もしかしたら、赤龍にとつて一番意思伝達しやすかつたのは東海林かも知れないし、その東海林が、ものすごく馬鹿で、どうしようもないことばかりだつてことは、赤龍にもわかつたのだ。

そう言つ問題じゃなかつた。

そういうもんだいだつたら、きっとものすゞく簡単に、この問題は解決する。そんなに簡単だつたら、それは東海林が心を改めるだけで済んで、それを赤龍が、ただ見つめているだけで、ただ傍観しているだけでいいのだ。

そう言つ問題ではない、と言つことを赤龍は理解していた。

海に映る赤龍の姿は、いつもよりも青かつたような気がしなくもない。しかし、赤龍が青になることなんてなくて、赤龍は、どこまでも赤龍だつた。どこまでも赤龍は赤龍で、それでいて赤龍は、どこまでも東海林を、下に見すぎていたかもしかなかつた。

赤龍は考える。

そして、こんな言葉が人の言葉にあるということを思い出す。何でこの時、赤龍がその言葉を思い出したかなんて、赤龍には分からなかつた。

『他人は、鏡、自分を映し出す』

赤龍は思いながら、海の方に視線を向ける。

海には風もなく、ただ光が反射していた。波がなく、海だけ、時間が止まつてしまつたような、そんな風にも見えなくはなかつた。もしこれで、星空が背景にあつたら、きっと綺麗に映し出されるとだらう。赤龍は考える。

そして、赤龍はこの時も、妙に思う。

その星空を、赤龍の背中に乗つて覗き込みながら赤龍に笑いかけている、馬鹿がそこにいるということを、赤龍は不思議にしか思えなかつた。

東海林が、海面に映つているような、そんな気がしたのだ。

何故かなんてことは分からぬ。赤龍は、ただ昼間の空の下を、ただ飛んでいるにすぎないので。ただ、海の上を飛んでいるにすぎないので。

そこには、風なんてものは、きっと存在しなかつた。赤龍は飛んでいて、体に風を受けているよつた、そんな気もしなくはなかつた。

しかし、その風は妙に野暮つたくて、赤龍には、どうも、潮の香りと違うよりも、どこか汗臭いようなにおいにしか、感じ取れなかつた。

分からなくなつてくるし、わざとこのまま、分からぬのかもしれない。

赤龍は思つ。そもそも東海林が悪いのじゃ、東海林があんなことを言つから。

思いながら、海面が揺らぐ。  
赤龍の中には、背中に乗つた東海林が、笑いながら、海に映つてゐる星空を指さしてゐることは確かだつた。東海林は、赤龍の中ではどこまでも馬鹿で、どこまでも、馬鹿正直だといふことしか分からなかつた。

でも、と赤龍は思つ。

底に映つてゐる東海林が、どこか別の場所を指してゐるよつた気がしなくもないのは、赤龍の氣のせいでもなかつた。

赤龍は、海の方に視線を向ける。

海は青く、深く、そして蒼く、どこまでも赤龍とは真反対の、鮮やかな色をしていた。きっと今の赤龍の色は、あまり艶やかでない、不恰好な赤色だらう。塗り絵のクレヨンの線が、はみ出でしまつたような、そんな感じ。

赤龍には、赤龍の赤が野暮つたく感じた。こんなことは初めてだつた。蒼がいいかもしない、なんて思つたのは、これが初めてだつた。

赤龍は、自分の『赤』が好きだつた。そもそも自分の体の色だし、それを嫌いになる奴は少ない、とも赤龍は思つた。しかし、思わなかつたのが、どこまでも海に映る赤龍の色だつた。どこまでも映し出したようで、どこまでも写真のようにくつきりとしていて、ピンボケしていなくて、赤龍には困つたことになつてゐた。

まるで、海面が鏡になつたような、そんな風にも見えなくはない。でも、赤龍にとつて、そんなものは、鏡でもなんでもなかつた。

鏡と言つよりは、むしろ、『鏡の入口』と書つよつて、そんな感覚に近かつた。

ただ、そこにあつたのは、赤龍と、東海林の影だつた。ただそれだけだつた。

どこまでも、東海林は馬鹿だつた。

赤龍には、そんな風にしか見えなかつた。だから赤龍は、そんな風にしか考えられなかつた。

## ちょっとした時間割

次の時間割なんて、東海林は考えてもいなかつた。考えてもいなかつた、と言つのは、別に全く考えていないわけではなくて、少しだけ、別のことを考えていたと言つた方が正確だ。つまり、東海林は違うことを考えていた。

そもそも、東海林が考えるべきなのは次の時間割なんて言つ簡単で明白で、どこまでもわかりやすいことではない。もつと、東海林には、考えなければならぬことがたくさんあつた。しかし、授業のことを考えなくていいのかと聞かれたら、それは違う。そう分かっているのだが、東海林には、それがどうも、今は納得できそうになかった。東海林にとって、今一番やるべきことは、勉強ではない気がしたからだ。確かに勉強も大切だ。否定はしないし、否定はできない。ただ東海林はそれをしない。

それをしてくれるのは、赤龍だつた。

赤龍は、ゲームをやりながら授業の内容を覚えるとか言つ滅茶苦茶なやつで、そんなあいつがうらやましくて、でも、赤龍なしでは、東海林はろくに、点数も取れなかつた。つまりそう言つことに他ならない。

東海林は、どこまでも『非力』だつた。色々な面で、東海林は様々なことで非力だつた。今東海林が、何かで、誰かに勝てるのこと、と考えてみても、東海林には何も浮かばない。つまり、東海林一人に出来ることなんて言うのは、全く持つて何もなかつたのだ。ゲームもあまりしないし、勉強だつて、読書だつてしない。やるのは、赤龍との会話くらいだ。

そのくらいしか、東海林には取り柄がなかつたのだ。

つまり、そう言つことなのだ。

考えてみれば簡単なことで、気付けてしまえば容易なことで、そしてそれは、かなり重々しく、辛いことでもあつた。つまり、東海

林はどこまでも、辛かつた。

自分一人では何もできないことに？

東海林は考える。東海林はそれを、容易に否むことが出来る。

違う。

東海林は思う。

それは、もしかしたら何か大切なものを、見失った考え方なのか  
かもしれない。東海林は思つた。東海林が少しだけ、そんな考えをし  
ていることを、東海林は遺憾に思つた。それでいて、幻滅だつた。

東海林は幻滅した。

しかし、それと同時に、妙な皮肉感も生まれてきそうな、そんな  
気分だつた。しかし東海林に必要なのは、皮肉でも、遺憾でも、妙  
なもやでもない。授業は大切だが、この際あまり関係がない。

東海林に必要なのは、赤龍かも知れない。

東海林は考える。

「つまり、この『had had』はいつも通りの『持つ』と言つ  
意味ではなくて、『ずっとなになにを持つて』と言つことにな  
る。少し慣れない形だけど、『have + p.p.』だからね、  
ちょっと仕方がない」

英語だつた。

訳の分からぬ言葉の羅列が、黒板の中で踊つている。そしてそ  
れは、東海林は全く持つてどうでもよくて、今必要かもしない物  
は、羽並の助言だつた。

羽並は、何かと言つていろいろと分かつてゐた。そして、何かと  
言つて様々なことを理解していだし、何かと言つて、色々なことを  
冷静に受け止めていた。口癖はいつも通りだつたが、それ以外は、  
特に何でもなかつた。

つまり、そう言つことだつたのだ。

今東海林に必要なのは、プロの意見だということだ。そして羽並  
は、プロだつた。東海林の知る、一人のプロだつた。

そう、つまり羽並だ。

東海林は思つと、いつの間にか、羽並の方に視線が向いていたことに気がつく。別に気が合つわけでもないし、特に何がどうと言つわけでもない。ただ東海林に、用事と言つ物があつただけだ。その方向に。

羽並に聞けることはたくさんある。例えば、赤龍とビーフやつて寄りを戻せばいいのか、とか、そう言ったことだ。

勿論、香奈のことは非常に気になる。樹になりすぎて、眠れるかどうか分からぬほどにだ。しかし、赤龍のことは、もしかしたら、東海林にとって一とも二ともつかない、火にならないほどの物なのがもしそれない。

何だか、不思議な感覚だつた。

そう言つた物事に、順位なんてものを付けることは出来なかつた。それに、そんなことに順位をつけることは、逆に自分を混乱させることに他ならなかつた。

ただ東海林は、実行すればいいのだ。

それが、東海林に出来る唯一のことかもしけない。チャイムが鳴る。あまり耳に入らない、もうなじみ過ぎて、今は存在すら、ただの時計代わりの物でしかない。

「お、終わつたな、それじゃあ起立！」

この先生は、委員長に号令を言わせるとは無い。

「氣を付け！ 礼！」

しかも早い。

しかも、みんな「ちやー」ちやーと何かを言つて、もう既に解散状態になる。それでもその先生は、職員室に帰つて行く。

東海林は、ただ羽並の方に足を運ばせる。

羽並は、英語の授業の片づけをしている。教科書やノートを、一つにまとめていた、丁度その時だつた。

「個岬さん」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「ん？」と言ひながら、東海林の方に視線を向け

る。東海林は、どこまでも真面目で、どこまでも真つ直ぐな視線を羽並に向けている。

それ以外にすることがなかつたし、多分それ以外は、東海林の中ででも、誰のなかででも、ありえないことだつた。

「どうしたの？ 東海林君」

羽並は、いつものはきはきした口調で言つ。さつきのことは、まるで何もなかつたかのよつた、そんな口調だつた。

東海林は聞くと、羽並に言つた。

「聞きたいんだけど、いい？」

東海林は言つた。

羽並は、少しだけ視線を細める。東海林は、どこまでも真つ直ぐと、羽並の方に視線を向けている。時間がゆつたり流れて行つて、そして、東海林と羽並の間で、徐々にそつとつたものが、なくなつて行く。

「何かしら」

羽並は、どこか試すよつた、そんな視線を東海林に向ける。

東海林は、ただ羽並の方に答えた。

「赤龍と、どうやつたら寄りを戻せるか」

聞いた羽並は、少しばかり微笑んだ。

また、手掛けりがなくなつた。

でも、また一つ手掛けりが増えたことも事実だつた。その手掛けりは、殆ど手がかりとは呼ぶことのできない物だけれども、ちゃんとした形が存在することは事実だつた。それには、ちゃんとした形が存在していた。それを、香奈は見たのだ。

ちゃんとした形があるということは、ちゃんと存在しているということだ。つまり、それについての情報が、この世界には存在している。

情報なんものは、今ではどこででも手に入れることができる。ネットだろうが、テレビだろうが、市場調査だろうが、世論だとか。

勿論、ゲーム屋でもだ。

もしかしたら、そつちの方が一一番、情報屋、と呼ぶにはふさわしいかもしぬなかつた。そもそも、ゲーム屋以外に情報を、深く取り扱つているところなんつものはない。そもそもそんなものは存在しないし、そもそも、情報屋なんつもののが存在するかどうかも、世間的には怪しいものだ。

しかし、それは実在する。それがボランティアなのか、それともちゃんと、どこから収入を得ているのか、それは香奈には分からなかつた。はつきり言つて分からなくてよかつたし、分からなくても、そんなに問題はなかつた。ボランティアだらうが何だらうが、香奈にはどうでもよかつた。

香奈は、情報が得られればいいだけなのだ。

つまり、得られるのならば、ネットでも電話でも、何ででも調べるだらう。しかし、そんな薄っぺらな情報だけでは足りないから、香奈はあの店に行くのだ。

### ゲーム屋。

香奈は、空を飛んでいた。正確には、黄龍に乗つて、空を飛んでいた。しつかりとした黄龍の感覚が、香奈にはあつた。しつかりとした感触が、香奈の手に伝わつて来ていた。黄龍のぬくもりかどうかは分からぬ。秋風の、涼しげな感覚だつただけかもしれない。しかし、それは確かに、黄龍の感覚だつた。

「ハンスに、結局言わなかつたわね」

黄龍が、香奈に言つた。

聞いた香奈は、「でも、ハンスさんにも、これ以上心配を掛けたくなかったのよ」と弁明氣味に、黄龍に言つた。

黄龍は聞くと、「……少しばかり、考えるように黙り込む。

「それに、ハンスさんに言つたところで何も変わらないわ。私の、これからする行動にはね」

香奈は言つた。

「確かに」と黄龍も呟いた。

それは確かにことで、黄龍の中で香奈が、華奢と言つよりも、どこか強気な風にとらえられた。あくまでも、強気なだけだ。

それか、みんなを守りたいと思う心、だらうか。黄龍は考へる。さつきのハンスのことにしたつて、香奈はまつすぐと、はつきりとした声で言つていた。黄龍の背中に乗つているせいか、目までは見ることが出来ないが、その声は、飛びながら聞いていても擦れず、そして、どこまでもはつきりとした、そんな真つ直ぐな声だつた。

香奈は本氣だ。

それ以外に、あり得なかつた。香奈にとつても、黄龍にとつても、きつとそれは決まつたことだつた。香奈は、それほどまでに本氣だつた。本氣以外の何物でもなかつた。香奈は非常に本氣だつた。

そして、それに伴う物も、ちゃんと香奈には分かつていて。それにどれほどのものが伴つて、どれほどのものが犠牲になるのか。香奈にははつきりと、手に取るより容易に分かつていて。しかし、それで香奈が得ることは、『守る』以外、外なかつた。

それで、香奈は十分だつた。

香奈は、守りたいのだ。自分の大切に思つてゐるものを、全て。勿論黄龍もそのうちに入つてゐる。しかし、黄龍は香奈のより理解者であり、よきパートナーだつた。それは、すでに実感していたことだつた。

お互ひを大切に思ひあつてゐるからこそ、他の物を守りたいと思うのは、尙更あたりまえな話なのだ。

そう言つことだ。

香奈は、心の底から思つてゐた。そして、黄龍もきつと、心の底からそう思つてゐるはずだ。そうでなかつたら、今しようとしている香奈の所業に、きつと同行することはしなかつただらう。いくら居候と言えど。

「黄龍…」

香奈は言つた。

黄龍は、飛んでいた。香奈を乗せて、新宿の方へ、高速で飛んで

いた。下手な車よりも、もしかしたらスポーツカーよりも速いかもしれない、しかしそれ以上に、香奈は黄龍とのつながりと言つ物があることを、実感していた。

黄龍は、「ん？」と小さく香奈に言った。

それは香奈に向けられたもので、それ以外の誰に向けられたものでもなかつた。それなりに、黄龍にとつても、香奈は大切な存在に他ならないのかもしれない。

香奈には、少なくともそう見える。それに、香奈はそう思いたい。そして、香奈はそれを信じている。

だから、香奈は黄龍に、こう言つしかなかつたのだ。

そもそも言つしかなかつたし、香奈自身も、その言葉を黄龍に言いたい気持ちでいっぱいだつた。もしかしたら、言つ場所が違うかもしれない。しかし、香奈はそれでも、黄龍に言つたかったのだ。

「…」

「…、」

「…、」

「…、」

香奈は黄龍に、はつきりと言つた。

少しばかりの沈黙。思考の巡りが悪くなる。しかし黄龍は、すぐ

に香奈へ言葉を放つ。

「それは、香奈が今やつとしむことが成功したら、言つて頂戴」

黄龍は言つた。

香奈は、それでも言つたがつたし、言つタイミングを誤つたとも思つてはいなかつた。香奈にとつては、その時間は貴重だつた。

ただ過ぎていくだけの重要な時間が、風のように吹きぬけて行つた。

すこしは、見込みがあつた、と言つことだろつか。羽並は、異獸いじゅうに侵されつづある思考を、自分なりに巡らせた。

羽並はその一言を聞いて、考えた。その話題を、あの話をされてなお、自分からしに来るということは、相当な『覚悟』と言つ物が

あるはずだ。それがどんな結果であれ、それを受け入れるだけの覚悟が、本人にはあるはずだ。

まがいなりにも、それは自分の思考だった。

「聞きたいの？」

羽並は、脅すように東海林に言った。

それを聞いた東海林は、一瞬息をのんだ。その瞬間を見計らつたかのように、更に羽並は東海林に言い詰める。

「もしかしたら、さつき東海林君が言つたみたいに、赤龍君が『帰つてきたくない』って言つかもしないのよ？その可能性は、東海林君がよく分かってるはず、でしょ？」

いたずら気ではあるが、本気でもある言葉だった。

聞いた東海林は、「…、うん」と羽並に答えた。しかし、それだけが東海林の答えとは限らない。

「でも、俺も赤龍と寄りを戻したいし…、それに赤龍も…、」

東海林は言葉を詰まらせる。

自分が言いたいことは、あまりにも自己中心的だ。

解釈だった。

「赤龍君も？本当にそつかしら？」

羽並は言った。

東海林は聞くと、「…、寂寥感を孕んだ沈黙で、口を紡いだ。

「本当に、赤龍君は東海林君の下に戻つてきたいと思うのかしら？」

羽並は言った。

それが問題なのだ。

東海林もそれを納得していた。つまり、赤龍が帰つてきたいと思うか、それともそつは思わないか。それが問題だった。

はつきり言って、それは恐怖と類似いていた。類似と言つよりも、酷似の方が近い。それは、裏切るか裏切られるかと言つ問題に近い。

東海林はそれを、自ずから否定する。

違う、それはちょっと違う。いや、ちょっとでもない、すぐ違

う。

ただ、東海林が『思いたい』ことだけが、赤龍の『考えていること』と言つわけではない。それだけのことだ。

裏切るか裏切られるか 赤龍がまだ、東海林のことを受け入れてくれるのか。

置き換えと言つか、どちらかと言つと後者だつた。  
つまりそう言つことだ。

これはあくまで、東海林が招いた問題なのだ。東海林が招いた問題に、ただ東海林が直面しているだけなのだ。それはあたりまえな話だし、それ以外は、東海林だつて『ありえない』と思えるほど、それは単純な話だつた。

東海林の問題なのだ。

違う、東海林が作り出した問題なのだ。

それだけのことだ。それを解くのは東海林だし、赤龍ではない。それに、赤龍はそれを、『正しい正しくない』ではなくて、『自分の気にくつ気にくわない』で判断する。

赤龍が答えなのだ。つまり、赤龍にしか答えはない。赤龍にしか答えは無くて、つまり、東海林の中には答えがない。

本当に、

東海林は考える。

本当にそんなんだろうか。本当に赤龍は、俺にヒントも残してくれていないのだろうか。赤龍は、本当に、俺には何も残してくれていないのでだろうか。

考えてどうにかなることでもない。

ましてや、考えなくては何もならない。

つまり、どうしようもない？

考えてどうにかなることではない 考えなくてはそもそも何もならない あきらめるわけにはいかない。

そう言つことなのかもしれない。

赤龍が、東海林に残したヒントなのか。

それとも、赤龍自身がヒントなのか。

東海林はふと思い出す。あの手紙の内容を、東海林は、快くなく、しかししっかりと、東海林はそれを見据えた。

心の中で、読み上げる。

東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ！！  
それは、赤龍の本意かもしない物。そして、大介の部屋に残されたもの。

つまり、と東海林は考える。

つまり、それが意味することは、ヒントかも知れないということだ。  
しかし、それが意味するヒントなんでものを、東海林は理解できなかつた。何かのアナグラムなのか、それとももつと、他の何かのか、なんてことは、東海林には分からなかつた。

しかし、

東海林は思った。

それが赤龍の思つてていることなのだ。赤龍の思つていることが、

『東海林の馬鹿、赤龍は本当にどこかに行ってしまうぞ！！』なのだ。

だつたら、東海林は答えを見つけたかもしない。

「…、確かに、あいつは、そうは思わないかもしない」

東海林は言った。

一瞬、羽並の表情が真剣になつた。真剣に、羽並は東海林の方へ視線を向けていた。東海林は、東海林なりにしつかりとした表情をしている。東海林なりの答えと言う物を、見出している。

迷路みたいな出口なのか、外へ出るための入り口なのか。

「確かに、戻つてきたくないと思うかもしれないし、もしかしたら、もうどこかで、新しい生活を始めてるかもしれない」

東海林は続けた。

羽並は、東海林の方に、ただ真剣に視線を向けていた。東海林が、これからなんというのか、羽並には分からなかつた。しかし、分かつたら何もならない。そもそも、そこまで羽並は、人の心を読むことにたけているわけではなかつた。

「でも、」

東海林は言つ。

羽並の視線が、一瞬和らぐ。

「俺は、赤龍と一緒に、飯が食いたい」  
本当の事だつた。

続ける。

「俺は、赤龍と一緒に学校に行きたい。赤龍と一緒に勉強して、赤龍の力を借りて、そして、俺があいつをまた、寮に泊めてやりたい」  
東海林は言つた。

それは、はつきりとした感情に近い物だつた。東海林にとつて確かなものだつたし、これ以上確かなものも、東海林にとつては珍しかつたかもしれない。それは今までにないくらい純粋で、はつきりした意志だつた。

「俺は赤龍と一緒にいたいんだ」

ただそれだけだ。本当に、ただそれだけ。  
まとまつていて、簡潔で、それでいてはつきりして、  
そして純粋。

聞いた羽並は、少しばかり東海林の話を、頭の中でまとめ始める。少しだけ目を閉じると、すぐに開ける。東海林を、羽並は視界に入れる。

羽並は、東海林に微笑む。

「まさに、純真ね」

羽並は言つた。

東海林には、その一字熟語を、うまく聞き取ることが出来なかつた。でも、それでもいいと東海林は思った。

「…」

東海林は、少しだけ小さく息を吐くと、羽並の方に視線を向ける。羽並は、さつきよりも東海林を食い入るようには見ていない。しかし、今度は微笑んでいる。その理由を、東海林は知らない。今の東海林はあくまでも『純真』なのだ。純真で、それ以外なんでもない。

「もし、それ以外の理由だつたら、理由にもどつてだけ、考え方だつたけど、まあいいんじゃない？」

羽並は言つた。

東海林は聞くと、少しだけ顔を明るくした。

「じゃあ…」

と東海林は言いかける。

それに歯止めをかけるのも、また羽並だつた。「ちょっと待つて、

」と羽並は言つと、東海林はぴたつと、言葉を止める。

「でもそれは、ぎりぎり合格点つてだけ、もつ少し、東海林君は考える必要がある、」

羽並は言つ。

東海林は、小さくため息を吐く。これでも結構考えた方なんだけどな。東海林は本気で思つ。

「でも、合格点は合格点、男群の仲間にしては、結構いいセリフ吐くじゃない、コノコノ」

とか言いながら、羽並は東海林を軽く、肘でざついてくる。

東海林は、何だか変な気分になつてくる。はつきりと、どうとほ言えない、そんな気分だつた。靄とは違う何かだつた。

「あ、あは…」

東海林は笑うしかなかつた。

羽並はすぐに、東海林へと言つた。「教えてあげるけど、ちゃんと自分で考えてね？」どこか、いたずら気な、そんな口調だつた。

羽並は、東海林にこう答える。告げる。

「ハンスよ」

東海林の思考が、一瞬迷つた。

ハンスが、一体何なのか、そもそも東海林には分からなかつた。

ハンスだから何なのか、と言うよりも、ハンスそのものとの関係が、東海林には今一、つかめなかつた。

「…、ハンス？」

東海林は聞き直す。

聞いた羽並は、「そう、ハンス」と東海林に答える。それは、はつきりとした口調で、とてもしつかりとした視線で。

「何でハンス……？」

羽並は聞くと、少し幻滅そうに「もう……、ちょっと見直したと思ったら、男子つてこれだから……」頭を抱えるような、そんな仕草を見せる。東海林には、羽並が何を言いたいのか、はつきり言って分からなかつた。

「もうちょっと頭を柔らかくしてよ……」

羽並は言った。

東海林には、言われても、どこまでも分からぬ。

「……」

東海林は少しばかり考えてみる。

ハンスと言つたら、幻術、D E P、それからユーカにライカンに春香に……、それから、えつと……、うーん。

分からん。

東海林は、結論に達した。

「分かんないんだけど……」

東海林は言った。

聞いた羽並は、「もう……」と小さく東海林に言った。それを聞いて一番困るのが、東海林だつた。

「いい?ハンスに会えば、幻術を使つてもらえる。幻術は、『特定の人物に幻覚を見せる』術つてことは分かつてるでしょ?」

東海林は頷く。

「もう分かつたでしょ?」

羽並は言った。

東海林は、さつきの羽並の説明を、頭の中で繰り返す。幻術はある特定の人物に幻覚を見せる術。

ある特定の人物 赤龍。

あ、そつか、そう言つことか。

東海林は思いながら、羽並に尋ねた。

「あのさ、幻術つて離れてても使えるの？」

東海林は聞いた。

一瞬、羽並はぽかんとなる。東海林の言つていることが、あまりにも外れたことを言つているから、ある意味、何を言つていいのか分からなくなる。

「…、知らなかつたの？！」

ある種の驚きだつた。

しかし、東海林は羽並ほど、そう言つた術に詳しいわけではないし、そもそも東海林に分かるのは、幻術と音魔おんまぐらいだ。それ以外は分からぬ。それに、知つても、そもそもその言葉を使う機会えないだろう。

「…、知らなかつたけど…、」

東海林は言つた。

羽並は、少しばかり呆れた風な、そんな視線を東海林に向ける。その視線を向けられて一番困るのは、他ならぬ東海林だ。それ以外には誰もいない。

「よく私たちについて行けたわね…」

少し頭にくる。

東海林は思いながら、その気持ちを抑える。それ以外に、するべきことがなくなる。

「…、悪かつたな…」

東海林は小さく呟いた。

それを聞いた羽並は、「まあ、いいわ」と東海林に言つ。全く、いいのか悪いのか、本当にはつきりしない。

東海林は内心、本心から呆れてくる。

「つまり、ハンスさんの所に行けば、赤龍君とコンタクトが取れるつて訳よ。ハンスの幻術を使って、ね？」

それは分かつた。

東海林は一度、軽く頷いた。

「俺は、ハンスさんの所に行けばいいんだな？」

東海林は、確認を取るように言った。

聞いた羽並は、「ええ、私が思いついた方法だけど、でも、出来なくはないはずよ」と東海林に言つた。

出来なくはない、じゃなくて、出来る、じゃないと困る気が、東海林には少ししてくる。しかし、特に何を言おうとは思わなかつた。

「それに、」

羽並は言つた。

東海林は、羽並の方に視線を向ける。羽並は、どこか嬉しそうで、どこか悲しそうで、それでいて、どこか気楽そうで本気そうな、そんな視線を東海林に向けた。

「私も、東海林君に、赤龍君と仲直りしてほしいし、」  
羽並は言つた。

別に、東海林は驚かなかつた。

そう思うのは、東海林だけではなかつた、と言うだけのことだ。別に驚くべきことでもない。そもそも、東海林には驚きすらこみあげては来ない。

「そつか、やつぱり、俺が非力なのは辛い…って感じ?」  
東海林は聞いた。

羽並は、少しばかり目を閉じる。「つづん」と一度、頭を横に振つた。いたずら気な視線を、東海林の方に見開く。

楽しそうで、どこか強気な目だつた。

「もつと考えなきやいけないぞ、東海林君」

本当に、いたずら気だつた。

それが、一番東海林が驚いたものだつた。

チャイムが、教室に鳴り響いた。

一番いい選択だと思つたし、それは今でも同じだつた。その選択は、香奈にとつては正しいものだつた。正しいものだつたし、それ以外にありえない物だつた。それに、もしそれ以外の選択肢なんてものがあつても、香奈はそれを、受け入れられるか分からなかつた。

それが、今の香奈だつた。

香奈は、長机と椅子の置いてある、あの埃っぽい部屋に来ていた。

そこにいるのは香奈と黄龍と、そしてもう一人。

「長富さん」に、聞きたいことがあるんです」「

長富はそれを聞くと、面倒くさそうな、びりでもよせやつな、しかしはつきりとした口調で答えた。

「知つてゐ、だつて、そうでなかつたらこなんとい、来ないはずだからね」

分かつてゐるような、そんな口調だつた。

聞いた香奈は、おうつゆうお方に視線を向ける。黄龍は、いつもでも長富に慣れそつもない雰囲氣で、見つめていた。

そこは、とにかく空間が歪んでいた。物理的にも、他の様々な観点でも、その部屋は歪んでいた。普通に見ると歪んでゐるようには見えないが、そこは、確実に『何か』が歪んでいた。空間は、その一つに過ぎない。

「それじやあ、私たちが何を知りたいかまで、分かつてゐる?」

黄龍は、試すような口調で、長富に言つた。

聞いた長富は、その問いに即答する。

「分からぬし、俺に直接関係ない」

黄龍は、どこか気にくわなかつた。

香奈は別に、気にしてない風な雰囲氣で、長富に言つた。

「いいですか……?」

長富は、香奈の方に視線を向ける。黄龍を見る時と同じような、お客様を見るような視線でもない、ただの、どこまで行つても視線なだけの視線。

「ここは情報屋」

そして、ここはどこまでも情報屋だつた。

ゲーム屋の裏の、情報屋。

聞いた香奈は、少しばかり口もつたあと、長富は、はつもつといつた。

「あの、調べてほしい人がいるんです」

香奈は言った。

黄龍は、少しばかり視線を細めた。

聞いた長富は、「また?」と香奈に、面倒くさそうに言った。香奈は聞くと、一度、はつきりとした返事をした。「はい」、それはどこまでも屈くような、そんな真っ直ぐなものだった。

聞いた長富は、少しばかり考える。そして、香奈の方に視線を向ける。

「名前は?」

聞いた香奈は、はつきりと答えた。

「ジョーン・エリザリータです」

はつきりとした声だった。

そう、ジョーン・エリザリータ。

昨日、このゲーム屋の表に出た瞬間対面して、そして何とか攻撃を躊躇つつ、相手の攻撃手段を奪つて、持ち越しにした人物。明らかに、畔と使っている武器が違つたのだ。

使っている武器は、『拳銃』だった。

そう、拳銃に似た拳銃。

しかし、その『拳銃』はリロードを必要としない、どこまでも弾なんてものが必要ない拳銃だった。

拳銃なのがどうかすら、香奈には分からぬ。

しかし、それは確実に、何かの確信に近い物だと、香奈は確信していた。香奈は、それが香奈の差がしている物に近い物だと、分かっていたのだ。

「分かった」

どこまでも面倒くさそうな口調で、いつも長富は答える。椅子から立ち上がると、長富は、埃だらけの底の空気を、少しばかり吸い込んだ。

咽はしなかった。

「探してくる」

長富は言つと、埃だらけの本棚の間の、暗い奥を、縫つよつて進んで行つた。

探しに行つたのだ。

香奈は、それを見てなんとなくほつとする。『情報』に『屋』までつくるのだから、もしかしたらお金を取るのかもしれない、と考えたのだ。しかし、それは無いようだつた。それは無いようで、どこまでもお金は取らない。そう信じたいし、もしお金を要求されても、何も支払うことは出来なかつた。

でも、お金は取りそつもないような、そんな雰囲気だつた。

「ふう……」

香奈は小さく、安堵に似た息を吐いた。聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。

「やつぱり、香奈も苦手なの？」

黄龍は聞いた。

それを聞いた香奈は、「え？」と黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、どこか真っ直ぐな視線なのに、香奈は、どこかよく分からぬような、そんな視線を向けていた。

「苦手つて？」

「どこか、明るいような、そんな口調だつた。

少しだけ、ではあるが、香奈は笑つてゐるよつて見えた。黄龍の氣のせいではない、と黄龍は思う。

「……ほら、あの長富つていう店主」

それを聞いた香奈は、長富の顔を思い浮かべる。香奈は、少しばかり、長富の一日のお行動を考えてみる。

朝起きる店のカウンターに座る ずっと座つてゐる ただ座つてゐる ラジオが鳴つてゐる 寝る。

うーん、と香奈は思い浮かべる。

はつきり言つて、長富が送つていそつな一日なんでものを、香奈は想像もできなかつた。想像が出来ない、と言つよつは、いつも何をやつてゐるのかわからぬような、そんな雰囲気。

「苦手っていうよりも、不思議？」

香奈は言った。

黄龍は、少しばかり訳が分からなくなつてくる。視線まで香奈に、訳が分からぬ風な目になつて行く。

「不思議…、つて？」

長宮が不思議、と言つのを黄龍はうまく飲み込めない。確かに不思議かもしれないけど、そこまで不思議でないような気もする。そもそも、不思議な気がしないのは、黄龍だけだろうか。黄龍は、はつきり言つて不思議ではないと思つている。

「ほら、何だかそんな雰囲気じゃない？隠された黒い仮面、みたいなね？」

香奈は言った。

黄龍には、もつと訳が分からなくなつた。

「…、隠された、黒い仮面？」

黄龍は、尋ねるように香奈に言つた。聞いた香奈は、「うん」といい声で、黄龍に言つた。そんな声で言われても、分からぬ物は分からぬし、どこまでも分からなかつた。

「ごめん、もつと分からなくなつたわ」

黄龍は、どこかあきらめ気味の口調で言つた。

「そう？」

香奈は、どこか不思議そうな視線で、黄龍の方に視線を向ける。

黄龍は、どこまでも訳が分からぬさうな表情で、長宮が情報を持つてくるのを待つていた。

東海林には、授業なんてものは無いも同然だつた。先生の言葉が、東海林の目の前を通りすぎて、東海林の中に全く入つては来なかつた。東海林の中では、もうすでに、別の意識が出来上がつていた。そもそも、東海林は勉強をする気なんてものはさらさらないし、東海林に『ハンスの所へ行く』以外、何をしたいと思っているわけでもなかつた。もしかしたら、今日は部活を休むかもしない、と東

海林は思った。

「だから、このファンデルワールス力っていう力が働いて、ドライアイスが出来上がってるんだぞ。でも、ドライアイスの式、誰か言える人」

化学だった。

と言つても、東海林に化学をする気はないし、そもそも東海林は、化学以上の力の存在を知つてゐる。それが理屈をどう弄つても、どうこねくり回しても、理論として成立することはおそらく決してない物。

東海林はそれを知つてゐる。

器の龍を見る力と、術師の術を使う力だ。

そもそも、龍と言う物を見るためには器でなければならぬし、術を使うなら術師でなければならない。ハンスの説明によれば、術師を人工的に作り上げることは可能らしいが、それはある種のリスクを伴う。

そう考へると、器つて何だ？

東海林は考へる。術師は『術を使う』奴らのことだ。術なら、つかえてもきっと損はない。東海林はハンスを見ていて思う。ハンスはよく、幻術を使ってぼろきれを『お金』に変えてしまう。そしてそれは誰にも気づかることなく、どこまで行つても『お金』として処理されることになる。誰かが、『何かおかしい』と思わない限りは、きっとそうあり続けるだろう。東海林は考へる。

それに、術なら、つかえて損はない。護身もできるし、相手を見抜くことだってできるかも知れない。無いものを、机から取り出す子音だって可能になつてしまつ。それは羽並がよくやつてゐるから知つてゐる。

それだったら、器はどうなるんだ？

東海林は思う。

そもそも、器と術師の違ひって何だ？東海林は本氣で考へる。

器は術師ではない。根拠は、術師は術をいう物を使えるが、器は

それを使うことが出来ない。また、術師は術を使用している間しか龍を見ることが出来ないらしいが、器なら、いつでも見ることが出来る。

これが違った。

東海林は思う。やつぱり、器の存在が、おかしい物だと思つ。術師なら、なんとなく分からなくはない。術を使えるし、かつこいいし、それに何だつてできる。龍だつて見ることが出来てしまつ。しかし、器はどうか、と聞かれると、龍を見るだけだ。龍を見ることが出来るだけで、それ以外何もできない。それ以外は、ごく普通の、一般準ど何も変わらない。

つまり、そう言つことだ。

なんとなく、そう考えるだけで器が、術師に劣つているような気がしてしまつるのは氣のせいか、と考えてしまつ。

しかし、と東海林は思う。

何故か、器には『龍』が付きやすい。東海林には、以前赤龍がいたし、大介や雄大や香奈なんかは、龍を自分の居候んしてしまつている。以前の赤龍だつてそうだ。

もしかしたら、器は龍を『居候に出来る』能力みたいなものを持つてるのか？

東海林は考えてみる。

「それじゃあ、寺山」

先生の声が、東海林の耳を突いた。

「え…ッ！」

とか東海林は言つ。

どうやら今は、化学の授業らしかつた。東海林はそれすら、頭の中にはなかつた。頭の中には、赤龍と、その他もうもうの雑多なこと。

「ドライアイスの化学式は？」

先生は東海林に尋ねる。

そもそも、そんなものを答えられる人間がこの世にいる氣がしな

いのは東海林の氣のせいだらうか。東海林は考える。そもそも東海林には、何を聞かれているのかよく分からなかつた。

何だつて？化学式？

考えて出てくるものではない。

「えつと…、」

そう言えば、ドライアイスつてあつたな、なんか、ケーキに入れ  
る奴だつけ？

東海林は考える。そして、少しばかり考えて言つた。

「えつと、」

東海林は考える。そして、考へても出てこないことがはつきりす  
る。

「それじゃあ寺山、ドライアイスつて何からできてる？」

先生は東海林に聞く。

どこまでも真つ黒で、それでいて暗澹に陥れられそうな、そんな  
瞳。

東海林はどこまでも沈黙する。

「…、あ…」

東海林は言つた。

そうだ、確かあの白い煙の出る奴だ。

考へると、東海林はすぐに、今までの授業の内容が頭の中で鮮明  
に蘇つて行く。

「お、分かつたか」

先生は、どこか嬉しそうな視線で、東海林に言つた。

東海林は聞くと、「はい」と呴くように、しかししつかりと、先  
生に言つた。

「C10H8!」

東海林は言つた。

その後、クラスにどつと、笑いが押し寄せってきた。

つまり、東海林は馬鹿だつた。

つまり、東海林は『非力』だつた、と言つことだ。

「えつと、…それはナフタレンだな、よくそんなもの言えたなって気がするけど…」

先生は言った。

東海林は、よく分からなくなつてくる。何が正しいかなんてことは、東海林には分からないし、東海林はそもそも勉強が嫌いだつた。「まあ、寺山がナフタレンの式を挙げてくれたから、ナフタレンで考えてみようか…」

先生は、どこまでも慈悲深かつた。

黒板に、訳の分からぬことを書いていく。

東海林は、段々と目を外の方に向けていく。何処か遠くの、海が近そうな、そんな場所を眺めていた。

天野下は、そもそも海なんてなかつた。接してさえいなかつた。しかし、東海林は、海を覗きこんでいるような、そんな気分になつてきた。それは間違いではなかつたし、東海林は海を覗きこんでいた。鏡みたに淀みのない海に、東海林は顔を覗き込ませていた。他人は自分の鏡、と言つ言葉がある。東海林はその言葉を、テレビや大人から、嫌と言つほど聞かされていた。はつきり言つて、だから何なのか東海林にはよく分からなかつた。しかし、なんとなく、分かるような気がしてくる。

赤龍は、どこまでも東海林と一緒に、東海林だったのかもしだい。

東海林は考える。赤龍は、どこまでも自分の主張を曲げなかつたし、東海林だつて、どこまでも自分の主張を曲げようとはしなかつた。けつか、突つ張つてしまつたのだ。

お互い。

東海林は、海の中に映つている物を見つめている。ただそれだけだ。海には魚さえ泳いでいるなくて、そこにあるのは、東海林の顔と、それから大きくて、なにか優大な影。

翼を持つその影も、東海林と一緒に映つていた。

違う、東海林がその影の背中に乗つっていたのだ。東海林は、その

巨大な、大きな蝙蝠の翼を持つ生き物に乗りながら、海の中を、ただひたすら覗き込んでいただけだった。

どこを見るんだ俺は。

東海林は思った、その瞬間だった。

「あ、起きた」

先生は、チョークをダーツの矢のように構えながら、東海林の方に、ある種の笑みを浮かべていた。

つまり、チョーク投げだ。

そんなものが実在するのかすら、東海林には怪しいものでしかなかつた。しかし、今日の前にあるのは、まさにそれの一段階前だつた。あとはチョークを、ただ目標に向かつて投げるだけ、と言うような、そんな構えだつた。

「あ、えつと……」

東海林は言った。

「授業中だからな、一応言つておくけど」

先生は言った。

東海林は聞くと、少しばかり口をもじもじと動かした。少しばかり、何をしていいのか分からなくなつてくる。

「それに、多分このクラスで一番『ドライアイス』について分かつてないのは東海林だから、ちゃんと起きてるんだぞ」

クラスに、若干の笑いがもたらされる。

もしかしたら、今日香奈がいなのは、ある種、東海林にとつて幸運なことだつたのかもしれない。

東海林は考えた。

そう考えられるほどに、東海林は少し赤くなつていた。

「……はい……」

東海林は言いながら、資料集のページを開いた。

長富の資料は、こう言つたものだつた。

「ジョン・エリザリータ。出身はイタリアで、学校は中退してゐる。

年齢は十五で、丁度同じくらい。性格は微妙なところだね、人の性格が好きで、色々な性格を知りたがる。それでもって、新しいものが好きで、さまざまなものを見たり聞いたりしたがる。日本語が出来て、属性は東海林君たちと同じ、火炎「

そこまでは、まだなんとなく分かつていた。

一つだけ、引っかかった単語があった。

「属性？」

香奈は聞いた。

黄龍は、少しばかり長富の方に目を細める。「なんだかゲームみたいね」と、黄龍は長富に、思ったことをそのまま告げる。

聞いた長富は、「その方が、受け取りやすいと思って、」と黄龍に返す。やはり、黄龍はあまり長富が得意ではない。思うと、黄龍はすぐに口を閉ざして、長富の方を、ただ眺めるだけにする。「とりあえず、属性っていうのは、その人の持つている波長みたいなもので、色々なのがある」

長富は言った。

それを聞いた香奈は、「ふーん」と小さく呟く。

「それで、他に何か」

長富は、少し面倒くさそうな口調で、香奈に聞いてきた。

聞いた香奈は、「ジョンは拳銃を持つてたはず、そのことについて、教えてほしいの」と長富に言った。

長富は聞くと、少しも鈍くない動きで、新しそうなファイルをめくる。そして、その部分を『翻訳』<sup>まじゅう</sup>する。

「銃についての関係、えーっと、魔銃の使い手で、本人は『魔銃リンドブルム（Lindwurm）0211』を使ってるみたい。それでもって、」

聞き逃せない単語を、長富は確かに呟いた。

「マフィアの一員みたいだね」

それ以上に聞きなれない単語が、香奈の耳を突いた。

一瞬、何の事が全く分からなかつた。全く分からなかつたし、は

つきり言つて何だかもよくなれば分からなかつた。

「マフィア？」

香奈は長富に呟いた。聞いた長富は、「ん？」と一度香奈に言つと、「うん」と言い直す。はつきり言つて、何の事だか全く分からぬ。それに、何故そんな単語がここで出でてくるのかすら、香奈には分からなかつた。

聞いた香奈は、「……」頭の中で様々なことを考える。それ以外に何もできないともいえるし、考えるしか、その歪んだ部屋にはなかつた。どこまでもビール張りではない、どこ高もわからないようなく分からぬ場所の、埃っぽい空氣をしたところには、それしかなかつた。

「派閥争いが激しくて、現在では大きく二つに、『ジョーン・エリザリータ』が所属してゐる『タンクラス（TANCLAS）』の一員みたいだね」

意味が分からなかつた。

聞いたこともなかつたし、はつきり言つて何の事かもわからなかつた。それが意味することも分からなかつたし、分かるわけもなかつた。

「タン…クラス…？」

香奈は、疑問的に呟いた。

黄龍は、小さく疑問げに言つた。

「そんなマフィア、テレビで聞いたことないわよ、それに、色々な情報を探つてみたりとかはしたけど、そんなの一言も聞いたことがないわ」

それを聞いた長富が、はつきりと答えた。

誰になんて、そんなことは分からなかつた。

「それはあたりまえだよ」

二人（一人と一匹）は、その言葉を聞いた瞬間に、長富の方に視線を向けた。長富は、さつきと同じ、いつもと同じ表情をして、二の方に視線を向けている。

言つ、続ける。

「だつて、」

表の情報でこんな『次元の違つ』情報が流れたら、大変なことになるじゃないか。

言つてゐる意味が、よく分からなかつた。

長富は更に続ける。

「タンクラス（TANCLAS）は、『ジエーン・エリザリータ』などから構成されてゐる。その目的は、そもそもの人間の『価値観』と、人間の『意志』の『統一』を目指してゐるんだ。それをするためには何だつてしようとする。一国の王や大統領だつて、彼らは殺しかねない。それに、君たちはもう知つてると思うけど、この世界には、『人間が否定し、あるいは求めたがる力』が存在してゐるんだ」長富は言つた。

香奈には、よく意味が分からなかつた。

しかし、そう言つことなのだ。そう言つことでしかなくて、つまり、マフィアはマフィアでも、『そこら辺にいるマフィア』ではないのだ。

香奈は思いながら、息を飲んだ。

「たとえば、魔銃とかね？」

長富は言つた。「魔銃つていうのは、リロードを必要としない銃なんだ。撃ち出すのは弾じやなくて、『次元の違つ』力なんだ。まあある種、エネルギーそのものの弾、とも言えなくはないけど」と言つと、長富は資料を整理し始める。

これ以上言つことは無い、と言わんばかりの手際で、資料をファイルに、きちんとしまつていぐ。

「…」

何を言つていいのか、ではなかつた。

何も言つことがなかつた。香奈の沈黙が、黄龍にはどうしても、

重々しく聞こえた。重々しくて、それは沈黙と言つよりは、むしろ叫喚に近かつた。

「他には、無いかな」

長宮は、相変わらずつまらなさそな表情をして、香奈に尋ねた。

土曜日は、長い授業をやる意味がない。そもそも土曜日は、普通の公立の学校なら、何もない、ただの平凡な一日なはずだ。ただパソコンを弄つたり、コーラを飲んだり、ゲームをしたり、時には友人とカラオケに行つたり。

つまり、休日であり、憩いの時間なのだ。

もしかしたら、そう言つた日に部活があるかもしれないが、そんなことは、全く問題ではなかつた。むしろ、東海林にはそつちの方が望ましかつたかもしれない。

とりわけ、今の東海林には問題が多かつた。問題が多すぎて、何から取り掛かればいいのか分からぬよう、しかし、やることは分かつたような、そんな雰囲気だつた。

授業がすべて終わるということは、その第一段階に過ぎなかつた。東海林は机の上でのうなだれながら、ただ思考がとぐろを巻いたり、色々な方向に走つて行くのを、眺めているような、そんな感覚だつた。そんな、考えに耽るような、そんな感覚に近かつた。

「おい」

と邪魔が入るのは、殆ど必然的なことなのかもしれない。

東海林は思いながら、横の方から聞こえてきた声の方に視線を向ける。その声は、どう考へても、東海林の中には大介の声だつた。大介の声が、東海林の中に響いてきたのだ。

「ん……？」

東海林は、少しばかり怠そうな、そんな視線で大介の方に視線を向ける。大介はそれを聞くと、東海林の方に言つた。

「お前、今日はハンスさんの所に行くんだつてな」

聞いた東海林は、少しばかり視線を細める。そして「ふーん…」

となる。小さくうなだれながら、東海林は大介に答える。

「何で知つてるんだよ

これは、東海林と羽並の、二人だけの理解なはずだつた。東海林と羽並以外、東海林がハンスのところに行こうと思つてゐるなんて知らない。

「羽並が言つてた」

だよな。

東海林は思いながら、うなだれて、羽並の方に視線を向ける。羽並は、他の女子と、普通に話を続けてゐる。本当に、ただ普通の友達のよう見えるが、もしかしたら、術師智雄立ちとか、そう言つ関係なのかも知れないと思つるのは、東海林だけだらうか。

「なるほど」

東海林は思う。羽並はおしゃべりだ。

聞いた大介は、東海林に問いかけてくる。「何でハンスさんの所に行くんだ?」と、聞いてくる。

それを聞いた東海林は、少しばかり口を紡ぐ。しかし、すぐにその糸を解きほぐす。

「赤龍と、仲直りする」

東海林は言つた。

それだけで十分だと思ったからだ。

それを聞いた大介は、「お、やつとか」と声を発する。そして東

海林は、少しばかり視線を細める。

そう、やつと。

東海林の中でも思える。これは確かに遅すぎた、これは確かに、遅すぎたのだ。赤龍と仲直りするには、もっと早い段階からの方がやりやすかつただらうし、ましてや、そもそもあの夜、大声で相手の非を言わずに、そもそもその時に仲直りすればよかつたのだ。それだけのことだつたのに、東海林には出来なかつた。

それが、東海林にはつらかったし、しかし、それは東海林にとって、ある種の試練の様オオなものなのかも知れない。

東海林は思った。

「それで、赤龍との交流手段がないから、ハンスさんに頼る東海林は言った。

聞いた大介は、「なら、」と声を発する。聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。何処までもその視線には、好奇心に似た光のようなものしかなかった、ように見えたのは、きっと東海林の気のせいではない。

「え、大介も行くの？」

少しばかり驚いた風に、緑龍も大介にそう言った。

大介はそれを聞くと、「勿論」と東海林に言った。そして、東海林の方に、当たり前のようすに視線を向けた。

「いいよな」

聞いた東海林は、少しばかり困った風な、そんな視線を大介に向ける。「まあ、別にいいんだけどさ」と東海林は答える。なんとなく、恥ずかしい気がしなくもないし、それは東海林にとつて、心の突つ掛りの一部になつた。それは間違いなかつた。

「何、もしかしてハンスさんっぽいところー？」

前にいる雄大まで、その話に絡んでくる。はつきり言って、なるべくからんでは欲しくないのだが、と東海林は思う。

思いながら、少しばかり喉に息を詰ませる。「まあ、そうだけど…」と東海林は細々とした声で言った。

それを聞くと、雄大は「おー仲直りタイム」と意味の分からぬ言葉を発する。東海林には、はつきり言って意味が分からぬ。それどころではなくて、意味が分からぬのではなくて、それは何か、違和感のようなものがあつた。東海林はまた、何か突つ掛るような、そんな感覚を覚えた。

「んで、まさかお前まで…」

東海林は言いかけた。

まだ言いかけただけだった。まだ東海林の喋る順番だった。しかし  
しそこに、雄大は躊躇もなく割り込んでいく。

「いいでしょーねー？」

雄大は、どちらかと言つと青龍の方に聞いてくる。青龍は、ただ腕を胸の前あたりで組みながら、ただいつもと同じように、静かにその喧騒を聞き流していた。

「…、」

そう、沈黙に近いそれで。

聞いた東海林は、「おいおい、」と小さく思つ。あまりにも自分勝手な行動で、東海林には何と言つていいのか分からなくなつてくる。しかし仕方がないとも思うし、それはありえないことではないと思う。

「…、全く、」

東海林は小さく言つた。

大介と雄大は、「よしつ」と小さく声を合わせる。縁龍は少しばかり呆れたような視線で大介を見つめて、青龍は、ただ淡々と、沈黙を守つている。

「でも、」

と東海林は言つた。

それを聞いた大介と雄大は、東海林の方に視線を向ける。東海林は一人に言う。

「今日の部活はなしになるからな。俺はそれほどまでに、今は急いでるんだ」

急がないと、赤龍がどこか遠くに行つてしまいそうで、東海林には怖かつた。今はこわかつた。さつきまでなかつたその恐怖心を、東海林はひしひしと、しかし確實に感じていた。

東海林は、急いでいた。

聞きたいことはそれだけではなかつた。それを聞いたから、それだけではなくなつた、と言うべきだった。それは幾分、難しいもの

があつた。香奈の判断も、難しいところがあつた。はつきりと、無理かもしれないと思うこともあつた。そしてそれは、多分無理なのだ。それ以外の何物でもない。無理なのだ。

しかし、やるしかなかつた。

香奈と黄龍で、それをするしかなかつたのだ。

香奈は思いながら、長富の方に視線を向ける。長富は、香奈の方に真つ直ぐと、しかしどこか、ふざけたような視線を送つてゐる。ただそれだけだつた。

香奈は答えた。

「あの、」

黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、本氣の顔をしている。「そのマフィアって、今この辺りに溜まつてゐるんですか？」

そう、つまりそういうことだ。香奈を狙うところとは、香奈に会わなければ話にならない。香奈がいるのは日本で、つまり、そのマフィア、タンクラス（TANCLAS）は日本に行かざるを得ない。

つまり、もし香奈を本氣で狙つてゐるのだったら、タンクラス（TANCLAS）は日本にいるということだ。

そして、多分それは本当だつた。

聞いた長富は、さつきの資料を、ファイルにとじたままの状態で、覗くようにして見た。資料の内容が、すぐに長富の口から出していく。

「… そうみたいだね」

それを聞いた香奈は、やつぱり、と言わんばかりの表情を、長富の方に向ける。長富は、さつきまで見ていた資料を、ファイルの中に入れた。そして「もひこい？」と聞くと、香奈は一度、少しばかり考えた。

「あの、それってどの辺に溜まつてゐるんですか？」

香奈は聞いた。

それを聞いた長富は、「どの辺…」と言いながら、面倒くさそうに資料を机の上に出す。埃が舞うが、この際気にしてもられない。

「えつと…」

面倒くさそうな口調で、長富は言った。そして、資料をめくつて行く。香奈は、それを食い入るように見つめている。

長富は、「あ、あつた」と言しながら、資料に一通り目を通す。聞いた香奈は、「どこですか、それ」と長富に聞く。声が、少しばかり詰まっている。詰まつていて、言葉がつまく出てこない。

「随分近いな…」

長富は、独り言のようにそれを呟いた。

聞いた香奈は、「…」口をただひたすら、紡いでいた。少しばかり息が浅くなつて行くのが分かる。

「えつと、世田谷の、楽多祖ヶ谷の、<sup>らくたそがや</sup>小さな廃工場あたり、だね」

長富は言った。

聞いた香奈は、ただ黙つて行く。

やつぱり…、

心の中で、小さく呟いた。

「…ありがとうございます」

香奈は言った。それだけだった。

長富は、資料をしまいながら香奈に聞いた。「他に、何か聞きたいことはある?」「どこか、どこまでも面倒くさそうな声だった。

「…、えつと…」

香奈は言いかけた。この際だから、何か聞いておくべきだらうか。考えてもみたが、考えるだけ無駄だった。はつきり言つて、長富に聞きたいことは一通り聞いたし、それに、もう頭の中から、きつと消えないと思う。それなりの内容だったし、香奈にとつて、それは重大なものだった。

「…いいえ」

香奈は、はつきりとではないが、確實にそうつぶやいた。

それを聞いた長富は「分かつた」と言つて、資料を片付ける。そして整えると、立ち上がり「本当にないね」と一人に聞いてくる。

聞いた香奈は、「はい」と呟いた。

黄龍は、長宮に何かを言いたいわけではない。

それを聞いた長宮は、「分かつた」と言つと、本棚の間の、暗い闇の中を歩いていく。長宮の姿が、見えなくなつて行く。

ここに来て、結構な時間がたつている気もしなくはなかつた。しかし、香奈にはそこが、どこか慣れ過ぎた歪みな気がしてならなかつた。あまりにも溶け込み過ぎていて、歪んでいるかどうかさえ、香奈には分からなかつた。そもそも香奈は、こんなものの歪みなんて退屈したことは無かつたし、せつとこれからも、それは変わらないだらう。香奈は思つた。

「…」

黄龍は、香奈の方に視線を向け始める。香奈は、何かを考えるような視線で、どこか遠くを見つめている。

黄龍はそれを見ると、小さく香奈の方に聞いた。

「…、香奈」

一瞬、香奈はそれを聞いて驚いた。そして、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、何か張りつめているような、そんな視線を香奈に向けていた。

「…、行くの？」

香奈は、考へない。

「楽多祖ヶ谷の廃工場つて言つたら、あの古い廃工場しかないわ」

香奈は言つた。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり、視線を沈ませた。香奈が、どこまで思つているのかは分からなかつたが、香奈が考へていることはすぐに分かつた。

それに、分からなかつた。

まだ、黄龍には、香奈について分からぬことが多い。それに、香奈はどこまで行つても香奈だ。香奈は、きつとまだ、自分みたいなんだ、黄龍は考へる。

「…、一緒に行く

黄龍は言つた。

香奈は、「……」少しだけ黙る。口が、うまく動かなかつたともいえる。

涙に近い何か、そんなようなものがこみあげてくる。

「……、ありがと……」

香奈は、再びそう言つたみたいだつた。

言葉が、そこに響き渡つたような気がするのは、きっと香奈の気のせいではない。

香奈の中で、その余韻が音を残して、そしてどこまでも、香奈の中に残つて行くような、そんな音だつた。

「……、黄龍」

香奈は言つた。

黄龍はそれを聞くと、少しばかり驚いた。しかしそんな暇もなく、黄龍は香奈の方に視線を向ける。香奈の視線がどこを向いているのか、そんなことは分からなかつた。しかし、その視線はどこまでも、真つ直ぐを向いていたことを、黄龍はきっと忘れないだらう。

「……」

黄龍は、何を言つわけでもない。

香奈が、黄龍に言つた。

「私、今日絶対に、頑張つて見せる。だから、黄龍も、頑張つてくれる？」

香奈は言つた。

恐怖が、その声には孕まれていた。どこまでの物なのかなんてことは、はつきり言つて黄龍には、全く分からなかつた。

しかし、黄龍はその言葉を、嫌な物には感じなかつた。ましてや、その言葉がなす余韻は、黄龍の中でのびのびとした、そんな余韻を残していく。

「……、それは、成功したら、ね」

黄龍は、はつきりと香奈に答えた。

結局、東海林は一人で行くことにはならなかつた。大介と雄大と、

緑龍と青龍と一緒に、ハンスのところに行くことになつた。東海林は、どこまでもうなだれるような、そんな感覚で染まって行つた。そもそも、東海林にとつて部活を休むことは、もともと実力がない上にさらに重なるハンデであり、東海林にとつて得にはならなかつた。しかも、もうそろそろ学園祭が近い。

学園祭のすぐ後に、中間試験と言うのもどうかと東海林は思つ。はつきりと。

しかしそんなことを講義するよりも、今は赤龍の方が先決だつた。赤龍がいなければ、中間試験も何もなくて、ただ東海林が終わるだけだ。学園祭に赤龍が必要だとは思わない。しかし、そんなのは重要ではない。

東海林に赤龍が必要なのだ。

いなくなつてみると分かる。きっと大介も雄大も、香奈だつてそうなるだろう。自分の龍がいなくなつたら、きっとさびしくて、いつまでも泣き叫びたいような、そんな気持ちになるはずだ。東海林は思う、絶対にそうなる。

泣き叫んではいけないが、東海林はひどく寂寥感にさいなまれた。それは否定しないし、そもそも否定が出来ない。そもそも、東海林と赤龍は、もしかしたら切つても切れない縁なのかもしれない。

そしてそれは、もしかしたら東海林の勝手な思いよがりかも知れない、と心の中では考えてみる。しかし、それを受け入れるのは、もう少し後でもよさそうだつた。

そう言う問題でなく、東海林はうなだれていた。そもそも、仲直りとか言つある意味恥ずかしくて、一番プライバシーが守られなければいけないところに、プライバシー侵害が入つているような気がするには、東海林の氣のせいだろうか。

考えながら、東海林はうなだれてくる。どんどんと沈みながら、東海林は胸の中に、妙な靄を覚えていく。

うなだれて、バスの中で揺られながら、東海林はため息を吐いた。

「はあ……」

赤龍がいたら、ここで「ため息は…」ビーたら「ーたら、となるはずだ。東海林は思う。しかしそうはならなくて、今ここにいる龍は、赤龍ではなくて、緑龍と青龍なのだ。つまりそう言つことなのだ。

「でもよ、ヤバいよな、絶対」

大介が、雄大に言つた。東海林は会話に入つていい。そもそも、入る気も起きない。

「何が？」

雄大は言いながら、大介の方に視線を向けている。

「だつてよ、学園祭のすぐ後に中間なんて、まず赤点取れつてことじゃねえか」

大介は言う。しかし、雄大は少しばかり考える。そして、「うーん」と軽く唸るだけで、別に何を考えているわけではない。ただ考えているように見えるだけ、になつてくる。

「さあ？」

雄大は言つた。

その「さあ？」の意味が分からぬと思つのは、東海林だけではないはずだ。しかし、大介はそれをおかしいとは認識しない。それも、東海林は少しおかしいような、そんな気しかしないのは東海林の氣のせいだろうか。

「それで、本当に無理だつて、絶対」

大介は言つた。椅子の方に背を持たれかけ、揺れるバスの中で、声を張り上げる。バスに乗つてるのは、何故か東海林たちだけだつた。

天野下のホテルと言えど、ホテル群は天野下学園前の駅前にあるわけではない。その少し離れた場所に、ハンスのいるホテルがあるらしい。天野下が、何故こんなにもホテルがあるのか、そんなことは東海林には分からぬ。

「何が？」

雄大は大介に聞く。その台詞は、さつきまでの大介の台詞を、丸

々なかつたことにするよつたそんな台詞だといつことに気付いていのだろうか、雄大は。

東海林は思いながら考える。そして、雄大の方に視線を向ける。雄大は、何かを考えていそうで、何も考えていないような視線を向ける。

「だから、中間試験」

大介は再びその話題を繰り返す。

「仲直り、か…、何か変な響きだよね」

緑龍は言った。青龍は座りながら、少しばかり目を閉じる。別に何もない、と言つよつた雰囲気で、青龍は揺れるバスの中で、ただ目をつぶつっている。眠くならないのだろうか。

「…、」

しかも何も言わない。

こんな風だと、絶対に眠くなつて行く氣がするのは、東海林の氣のせいではないはずだ。東海林は思いながら、椅子に座りながらうなだれる。さつきからうなだれてしかいない氣がするのは、きっと氣のせいではない。

ハンスからのメールはこうだ。

『差出人 ハンスさん

添付 なし

件名 Re : ホテルの名前

本文 ホテルグランドセントロリーの、1050号室だよ。今はそこに泊まつてゐる。でも、何で?』

それはある意味、普通の反応だともいえる。いきなり『今泊まつてゐるホテルどこですか?』なんてメールを送つたら、そうなるに決まつてゐるのだ。

それに対しての、東海林の答えはこうだつた。

『宛先 ハンスさん

添付 なし

件名 Re : ホテルの名前

本文 ちょっと、ハンスさんに頼みたいことがあるんです。多分ハンスさんにしかできないし、俺はハンスさんに頼みたいんです』 そう言つておけばいいと思ったのだが、帰つてきた答えも、また変なものだったことにはかわりなかつた。

『差出人 ハンスさん

添付 なし

件名 Re: ホテルの名前

本文 いいんだけど、でも今はやめておいた方がいいよ。理由は来れば分かるかもしれないけど、でもとりあえず、今僕らのホテルに来るのはどうかと思う』

その内容が、いまいち東海林には理解できなかつた。だからと言つて、それで東海林の行動が変わるわけではないのだが。

東海林は、まずハンスに会わなければならぬ。それを東海林は、重々理解している。理科と言うよりかは、それはある意味、流されるような、しかし自己決意に近い何かがそこにはあつた。

羽並から聞いたハンスのことだつて、羽並が許してくれなかつたら、東海林に提案なんとしていなかつただろうし、そもそも羽並が、東海林に助力してくれたことだつてそもそもありがたいのだ。あのままで、確かに東海林は何をすることもせずに、赤龍と、時間とともに広がつていく隔たりを、ただ見つめていくだけだつたのかも知れなかつた。

しかし、ほんの少しではあるが、打開策に似た光を、東海林は見つけたのだ。

東海林はある意味、期待をしていた。ハンスにも期待はしていたし、様々なものに、東海林は期待していた。

そう言つ問題ではなくて、東海林は赤龍に、もしかしたら一番期待していたのかもしれない。そうでなかつたら、赤龍に期待をしていなかつたら、何もならない。赤龍が、東海林と一緒に暮らしてくれるこを、まだ肯定的に受け入れてくれるのならば、東海林はハンスのところに行く価値があつた、と言えるだろ。

しかし、もし万が一。

本当に、万に一つの可能性かもしれないそれに、的中したら。もし赤龍が、「いやじゃ」とか「断る」とか言つたら、もう東海林は、色々な意味でおしまいかも知れない。東海林はもしかしたら、赤龍と言つ物にいろいろな期待をかけすぎていたのかも知れない。本当に今思うが、東海林は、赤龍と言う龍に、自分の未来まで託していだのかも知れない。一生一緒にいてくれて、一生楽しく過ごせるかもしれない、だなんて東海林は思つてはいる。それに、多分これからもその思考は変わらない。

東海林は、バスの中で揺られていた。ただそれだけで、東海林は本当に、何をするわけでもなかつた。携帯電話も弄らなかつたし、ゲームもしなかつた。本を読むわけでもなく、ただ東海林は、バスの席に座つていた。どこまでもそれはバスの座席でしかなくて、それ以外の何物でもなかつた。

そもそも、バスに乗つてている理由だつて、はつきり言つて赤龍がいないから、という極論に足り着く。

東海林は、小さくため息に近い吐息を吐いた。そして東海林は、そのため息が言い咎められることを、心の中で小さく願つた。

ちょっと古風で、変な口癖の付いた、赤いラーメン好きの龍の、言い咎めるような声を、東海林は期待していた。

東海林は思いながら、外の風景を見つめた。どこか野暮つたくて、それでいて、空が曇り始めていた。  
天気予報は、外れた。

少しだけ、満足していた。その人物は、心の底から満足していた。今日は部活だつた。土曜日に部活がない部活なんて、逆にその人物にとつては、部活でもなんでもなくただの同好会に過ぎないものだつた。しかし、吹奏楽部は違う。吹奏楽部はみんなが一丸となつ

て、一つの『音楽』と言つ究極の存在に一步、近づくのだ。誰かが先に進み過ぎていたり、なんてことは存在しない。みんなでそろつて初めてそれが『一步』になるのだ。

その人物は、少なくともそう考えている。

その人物は、東海林の入つていてる吹奏楽部の、東海林のは言つているパートであるクラリネットパートのリーダーだつた。リーダーなんて名前だけで、殆ど普通の部員と変わらない。ただ少しだけ変わるとこには、みんなを指揮つて、練習をさせるということだろうか。そして「どこそこが出来てない」とか「なになにがずれてる」とか、そう言つた簡単なものを言つていく。合奏に備えて、それは音楽を始めるにあたつてのスタートラインに近い物になつて行く。

「あ、ちょっと待つた」

その人物は言つと、机の上でカチカチとなつているメトロノーム（リズムを正確に刻む、振り子が付いた道具）の針を止める。それを見たクラリネットパートのみんなは、それに合わせてすぐにやめる。そういう時は必ず、何かが出来ていなくて、それを注意する、とこう合図のようなものなのだ。

「あのさ、」

その人物は言つた。みんなは、別にいつも通りのよう、そんな表情をしながらパートリーダーの方に視線を向けている。

「気付いた？」

そう、ここは注意を言つべき時。

「ショウジンがいないことに」

こんなことは、普通この時間には言わない。

しかしその人物は、普通のようにそう言つた。ショウジンは、東海林のことだ。愛称なのか、略称なのか、それともなにか、罵倒の言葉なのか。恐らく「番田」と「番田」はない。

「気付いた」

端に座つていてる、バセットホーンを持つた人物がいた。

「勿論」

「多分」

「そんなんじゃないかとは思つてた」

「…」

みんなそれぞれ、独特な返事をしていく。それがこのクラリネットパートの、唯一のいいところだとその人物は思つてはいる。それ以外は、少しではなくかなり駄目だ。音程も微妙に合わないし、和音と言う和音が、ことんその分だけずれているのだ。みんな気づかないだけで、みんなずれているのだ。つまり、そういうことだつた。

「でしょ？」

その人物は言つた。普通は、この時間に言つべきことは、出来ていないところだ。しかし、今のところ何かが出来ていないということは無い。ただ少しだけ、ずれているだけだ。それが何なのかは分からぬが。

「みんな気づいてた？」

その人物は、クラリネットパートのみんなに聞いた。それを聞いた全員は、頷くか肯うかして、その人物の方に肯定する。

「ショウジン空氣薄いから、気付かれてないと思つてたのにー」

その人物は言つた。

東海林は、その日部活には来ていなかつた。土曜日なんて言つ中途半端な日に学校がある、と言うのも少しばかり変なのだが、それ以上に妙なことが、その人物にはあつた。

今その人物は、無性にうれしかつた。

うれしいというか、楽しいというか、とりあえず、そう言つた正の感情であることには間違ひない。

その人物は、赤龍を知つていた。赤龍を見ることが出来たし、赤龍と話すこともできたし、赤龍と親しくもあつた。少しばかり意外な一面を見せる時もあつたが、それでも赤龍とは親しかつた。

東海林とも、その人物は親しかつた。そもそも、パートリーダーが部員と親しくないわけがないのだ。部員と親しいのは当たり前で、その上で音楽を作つて行く。ただそれだけのことだ。

つまり、何事もつながりが大切なのだ。

もうすぐ学園祭で、その準備でもあった。この土曜日は、殆どそんなようなものだった。それに本来は、来ないなんてことはありえなかつた。

しかし、その人物は、東海林と赤龍が今、あまりいい雰囲気はないということを知つていた。だから、少しばかりうれしかつたのだ。

東海林が、やつと仲直りを図ろうとしているのだ。これほどうれしいと思えることは無い。

その人物は、小さく、しかし大きさにそう思つた。

「何でいないんだろうな、」

眠たそうな視線が、その人物の方に降りかかつてきた。

それを聞いたその人物は、「え……あ……」と言葉を詰まらせながら、少しばかり視線を逸らす。龍を見ることが出来るのは、特殊な人物だけだ。

それだけが問題ではなかつた。この際、そう言つ問題ではなかつた。

「えっと、ね、まあいろいろね」

その人物は言つた。

そう言つしか、出来なかつたともいえる。

そこは、もう真っ暗になっていた。もしかしたら、赤龍がずっと飛んでいるからかもしれないし、もしかしたら、それはずっと赤龍が、考え事をしていたからかもしれない。とりあえず、辺りが真っ暗であることは確かだった。あたりは真っ暗で、海には何も映つてなくて、何が面白いわけでもなくて、逆に赤龍にとつては、その飛行 자체、あまりいいものではなかつた。いつもなら、飛ぶことは面白いこと、として処理できたかもしれない。しかしそう言つ問題でもない。面白い面白くないで判断できないことだつて、世の中には沢山ある。この飛行は、面白い面白くないではないし、そもそもこの飛行が面白いだなんて、赤龍自身思つてはいなかつた。ましてや、鏡となる海が見えなくなつて、さびしくもあつた。

しかし、それはうれしくもあつた。海が見えないところとは、鏡状態の自分の姿も、うまく映し出されているわけではないということだ。今の野暮つたい自分を、見なくとも済むといつことだ。なんとなく、赤龍は嫌だつた。自分が海にいることも、自分が今飛んでいることも、自分の近くに東海林がいないことも、そして、自分自身も、赤龍には嫌だつた。嫌と言つか、そもそもあまりいいものではなかつた。

言葉さえそこにはないし、そんなものは必要なかつた。この際、言葉なんていらない、野生に帰つてしまおうか、そう考えてみるが、それが無理だと赤龍は思う。赤龍は別に、力が強いわけでも弱いわけでもなかつた。龍の中では普通ぐらいの、そのぐらいの体力をしていた。

そう言つ問題ではなかつた。

それは、赤龍が今どうしたいかの問題だつた。今赤龍が、本当は自分の中ではどうしたいのか、長々と、延々と赤龍は、自分の中で自問自答を繰り返そつとする。しかし、それはいつも自問で止まり、

答えは返つて来ずに、それはまた自問になる。そして、答え何て物はどこまで行つても見えてこない。そんなものが存在するのかも怪しいし、そもそも、赤龍が探しているのが本当に答えなのか、と言ふ面でも、赤龍は自分自身を疑つていた。

どうしたいか、と言つよりも、鏡が見えなかつた。

それどころか、自分の中ではよりいつそう、色々な物が見えてきた気がして、赤龍には嫌だつた。赤龍の背中には、今なにもいない海には真つ暗な物しか映つていないし、蜃間のように、魚が泳いでいるところを見るこども出来ない。

ため息をする。はあ…。

はつきり言つて、自分でもそんなものはしたくはなかつた。しかし、ため息をしていないとやつてられない、と言つ気持ちが、赤龍にはよく分かつた。今は、嫌と言つほどよく分かる。分かつてしまふ。

東海林は、こんな気持ちでいつもため息をしていたのだ。

そう分かる、赤龍が微妙に苦しかつた。ため息は赤龍の周りに取り巻いて、いつも圧迫感に似た何かに代わる。赤龍は少しばかり視線を細めると、海の方に視線を向ける。どうせ前には何もない。赤龍には分かつてゐる。

東海林は、一体何をしているのじゃ。

考えながら、少しばかり嫌になつてくる。よく見ると、海にうつすらと、赤龍の影が映し出されている。海は忠実に、赤龍の影だけを映し出している。それは、海がまだ、鏡としての機能を果たしている、と言つことに他ならない。

それはよく分かつてゐるし、赤龍だつて、急に海が鏡の様ではなくなつたとか、海が急に光を反射しなくなつたとか、そう言つことではないといふことが分かつてゐた。しかし赤龍は、ある意味その光景に、驚いたとしか言いようがなかつた。

東海林の寮からでは見えなかつた、たくさんの『星』と呼ばれる光り輝く粒のようなものが、海に、忠実に映し出されてゐたのだ。

色とりどりで、たくさんの中がそこにはある。赤、青、黄色、よく見ると、それぞれ色が全く違つて、ピンク色にも見える物もあつたり、中には、真っ白に光り輝いているように見える星もあつた。それは、いつも寮から見ている星とはまるで違つて、そこにあるのは、恍惚に似た何かだった。

それが、少しだけ苦しい気もしなくはなかつた。

赤龍の所にだけ、その『星』はなかつた。赤龍の所にだけ、その光は届いてきていなかつた。そこにあるのは、どこまでも影だけだつた。

あたりまえな話だ。

赤龍が、その星の光を遮つてはいるのだから、海に映つてはいる赤龍の影に、そんなものは映るはずがないのだ。光は直進する。何も無かつたら曲がつたりなんだりはしない。そして、それを遮つてはいるのは赤龍だつた。

赤龍は、なんとなく野暮つたく感じた。

しかし、赤龍にとつて、それはどこか仕方のないような、そんな気分にもなつてしまつた。自分には星がない。自分には影しかない。今の自分に、星のような輝きは無くて、それはまるで、陰でしかなかつた。

赤龍は息をのんだ。

もう、鼻が馬鹿になつてはいた。数時間、海の上を飛んでいれば、海の臭いなんてものは気にならなくなつて、もう赤龍にとつて、無いも同然の感覚でしかなかつた。それはいつものことで、慣れは、生き物には必須の物だつた。

そこには、何もないような感覚しかなかつた。

赤龍にとつて、それは何もないというよりは、穴に近かつた。真つ暗で、深くて、しかも寒い風が、そこから吹き付けてくるような、そんな穴のような感覚だつた。そこには何もないし、そこには光もなかつた。それは、赤龍が見た限りでは、影に似た穴だつた。海にも、それと似たようなものが、確かに映し出されていた。誰かが赤

龍の背中から、星と一緒に影を見つめる姿を、赤龍は目を逸らしてみることが出来なかつた。

赤龍は、目をつぶつた。翼の羽ばたきが、さつきよりもペースが落ちていた。それに、赤龍はどこか疲れていた。ずっと飛び続ければ、疲れるに決まつてゐる。明日はきっと、翼の筋肉痛だ。赤龍は覚悟する。

でもきっと赤龍は飛び続けるかもしれない。赤龍は、新しい場所が見つかるか、それとも、自分が死ぬまでずっと飛び続けるかもしない、と考えたのだ。そこには何もなくて、ただあるのは、星の光と、それから穴のような影だけだつた。

赤龍は、小さく深呼吸をした。

そして、その星が消えていき、段々と、明るい太陽が昇つてきたことを、赤龍は理解していた。つまり、赤龍は飛び続けているということだ。もう地球をきっと、何週もしている。それほどまでに赤龍は、様々なところに飛んで行つていた。

そこまで飛んでいるにもかかわらず、まだ自分の居場所が見つかっていない。

赤龍の居場所が見つからなければ、死ぬまで飛び続けるまでじや。赤龍は、妙な意地を張つていて。

それは赤龍にとって、楽しいことではなかつたし、うれしいことでもなかつたし、辛いことでもなかつた。今となつてはの話だつた。

## 青いバスーン

東海林がハンスの部屋を訪れる理由は、簡単だつた。赤龍とコンタクトを取るためだ。それ以外は、東海林に目的はない。目的は、ただ赤龍とコンタクトを取ること。

しかし、そこには妙なものがあつた。

妙なものと言うよりは、何か、見かけないもの。しかし、どこかで見たことがあるような気もしなくもないし、はつきり言って、それが正確に何なのかなんてことは、東海林には分からなかつた。

しかし、少なくともただ事ではない、と言つことが、東海林にも見て取れた。

そこには、椅子にガムテープでがんじがらめにされた、やつれた少女のような、そんな風貌の人物が座つていた。制服は、ガムテープでがんじがらめにされていて、どこの学校のかはよく分からぬ。「ちょっと、訳ありでね」

ハンスが言つた。

東海林たちはテーブルの椅子に座つていた。テーブルの上には、温かいソーサーと紅茶が入つていてカツプが置いてある。ハンスはそれを、慣れた風に飲んでいる。東海林には、少しばかり紅茶の味の良し悪しが分からぬ。

ハンスはどこか、東海林たちの顔色を窺うような、そんな視線で見つめていた。青龍と雄大は、それを見ても何も表情が変わらなかつたが、流石に東海林と大介と緑龍は、それを見て目を見開くしかなかつた。

「…、何が、あつたんですか…？」

東海林が、ハンスに口を開いた。

それを聞いたハンスは、「まあね」とよく分からぬ返事をする。ハンスの隣には、青い狼が座つてゐる。狼と言つよりかは、人狼と言つた方がしつくりくる、そんな姿をした生き物だつた。

「雄大は、驚いてないみたい」

その狼は言つた。

それを聞いた雄大は、「ん?」とその狼の方に言葉を返す。

「だつて、こういうの見慣れてるもん」

一瞬、東海林は雄大の方に視線を向ける。雄大は、何でもないといつた風な、少しばかり笑つたような表情で、その狼の方に視線を向けていた。

東海林は補足した。

「…気にしなくていいぞライカン、雄大の言つことなんて…」

東海林は言つた。

それを聞いたライカンは、東海林の方に視線を向ける。尻尾が、椅子の下で少し、揺れているのが分かる。

「そうかな」

ライカンは言つた。

ライカンは、東海林たちがゴールデンウイークに、孤島へ行つたとき知り合つた人狼だつた。名前がないらしく、誰かに『ライカン』と言つ名前を付けてもらつたとのことだが、詳しいことは東海林も知らない。

「まあ、君たちに隠すことは無いかもしれないね」

ハンスは言つた。

それを聞いた東海林は、小さく息をのんだ。

その時だつた。ドアが、ノックされたのだ。

コンコンッ

乾いた清潔な音が、ホテルのリビングに響き渡る。そして、リビングのドアが開けられると、廊下から、ケーキの乗つたワゴンを押した、ハンスの知人の春香が入つてきた。東海林たちのテーブルの近づくと、ケーキを並べていく。

「いつもありがとう」

ハンスは、自然な笑みで春香に言つた。春香は、どこか何を言つていいのか分からなさそうに、はつきりと「いつもの事だからです」

と返す。少しばかり、ハンスは微笑みを増させる。「それもそうだね」とハンスは言つ。

春香がワゴンを押して、廊下に出よつとした、その時だつた。

「あ、そうだ」

ハンスは言つと、「春香、」と引き留める。

聞いた春香は、ワゴンから手を離し、踵を返す。「何ですか?」と春香は、どこか無機質にハンスに聞く。

「ユーカの調子は?」

ハンスは聞いた。

それを聞いた東海林は、「え、ユーカどうしたんですか?」とハンスに聞く。

それを答えるかのように、春香がきちんと、分かるように説明した。

「まだ熱は七度以上ありますし、席とくしゃみと発汗が絶えません。あと数日、待たれた方がいいと思われます」

そうか、と東海林は思った。

ユーカは、ピンク色の神をした少女で、ハンスと一緒に暮らしている少女のことだ。ハンスはユーカのことをとても慕つていて、しかもハンスがユーカに対して、敬語を使うような相手だ。それほど相手と言つことになる、のだが、東海林にはそこまで込み入ったことは分からぬ。

そんなユーカが今、風邪なのだ。

東海林はそれを聞いていて分かつた。「なるほど、」と小さく東海林は言った。

「それじゃあ、なるべく水分補給と、栄養補給を絶やさずに、お願ひね? 必要なら、僕も行くから」

ハンスが言った。

それを聞いた春香は、頭を横に一度ゆつくり振つた。

「畔の方を、見ていてください。確かにガムテープは術でほどけないようにしてありますけど、でも、物には劣化がありますし」

聞いた東海林は、この椅子にがんじがらめになつてている人物の名前を、初めて知ることが出来た。そうか、畔つていうのか。

それを聞いた大介は、「それつて、まさか……」と小さく言う。

聞いたハンスは、大介の方に視線を向ける。東海林は、驚いた風に大介へと視線を向ける。

「火蔵、ですか？」

訝りがそんなにきつくな、そんな口調だつた。大介にしては珍しいことだつた。

聞いたハンスは、「うん」と大介から目を逸らさない。「どうして知つてるの？」と、ハンスは聞いてくる。

それを聞いた大介は、「だつて、」とハンスの方に言葉を進めていく。

「火蔵はうちの学校の生徒ですから」

聞いたハンスも、驚いていた。

はつきり言つて、東海林も驚いていた。

驚かないのは、青龍と雄大と春香とライカんくらいなものだつた。春香はそれを聞いたにもかかわらず、「それでは」と小さく言うと、一例をして、それから廊下の方へとワゴンを押して、リビングからいなくなる。残りは雄大と大介とライカんだけだ。

「そうだつたのか？！」

東海林は、驚いた口調で大介に聞く。聞いた大介は、少しばかり呆れた風な視線を東海林に向ける。

「お前知らなかつたのか？」と言つたが、クラスの奴の名前くらい知つておけよ」

大介は言つた。

東海林は聞くと、少しばかり思い出してみる。火蔵、畔、どこかで聞いたことがあるようないような、と言つ程度の認識はあつた。しかし、それ以上ではない。

東海林には、そんなに重要な記憶の中に、その名前がないということだ。はつきり言つて、何でもいいと思つていたし、誰がどう入

れ替わつても、女子であるなら、もしかしたら東海林は、全く気付かないかもしない。勿論、香奈がいなくなつたらすぐに気付くのも事実だと思うが。

しかし、その名前には、あまり覚えがなかつた。ただ、香奈が数回口にした程度のようだ、そんな気がするのは確かだ。

しかし、やはりそれ以上でもない。

畔は今、白目を剥いてどこか遠くの方を、やつれたような表情で見つめていた。どうしてなのかは、東海林には想像もできない。

「香奈君の話を聞いてるとね、何だか、襲われたらしいんだ、畔に」

ハンスは、東海林に言った。

東海林は、畔の方から目を離すことが出来なかつた。まるで、生きるというそのものがそこから抜け出てしまつたような、老婆にも似た、しかしそれ以上にひどい何かだつた。そこにあつたのは。

「おそ……、われた？」

東海林は徐々に、ハンスの方へと視線を向ける。ハンスはどこか、いつも以上に真剣な、そんな表情で東海林の方に向いている。東海林は、少しばかり言葉を失う。

「うん、どうやら、帰りの途中で襲われたらしくてね。それで、僕のメールアドレスを知つてたから、きっとそこにかければ、分かるかもしぬないと思つたんだろうね。僕なら、龍を見ることもできるし、それに、どういう状況だつたかっていうのを説明して、一番理解できると思つてくれたんだろうね。頼られてるのかは分からぬんだけど、でも悪い気はしなかつたよ。でも、その説明によると、なんだけど」

ハンスが一度言葉を区切つて、お茶を小さく口の中へ啜つた。東海林は、それにならつて紅茶を口の中に含む。味があまりしないようを感じるのは、東海林のせいではないと思う。

「せつからだから、ケーキを食べてよ。春香が作つてくれたんだし」

それを聞いた東海林は、「あ、はい」どこか張りつめたような、そんな口調で、緊張気味に言つた。空氣そのものが張りつめていて、

緊張していた。

「 いただきます…」

言いながら、大介が自分の分のケーキを、テーブルの真ん中から寄せてくる。ケーキは、なんとなく甘ったるすぎで、とても、この空気とは合わない味をしていた。それは間違いなかつた。

「あ、いただきます」

焦りながら、緑龍も小さく言つて、大介と同じようにケーキを自分の方に寄せる。そして、それをおぼつかない手つきで、切つて口の中へと入れていく。

「わーー」

とか言つのは、この場では雄大しかいなかつた。

雄大は言つと、楽しそうにケーキをすぐに自分の方に寄せてくる。それをフォークで切つて食べる。

青龍は、さつきから皿をつぶつたままで、何をしようともしない。「どうだい？」

ハンスが東海林たちに聞いた。

聞かれても、東海林には答えようがなかつた。この空氣の中で食べても、恐らくおいしく感じられることはきつとない。そんな気が、東海林にもしていた。

「 おいしいでーすとつても」

雄大は、笑いながらハンスに言つた。どこか雄大は違う。いつも思うが、それはあながち間違いでもない気がする。

「 そうかい？ うれしいね」

ハンスは言つた。何で、ハンスが作ったわけでもないケーキを、美味しいと言わせて喜ぶのか、それは東海林には分からなかつた。そんな詳しい話は分からなかつた。

「 それで、さつきに続きなんだけどね」

ハンスは言つ。

東海林のケーキを食べる手が、ぴたりと止まる。ハンスの方に、真剣な視線を向ける。

「その話によると、畔君はどうやら、スタンガンを突きつけて来たらしいね。それで、何でも香奈君に『殺す』なんて言つもんだから、それで防衛として、黄龍を使つたっていうわけだね」

ハンスは言った。

一瞬、

東海林の口の中に、何かきつく酸っぱいものが現れたような、そんな気分に駆られた。それが一体何なのかはよく分からぬ。しかし、東海林の口の中ではやけに野暮つたく、後味が悪い酸味が広がつていた。

「…、香奈さんが、ですか…？」

東海林は、少しばかり喉を乾かしていた。

大介は、東海林の方に視線を向ける。少しばかり心配そうな、そんな視線であることは間違ひなかつた。

「それは、彼女の話だけだと何とも言えないんだけどね、でも、それによ似たようなことは言つていていたよ」

ハンスは答えた。

東海林はそれを聞くと、少しばかり視線を沈めた。そして、どこか悲しいような、そんな気分になつてくる。

「それで、今その詳しい内容を、畔君から引き出そうとしてるんだけどね。でも、うまくいかないんだよね」

ハンスが言つた。「やっぱり、記憶的なものは、僕らにはちょっと無理かもしれないね…」

東海林は、それに關して何を言つとも出来ない。

「あー…」

雄大が、急に声を張つた。

聞いた東海林たちは、一気に雄大の方に視線を向ける。紅茶を零したとか、ケーキを落としたとか、東海林はてつきりそういう物だと思っていた。しかし、テーブルの上には、雄大の紅茶らしきものと、雄大のケーキらしきものが、雄大の目の前にあつた。

「記憶うー

何を言つてゐるのか、はつきり言つて東海林には分からなかつた。青龍は、面倒くさそうに、雄大の方へと視線を向けた。

「青龍ならできるかも知れないなー」

雄大は、何かを仄めかすような、そんな口調で東海林たちに言った。東海林たちの視線が見開かれ、一気に視線を浴びていた。

ハンスが言つた。

「青龍君、が？」

聞いた青龍は、少しばかり面倒くさそうに目を細めた。それ以外にすることもなかつたと言えば、そう言つことになるかもしない。「うん。青龍なら、相手の記憶くらいカツパドキアかもね」言つてゐる意味が分からぬ。そもそも、知つてゐる単語を並べればいいといふわけでもない。東海林は思つが、この際そんな事関係ない。

「…、」

青龍は、面倒くさそうな視線を、ハンスの方に向ける。

「できる、のかい？」

ハンスは言つた。

聞いた青龍は、少しばかり目を閉じて、小さく息を吸つた。「…、少しなら」と、小さく呟くように青龍は言つた。

ハンスはそれを聞くと、「そつかい…？なら頼むよ」と青龍に言う。

雄大は分かつてゐる。だから青龍を推薦したのだ。  
分かつてゐるから推薦したのだ。

青龍は、面倒くさそうに立ち上がると、畔の方に近づく。尻尾はだらりと垂れていて、どこか抑揚がない動きだつた。上下もしないし、左右も動かない。ただきつちりとした、ただの運動のように、青龍の動きは規則正しかつた。

青龍は畔を見ると、少しばかり目を細める。そしてハンスの方に目を向ける。「…、」無言で、何かをハンスに言つ。それを見たハンスは、少しばかり視線を逸らした。

青龍は畔の方に視線を向ける。そして、ガムテープの間から見えている指を、青龍はじっと見つめた。白っぽくて、華奢な細い指だった。それだけだったらそうだったが、それはあまりにも白くて、生きている感覚がそこにはなかつた。

青龍はその指に鼻先を近づける。一瞬、東海林は青龍が、何をしようとしているのかわからなかつた。あの体勢と言つたら、手にキスをする程度しか思いつかない。そもそも、東海林の位置からでは、青龍の口元がどんなふうになつてているか、死角になつていて見えていなかつた。

青龍は、その華奢な白い指を、小さく、しかし牙が食い込むほどには噛みついた。

小さく、キシャッ、という音が、青龍の耳には聞こえてくる。そしてその音は、青龍の中に、確実に流れ込んでいく畔の血と共に、入つてくる。

やはり、東海林たちには何をしているかは分からなかつたし、それで何が分かるのかすら、東海林には分からなかつた。しかし、それが必要なのなら必要なのだ。東海林は考えて、別に青龍が何をしているかを見ようとはしなかつた。

はつきりした。

青龍は、牙から華奢な白く細い指を離した。やはり、指からは小さく、嫌な音がする。青龍は、はつきりしている。非常に、これ以上ないくらいに明白になつている。

これがすべてなのなら、と青龍は思つ。

「…、分かつた」

青龍は言いながら、立ち上がる。そして東海林たちの方に視線を向ける。別に口から何かを垂らしているわけではない。

「…よかつたよ」

ハンスは、どこかあまりうれしくなさそうな、そんな雰囲氣で青龍に言つた。青龍は、真つ直ぐハンスを見つめているだけだ。

「本当か…！」

大介は、どこか驚いた風に、青龍の方に言った。

聞いた青龍は、それでもハンスの方から視線を離さない。雄大は、別にどうでもよさそうな視線を、どこか別の方に向いているだけだった。

「それで？」

ライカンが、青龍に聞いた。

それを聞いた青龍は、ライカンの方に視線を向ける。ライカンは、力のこもっていない声で、しかしあはつきりした口調で、青龍に問い合わせた。

「どんなことが、分かったの？」

分かつたには分かつた。しかし、これは危ない。それほどまでに、危ないということは理解しているつもりだった。

青龍には、それがそれ以上のことだとも思えなかつた。それが、大変なことだということ以外は、特にあまり、何かを思つてゐるわけでもなかつた。

しかし、その『大変』なことだと思う中に、どこか『感心』がその中にはあつた。その中にある妙な感心が、青龍の中の何かを、本当に少しではあるが、抑揚をつけさせた。それが、あながち嘘でもない。

「……」

急いだ方がいいかもしれない。

青龍は言うと、沈黙を守るだけだった。

結局、一度寮で態勢を立て直すことにして、その『タンクラス（TANCI LAS）』とか言うマフィアの団体に、色々な意味で木端微塵にされそうで怖かつた。黄龍は強い。人間なんかよりもずっと強い。それは分かつてゐるのだが、それでも、備えなければ気が済まないのは、それは香奈が人間だからなのかもしない。

「きっとみんな、合奏してゐるのね、今頃」

香奈は言った。

吹奏楽部の今日の練習メニューが、合奏だとは知らない。もしかしたらパート練習かも知れないし、セクション練習かも知れない。そして、香奈の思った通り、もしかしたら合奏かも知れない。香奈は、どこかさびしいような、そんな感覚に似たものを持っていた。それが何なんかることは、香奈にはよく分からなかつた。

「そうかもしれないわね」

黄龍は言った。

空腹感さえなかつた。そこに、安らぎなんてものさえなかつた。何処まで行つてもあわただしい空気が、ただひたすら香奈の周りを取り巻いて、香奈をあわただしい気持ちにさせていく。そして、香奈をどうしても、妙な気分にさせてしまう。どこか腑に落ちない、破綻したような、しかし、それ以上の物が宙ぶらりんな、そんな妙な感覚。

「みんな、私がいなくとも大丈夫かしら」

香奈は、小さく呟いた。

大丈夫ならそれでもいい。大丈夫でないのなら、それでも香奈は、なんとなく許せるような、そんな気分になつてくる。残念ながらこれは現実で、どこまでも夢ではない。

「…」

黄龍は、その香奈の問いに答えることが出来なかつた。どつちにしても、あまりいい答えにはならないことを、黄龍は理解していたからだ。黄龍は香奈に、何を返すこともできなかつた。

「きつとみんな、大丈夫よね」

香奈は、強がりだつた。

そうでなくては、こんな台詞を今、言えるわけがないのだ。そんな台詞は、香奈が強がりだから、言えるようなものだつた。

「… そうかもしれないわね」

空気が、震えなかつた。

空気が悪かつた。そもそも、気分がこの状況でいいという方が、

色々な意味でおかしいと思つるのは、きっと黄龍だけではない。黄龍は、どこか気持ちが悪くなりながら、空気がおかしなことになつているような、そんな気がしてならなかつた。

「私ね、少しだけほつとしてるの」

香奈が言つた。

意味が分からなかつた。

聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、どこまでも別の方向を向いている。どこまでも、黄龍でない方向に視線を向けている。

「私がいなくても、大丈夫なんだなって思つて、ちょっとよかつた気がしてるので」

香奈は言つ。黄龍は、少しだけどどこか、張りつめたような感覚に苛まれる。香奈は、どこまでも開放的な、そんな表情を、黄龍とは別の方向に、そして黄龍とは真反対に、向けていた。それがどこがなんてことは、香奈自身にもよく分からなかつた。

「…、」

黄龍は、香奈を見て沈黙する。息が詰まるのは、きっと空気が悪いからだ。黄龍は考える。

「きっと、みんなうまく行けるわよね、中学のみんな」

香奈は言つた。

吹奏楽部は、中学生と高校生に分かれる時と、会わせる時がある。今日は会わせる日だが、香奈の心の中は、どこか張りつめたような、そんな雰囲気とは無縁な感情を、どこまでも心の中に孕ませていた。

「…、」

黄龍は、黙つていた。

いい言葉が、見つからなかつた。いい言葉が見つからなくて、どうでもいいような、そんな考え方だけが、黄龍の中を走つて、直に低徊し始める。

「…香奈が、そう思うのなら、きっと…」

黄龍は、言葉を詰まらせた。

それ以上、言えなかつたのだ。言つたら、それが本當になつそつだから、黄龍は言わなかつたのだ。

それが本当に、香奈にとつていいことなのか。

黄龍には分からなかつたし、きつとこの後も分からない。

もし香奈が、黄龍が今想像している、一番の奥底の、真つ暗闇の道へと突き進んでいんだとしたら、の話ではあるが。

「そうよね」

香奈は笑う。無理な笑いでもなければ、ざことなく自然味を欠いている笑み。

黄龍は、香奈にとつての何なのか。はつきり言つて、黄龍自身には分からなかつたし、きつとこれからも分からないと思つ。

そこには、空気がいいなんて存在しなくて、ただ緊張感と、それと似た安堵が、あちらこちらに漂つているだけだつた。田に見えないのは、いつもの空気とほとんど同じで、見た田は何も変わらなかつた。

意味が分からないし、青龍が何をやつているのかもわからなかつた。そして、青龍が何をやつたのか、そして青龍が言つている意味が、東海林たちには、いまいち理解が出来なかつた。

「…？」

東海林は、少しばかり首をかしげた。

ハンスは、少しばかり青龍の方に視線を向ける。青龍はどこまでも、真つ直ぐしか向いていない。はつきりとどこかを向いているわけではない。ただ真つ直ぐを見ているだけなのだ。

「それは、どういうことだい？」

ハンスは青龍に聞いた。

聞いた青龍は、ハンスの方に視線を向ける。そして、口を開く。

「…罷だ」

青龍は言つた。

その意味も、東海林にはよく分からなかつた。東海林には、それ

がどう言つたものなのか、と言つことも、想像が出来なかつた。想像の範疇を、とうに超えていた。

「どんな？」

大介が青龍に尋ねる。少しばかり、不安に似たものが、大介の中にこみ上げてくる。

青龍は、「…様々な行動パターンが、読みつくされてる。だから、何をしても危ない」警告氣味に、東海林たちに言つた。

「それって、どういうこと？」

ライカンが、口をはさんだ。

「…」

一回青龍は沈黙し、少しばかり目を閉じる。

東海林は、畔の指のあたりを見る。何かあるかと見て、少しばかり目を見開く。畔の華奢な、白くて細い指から、若干血が垂れている。

「…」これは、香奈とマフィアの争い。…、マフィアの名前、畔の雇い主の団体名は『タンクラス（TANCLAS）』、それは様々な団体と対立するもので、その団体の中でも、色々とはバツがある。その中の一派が、畔を雇つて、他のリーダー格を潰そうとした

聞いた大介は、「…え」と声を発する。

東海林には、いまいちよく分からぬ。

ハンスたちは、何かを理解できたよう、そんな表情で青龍の方に目を細める。雄大は、何も気にせずにケーキを食べている。

「それって、もしかして…」

大介は言つた。

大介の頭の中で、様々な物事が繋がつて行く。

香奈 畔に襲われる：畔『タンクラス（TANCLAS）』とか言つマフィアに雇われている：『タンクラス（TANCLAS）』たくさんある派閥があるお互い対立しているマフィア：香奈 畔に襲われている『タンクラス（TANCLAS）』に目をつけら  
れている 派閥争いに巻き込まれている？

思考が、一本に繋がりかける。まだ仮説の話だった。しかし、それはあまりにも、この状況に融通の利く仮説だった。

青龍は、大介の方に一度、頷いた。

東海林には、何の事かさっぱりわからない。頭の中で、『じぢや』じぢやとしたものが、伸びたり縮んだりしているだけだ。

「それって、どういうことだ？」つまり

東海林は青龍に聞いた。

それを聞いた青龍は、話すのが面倒くさそうな表情をする。その分かりに、ハンスが東海林に説明する。

「つまり、香奈君は、少なくとも」

『タンクラス（TANCLAS）』の派閥争いに関係があるってことだよ。

ハンスは、はつきりと言った。

はつきりと、東海林には分からなかつた。それが一体何なのか、ではない。何故か、でもない。意味が分からないわけでもない。ただ、それがどこまで行つても、東海林にとつて夢と似たような、そんなものにしか見えなかつただけだ。

「…へ？」

東海林は言った。

青龍は、面倒くさそうな表情をしながら、雄大の座つている席の近くに戻つて行く。そして、青龍は目をつぶつて、辺りの音を聞いているのか、それとも考えを巡らすのか、そんなような雰囲気を、東海林たちに醸し出す。

「香奈さんが…、マフィア…？」

東海林には、分からなかつた。

ハンスはそれを考へると、少しばかり顔をしかめる。青龍の方に一瞬、視線を向ける。

「青龍君、もしかして香奈君のこれから行動つて…」

ある思い当たりがあつた。

今朝話していた、昨晩襲われたことについて。そして、それにつ

いて深く追求しなかつたことについて。

ハンスの中で、その二つが引っかかる。

「…、」

樂多祖ヶ谷の、廃工場。

青龍は呟いた。

東海林には、いまいち何が言いたいのか分からぬ。それに、その前に分からぬことがある。

「香奈さんが、マフィア…？ あ…」

東海林は言いながら、頭の中でぐちゃぐちゃとなりかけたものを整理しようとする。

香奈 青龍の言つことが正しければマフィアなんだけれど ？  
それつて本当に本当？ と言うか、何だよ『タンクラス（TAN CLASS）』って聞いたことないぞそんなマフィア そもそもテレビでマフィアのことをそんなに聞かない 廃工場？ 樂多祖ヶ谷の廃工場 女子寮？

もう訳が分からぬ。

ハンスは、東海林の方に視線を向ける。

「どうやら、僕たちはまた、やらなければならぬことが出来たみたいだ」

ハンスは、どこか冷静そうじ、しかしへこか焦つた雰囲気を、東海林の方に向けていった。東海林に、冷静な気持ちと、焦つた雰囲気が移る。

「香奈君は今、非常に危ない地点にいる。『タンクラス（TAN CLASS）』に殺されるか殺されないかつていうね。そして、それを彼女は、一人で抱え込もうとしてる。でも、『タンクラス（TAN CLASS）』を一人では相手に出来ない。そんなことをしても、命を無駄に落とすだけだ。いくら黄龍君がいてもね」

ハンスは呟いた。

それが意味することは、東海林には明白だった。

聞いた東海林は、ハンスの方に視線を向ける。ハンスは、真面目

な視線しか東海林に送らない。

「もしかして、それって、香奈さんは『タンクラス（TANCLAS）』とは直接、関係がないってことですか？」

東海林はハンスに聞いた。聞かれても、「それは、ちょっとわからぬ」とハンスは答える。当たり前だ。

東海林は「…」少しばかり口を閉ざす。

「でも、」

ハンスは言う。

「香奈君は、一人で『タンクラス（TANCLAS）』に太刀打ちしようとしてる。それを、僕らは手助けしなくてはならない、もし、東海林君がそれを望んでるんならね」

一瞬、訳が分からなくなる。

香奈 香奈 香奈 どこまで行つても香奈  
マフィア？ 知らないそんな事

香奈は、いつも香奈なんだ。

東海林は、心中でハンスが言いたいことを理解した。それは、もう東海林がとっくに覚えていたことだつた。しかし、応用が利かなかつた。

応用できた。

「俺は行きます」

東海林は、ハンスの方に視線を向ける。

ハンスはそれを聞くと、「東海林君らしいね」と少し笑う。今日は、たくさんの人々に笑われた氣がするのは、きっと氣のせいではない。

少しばかり微笑みながら、ハンスは大介の方に視線を向ける。視界には、緑龍もしつかり、捕えられている。

「大介君たちは？」

ハンスは尋ねる。

「勿論、同行させてもらいます」と大介は言う。

「僕もです」緑龍は、大介に続いて言う。

「頼もしいね」とハンスは、さっきよりも微笑むような、そんな視線で大介を見つめる。そして、ライカンの方に視線を向ける。「ライカンは行く?」ハンスは尋ねる。

「…」

ライカンは何も答えずに、雄大の方に視線を向ける。察したハンスは、雄大の方に視線を向ける。「行く?」とハンスは、雄大に聞く。

「うーん、どうしようつか」

雄大は、目をつぶっている青龍に言った。青龍は聞くと、少しばかり目を開いて、雄大の方に視線を向ける。「…畔に近づいてみる」訳の分からぬ答えが返ってくる。

聞いた雄大は、一瞬変な顔をする。きっと誰だつてそう思う。意味が分からぬし、そもそも、答えになつてない。「それどういうこと?」流石の雄大も、よく分かっていない雰囲気だつた。

しかし、青龍の目はまっすぐとしている。どこか本気なその眼に、雄大は逆らおうとはしない。

「分かつたよ」

雄大は言うと、立ち上がり、畔の方に歩み寄る。

胸元が、少しばかり青く輝く。

東海林たちは、少しばかり目を見張る。何だ…?と心の中で思い始める。ライカンは、なんとなく納得するような、そんな気分になる。

「あれ」

雄大は言いながら、首に吊っているあの青い結晶を取り出す。ネックレスのような感覚で、いつも雄大は持ち歩いているようだつた。学校は、装飾品は認めていない。だから、きっとシャツの中に隠しているんだろう。東海林は思う。

八面体の、あの綺麗な結晶が、畔に近づくたびに光を増す。あの結晶は、確か学校の中庭の、あの円筒状の奴の地下へ行くための鍵のようなものだつたはずだ。

それが何で、今光ってるんだ？

東海林は思う。

雄大は、畔の方に、その結晶を持ちながら近づいていく。光は、確実に、しかし不規則に増していく。光が、雄大の手の中からあふれ出しそうなほど、光っている。

畔のポケットが、青く輝いている。

「…？」

ハンスは、それをじっと見つめている。東海林たちは、あっけにとられて見つめている。

雄大は、畔のポケットに結晶を近づける。畔のポケットが、青く光り輝いていく。そして、その光は雄大の手に持っている結晶と、調和しながら混ざりあう。

瞬間、

光輝く。青い閃光が辺りを包む。音が出ないのが不思議なくらい、それは光だけだった。

一瞬にして光は、リビング全体を満たす。あたりが一瞬にして青の世界になり、それ以外何もなくなってしまったような、そんな強すぎる光が、そこにはある。

どこまでも、何もかもを飲み込みそうな、蒼。

「なッ！」

東海林は目を手で覆う。

「うわッ」「わッ」言いながら、大介と緑龍も目をつぶる。

「…」

青龍は、それをじっと見つめている。

ほんの一瞬の出来事で、その光は一気におさまる。青い光は一瞬にして消え去り、しかし代わりに、雄大の手の中で光っている結晶が、さつきよりも光り輝いていた。それもどこまでも、何もかもを飲み込みそうな、そんな蒼だった。

畔のポケットは、もう青く光っていない。

「…？」

雄大も、呆然としているだけだった。

「…何があつたの？」

ライカンは、一人、不思議そうに呟いた。

「…」

青龍は、何かを知つてゐる風に、ただ沈黙を守つていた。視線は、雄大の方を食い入るように見つめている。

手の中の、結晶を見つめている。

「何がどうなつたの？」

雄大は、青龍に呟いた。

それを聞いた東海林たちは、一気に青龍の方へと視線を向ける。

青龍は、さつきと変わらない視線で、雄大の手の中を見つめる。

「…、雄大に戦力を与えただけ」

青龍は呟いた。

はつきり言つて、それだけだと意味が分からぬ。

東海林は思つと、青龍に「それつてどういうことだよ」尋ねるよう投げ捨てる。

「…」

青龍は、東海林の声なんて全く氣にしていない風に、雄大に言った。

「…、バースーンを、想像してみて」

それは、明らかに雄大に向けられた言葉だった。

それを聞いた雄大は、少しばかり悩むような、そんな声を発する。「うーん…」言うが、雄大は手に持つてゐる結晶を見る。最初は薄紅色だつたのに、今は青く輝いてゐる。意味が分からぬ。

それ以外に、やることがない。

雄大は思うと、バースーンを想像する。雄大がバースーンを想像することなんて簡単で、形だけでなく、手触りまで、自分の中で再現される。細部が、細かくそこに現れていく。

結晶が、まとまつた光を纏う。それは甲高い音を発しながら、光を形成していく。その形は、確かにバースーンの形に近い。

「あ、」

雄大は呟いた。

さつきまで結晶の紐を持っていた手が、今は、青いバスーンのストラップに代わっている。結晶ではなくて、今雄大の手の中にあるのは、明らかにバスーンだつた。

「バスーン」

雄大は呟いた。

青龍は、当たり前な風にそれを見つめていた。はつきり呟つて、それはものすごく困る。青龍にとつて当たり前でも、こっちにとつては当たりまえではない。

「どうなつてんだ？」

大介が、青龍の方に視線を向ける。

ライカンが、代わりに答える。

「さつきの、畔のスタンガン」

聞いた東海林たちは、ライカンの方に視線を向ける。ライカンは、別にいつもと変わらないような視線で、どこか遠くを見つめている。「あれが、もともと雄大の持つてる結晶の一部だつた。それが元に戻つただけ」

つまり、こういうことだ。

畔が持つてているスタンガンは、もともとあの結晶の一部だつた。あの結晶の一部が、今雄大の結晶の中に戻つて行つて、そして、雄

大の考へで形が変えられるおまけがついてきた。

「意味が分かるような、分からないような…」

東海林は呟いた。

雄大は、そのバスーンを咥えてみる。そして、その光の中に、息を吹き込んでいく。勿論バスーンの指使いで。

「ボー

まろやかで、どこまでもまろやかで、それでいて滑らかな音質が、東海林たちの耳に響く。余韻を残して、それは確實なまとまりを残す。

「おー、」

緑龍が、感心気味に言った。

青龍はその音を聞くと、少しばかり吐息を吐いて、小さく息を整える。そして、雄大の方に視線を向けた。

「…、それで、雄大が願えば、音魔が使える」

聞いたハンスは、目を見開く。

「音魔が、願えば使える…？」

ハンスは聞いた。

青龍は、ハンスの方に細めを向ける。そして、面倒くさく、あまり肯定したくはないが、青龍は頷いた。

ハンスは、「わあ…」と小さく呟く。

「まーいいやー」

雄大は言うと、そのバースーンを口から離す。バースーンは光を纏い、さっきのままの、あの結晶に戻る。どう考えてもバースーンより小さく、どう考えても、さっきのバースーンを形成していた全てだとは思えないほど、その結晶は小さかった。

それは徐々に光を失い、そして消える。結晶は青のままで、雄大の手の中で、ネットクレスとして存在している。

「これで、戦力が増えたつてこと?」

ライカンは、小さく呟いた。

東海林は、どこか腑に落ちなかつた。さっきの出来事と言い、そもそも腑に落ちないことが多すぎるような、そんな気がするのだ。少しばかりハンスは目を閉じる。顔をしかめるが、どう考えても、自分の中の考えでは、あり得ない答えが返つてくる。そして、考えないことにする。

「でも、これで香奈を助けられるつてことだな」

大介は呟いた。

考えるべきことは、二つ。

一つは勿論、香奈を救うこと。そしてもう一つは、香奈を救うにあたつて、それに必要なメンバーが一人足りないということだ。

「ハンスさん」

東海林はハンスに呟いた。

当初の目的を忘れていたわけではない。ただ、理由がもう一つ増えただけだ。

「どうしたの？」

ハンスは、どこか腑に落ちないような、そんな表情をしながら、東海林の方に視線を向ける。東海林はまっすぐな視線を、ハンスに向ける。

「頼みがあるんですけど、」

聞いたハンスは、少しばかり目を閉じる。そして、少しばかり腑に落ちなくて、もやもやしたそれに、更にもやもやした何かが注がれていくのを感じた。それが多くなって、更に心の中の靄が、はつきりしたものへ変わつて行く。

不愉快だが、愉快だった。

「何だい？」

ハンスは、いつの間にか笑っていた。

聞いた東海林は、ハンスにこう頼む。

「赤龍と、」

コントクトを取つてほしいんです。

はつきりした声で、東海林は言った。大介は、少しばかり安堵を覚えたような、そんな視線を東海林の方に向けていた。

そこは、どこまでも海だつた。さつきから飛んでいるが、海しかいていない気がするのは、きっと氣のせいではない。赤龍は、意図的にぐるぐると、巨大な円を描きながら飛んでいるのだ。それがどこだかは分からぬが、底のない深い青色をした海が、赤龍の赤を飲み込みそうな、そんな底知れない感覚が、赤龍を苛んでいた。さつきからずつと、同じ場所をぐるぐるぐるぐる回つてゐるだけ

で、一日前とその日とを、ただ行つたりきたしているだけだった。小さな島国程度なら見えるが、それ以外に国は、この辺にはありそうもなかつた。

何もない、と言つわけではない。そこには、巨大な鏡がある。

しかし、人が赤龍を目にすることは無かつた。これだけ世界を回つても、器らしき人間には、赤龍は会つていない。赤龍は、あきらめてぐるぐるぐるぐると、さつきから回つているだけだ。

赤龍を、巨大な海が映し出す。海は、赤龍の影をはつきりと映し出して、そしてそれを、はつきりと消し去つていた。

赤龍の背中に、もう何が乗つてゐるわけでもなかつた。あるのは、赤龍の影だ。それから太陽。

気持ちが悪かつた。背中に何も乗つていなくて、それが鏡のよくな海に映るのは、ひどく気持ちが悪いものだつた。気持ちが悪く、その上吐き氣がして、更に不安になつていつた。どんどんと、不安は募つていいく。

このまま、いつそのこと海に落ちてしまおつか。

赤龍は考える。少しばかり目を細めて、小さく、ため息に似たような、そんな吐息を吐き出す。

もしかしたら東海林は、本当に、赤龍がいらなくなつたのかもしない。勉強なんていぐらでもやれば貽えるし、赤龍がいなくなる分、食費だつて少なくなる。ゲームだつて東海林の好きな時に出来て、好きな時にやめられる。好きな時に香奈と一緒に帰れて、好きな時に眠れる。赤龍の鼻に、激辛ソースを入れる必要もなくなる。赤龍は更に考える。

もしかしたら、東海林に厄介ごとを持ち込んでいたのは赤龍かも知れない。そして、東海林を危ない目に合わせた元凶も、もしかしたら赤龍かも知れない。赤龍が全ての元凶で、赤龍が東海林の下からいなくなれば、東海林は幸せになれるのかも知れない。

それじゃあ、と赤龍は思考を停滞させる。

赤龍は、誰の近くにいればいい？

赤龍は考えてしまう。その思考は停滞して、赤龍の中にくつきりと形を作つて行く。

赤龍は、誰かが近くにいただけで、その誰かを自分の「ごたごたにまきこんでしまう。その誰かは、東海林であれ、器であれ誰であれ、そのはすだ。赤龍をいに嫌う集団なら、なおさら危ない。そもそも、赤龍を『人』が知つているという時点で、その人は普通の人ではない。赤龍は考える。

なら、赤龍は誰のそばにいればいい？

考える。誰にも巻き込まない、そんな存在。赤龍の、そんなごたごたにも巻き込まれない、または巻きもまれても対処できるような、そんな存在。

赤龍は考える。海は、赤龍をくつきりと映し出し始めている。赤龍の赤い鱗が、海にくつきりと、細かく彩られている。

赤龍は逆に考える。

誰が、赤龍の近くにいてくれる？

考えてみる。つまり、赤龍の「ごたごたに巻き込まれず、それでいて、赤龍と一緒にいて不快にならないような、そんな存在。いるのか？ そんな奴は。

赤龍は考える。そして、更に頭の中で、考えていく。

思考の逢着、赤龍はため息を吐いた。はあ…。

知つてうれしいことと、知つて不快なことがある。その思考の逢着した場所は、明らかに、赤龍にとつていいものではなかつた。

そこは、空白地帯だった。

それが意味することは、誰でも明白だつた。つまり、そう言つことだ。その場所が空白と言つことは、答えは簡単だ。誰もいない。

そこには、誰もいない。または、いなくなつた。

赤龍は、少しだけ悲しくなつてくる。さつきよりも少し、悲しいという気持ちがこみ上げてくる。青い中にいる赤龍は、どう見ても青の仲間ではなかつた。海は青でしかなくて、赤龍は赤でしかなか

つた。赤龍の背中に、誰かが乗っているわけでもなくて、昨晩見ることが出来たあの『影』に似た存在も、今は空白に埋もれていた。

誰にも求められない。

赤龍は考える。少しばかり、ため息だけでは気持ちの整理がつかなくなつてくる。

誰にも必要とされないし、その誰かすら、近くにいただけで不快にさせてしまつ。または困らせて、迷惑をかけてしまつ。

そんな奴に浴びせられる言葉を、赤龍は簡単に想像できる。

『出て行け！』

だ。簡単な話だ。

簡単すぎて、それは赤龍の中でぐるぐると渦を描いて回つて、そして途切れで、それから妙な風に赤龍の靄を重くする。

海の中は、それに比べ、どこか透き通つてゐるよつな、そんな風なものに満ちていた。そこは、底が見えそうなくらい透き通つていた。海は、そこにある空が完璧に見渡せそうなくらい、透き通つていた。

もしかしたら、赤龍も、もしかしたら、その透き通るよつな海の底の空に手を着くことが出来れば、赤龍の靄なんものがなくなるかもしれない。そもそも、そこには靄なんてものすら、無いかもしれない。

赤龍は考えながら、少しばかり水面に近づく。潮の香りがする。音がする。そして、どこまでも透き通つてゐる。

海が鏡のように、赤龍の顔を映し出している。そこには、どこまでもすがすがしそうな表情をした、青みがかつた赤龍がいた。その後ろには、やはり誰もいない。しかし、空に少し近づいた赤龍は、とてもすがすがしそうで、とても輝いていた。影ではなく、そこにあるのはどこまでも、空にしか、赤龍は見えなかつた。

空に手を伸ばそうとした、その時だつた。

一つの音が、赤龍の耳の中で、小さく響き渡つた。ノイズのよくな音だつたが、それは次第に揺れを少なくしていつて、それは完璧

な声に代わる。

何の機械を使っているわけでもない。

『やあ、赤龍君』

その声は、聴いた声だった。

ハンスの声だ。

赤龍は思いながら、目を細める。そして、海の方から視線を逸らす。赤龍は耳の方に、自分の視線を向ける。

「何じゃ、ハンスではないか」

赤龍は、声のトーンを落として、そうハンスに言つた。

ハンスは、自分の耳に手を当てて、何かを行つているようだった。それが幻術であるということしか、はつきり言つて東海林には分からぬ。

「やあ、赤龍君」

ハンスは、いきなり、まるで獨白のようになつづぶやいた。しかし、それが獨白ではないということを、少なくとも東海林たちは理解している。

ハンスはテーブルに手を着く。

そして、そこから声が聞こえてくる。

『何じゃ、ハンスではないか』

その声は、赤龍の声だった。

東海林は、どこかほつとしたような、そんな気分でその声を聞いている。声は、ハンスの手からテーブルで再現されている。恐らく幻術。東海林には、それしかわからない。

「何だか、少し声がやつれてるね」

ハンスは、どこか笑顔で赤龍に言つた。

赤龍はそれを聞くと、少しばかり不愉快そうな声で、ハンスに答える。

『あたりまえじゃ、ずっと寝ないで、昼夜太平洋を飛び回っているのじゃからな』

東海林はそれを聞くと、「は…？」小さく声を出す。しかしそれは、赤龍には聞こえない。赤龍は、今ハンスの声しか聞こえていない。

「それはまた、何で？」

ハンスは、笑みを絶やさずに赤龍に聞いた。

東海林は、赤龍の答えに期待する。少しばかり怖くもあるが、緊張している、とも言い換えられる。

『赤龍には、それしかやることがないのじゃ。哀れなことにの』赤龍は言った。

「自分で哀れとか言うなよ…」

東海林は、どこか呆れた風な口調で、そのテーブルに言った。聞いた大介は、無言で数回肯く。

「ところで、東海林君と喧嘩してるんだって？」

ハンスは、赤龍に聞いた。

赤龍の声が、一瞬止まる。小さな息遣いだけが、そのテーブルを伝わって、東海林の耳に届いてくる。

雄大は、関係ないと言わんばかりに、ケーキを食べている。

赤龍は、沈黙を小さく守る。そして、その緊張に、小さな息遣いが聞こえてくる。東海林も、少しばかり緊張する。

「それって本当？」

ハンスは聞いた。

東海林は、少しばかり目を見開く。

『…、うむ』

赤龍は、肯定した。

その声は、さっきの声よりも、どこか疲れた様子であつたことは、間違いかつた。どこまでも、赤龍は、いつもの赤龍ではなかつた。

あくまで、東海林の知っている範囲で。

「それで、」

ハンスは赤龍に言った。

それと同時にハンスは、東海林の方に視線を向ける。少しばかり微笑んでいるが、東海林の方に真剣なまなざしを向けて。

東海林は、小さく目を閉じる。そして、少しだけ乱れた呼吸を、自分で整える。ハンスを、真つ直ぐと見つめる。

見たハンスは、一度、しつかりと東海林の方に頷いた。

「赤龍君は、東海林君の所に戻つてくる気はある?」「息をのんだ。

少しばかり唐突なような、そんな気もしなくはなかつた。しかし、それは唐突でもなんでもなくて、いつか来ることには間違いがない、そんなことだつたことは、確かだつた。東海林も、それを承知している。だから、息をのんだ。

赤龍の返事は、帰つてこない。まだ、どこか小さく鼓動が乱れているような、そんな雰囲気もあつた。

それは、もしかしたら東海林の鼓動かも知れない。

東海林は思う。そして、少しばかり呼吸を整える。

『…、東海林は、』

赤龍は言った。

東海林は、それに集中して耳を傾ける。大介や緑龍も、その話に耳を傾ける。青龍は目をつぶつている。

『…、そこに、いるのかの…?』

赤龍は聞いた。

尋ねた、と言つべきだつた。

ハンスはそれを聞くと、東海林の方に視線を向ける。東海林は聞くと、少しばかり考える。そして、一度小さく、首を横に振つた。

大介と緑龍は、その東海林の反応に、少しばかり驚きを覚える。何故ここで、それを言わないので、と言つことに関して。

もし、東海林がハンスの近くにいると分かつたら。

東海林は、赤龍のことを考へたのだ。そして、その結果が偶然、これだつたということだ。それは簡単な話だつた。

東海林の前だと、もしかしたら赤龍は、正直になれないかもしが

ない。

それを、東海林は身を持つて、経験した。

「いよいよ」

ハンスは、東海林が示した通り、赤龍に言った。

聞いたのか、赤龍は小さく、ため息に似た何かを吐く。少しばかり東海林は、その声に意外さを覚える。『はあ…』の声、それは、どこからどう聞いても、赤龍の声に他ならなかつたからだ。

東海林のため息にそつくりな、赤龍のため息。

『なら、ハンスになら、言えるかもしけんな』

赤龍は、言った。

聞いたハンスは、少しばかり心を穏やかにする。目を閉じて、何かに集中するような、そんな雰囲気で赤龍に言った。

「何か、あつたんだね」

それが、一番最初に言つべきことだ。ハンスにはそれが分かっていた。

東海林は、真面目な表情でテーブルの方に視線を向ける。テーブルは、静かなままだつた。声は、少しばかり何かを考え込んでいた。「何があつたの？」

ハンスは、穏やかな声で、赤龍に尋ねた。

赤龍は、少しばかり不本意そうな口調で、ハンスにこいつ答える。

『うむ…』言い、それから小さく息継ぎをする。

『東海林がいないから話すのじやが、実は、赤龍はとても不安なのじや』

赤龍は言った。

聞いた東海林は、少しばかり、目を見開いた。しかし、そこまで

驚くようなことでもないかもしね。東海林は考える。

『赤龍が、もし器に出来なかつたらどうするか、そして、もし出会えたとしても、その器が赤龍を受け入れてくれるのか。その器が、

赤龍の厄介」とに巻き込まれても、平氣なのかどうか。

一瞬で、東海林の心が揺さぶられた。それは、もしかしたらお互  
い様なのかもしない。それは、東海林には分からない。

『赤龍は、他の龍よりも何故かよく狙われる。そのせいで、その器  
に嫌な思いをさせないかどうか、赤龍は疑問のじや。東海林が、  
赤龍を嫌いになつた理由も、そつじやからな』

喉の奥が渴いていく。しかし、口は嫌なほど、湿つて行く。

『東海林は、正しかつたのじや。確かに赤龍がいるから、東海林は  
大変な思いをして、赤龍のわがままに付き合つてゐるから、いろい  
ろ疲れてしまつてゐるのかもしない。じやつたら、愛想を尽かれ  
ても、赤龍には何も言えん』

赤龍は、さらに続ける。どこか、その声は震えている。

『出て行けと言われても、赤龍には文句を言つ資格はあらん』  
言つた。

東海林の中で、何かがもやもやと、しかしどこか、言葉に出来な  
い何かが、あふれ出していくよつた、そんな感覺に近い物を感じる。  
東海林は、何も言つことは出来ない。赤龍を、そんな風にさせてしまつたのは、もしかしたら東海林かも知れないからだ。

少なくとも、それは理解していた。

「それじゃあ、」

ハンスは口を動かす。動きが、妙にどんどんとしてくるよつた、  
そんな氣しか東海林にはしない。

「赤龍君は、東海林君の所に」

帰つてきたいと思う?

ほほ、核心と言つてもいいものが、そこに突き出された。

同時に、東海林と赤龍の心を、それはぐつと、揺さぶつて行く。  
どんどんと、またはそれ以上に。  
どんな答えが返つてくるのか。

東海林は、テーブルに耳を傾ける。頭の中で、思考の停滞と感情

の流動が行き来する。さまざまなパターンの、赤龍の返答が、東海林の頭の中で響いてくる。それは、単に東海林を焦らせるだけでは、収まるわけがなかつた。

赤龍の声が、少しばかり途切れ。東海林には、赤龍の鼓動が、聞こえてくるような、そんな気がしてならない。

『……な、何をいきなり』

赤龍は、凍結しかかつた思考回路を、自分の炎で溶かしていく。しかし、それはほとんど溶かしきれない。

「そんなの決まつてるさ」

ハンスは、東海林に言つた。

「君が、彼と一緒にいたくないかつて、聞いてるんだ」

ハンスは言つた。

誰に向けられた言葉なのか、それを東海林は、理解することは出来なかつた。その言葉は、赤龍にも、東海林にも伝わつてくる。

大介は、少しばかり感心気味に、「なるほどな」と小さく言つた。少しばかり不思議そうに、緑龍は大介の方に視線を向ける。大介は、ハンスの方に視線を向ける。本当に、大介はどこか、満足しているような、それが何かを楽しんでいるような、そんな視線をしていた。

『……』

黙る。それ以外に、何ができるわけでもない。しかし、どんどんと息が詰まつて行くのが分かる。その問いは、考えと言つ考えをことごとく凍結させていき、感情と言つ感情を、ことごとく凍らせていつた。

そんな簡単なものではない。

東海林は、少しばかり汗を握る。赤龍は、小さく息をのむ。少しばかり考えて、小さく息をつく。

『……ふー、はあ……』

それは、深呼吸の様にも聞こえたし、ため息のよつにも聞こえた。どこまでも、肺の奥に伝わつて行かないような、そんな息だつた。

『……』

どこを向いているのか。

ハンスは、東海林の方に視線をまっすぐ向けていた。そんなことは、東海林の中では決まりきったことだった。

考えてみれば、当たり前な話だ。

東海林は、赤龍と一緒にいたくないか、それとも一緒にいたいのか。

考えるまでもない。

そもそも、東海林は赤龍と一緒にいて、楽しくなかつたのか？赤龍が図々しくて、なれなれしくて、鬱陶しくて、もうやめてほしい、だなんて思ったのか？東海林は赤龍を見ていて、赤龍と一緒にいて、楽しくなかつたのか？

東海林は、それ以上の物を赤龍に、見出していなかつたのか？赤龍は、確かに厄介ごとを東海林に振りまいたかもしれない。しかし、それを受け止めたのは東海林だ。もし東海林が厄介ごとを嫌だと思ったなら、赤龍なんて、ハンスが初めて襲来した時から、放つておけばいい、と考えればよかつたのではないか？そんなややっこしい、面倒くさい、しかも生死を左右するものなのだから、赤龍を放つても、それは東海林にとつて、また人間としても、一つの方法だ。それは決して間違つていなし、逆にそれは、反論が出来ない。こいつを近くに置いておいたら、もしかしたら死ぬかもしれない、なんでも自分から置いておこうと思うのは、そんなのはただの自殺行為だ。何処までも剣呑で、どこまでも樹圏で、どこまでも自分の立場を危うくしいうものだ。

でも、東海林は赤龍になつて言つた？

東海林は赤龍に、こう言つたことを覚えている。簡単な話だ。とても簡単な話で、今でも言葉にできる、そんな言葉だ。

その言葉は、こうだ。

お前を守りたいと思う。

そんなに難しいものではない。ただ、苦しんでいる物を見て、守りたいと思うのは、それは間違つた感情だろうか。それは違う、と

東海林は考える。それは東海林の考へてゐることではあるが、それは間違いではない。

東海林は、赤龍を守りたいと思つてゐるし、今でもそう思つている。

簡単な話だ。簡単すぎて、嫌気がさす。

東海林は思つて、ハンスに言つた。

「『一緒にいたいに、決まつてゐる「だらり」『であるひ』』『』

二人は言つた。

見事に、それは同時だつた。それは何ら、不思議なことには感じなかつた。シンクロニシティなんてものは、ざらにあることだ。聞いた大介と緑龍は、どこか興味深そうに、テーブルと東海林の方に視線を向ける。ライカンは、じつとハンスを、見つめている。ハンスは、「そつかい」と、赤龍に微笑んだ。

「それじゃあ、赤龍君。君にいろいろと伝えたいことがあるんだ」ハンスは言つた。

赤龍はそれを聞くと、『何じや』と答える。少しばかり、辛そうな声だつた。東海林は聞くと、まだ突つ掛りがあることを覚える。「まず一つ目は、赤龍君。君の声、実は東海林君が、聞いてたんだ」どこかいたずら気な、そんな口調だつたことが、救いだつた。聞いた赤龍は、一瞬の思考停滞を覚える。しかし、すぐにそれが何だかを理解する。『…むッ』と赤龍は、小さく呟いた。

「だよね、東海林君」

ハンスは、東海林に笑顔で尋ねる。

そんなに笑顔でいられるのも、色々と困る。しかし、東海林にこみ上げてきたのは、少しばかりの笑みだつた。

「まあ、はい…」

東海林は言つた。

『…、東海林、かの…?』

赤龍の声だつた。

聞いた東海林は、少しばかり口の中が、カラカラになつて行くの

を感じる。乾いていく。しかし、何かが潤いを取り戻していく。

「ああ、まあな」

東海林は言った。

聞いた赤龍は、『……聞いて、いたのかの……』と尋ねる。東海林は聞くと、少しばかりどもる。そして、赤龍に答える。

「まあ、な

さつきから、同じ」としか言えなくなっている気が、東海林にはする。

しかし、それでいい氣も、東海林はする。

「でもね、赤龍君」

ハンスは言った。

赤龍は、どこかじれったそうに、しかしどこか恥ずかしそうに、ハンスの方へと耳を傾ける。『つむ…?』と赤龍は、ハンスに呟く。「赤龍君が、一緒にいたいって言った時に、実は、東海林君も同時に、同じこと言つてたんだよね」

東海林の方が、恥ずかしくなつてていく。

赤龍は、『む…』と小さく呟く。

『そう、なのか…?』

少しばかり、突つ掛りがあるような、そんな口調だった。しかし、それは間違いなかつた。それは確かにそうで、東海林は確かに、赤龍と同時に、ほとんど同じことを言つた。ただ、語尾がいつものように違つただけだ。

それだけの話だ。

それを聞いたハンスは、「うん、殆ど同じ。語尾だけ違つたね」と、どこか楽しそうに言つた。それは、東海林の方にも来る言葉だつた。

『そう、か…』

赤龍は言った。

どこか、息が小さくなつてていく。そして、少しばかり息が、浅くなつていいく。どこか、笑みのようなものが零れてくるのは、東海林

の気のせいではない。

呴くと、海に映る赤龍の顔に、少しばかり、歪みのような、そんな歪が生まれてくる。それは漣を立て、赤龍に波紋を残す。

「そう、なのかな…」

赤龍は飛びながら呴いた。

これでもう、赤龍のするべきことは分かつていた。  
海の底にある空に手を伸ばすのは、もう少し後でもできることだ。  
それに、海の底から、いざれ誰かが迎えに来る。それは、赤龍には分かりきつたことだつた。

「東海林は、まだ、赤龍のことを…」

温かくて、妙にじれつたくて、そして、靄のようなものが、赤龍の周りを取り巻いていく。どこか気持ちが悪くなるような、そんな気持ちだつた。しかし、気持ちが悪いと言つても、悪い『気持ちの悪い』ではなかつた。色々な意味でよく分からぬ、いい意味での『気持ちが悪い』と言う物だつた。

赤龍も、はつきり言つてそれがよく分かつていない。それが分かることも思えない。しかし、それを実感することは出来る。

今、赤龍は実感している。

何がが、赤龍の中からこぼれ出している。温かいものが、海の方へと漣を作る。

「…、グフッ…」

小さくしゃくりあげて、少しばかり赤龍は、目を閉じる。赤龍の瞳孔は、海の中에서도縦に割れている。しかし、海だからなのか、どこかその瞳孔は、何かに滲んでいるような、そんな風にも見えなくはない。

揺らいでいる。

しかし、揺らぎはしない。

『赤龍、』

その声は、東海林の声だつた。

声は、赤龍の中で響いて、それは、赤龍の中で余韻を残す。海の中にまでは響いて行かない。しかし、海の中に映し出されている余韻は、空白部分を埋めていくような、そんな感覚に近かつた。

「…」

名前を呴こうとした。

赤龍に、いまそれをすることは出来なかつた。今赤龍に出来るのは、少しだけ息を飲み込むことだけだつた。

『早く、』

帰つてこいよ。

東海林の言葉だつた。

聞いた赤龍の中で、何かがあふれていくのを感じる。化学の授業で、液体ヘリウムの超流動と言つのを聞いたことがある。ゲームをしていても、それははつきりと聞こえてきた。それと似た感覚の何かが、赤龍の中でも起つていて。赤龍が、赤龍の中でも起つていて。

赤龍が、冷たいのではない。

海が、冷たいのだ。

思つと、赤龍は少しばかり、片腕で目をぬぐつ。そして、小さく再び、しゃくりあげる。翼は、少し乱れ氣味に動いている。

「全く…」

赤龍は呴つた。

呆れたような、うれしいような、

赤龍自身、よく分からぬような、そんな言葉だつたことは、確

かだつた。

「遅いぞ、東海林…」

そう言つのは、当たり前に近かつた。

東海林は、少しだけ遅かつた。ほんの少し遅かつた。しかし、もしかしたら、とも赤龍は思う。もしかしたら、これくらいが丁度いいのかもしれない。これくらいが、喧嘩に懲りる、いい時間なのかもしぬれない。

東海林はそれを、見計らつたのだろうか。あくまで、数学的な意

味合いで。

違う。

赤龍は考える。そんなことは、あの東海林には出来ない。東海林に出来るのは、己の感性を主張することだけだ。

つまり、そう言つことだ。

東海林も、喧嘩に懲りたのだ。

赤龍は考えてみる。喧嘩をして、出て行つて、そしてもし、自分から連絡を取ろうと思ったら、どうするだろうか、と。赤龍は実際、一度東海林の所に行つた。しかし、東海林はその時、まるで赤龍には見向きもせず、香奈の方にばかり視線を向けていた。もしかしたら、それは当たり前なのかも知れない。赤龍は考える。赤龍だつて、雌のことを考えないわけではない。それに、赤龍だつて、目の前に雌がいたら、同じような態度を示すかもしれない。そう考える。

それは、自然なのだ。

それに、と赤龍は考える。

赤龍の方に視線を向けないのは、当たり前だ。そんなの、考えてみれば簡単で、簡単すぎる物だつた。逆に、何で赤龍がそれに気付けなかつたのか、不思議なくらいだ。

赤龍は考える。

それはどこまでも、赤龍の中で正当化されていく。そして、それは同時に、赤龍の否定を意味していた。

簡単な話だ。

赤龍には、勇気がなかつただけなのだ。東海林の前に顔を出して、謝ろうとする勇気が、赤龍には無かつたのだ。

それに引き替え、

赤龍は少しばかり、尊敬してしまう。まさか、龍が人に対しても尊敬なんてものを抱くだなんて、思つてもいなかつたが。実際に、赤龍は今、非常に人を尊敬している。尊敬に値するなんて物ではない。

東海林は、自分から謝る勇氣があつた。

考える。

少しばかり、赤龍は考えを全面的に、改めた方がよさそうだった。それは、色々な物に対して、だ。

少しの間の沈黙。

それは、厳粛に保たれていた。何の音もしない。あえてする音と言えば、風が、赤龍の体を取り巻く音だろうか。

ほんの微かではあるが、赤龍には聞こえていた。

「して、」

赤龍は言った。

聞いたハンスは、小さく『ん?』と呟く。

「赤龍はいかにして、東海林の下に向かえばいい」

聞いた。

それを聞いたハンスは、考えもせずに赤龍に言った。

『え、飛んで帰つて来れない?』

聞いた。

それを聞いた赤龍は、『はあ…』と小さくため息をした。しかし、そのため息は、赤龍を圧迫するような、そう言ったものではなかつた。

「今赤龍は、太平洋の中央にいるのじゃから、飛んで帰るとなつても、また少し、時間がかかるぞ?」

それを聞いたハンスは、『うーん、』と少しばかり、面倒くさそうな声を発する。『まあ、仕方がないか』とハンスは呟く。実は、何かをされなくとも、赤龍は東海林の所に、帰つて来れるることは帰つて来れた。

それとは関係がなかつた。

帰つて来れる帰つて来れないに問題はない。赤龍が問題にしていたのは、そんな簡単なことではない。

どうすれば、東海林の近くに、一刻も早く戻つて来れるのか。

それだけが、赤龍の中で問題になつていた。

『分かつた。それじゃあ、僕の言つことによく聞いてね』

ハンスは言った。

そういう時は、大概本気だ。

赤龍はそのハンスの声で、理解した。完璧に、しかしどこか、表面向的に。

「…、何じゃ？」

赤龍は聞いた。

この話してゐる時間も、赤龍にはじれつたくなつてくる。こんなに無意味に感じるのも、赤龍には初めてだつた。

それを聞いたハンスは、赤龍に言った。

『これから僕は、君に双影中行つていう術を施す。君は影の中を通り、僕らの目の前に突然とあらわれる。言つてゐる意味が、分かることかい？』

今一分からない。

そんなことは言つていられない。

「して、赤龍は何をすればいい？」

赤龍は、少しばかりせかすように、ハンスの方へ声を響かせる。喉が、久々に潤いを取り戻したような、そんな感覚を孕んでいた。

『君は今、飛んでるんだよね？』

ハンスは言つ。

聞いた赤龍は、「さつきから、そう言つておひづ」と言つ。「そもそも、飛ばずしてどうやつて、赤龍が太平洋を巡るというのじや」聞いたハンスは、小さく笑む。『確かに』と言つと、赤龍に続ける。

『僕がこれから三つ、カウントダウンするから、数え終わつたら、翼の動きを止めてほしいんだ』

言つてゐる意味がよく分からぬ、と思つるのは赤龍だけだらうか。声が、聞こえてくる。『そんなことしたら赤龍が落ちるんじや…』と言つるのは、東海林の声だ。

『大丈夫、心配しないで』

ハンスは、東海林に言つた。

『その時にはもう、赤龍君は僕らの目の前に現れてるはずだからね。

影の中を渡つてゐるんだから、そんなの殆ど関係がないからね』

赤龍は、どこかまだ、不安感を拭い去れない。

「…、」

一瞬だけ、黙る。

『と言つことだから、分かつた？赤龍君』

ハンスは、赤龍に尋ねた。

これは、思いのほか少し怖い。太平洋のど真ん中で、羽ばたくのをやめると言つるのは、飛行機に海の中へもぐれと言つてゐるようなものだ。正確には、落ちる、と言つてゐるようなものだが。

しかし、背に腹は変えられない。それに、赤龍には急ぐ理由があつた。

それに、猜疑心を持つ理由なんて、そもそも赤龍には無いのだ。

赤龍は気づく。

赤龍は、ハンスに猜疑心を抱く必要なんて全くないのだ。考へる。そして、小さく深呼吸をする。

「…、了解した」

赤龍は息をのむ。

そして、赤龍は目を閉じる。どうせ目を閉じて飛んだとしても、ここは何の障害物もない、太平洋のど真ん中だ。障害物が多いコンクリートジャングルとは違う。

少しばかりの恐怖と、ある意味スリルに近い感覚を、赤龍は覚える。しかし、どこまで飛んでもぶつからない、と言つ不思議が、赤龍の中には生まれる。飛んでいるのに、障害物をそのまま、通り抜けるような、そんなわけのわからない快感がある。

『始めるよ…？』

ハンスは言った。

赤龍はそれを聞くと、小さく息を吸つた。息を吸つて、それからハンスの方に答えた。

『うむ…』

少し、スリルにも似た何か、とは違う恐怖心のよつな、猜疑心のよつな、よく分からぬ感情がこみあげてくる。

ハンスは、一つ目を数える。

『二』

ハンスの声。

それは赤龍の中で、確実に募つて行く重々しい言葉。

これはカウントダウンだということを、赤龍は改めて実感させられる。これはあくまでカウントダウンで、ただのカウントではない。赤龍の中では、鼓動が少し、高鳴つて行く。

『一』

少しばかり、息が切れていく。翼を動かす間隔が、どんどん狭くなつていく。赤龍は、固く目を飛ぶつて、まだハンスが、最後の数字を言つていなことを頭の中で処理させる。しかし、それは非常に纖細な思考で、赤龍の中を、纖細ながら、滅茶苦茶な方向に走らせていく。走つて行つて、それから赤龍は、再び、喉の渴きのようなものを覚える。

海水は、残念ながら飲めない。

そもそも、飲む氣すら起きない。

『一』

この次の数字は語られない。

しかし、このリズムは、赤龍の心の中に、しつかりと刻まれる。何もかもが、赤龍の頭の中で繰り返されるよつな、そんな気分になつて行く。特に、東海林と分けてから、今までの事。それが、ずっと頭の中で繰り返される。

そして、それは破綻していく。

どこかで、その纖細な思考回路は、赤龍の中で音を立てて、確かに崩れしていく。赤龍は、小さく息を吸おうと思う。しかし、考えと体が、全く同調しない。同調しない、とか言つ問題でもない。考えが、体を動かしているわけではない。

赤龍は、リズム感だけはよかつた。

すぐに、『零』がくる位置で、赤龍は翼を羽ばたくのをやめる。もしある海の上に赤龍がいたとしたら、赤龍は海にまっさかさまになる。まだそんな程度では、赤龍は死にはしない。しかし、それなりに心に来るものくらいはあるだろう。赤龍は考える。

赤龍の時間が、一瞬止まつたかのよつた、そんな感覚を覚える。何もかもが一瞬にして消え去つたよつた、そんな感覚。でも自分は存在して、しかし自分は何も思つていない。何も思つていなくて、ただ存在しているだけの、ただそんな場所が、目の前に広がつているよつた気がした。

赤龍は、どこかで嗅ぎ鳴れた臭いを嗅いだ。

それは、東海林のにおいだつた。

それとほとんど同時に、赤龍は固い何かに墜落した。

ゴツッ…

赤龍は、床に頭を打つた。

それは、聞いているだけでも痛々しい音だつた。

床に落ちるなんて、ある意味、龍として何か心残りなものはあるかもしけない。東海林は、いきなり現れた赤龍を見てそう思つ。原理は、さつきハンスが言つた通りだ。つまり、影の中を移動するらしい。それを引き起こしているものが何だかわかれ、科学で同じようなことが出来るかもしけない、と東海林は同時に、小さくではあるが考える。

「痛たたたた…」

赤龍は、頭を少しばかり右手で押さえ、目を固く瞑りながらそう言つた。田の前にいるのが赤龍なんで、東海林は少しばかり、動搖した。

こんなに時間がかかるない物だとは思わなかつた。それに、こんなにも自然に、赤龍が現れる物だとも、東海林は思わなかつた。

思つと、東海林は赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、固く瞑つた目を徐々に開きつつ、辺りを確認する。少しばかり見回して、小さく、「謎じや…」と呟く。はつきり言って、そう思わないやつの方がおかしい気がする。それはきっと、東海林の気のせいではない。

「…」

少しばかり、口の中が涼しいような、そんな気がしなくもなかつた。体の中の空氣の巡りが、悪いような氣もする。東海林は、息を数回、小さく吸い上げる。そしてその、赤い龍の方に視線を改める。

「お帰り」

東海林は言った。穏やかな口調で、その方向に向かつて。聞いた赤龍は、少しばかり口を堅く閉じる。そして、少しばかり視線を泳がせると、どこか、ボソッとしたような声が聞こえた。

「た、ただいま…」

赤龍は言った。

小さくではあるが、赤龍は確実にそう答えた。それは東海林の耳の中に、確かに残響のようになつていて。それはどこまでも、消えない。

「ところで、」

ハンスが言う。

それを聞いた東海林たちは、ハンスの方に視線を向ける。雄大はケーキを食べている。

「そんなにのんびりしている暇も、なさそうだよ」

ハンスは言った。

いつの間にか、時間は六時近くになつていて。いつの間に、

東海林は心の中でつぶやく。そして、少しばかり小さく、ため息を吐く。東海林は赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、少しばかりそれを気にしている様子ではあった。しかし、それを言い咎めることはしなかつた。

「時間がないとは、どうこいつじゅ…？」

赤龍がハンスに尋ねた。

それを聞いたハンスは、「うん」と赤龍の方に言つた。そして説明を始める。

「実は、香奈君が今、大変みたいなんだ」

そう言つと、ハンスは視線を、ガムテープでぐるぐる巻きにされている、畔の方に視線を向ける。畔は、どこか空ひな視線を放っている。何処になのかは、分からぬ。

「あの子、畔つていうんだけど、その子に、殺されそうになつたみたいでね」

一瞬、「何じゅと…ッ！」と赤龍は声を張り上げる。

香奈が、何故狙われなくてはならないのか。

それは、赤龍には分からぬ。恐らく、ここにいる中で知つてゐるとしたら、ハンスくらいかもしけない。赤龍は考える。そして、もう少し考えてみる。

「そしてね、香奈君が今、向かいそうな場所に、もしかしたら袋叩きされるかもしだいんだ」

ハンスは言つた。

「冗談でもなければ、悪ふざけでもない。赤龍を誘い出すための口実でもなかつた。ただ、それはどこまでも、事実でしかなかつた。『もしこのままいつたら、香奈はどうなるのじゅ…』」

赤龍は、ハンスに尋ねる。どこか、心配以上の物が、赤龍の心中を、徐々に采配していく。赤龍には、よく分からぬ。

「それは、やつぱり、殺されるかもしけない」

ハンスは、少しばかり口どりを重くして、赤龍にそう言つた。

聞いた赤龍は、少しばかりあたりに目を泳がせると、小さく吐息を放つた。それはどこまでも、ため息に似ているだけの、ただの吐息だつた。もしかしたら、さつきまでの赤龍のため息のよつたものは、もしかしたら、ただの吐息だつたのかもしけない。赤龍は、吐息を吐いただけだつたのかもしけない。

東海林は、妙な気分になる。

本当に、妙な気分だった。

「だから、つていうのは少し言い方がおかしいかもしないけど」

ハンスは言った。

赤龍の方に、ハンスは視線を送る。赤龍は、その視線を躱すわけがなかつた。

言つ。

「僕らの大切な仲間のためにも、一緒に、戦ってくれる…？」  
赤龍は、それを聞いて少し、本当に少しだけ、がっかりした。別に、誰が言おうが、赤龍はそれを聞いたら、助けに行くつもりだつた。それは変わらない。そんな程度の、小さな落胆に過ぎなかつた。しかし、赤龍が小さく落胆したのも、事実ではあつた。ましてや、それは事実でしかなかつた。それを、東海林が理解できているのかは分からぬ。

赤龍は、小さく思つた。

東海林が、赤龍に言つた。

「まあ、お前が行きたかつたら、でいいんだけどな」

東海林は言つた。

どこか、投げやりとは違う、別の何かの感覚に近かつた。しかし、赤龍には初めて、東海林の言つてゐる言葉の意味が、よく分かつたような気がした。

いつもの赤龍なら、それを聞いてどう反応したか、それは赤龍自身にもわからない。どう反応するかだけは分からぬ。

しかし、と赤龍は思う。

東海林が、赤龍にそう言つたことだけでも、かなりの進歩な気もしなくはない。ただ、それに伴つて、赤龍も成長してゐるかいないか、それが問題だつた。

赤龍は、成長しただろうか。

考へてもわかるものではないし、考へて何かを言つ物でもなかつた。それは、赤龍にはよく分かつてゐた。

だから、赤龍は言った。

「誰に言つておるのじや？」

赤龍の声だった。

それは、どこまでも赤龍の、どこか図々しくて、どこか上から田線の口調だった。

東海林には、それがどこか、心地いいような、そんな気にしかならなかつた。

「決まり、つてことだね」

ハンスは言つた。

赤龍は立ち上がり、ハンスたちの方に視線を向ける。そして、小さく微笑む。「さて、」と赤龍はつぶやく。

東海林の方に視線を向ける。

「東海林こそ、覚悟は決まつてあるのじやろ？」

赤龍は、どこかいたずら気に、東海林へ声を発した。

それを聞いた東海林は、少しばかり、ではあるが驚く。赤龍がそんな一言を、東海林に言つとは思えなかつたからだ。そもそも、そんな台詞を言えるということ 자체、東海林には驚きだつた。少しばかり、息を潜める。

しかし、どこか開放的なそれが、東海林の中で満たされていくのも、自身で理解している。つまり、そう言うことなのだ、と東海林は理解する。それだけで、それ以外なんでもない。

東海林は、赤龍の目を覗きこむ。

赤龍の目は、いつものように光り輝いていて、目の中の光は、どこにも無くしてはいなかつたようだつた。ましてや、その光は、東海林の寮を出て行く前よりも、ずっと輝いていたように見えるのは、きっと東海林の氣のせいではない。

赤龍は、成長した。

それだけのことだ。

それが、東海林にはどこか、うれしくもあつた。しかし、妙な気持ちが増していくような、そんな気があつたのも事実だつた。

東海林は、少しばかり深呼吸をする。どこまでも、ため息とは無縁な息が、そこに放たれる。それが、ため息だと思われなければの話ではあるが、少なくともそこでは、ため息になることは無かつた。

東海林は、赤龍の方に視線を向ける。

そして、一瞬だけ小さく、赤龍に微笑んでみせる。

「…」

俺を誰だと思つてる？

東海林は言つた。

東海林の目にも、光がともつてゐるのは確かなことだった。

静寂、と言つよりも、どこか寂寥に近い、靄のような存在に近かつた。嫌と言つほど、それは香奈の心の中で広がり、そして縮んでいく。縮んでいくと、それから煙のように、もくもくとした妙なものが、また広がつて行く。

時間は、大体六時くらいだった。

結構な時間が、経つてゐた様子だった。それは、香奈にもわかつていた。ただ、時間を無駄にした、と言つよつた感覚は、少なくともなかつた。そこにあるのは、香奈の感覚と、時間との差異だ。

「黄龍」

香奈は言つた。

それを聞いた黄龍は、香奈の方に視線を向ける。香奈は、どこか俯いたような、そんな視線で黄龍から目を離してゐた。

「…」

黄龍は何も言わない。

香奈は、それでもよかつた。はつきり言つて、この沈黙があるから、もしかしたら今の、この平穏に似た心の在り方があるのかもしない。

「私たち、大丈夫よね…？」

その意味が、黄龍にはうまく把握できていない。

しかし、何を答えるわけにもいかなかつた。何を答えるわけでも

なく、黄龍は、小さく息を飲んでいた。香奈が、今なにをも思つているのか、そんな細かいことは、黄龍には分からなかつた。

「私たち、ちゃんと、真つ直ぐ進めるわよね」

香奈は言つた。

黄龍には、香奈の言いたいことが、なんとなくすら分からなかつた。真つ直ぐの意味が分からないし、何が大丈夫なのかもわからない。適当な受け答えをするなら、何も答えないほうがましだ。黄龍は考える。そしてあえて、何も言わないことにする。

「……」

しかし、香奈は続ける。

時間は、刻一刻と過ぎていく。しかし、ほんの一秒一秒だ。それだけに過ぎない。本当に、ただそれだけだ。

「きっと、私たちが望んでるものは、悪い物じやないわよね、絶対。だって、みんなが笑顔になれるような、そんな事なんだもの……」

香奈は言つた。

何が言いたいのかは、黄龍には分からなかつた。

しかし、と黄龍は思う。少しばかり困るが、その『困る』を押し切つて、黄龍は自分の心を口にする。

「それは、香奈にとつてはの話」

香奈は、少しばかり驚いた風な視線で、黄龍の方に目を向ける。どこか、目が潤つているような、そんな風にも見えなくはない。香奈は、少しだけ、悲しそうな光を目に浮かべている。

「香奈にとつて、それはいいことかもしない。でも、もしかしたらそれは、他の人たちにとつてみれば、とっても厄介で、もしかしたら、何かの障害を来すものかもしれない。もしかしたらそれだけじゃなくて、その動きは毒となりえるかもしない。それは香奈にとつていいものかもしれないけど、でもそれは香奈だからよ」

黄龍は言つた。

香奈は聞くと、視線を落とした。どこか悲しそうではあつたが、

黄龍はその言葉を、何かで訂正するつもりなんてものはさらさらな

かつた。ただ、黄龍にとつて、それがただ、常なだけだった。

「…、何で、」

香奈が言つた。

黄龍は、香奈の方に視線を向ける。少しばかり、口の中が酸つぱくなる。

「何で、みんなが笑うことが出来ないのかしら…」

香奈にとつて、

それは黄龍にとつても、答え難いものだつた。黄龍には、それを答えることは出来ない。適当なことを答えることもできない。ただ、それが本当だとと思うことを、黄龍は言つだけなのだ。

だから黄龍は、答えた。

「幸せが、人によつて違つから、よ」

悲しいことなかもしれない。

それは、ひどく悲しい物なかもしれない。皆が同じように笑うことなんてできない。誰かが笑つているといつことは、誰かが泣いているといつことだ、と黄龍は言つたのだ。直接的にではなく、間接的に。

それは、間違つているのかもしれない。しかし、合つているのかもしれない。それは香奈には分からぬ。

香奈は小さく涙を流す。小さくてで涙を掬つと、小ちく、心で息をためる。「それでも」と香奈は言う。

「私には、それが正しいと思う。それでみんなが、笑顔になれないんだとしても、」

香奈の声は、手堅いものがあつた。

少しばかり。黄龍は目を細める。そして、香奈の方に視線を向ける。いつもとは違う視線を、香奈は床に向けていた。いつもの香奈の視線なら、もっと優しい、もっと温かみのこもつた視線だ。

しかし、その香奈の視線は、どこまで行つても冷たくて、どこまで行つても、何か頑ななものがあつた。

「…、」

何が正しいかではない。

もう、はつきり言つて正しい正しくないの問題ではない。それを、黄龍は理解していた。それを、香奈が分かるかどうかの問題だ。分かつたとしても、あの視線は、本気の視線だ。今までの香奈の視線の中で、一番本気の視線だ。

「、香奈が、そう思うのなら」

黄龍は言った。

意思表明でもあった。

聞いた香奈は、黄龍の方に視線を向ける。何を言われるかは、何も考えない。期待しない方がいい。香奈は考えた。もし、黄龍と香奈の考えていることが違つたら、香奈はどう思つて、きっと分からない。

今の香奈本人だからこそ、そう思えた。

黄龍は、続けた。

「、それが正しいと思うのなら、私はそれについて行く。私は、そう決めた」

その声は、確實なものだつた。喉が渴くよくな、そんな台詞だつたことを香奈は理解している。

それが、本当に黄龍の思つていることなのかは分からない。もしかしたら黄龍は、心の中では、香奈を蔑んでいるのかもしれないし、もしかしたら、黄龍は心の中で、香奈に強い敵意を抱いたかもしれない。

それは、香奈には分からない。

だから、こう答えるしかなかつた。

「、そろそろ」

香奈は立ち上がり、時計の方に視線を向ける。時計のピンク色が、妙に褪せたように見えたのは、気のせいだらうか。

香奈は考える。

六時を回つた、その時だつた。

少しばかりではあるが、心のどこかでまだ、抵抗と言う物を感じ

ている。さつき香奈が言ったこと、それ自身に違和感を抱いている。もしかしたら、香奈本人に、違和感を抱いているのかもしれない。全員が笑顔になれないんだとしても、それが正しいと思う限り。いいこと？

わるいこと？

香奈は、考えるまでもないことに思い当たる。

「行くわよ」

香奈は、どこか冷たく、黄龍に言い放つた。すぐにベランダの方に出ると、香奈は小さく息を吸つた。

黄龍は、それについて行くしかなかつた。それについて行くしかなかつたし、それ以外に選択なんてものは存在しなかつた。

青龍の話によると、その『タンクラス（TANCLAS）』とか言う集団は、楽多祖ヶ谷の廃工場に溜まつているらしい。それを聞いた時、東海林は思わず考える。

楽多祖ヶ谷、つまり、女子寮のあるところ。  
つまり、香奈だ。

『タンクラス（TANCLAS）』は、香奈を狙つてゐる。それが、表に出たような、そんな言葉だった。

なのに、と東海林は思つ。

もう六時を回つてゐるのに、それなのに、まだ東海林はこんなところにいる。赤龍と、やつとよりを戻せて、やつといつも東海林と赤龍に戻つた。と言うのに、今度は香奈が大変なのだ。

欠ける、何てことはあり得ない。そんなことは、絶対にありえないのだ。

赤龍がいなくなつてみて、初めて分かつた。誰か一人が仲間から欠けるということは、その仲間の間の距離が、その誰かひとり分、広がつてしまつということだ。ぼっかりした空間が、そこには確實に存在した状態になつてしまつ。

それは嫌だつた。

それに、そんなことは誰も、きっと望まない。望めないし、望む人はきっと、悲しい人だ。

「早く、行つた方がいいかも知れないね」

ハンスは言った。

聞いた東海林は、ハンスの方に視線を向ける。少しばかり焦つているのか、早口でハンスに聞いた。

「ハンスさんは、一緒に行かないんですか…？」

東海林の側にいるのは、大介と緑龍、雄大と青龍、ライカン、それから勿論、赤龍だつた。全員の距離は、まだ変わつていない。今の中だ。

東海林は、少しばかり口の中を焦らせる。

ハンスは、少しばかり早めに、口を動かしていく。

「うん、僕は畔を見ていなくちゃいけないし。それに、ユーカの事もあるしね」

どこかで聞いたことがある。

ドイツ人は時間に厳しい。色々な規則を重んじて、遵法だということを、東海林は聞いたことがある。東海林が思うドイツ人のイメージに、ハンスが合うとは、夢にも思つていなかつたが。

しかし、考えなくともハンスはドイツ人なのだ。

それは、ある意味あたりまえと言つてしまえば当たり前なのだ。

「そう、ですよね」

東海林は言った。「分かりました」

ハンスはそれを聞くと、どこか焦つて「いるような、そんな雰囲気で一度、東海林の方に言葉を喰く。

「君は、何を望むんだい？」

始め、意味が全くと言つていいほどわからなかつた。

分からぬ、と言つよりも、それ自体に意味があるのかどうかすら、東海林には分からなかつた。

何を聞いているのか、東海林には一瞬わからなくなる。

青龍はその質問を聞くと、ハンスの方へと視線を向ける。どこか

細い視線と、それから「こ」か、冷静そうな視線だった。

「望む……？」

東海林は、ハンスに聞いた。

聞いたハンスは、「うん」と東海林に言った。「君は、何を望むんだい？」ハンスは尋ねる。「君は、香奈君を助けて、どうしたいんだい？」

聞いた東海林は、少しばかり黙る。青龍は、面倒くさそうに目を閉じる。

赤龍は、ハンスの方に視線を向ける。東海林は、少しばかり向けて視線を、ハンスの方に細める。

赤龍が代わり、ハンスに言った。

「そんなの、決まつておる」

一瞬、東海林も何が起こったのかわからなかつた。

雄大は、どこかつまらなさそうな雰囲気で、その青い結晶を弄っている。右手の中で、それは確實な鮮やかさを、辺りに放っている。見ると、少しだけさつきと形が変わったような、そんな気もしなくはない。しかし、雄大は細かいことが嫌いだつた。そもそも、細かいことなんて考えてはいられなかつた。考える気も、雄大には起きなかつた。

「……？」

東海林は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、間違いない、と言うような視線で、ハンスの方に視線を向ける。

「……」

小さく、ハンスは赤龍に笑つた。

大介は聞くと、緑龍に小さく尋ねる。「おい、ここ笑つておくべきか……？」と聞いた緑龍は、「ああ……」と困った風に答える。

「言つてごらん」

ハンスは、赤龍に言つた。

赤龍は、その答えに確信を持っていた。それは、確實に赤龍の中で、どこまで行つても東海林だつた。それに、多分それは正しい。

それはきっと、東海林が否定しない限り、正しいと思つ。

赤龍が、そう思つただけだつた。

しかし、赤龍がそう思つたのだ。

「東海林は、」

みんなと一緒にいたいのじや。

それは、あまりにもいつものことで、東海林は逆に、気付いていなかつたのかもしれない。あくまで、過去形は保つてゐる。どこまでも、気付いていなかつた、のだ。

赤龍が帰つて来て、確信が持てた。それだけの事でもあつた。

「…」

東海林は、それを聞いて赤龍に、微笑み返す。赤龍は、東海林の方に微笑んでみせる。いつもよりも、自然な笑みで、それでいて、赤龍の真つ直ぐな、どこか自慢げな視線が、東海林の方へ注がれていく。

「そう、これがいつもだ。」

東海林は思う。

ハンスはそれを聞くと、少しばかり目を細めた。

赤龍と、東海林の間の境界線、と言つ物が、ハンスの中では、よく分からぬ物と化していた。はつきりとしない、そんなぼんやりとした、不自然な形を取つたような、そんなものにハンスは見えた。しかし、そんなことはあくまで、どうでもいいことでしかなかつた。

聞いたハンスは、二人の間を見つめる。間に、意思疎通を越えた、感覚の共有に似たものを、ハンスは見逃さなかつた。

干渉だつたか、それとも適合だつたか。

どれにも当てはまらない気がするのは、ハンスだけだろうか。

「…、そう、かもしれないね」

ハンスは、赤龍に言つた。あくまで、赤龍に。

それを聞いた赤龍は、「そうに違いない」と、ハンスに語った。  
赤龍には、絶対的な確信に似たものを、持っていたのだ。

「かもな」

東海林は、囁くような、そんな口調で赤龍に言った。

そして、ハンスの方に一人（一人と一匹）は視線を向ける。ハンスは、小さく息を吸い込んで、吐いた。

「それじゃあ、俺たちは行きます」

そう言った時、一瞬で空気が凍りつくような、そんな感覚に、ハンスは見舞われた。そこにあるのは、あくまで本当の事。

だから、ハンスも本当のことを言つ。

「…、絶対に、みんなで帰つてくるんだよ」

それは、いつものことにならなかった。

しかし、今日のこの出来事は、いつもの事よりも少し、重いことだつたことは確かだ。ハンスの言葉でさえ、東海林にとつて重かつたのだ。

「…、」

何も言わずに、東海林は振り返つて、「行くぞ、みんな！」と声を張り上げる。持ち合わせてない筈のリーダーシップが、東海林の中で湧き出でくる。そして、みんながリビングから、東海林の後続していく出で行く。

「…、死なないでね」

そこでは、ハンスの声は、非常に小さな声だつた。

## 役を割り分けて担う

ハンスの泊まっているホテルから、楽多祖ヶ谷まではそんなの距離はない。しかし、東海林たちが、楽多祖ヶ谷に詳しいわけもなく、樂多祖ヶ谷の廃工場、と言わざるも、全く分からなかつた。

唯一、畔の記憶の中を覗いた青龍だけは、その廃工場の場所を知つていた。それ以上に、何か重大なことを知つていそうだと思うのは、東海林のせいだろうか。東海林は考えてみる。

曇り、と言うよりは、雨雲に近かつた。朝の予報では、こんなに雲がかかるだなんて言つていなかつたし、そもそも『晴れる』と天気予報は告げていたはずだ。

これが、天気予報の未発展、と言う物なのだろうか。

東海林は、赤龍の背中に乗つていた。赤龍は東海林を背中に乗せて、青龍の後をついて行くように飛んでいく。青龍の上に乗つているのは、雄大とライカン。そして、赤龍の隣を飛ぶように、青龍について行つているのが緑龍だつた。緑龍の上には、勿論大介が乗つている。

東海林は、携帯電話を耳に押し当てる。焦燥感に似たものが、その携帯電話の中から、東海林に伝わつてくる。

『おかげになつた電話番号は、現在電波の届かない場所にあるが、電源が入つていないので、かかりません』

つまり、そう言つことだ。

それ以外に、何もなかつた。

自動音声は、東海林の中で妙な思考に繋がつて行く。しかし残念ながら、その妙な思考が正しいことを、事実が告げている。

香奈は、携帯電話の電源を切つてている。つまり、外からの連絡を絶つてゐる。と言つことは、香奈はいつもの状況にはないということだ。

今、香奈がいつもの状況にはない、と言つことは、ここにいる七人

(三人と四匹) なら、それが何を意味しているのか、すぐに理解できるはずだ。

その一人に、東海林がいた。

東海林は、吐き捨てるような声で、「クソツ」と呴く。そして、少しばかり強引に、携帯電話の電源ボタンを押す。携帯電話に、何も変化がないような、そんな気が東海林にはして、仕方がなかつた。「出ない…ツ」

小さく、東海林は空中に呴いた。誰にも聞こえない程度に呴つと、東海林の喉の奥から、焦りがこみあげてくるのが分かる。

東海林は、香奈に電話をしていた。

それ以外に、電話をする相手もいない。香奈と連絡と取れれば、少しは話し合いになると思ったのだが、それはあくまで、東海林の中の推論に過ぎなかつた。

香奈は、電話に出なかつた。いつもなら、東海林の電話ならすぐに『あら、東海林君』と明るい口調で受話器に話しかけてくれるのに、今日は、そんな様子がなかつた。

「東海林、どうじや」

赤龍は、東海林に聞いた。飛んでいて、風で東海林の声が聞き取れなかつたのか、龍の耳でも、さつきの東海林の声は聞こえなかつたようだつた。

それを聞いた東海林は、少し大きめの声で言った。

「駄目だ、コールしても、留守番になるだけだ」

東海林は言った。

それを聞いた赤龍は、やはり東海林と同じ場所に、たどり着いたようだつた。「それは…、」そこで、赤龍は言葉を止める。「結構ヤバいって、ことじやないのか?」

大介の声が、隣から聞こえてくる。

それを聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。少しばかり目を細めて、真剣そうな視線を、東海林の方へと向けている。東海林の焦りが、更に甚だしくなつていいく。喉が、嫌と言つほど

乾いてくる。腹痛が、東海林の中で襲つてくるような、そんな気分にもなつてくる。

「…、かもな」

東海林は言った。

聞いた緑龍は、東海林の方へ、別の提案する。

「それじやあ、何か、別の連絡手段つて、無いんですか？」

流石の緑龍も、どこか焦つたような雰囲気で東海林に言った。東海林も、その声につられてではないが、冷や汗が頬を伝つていく。

「…残念ながら、ハンスさんがいないからな。もしかしたら、ハンスさんがいたら、何とかなるかも知れないけど」

それを聞いた緑龍は、少しばかり表情を沈める。東海林の方を向くわけではなく、ずっと前を見ている。青龍を見逃してはいけない。

「何か、他の方法は無いのか…」

赤龍は、遺憾そうに言った。

雄大は、さつきから何も言つていない。いつもの雄大ではないよう、そんな雰囲気を、今の雄大は纏っている。それが何なのかは、東海林には分からぬ。

「…」

青龍は、いつも通り無言だった。しかし、雄大はいつも通りではなく、寡黙だった。何処までも、雄大は黙っていた。

ライカンは、何も話すことがなかつた。

後ろで、話し声が聞こえる程度だった。

「と言うことは、」

赤龍が東海林に言った。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、少しばかりではあるが、東海林の方に視線を向ける。

小さく、ふてぶてしく、笑つた。

「急いだ方がいい、と言つことじやな」

極論だった。

その通りだつた。

「この状況下ですることは、電話ではない。それに、話し合いでない。どうやって、香奈を救うかどうか、と言つことだ。それ以外に、何があるわけではない。やることがそれだけだ。

「…」

はつきりした。

思考の低徊は、きっと赤龍がいなかつたから起つたことだ。赤龍がないから、それが東海林に何らかの影響をもたらして、そして、思考が低徊したのだ。

今の東海林に、思考の低徊なんてものは無かつた。

それが、東海林にとつてはつきりした、またははつきりしすぎる物になつた。それは、なんとなく、懐かしいような、そんなものがあつたことは間違いない。

つられてなのかどうなのが、なんてことは、はつきり言って東海林には分からなかつた。しかし、東海林はどちらでもよくて、ただ、赤龍の様に、図々しく、素晴らしい上から目線で小さく笑つた。

「そうだな」

東海林は言つた。

そして、前を見る。ぽつぽつとだが、雨が降り始めている。辺りが、段々と暗くなつていぐ。真っ暗に近い、そんな色だつた。

灰色と、青と、それから黒を、思いつきり濃く混ぜ合わせたような、そんな色だ。

「急がないとな」

雨が、赤龍の上にも、東海林の肩の上にも、小さく振り始めた。

不規則で自然的な、そんなリズムを刻みながら、雨は強さを少しずつ、増していった。不規則さが、心の中で、妙に気持ち悪いような、そんな気分を膨れ上がらせていった。

「いつ、ここで、何が、どうやって作られていたのか、そんなこと

は分からなかつた。香奈が、天野下学に通う前から、ここは廃工場だつた。一時期は、幽霊が出るとかで噂になつたが、それがいつのことだつたか、実はよく覚えていない。香奈が分かることは、一つだけだ。

「ここに、『タンクラス（TANCLAS）』がたまつてゐるといふことだ。

ここは今、タンクラス（TANCLAS）の溜まりになつてゐる。つまり、田の前には、香奈を殺そうとしている奴らが溜まつてゐる建物がある。きっと一人や二人ではない。三人でもないし、もつとそれよりも多い数、と言つことは、なんとなく感覚で理解できいた。マフィアと聞いたら、もしかしたら千人越え、と言つのもあり得るかもしれない。香奈は、かつて聞いたことのあるニュースを思い出す。タンクラス（TANCLAS）ではないが、どこかのマフィアが警察に捕まつて、そのマフィアの人数が尋常ではなかつたことから、報道されたものだ。

そのくらいいるかもしれないし、それよりは少ないかもしれない。しかし、香奈の中で、これだけは言いきれることがあつた。確かにことで、どこまでも、香奈にとつて正しいこと。

「…ここね」

香奈は言つた。

黄龍は、何も言わない。ここが、何なのかと問つことも、はつきり言つてよく分かつてない。分かることは、ここが工場だった、と言つてくらいいだ。

「…」

嫌な予感、とでも言えばいいのか、そんなような変な感覚が、そこにはあふれていた。そこに流れてくる風は、黄龍の体をすり抜け、何かを摩耗させていくような、そんな冷たい流れを持った風だつた。

嫌な予感ではない。

そんな抽象的なものではなく、もつと具体的で、本能的な『嫌な

予感』だった。そこにあるのは、そう語ったものだった。

「…ねえ」

香奈は、語った。

それを誰に語っているのかは、黄龍には分からない。しかし、その言葉が、どのくらい張りつめている物なのか、それはなんとなくではあるが、理解することが出来た。

小さく、香奈は呼吸をした。

「これで、本当に全部、うまくいくと思つ…？」

悲しそうな、そんな感覚でもあった。

黄龍の呼吸が、いつもより浅くなっていた。

緊張ではない。

緊張何ていう、分かりやすく、あまりにも単純なものではない。確かに、緊張もそこには孕まれて居る。空氣そのものが、ここでは張り詰まつたような、そんなものを持っている。

「…」

何も答えられないし、黄龍は、何を理解しているわけでもない。分かつて居るわけでもない。香奈に答えられることは、そこには一つもない。

「本当に、私が頑張れば、東海林君が幸せになれると思つ…？」  
息が詰まつた。

思考が、奔走しているようだつた。まるで何も考えられなかつた。しかしそこには、奔走と冷静の両極端が、奇妙な風に結び合つて、それは妙に、香奈の心を無心にさせた。

「…」

本当に、何もなかつた。

言える範囲も、黄龍が考えられる範囲も、越えていた。

香奈は、何も答えが返つてこないことを承知する。もしかしたら、もともと承知していたのかもしれない。しかし、香奈はそれでも続ける。

「…でも、私はやる。やうなこと、やうやくやうもの

自己満足？

それでもよかつた。それが自己満足だらうが何だらうが、香奈にはどうでもよかつた。ただ、やるべきことがそこにあるだけなのだ。

「…、かも、知れないわね」

それだけは言える。

聞いた香奈は、小さく目を閉じる。息を小さく吸つて、少しだけ目を開ける。辺りは、さつきと同じ、暗い、夕暮れの暗さを越えた闇に、包まれている。

どちらに転んでもいい。いい方に転んでも、悪い方に転んでも。どっちにしても、こうなつてしまつたからには、こうするしかない。こうするしかないし、他に道がなかつた。

偏見？

そんなことは分からぬし、そうであつたとしても、香奈は一向に構わなかつた。

「…、黄龍」

香奈は、黄龍に呟いた。「あなたは、私と一緒にいて、絶対に、後悔しない…？」哀しそうな、そんな口調だった。

風が一瞬止んで、それから、一瞬だけ、時間が止まつたよな、そんな感覚に近かつた。その間、そこには何もなくて、沈黙しか存在していないうな、そんな感覚に近かつた。

黄龍は、口の中に、空気が流れ込んでくるのを感じる。だからどうするわけでもない。

その空気を、黄龍は押し出していく。

「…私は、香奈について行く。そう決めたの」

黄龍は、呟いた。

少しだけではあるが、何故か悲しいような、とてもうれしいような、そんな気がしてならなかつた。そしてまた、あの言葉を呟くつとする。

しかし、その時口を紡ぐ。

香奈は、小さく呟いた。

「後で、ね」

黄龍には、それが何を指しているのか、なんとなく分かったような、そんな気になつて行く。胸の中に何かが詰まつてゐるような、そんな感覚に近い。しかも、これは放つておいたら、どんどん硬化していく、危ない物のような気も、黄龍にはしていた。

しかし、黄龍にはそう答えるしか、出来なかつた。出来ないから、今いつして香奈の隣にいるのだ。

「…」

香奈は小さく息を吸つた。

様々な顔が、田の中で浮かんでくる。目を閉じなくとも、香奈の中では見えてくる。みんなの笑顔が、見えてくる。はつきりとした、真つ直ぐな視線を香奈は向ける。

「行くわよ」

香奈は言った。

言つと同時に、廃工場の門を、一步一步、確実に踏みしめていく。それを聞くと、黄龍もついて行く。それしかできないし、それ以外に何かをしようとも思わない。

門を、ぐぐつた。

そこは、より一層、夜が真つ暗になつたような、そんな雰囲気を見せていた。そして、小さくではあるが、雨が降つてきたのを感じる。小さな雨粒が、小さく振つてくる。予報では、確かに一日中、晴れだつたはずだ。それは夜も同じだ。

香奈の肩に、黄龍の足に、雨は当たる。

香奈は急ぎもせず、廃工場の中に、足を踏み入れていく。さつきよりも、少しずつ重くなつていく。尋常ではない重さの足を、香奈は絶えず、前に動かし続ける。

廃工場に電気が來てゐるわけもなく、その中は真つ暗だつた。しかし、工場と言つ割には、案外簡単なつくりをした工場だつた。こが昔、何の工場だつたのか、なんてことは、香奈は知らなかつた。きっと、そんなに細かな過程を必要としない、おおざつぱなものだ、

としか分からなかつた。

しかし、電源を入れればすぐに機械が起動して、今にも動き出し  
そうなくらい、それは綺麗な形をとつていて、鏽も少なかつた。  
異様な光景、と言つたら異様な光景だし、そうでない、と言つた  
らそうでない光景だつた。自然だし、不自然だつた。  
その時だつた。

「あら、来てくれたのね。うれしいわ」

声が、聞こえた。

今まで聞いたことのないような、そんな声だつたことは間違いない。

声は、香奈の前方から聞こえてくる。聞いた香奈は、目に力を  
入れて、前の方を見渡し始める。

さつきまでいなかつたような、大人数の誰かが、そこにはいた。  
一つ普通ではないところを擧げるとするなら、手に、全員が拳銃を  
持つてゐる、と言つところだらうか。

おそらく、魔銃。

香奈は、それを少しではあるが、察した。

「『タンクラス（TANCLAS）』へようこそ、なんてね」

ふざけるようにして、その人物は言つた。最前列にいる、香奈と  
同じ年くらいの、日系の少女だつた。

「私の名前は板滝 いただき 姫野、よろしくね」

そんな風に、よろしく何て言われても、あまり親近感が沸くよう  
な、そんなほのぼのとした関係にはならない。香奈は思つ。

「一つ確認させてくれる？」

その声の人物、姫野は尋ねた。聞いた香奈は、「何…」と冷たく、  
姫野に言い放つた。

「あなたは、オソノ・ハルセの娘よね？」  
ハツとなつた。

その話を、畔にしたことは無かつた。確かに、香奈の父親は春潮御園だ。外国風に言つたら確かに、オソノ・ハルセとなるかもしない。

しかし、その話は、小学校以上の友人には、したことがなかつた。つまり、香奈の父親の話は、今の東海林たちは知らない、と言つことだ。

黄龍は、香奈が動搖して「」とすぐ気付いた。視線を向けて、香奈の田を見つめる。

「…、何で知つてるの」

声を、少しだけきつくして、香奈はその少女に言つた。  
よく見ると、その団体は全員、少女の集まりだつた。そこに、少年は存在しなかつた。この廃工場にいるのは、よく見ると女だけだ。

「何でつて、何が？」

姫野は言つた。

聞いた香奈は、小さく息を吸つ。そして、姫野の方に田を細める。  
「だから、何であなたが、私のお父さんことを知つてるの…？」  
それを聞いた姫野は、「そんなの、分からない？」と小さく言つた。

「でもそんなことはどうでもいいじゃない」

姫野は言つた。

香奈は、さつきよりも田を細める。「どうでもよくないわ」冷たく、香奈は言つた。

「…、」

「どうかつまらなさそうに、姫野は田を細めた。

「何で、私のお父さんを知つてる…？」

それを聞いた姫野は、「…、あなた、本当に何も知らないみたいね。ジエーンから話しさ聞いてたけど」と小さく呟く。

「まあいいわ、知りたいんだつたら教えてあげる」

姫野は言つた。

香奈は、その声に耳を傾ける。

その声が、嘘をついていようつた口調ではなかつたことだけは、確かだつた。

「オソノ・ハルセは」

タンクラス（TANCLAS）のリーダーだつたのよ？

一瞬、

意味が分からなかつた。

頭が真つ白になつた、とも違つ。何かが、そこにはなかつたのだ。息をすることさえ、香奈は忘れていた。

「……」

香奈は目を見開いて、姫野の方に視線を向ける。少女は、何も問題はない、と言わんばかりの、『よく普通のような、そんな視線を香奈に向けていた。香奈に向けて、少しばかり、自慢げに笑つていた。

「これでわかつたでしょ？」

姫野は言つた。

「あなたが私たちに、狙われる理由」

聞いた香奈は、心の中で思う。そんなことはありえない。

しかし、とも香奈は考える。

香奈の父親、春潮御園は行方不明だつた。

幼いころから、物心つくその前から、香奈の中に御園の記憶はなかつた。覚えてもいないし、だから何なのか、とも香奈には言えてしまう。父親がいないからつて、どうつてことは無い。そう思つていた。

急に、そんな話を掘り返されても困る。

「あのオジサン、本当に嫌いなのよね」

姫野は言つた。

聞いた香奈は、視線を姫野の方に向ける。

「私たちの言つことは無視して、他のマフィアともできるだけ交友を深めて、大きな力をつけようだなんて戯言をぬかしちやつて、みんなから反共が来たわ。そんなことをしたら、『タンクラス（TANCLAS）』としての誇りがなくなるつて。まさかあのオジサン

に、こんなかわいい子がいたなんて、知らなかつたけど」

姫野は言つと、香奈の方に視線を向ける。

「もともと、あのオジサンの子供が、この『タンクラス（TANCI LAS）』のリーダーになるはずだつたのよ。本当は、あなたが『タンクラス（TANCI LAS）』を引き継ぐことになつてたのよね。でもあのオジサン、どんなに聞いても『私には子供はいない』の一点張りで、もうどうしようつもなかつたから、それでみんなの反感が爆発して、」

殺されちゃつたわ。

「あのオジサン」

そんなんに、衝撃ではなかつた。

はつきり言つて、香奈にとつて御園がいてもいなくとも、はつきり言つて関係がなかつた。どうでもよかつたし、そもそも、赤の他人とも割り切ることが出来た。しかし、あまりいい思いがするよくな、そんなものでもなかつた。

「それで、代わりに私がボスになつたわけ。ついでに言つと、私のお父さんはその時、副リーダーだつたわ」

そんなことはどうでもいい。

香奈は思いながら、少しばかりむしゃくしゃするよくな、そんな気持ちを姫野へぶつける。

「だつたら、何で今さら私なんて……」

小さく言つかけた。

その時だつた。

姫野が、「そうなのよー」と香奈へ言つた。声は、どこまでも透き通り、その工場に響き渡る。耳鳴りのよくな、そんな響き方をする。

「あの時あのオジサンが、子供はいない、なんて言つもんだから、みんなそれもある意味信用して、私をリーダーにしたわけよ」  
本気なのか、それとも全くの嘘なのか、それは全く分からなかつた。一体何を言つたがつてているのか、香奈には分からなかつた。

「でも考えてみて」

姫野は言った。

廃工場の中は、息が詰まるような、そんな空氣だった。その空氣は淀んで、さらに悪くなつていぐ。

「もし今、あのオジサンの娘であるあなたがいるつてみんなが知つたら、どうなると思う？みんな、あなたをリーダーにさせようとするのよ？言つてる意味が分かる？」

少しばかりバカバカしくなる。

香奈は思うと、小さく吐息を吐く。

「私は、何と言われようともマフィアのリーダーになんてならない」  
聞いた姫野は、「あなたの方が分かつてないじゃないの」と、どこか呆れて、蔑むような口調で言つた。

「もしいるつて全体に知れたら、それこそ分裂物よ。私もよくは知らないんだけどね、そのオジサンの意見に、賛成だった人たちだつているのよ。でも反対派の方が多かつたし、それにあんな発言をしたもんだから、その賛成派だつて少しは怒つたわけよ。『タンクラス（TANCLAS）』を滅亡させる気か、つてね？」

姫野が何を言いたいのか、いまいち香奈には分からぬ。

しかし、それは香奈に関係がない話ではない。香奈と、大きくかわりがある話だ。香奈は考える。

「でも、あなたが出てきてしまった。最近調べて分かつたんだけどね？私も。それでもし、貴方がいるとばれたら、どうなると思う？賛成派は絶対に、あなたをリーダーにさせようとする。でも反対派は、あのオジサンの娘なんてとんでもない、と思うでしきうね。そこでもう、団体として分裂よ。暴動なんか起きるだらうし、そんなことになつたら、『タンクラス（TANCLAS）』としての誇りも何も、何もないじゃないの。まあ、そもそもマフィアに誇りなんて、なんて思うかもしれないけど。でも私たちにとつてはね、『タンクラス（TANCLAS）』は居心地のいい場所なのよ、とつても。分かつてくれる？」

香奈は考える。

「…そんなの、あなたたちの勝手じゃない」「  
考えて、香奈は言った。

今ここで、その言葉を肯定したら、香奈は殺される。それを香奈  
は、少なからず理解していたからだ。

姫野は「つれないわね…」と小さく呟く。

香奈は、姫野に尋ねるようにして、言葉を放つた。

「あなたの後ろにいるのは何なの」

姫野はそれを聞くと、「ん?」と小さく香奈に答える。そして「  
ああ、」と小さく頷く。

「これは、オジサンの反対派よ。つまり、私を支援してくれるのは。  
それにこの子たちは、私に忠義深いのよ、とっても。だから、ここ  
であつたことを、全部なかつたことにしてくれるので。それだけじゃ  
なくて、みんな私の手伝いまでしてくれるのは? いい子たちだと思  
わない?」

姫野は言った。

そんなことを香奈に言われても、はつきり言つて、いい印象が沸  
くはずもない。そもそも、この廃工場 자체が、あまりいい雰囲気を  
醸しだしてはいない。あるのはよどんだ空氣と、古い機械油の臭い  
だった。

「…」

香奈は沈黙する。そこには、何も音がないわけで阿ない。さつき  
いよりも雨が激しくなつてゐるのか、雨の打ち付けてくる音が、香  
奈の耳には届いていた。非常に、気持ちが悪かつたと言えば気持ち  
が悪かつた。

「と言つことだから、」

姫野は言つ。

香奈は、少しばかり視線をきつくる。姫野の方に、瞬きを忘れて  
見つめる。

「私たちの協力をしてほしこの。いいかしら」

とても、軽い口調だつたということを、香奈は理解した。

それを意味することが、香奈には何なくではあるが、理解をしていた。それは、非常に簡単なことだった。

私たちの協力 私たちの利益になるようなことをしてほしい 御園の子孫を消してほしい 死んでほしい。

簡単なロジックだった。

それが、香奈の中で、ロジックと呼べるものなのかすら、疑問だつた。香奈は思うと、小さく呟いた。

「…拒否するわ」

黄龍は、少しばかり口を窄める。

香奈自身の、鼓動が速くなつていいくのを感じる。香奈は今、自分で緊張していると分かるほどに、非常に鼓動を早くしていた。もしかしたら、緊張している、よりも強度な恐怖だつたのかもしれない。

い。

聞いた姫野は、「あら、そう」と軽く呟く。

香奈はそれを聞くと、小さく「黄龍」と名前を呼ぶ。

黄龍は香奈の田の前に走る。勿論、まだ姫野の、つまらなそうな声は響いてきてはいない。しかし、黄龍は走り出した。

「それじゃあ、仕方がないわ」

一瞬、

銃口が、香奈の方に向けられる。そして、その弾の様な物を、黄龍は自分の爪で弾き飛ばす。

それを合図にでもしたかのように、みんなが一斉に散らばり始める。姫野の後ろにいた少女たちはみんな、姫野の後ろから、一斉に三々五々する。

そして、また別の方向から、銃口を向けられる。そして、香奈がその標準に入る。

銃声がしたと思ったら、その方向にはもう黄龍がいる。黄龍は、一瞬で多方向の銃声を聞き分けて、その方向から飛んでくる弾のようものを、自分の爪で弾き飛ばしているのだ。

これには、限界がある。

どんなことをしても、これは追いつかなくなる。

しかし、黄龍はただひたすら、爪で飛んでくる弾を弾き飛ばす。

黄龍は、自分の感覚が許す限り、自分の爪で、飛んでくる弾をはじき飛していく。それは最終的に、どこへ飛んでいくのかわからない。そんなことは関係ない。

黄龍には、ただひたすら、守りたいものがあるだけなのだ。ただ、守りたいものがあるだけで、ただそれだけなのだ。

何度も何度も、爪で弾を弾き飛ばす。弾き飛ばした後、その弾は消えていく。空中に、解けるようにして消えていくような、そんな感覚がある。

「…」

香奈は、どこか張りつめたような、そんな雰囲気で黄龍を見ている。黄龍の、その必死な顔を見ていると、香奈自身、心が締め付けられるような、そんな気分になつてくる。でも、うれしくもあつた。

黄龍は、香奈について行つてくれる、と言つたのだ。

それを、香奈はしっかりと覚えていた。ただそれだけのことだった。

「あら、やつぱりその子、反射神経いのね」

姫野は、そうつぶやく。そして、楽しそうな表情をして、香奈の方へと拳銃を向ける。そして、引き金を引いていく。その繰り返しだ。

単純だが、黄龍には単純ではない。

時々、一回同時に銃声が聞こえることがある。しかし、何とか黄龍は、両手を使って弾を弾き飛ばしていく。動き回つていて気付くが、まだ、昨日の傷が治り切っていないのを、初めて知る。

そんなことは構つていられないし、構つてはいるだけ時間の無駄だし、そんなことを考えていたら、確実に危ない。

そう黄龍は、頭ではなく本能で考えていた。

その時だった。

「みんな」

その声は、姫野の物だった。

一瞬、聞いてぞっとする。

しかし、姫野はどこか、うれしそうな視線を香奈の方に向けている。みんなはそんな表情を、真っ直ぐ見つめている。

「今思つたんだけど、この際戦力を削いじゃつつていつのはどう?」  
聞いたみんなは、まだ何だか分からぬ、と言つていつのはどう?」  
野に向ける。

姫野は、それについて細かい説明を呴えていく。

「この際だから、あのチヨコマカ動く子の方を、重点的に狙つて  
いつのはどう? そうすれば、必然的にオソノ・ハルセの子だつて、  
あきらめざるを得なくなるわ」

なるほど、と言つ声が小さく上がる。

黄龍は、小さく息を吸い込んだ。

そうか、とも思つ。流石、リーダーは違う、とも黄龍は思つ。確  
かに、今は香奈本人を狙つても、黄龍に攻撃を止められる。しかし、  
黄龍がいなくなつてしまえば、または動けなくなつてしまえさえす  
れば、香奈は、防御が出来なくなる。弾を、防ぐことが出来なくな  
る。つまり、そう言つことだ。

黄龍は思いながら、「……」小さく声を上げた。

あたりを睨みつける。

銃声が聞こえてくる。それは、自分に向かつて。

黄龍は素早く避けるか、それが弾を高速で弾き飛ばすかして、何  
とか回避していく。しかし、とも黄龍は思つ。

気づいた。

本能的に、ではあるが、黄龍はこの時すでに、気付いていた。

これでは、攻撃もくそも何もない。

それだけのことだ。

黄龍は思うが、しかしこの循環は、もう開始されてしまつていて  
かといつて、香奈だけを廃工場の出入口に向かわせるのは、あま

りにもリスクが高すぎる。もし、出入口に向かわせている間にでも撃たれてしまつたら、そこですべて終わりだ。黄龍も、きっと絶望感に打ちひしがれるだろう。

考えたくもないし、考えられなかつた。

黄龍は、香奈の近くを離れないように動き、よけながら、弾を爪ではじいていく。偶に避けることを失敗して、若干のかすり傷を作りが、さつきのと同じだ。

そんなものに構つてはいられない。

何か、

黄龍は考える。

何か、攻撃手段は、ないの…？

考えていても、すぐに弾が飛んでくる。それがどんな方向であれ、飛んでくることには変わりない。

黄龍の思考は、途切れ途切れに、時々リセットされながら、その連鎖をただ繰り返していた。

何か、攻撃手段。

それさえ分かればよかつた。今の黄龍には、それさえ分かるなら、何もかもを投げ出すかもしれない、とも思った。

その時だつた。

銃声が、重なつて三つ。

そんなことは、ほとんどなかつた。しかし、今初めて、その音が廃工場に響き渡つた。

一つは自分の肩の方に、一つは自分の腹に、そしてもう一つは、

香奈の心臓の位置。

つまり、そう言つことだつた。

もしこれに当たつたら、香奈は確実に終わる。つまり、姫野の野望が成し遂げられて、黄龍は暗澹に打ちひしがれる。しかし、香奈を守つたら、黄龍は自分に迫つてくる二つのどちらかしか、防ぐことができない。見た目、一つともよけたら、香奈に当たる。心臓よりは致命的ではないにしろ、かなりの障害を被るのは確かだ。

黄龍は考えて、実行に移すしかないと思つ。

それしかないし、それ以外に何もなかつた。それに黄龍には、ある程度の覚悟くらいは、決まつていた。

決まつていなかつたら、そもそもこんなことないとも思つ。

黄龍は息を潜めつつ、それを実行する。

黄龍は、香奈の胸の前に手を伸ばし、爪でその弾を弾き飛ばす。もう片方の腕で、難ぎ払つようにして、一つの弾を弾き飛ばそうとする。

香奈に弾は届かなかつた。

ほんの一瞬ではあるが、爪に妙な感覚が走つたのを覚えてくる。何かが掠つたような、そんな妙な感覚だつた。

：！

そう、香奈に弾は届かなかつた。

届いたのは、黄龍だつた。

食い込んだのは、腹と、それから肩をそれで、右胸のあたりだつた。

食い込んで、それは肺で止まつたような、そんな感覚があつた。なんとなくではあるが、一瞬で黄龍は、それを実感した。

それとは別に、痛みが黄龍を襲つた。腹から伝わつてくる、何かをひねりつぶしたような、そんな痛みと、それから息苦しさ。

黄龍は、途端に息が苦しくなつていく。視界がグランと大きく揺れ、目の前の色が、若干赤く染められていく。

自分の鼓動が速くなつていくのが分かる。自分が平衡感覚を失つて、床に倒れていくのも感じる。衝撃は、あまり感じない。

黄龍は倒れると、少しばかり目をうつりにする。まだ、黄龍自身が生きていることを実感するが、どんどんと、意識と呼べるもののが飛んでいくのを、ひしひしと感じてもいた。

「黄龍……！」

香奈は、大きく叫んだ。

途端に倒れたような、そんな風にも見えた。

少しばかりじれったいような、そんな気分になつて行く。そんな、妙な気分で、しかも、とてもむしゃくしゃするような、そんなじれつたさだった。

黄龍の左側腹部と、肺のある右胸から、どんどんと血が流れいく。龍だからと言つのがあるからか、少しづつ、流血は止まつて行く。しかし、それでもひどい傷だったからか、氣を失つ程度に、黄龍は地を失つっていた。

「あら、見事命中？」

姫野は、どこか楽しそうな、そんな口調で呟いた。

香奈は黄龍の倒れている場所に体を近づけ、腕で黄龍をゆする。黄龍の目は、しっかりと閉じられている。音を聞いているのかすら、香奈には分からぬ。しかし、香奈は分からぬからこそ、言い続けるしかない。

「黄龍……黄龍……！」

言つが、返事はない。

ただ、声が聞こえてきたのは確かだった。

「あら、なんてかわいそつなかしら」

その声は、姫野の声だった。

香奈は、黄龍をゆすり、「目を覚まして……ねえ……」と、若干涙目を浮かべてこる。それをむらむら、むらむらに姫野は語る。

「見てるだけで涙がじみ上げてくるわ」

それでも、どこかふざけているような、そんな口調であることに、は間違ひなかつた。

聞いた香奈は、姫野の方に目をきつく細める。わたりよりも数段、目を細染めていたことは確かだ。

そんな視線を見ると、姫野は少しばかり悲しそうな表情になる。どこか悲しそうな、笑つてゐるような、そんな表情を、香奈の方に、まっすぐ向ける。

姫野は、香奈に言つた。

「かわいそだだから」

銃を構える。

その表情は、歪んだ笑み。

「あなたから」

殺してあげる。

そして、引き金を引こうとする。引き金はどこか軽く、そしてどこか、ゆっくりと引かれていく。

ある意味で、覚悟をしていた。

覚悟をしていたのは、別に黄龍だけではない。黄龍だけではなくて、香奈も覚悟をしていたのだ。黄龍は、香奈を守るという覚悟。香奈自身は、みんなを傷つけさせないという覚悟。

黄龍が覚悟をするためには、香奈が覚悟を決めなくてはならない。しかし、黄龍が倒れてしまった。

銃が、間近に突き付けられたような、そんな気がして初めて、香奈は理解したのだ。はつきりとした、真っ暗な闇を、香奈は見ることが出来た。

もう既に、自分は黄龍を巻き込んでいる。

はつきりと思つ。だから、今自分に、銃口が付けられれているのだ。黄龍と言つ守り手がいなくなつたから、香奈は防御をできなくなつたのだ。

もつとひどい。

香奈は考える。これは、そんな事よりももつとひどいことだ。

黄龍は、香奈のためにいろいろなことをやつてくれた。しかし、今の自分はどうだらうか。確かに、みんなを傷つけさせないという覚悟が、香奈の中にはある。今もそれは変わらない。しかし、とも香奈は思つ。

黄龍がいなかつたら、黄龍が覚悟をしてくれなかつたら、自分はどこまでも、何もできなかつたのではないのだろうか。

考えることしかできないし、それ以外を、迫られてはいなかつた。しかし、とも香奈は思つ。

もし、あの引き金ひとつで、すべてが終わるのなら。

そもそも『タンクラス（TANCLAS）』が狙っているのは、東海林でも赤龍でもない。香奈に他ならない。理由もやつと、理解出来た。

そう、香奈自身なのだ。相手にもちゃんととした理由があつて、そう言つた行動に出ているのだ。それ以外になんでもない。田的のために動いているだけに過ぎないのだ。

香奈だつて同じだ。

香奈だつて、みんなを傷つけたくない、と言つ理由から、自分が『タンクラス（TANCLAS）』を潰そうと思ったのだ。だからここにいる。

それに、それが一番、みんなが幸せな方法だとも思つた。あくまで、香奈が見ているみんなは、それが一番だと思つていた。

自分も、それが一番幸せだと思つたのだ。

しかし、とその考えに歯止めがかかる。

よく考えてみると、それは『タンクラス（TANCLAS）』の団体に迷惑がかかる。今まで隠匿されてきた存在が、ニュースにあらわになるかもしれない。『タンクラス（TANCLAS）』はもしかしたら、分裂してしまつかもしれない。それはあまりにも、『タンクラス（TANCLAS）』の事情に沿わない。

だが、もしここに香奈が、あの引き金ひとつで消えてしまつたら。香奈は考える。

黄龍には迷惑をかけてしまつたし、非常につらい思いまでさせてしまつた。黄龍から流れ出る血が、香奈の心の痛みに変わつていくよつな、そんな感覚さえあつた。

実際の痛みなんて、分からなかつた。

だから、黄龍と同じように痛みを分かることが出来れば、きっと黄龍だつて報われるはずだ。このまま血がなくなつたら、一体どんなことになるのか、それは分からない。

だから、香奈は思つたのだ。

もしかしたら、引き金を引かれた方が、一番、みんなが笑顔になる方法なのかもしれない。

そう考えた。

その瞬間だつた。

音が、聞こえてきた。それは、何か、楽器の音のような、そんな感覺だ。この音は、バスーンだろうか。香奈は咄嗟に思った。須臾、

バンッ！！

それは、廃工場の出入口が、何かで吹き飛ばされた音だつた。爆薬でもない、クレーンでもない。それじゃあ、一体なんだろうか。みんなは、廃工場の出入口の方に視線を向ける。あの姫野さえ、その方向に視線を、唖然としながら向けていた。

香奈は、小さく息をのむ。そして振り返る。

一瞬、

香奈の心が、何かで締め付けられるような、そんなひどい何かで満たされた。気持ちが悪いほど、視界がグランと揺れる。めまいが起きそうなくらいの頭痛が、一気に香奈を襲つたのだ。それは、香奈の心を貫いた。

そこにいたのは、東海林たちだつた。

東海林は、一瞬その光景を見て焦つたが、まだ香奈の目に光があることを確認すると、少しばかりの安堵が、心中を取り巻いた。そこにいたのは、勿論東海林だけではなかつた。

東海林だけではなくて、雄大や青龍、大介や緑龍、それからライカンがいた。勿論赤龍も。

小さく、東海林は過呼吸しながら、その光景を見つめている。香

奈の足元に広がっているのは、確実な赤色だった。

しかし、見かけ香奈には、外傷がなさそうだ。

「大丈夫！？香奈さん…！」

東海林は言った。

目から、涙が零れてきていた。香奈は、温かすぎるそれが、あまりにも輝いていたのを、歯を食いしばって堪える。

何故ここに来たのか。

そんなことは問題ではない。

今、ここにいる東海林が、どこまでも東海林であることに問題があるのだ。その問題は、絶対解決されない。

「…、東海林…、君」

徐に、香奈は東海林へ呟いた。

姫野はそれを見ると、「ふーん、」とどこか、面白げに言った。東海林はすぐに、手に持っている携帯電話の画面を、ある「マンド」を実行する手前までの操作を行った。

「真打登場？って感じかしら」

姫野は、東海林たちに向かって言った。

「お前か、『タンククラス（TANKCLAS）』とか言うのは」

東海林は言った。

声が出なかつた。しかし香奈は、呟いていた。

姫野はそれを聞くと、「そうよ」何のためらいもなく、そう答えるだけだった。それを聞いた東海林は、少しばかり腹が立つてくる。

「なんでお前は、香奈を狙うんだ」

東海林は少しばかり後悔する。

しかし、今さら言つたことは取り返すことは出来ない。

それを聞いた姫野は言つた。「そんなの決まってるじゃない」と東海林に言つ。「リーダーが恐れるのは、同じくリーダーだけよ

東海林には、その意味がなんとなく理解できていた。

「何で香奈を襲うんだ」

東海林は声を張り上げる。

それを聞いた姫野は、小さく呆れたような、そんな雰囲気でため息を吐く。「ふーん…」「どこか、深いため息だつた。

「あなたつて、国語力ないでしょ」

いきなりそんなことを言わわれても困るし、そんなのはどうでもいい。

東海林は思った。

ただ、東海林はじつと、その方向に睨みを利かせている。姫野は、つまらなさそうにため息を吐いた。

「はあ…、香奈は、元『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーの娘なのよ」

大介は、少しばかり目を大きく丸める。緑龍も同じだつた。しかし、それ以外の人物に、反応は無い。

「でもそのリーダーは、子供を作つてないとか言つておきながら、この様だつたわけよ。今さらそんなのが出てきても、今のリーダーの私にとつては、厄介ごとでしかなつてこと。ただの邪魔に過ぎないのよ。分かる？」

聞いた東海林は、それを聞いた後さらに、そいつに呆れてくる。「だからつて、香奈を殺していい理由にはならないだろッ！」

東海林は声を張り上げた。

聞いた姫野は、小さくため息を吐く。

香奈は、声が出なかつた。あまりにも、息が詰まつたような、そんな感覚が胸の中に溜まり込んで、息をすることさえつらかつた。しかし、小さく声を出す。

その声は、誰にも届かない。

姫野はそれを聞いて、再びため息を吐く。「はあ…」そして、東海林の方に視線を細める。どこか、不愉快そうな視線であったことは確かだつた。

「あなたにはそつかもしれないけどね、私たちにはそつと問題なの」

そう言つと、姫野は視線を改める。少しばかりいたずら氣に笑う

と、姫野は東海林に、少しばかり冷たく微笑む。

「あなたが誰だかは知らないけど、ここで邪魔をされるわけにはいかないのよ。もしこれでわかつてくれないっていうんなら、」

姫野は、銃口をさらに上げる。

狙いは、東海林だつた。今引き金を引いたら、絶対に東海林に当たる。銃が、それ自体を孕んでいた。

そんなことはどうでもよかつた。

今問題なのは、そこで香奈が、傷ついているということだ。それだけだし、それ以外に他ならなかつた。

しつかりとした視線で、東海林は携帯電話のボタンを押す。

それを見た雄大は、バーンを口に咥える。携帯電話が光を帯びる。それを見た姫野は、目を細めた。

「…、」

少しばかり侮蔑したような、そんな視線で東海林を見下すと、その光の中へと、引き金を引いた。

「…！」

ダメツ！

香奈の声が、轟いた。

しかし、それは一瞬にして別の音に置き換わる。銃声だ。

つまり、東海林の方にあの弾が、撃たれたということだ。

一瞬で、何もかもが崩れ去つたような、そんな気が香奈にはした。

これで、もう何もなくなつたような、そんな雰囲気。すぐに消し飛んだ。

光が止み、シルエットがあらわになる。そこにあるのは、さつきまで持つていなかつた赤い、鱗だらけの剣を、鱗だらけの右手で持つた東海林が、そこに存在する。

「…、やっぱり、一筋縄じや行かないみたいね」

姫野は言った。

東海林は視線をきつくする。相手の様子をうかがつているともい

う。

雄大は青いバースーンを構え、青龍は、いつの間にか手にしている透明な剣を、相手の方に向けている。ライカンは、一足歩行だったのが、四肢を地面に、綺麗につけている。どこか、射抜くようなそんな視線を、放っている。

少しばかり、ショールなような、そんな気もしなくはなかつた。  
「全く、変な世の中よね」

姫野は言った。

それを合図にするかのように、姫野は引き金を東海林に引く。

一瞬にして東海林は、その弾を剣で受け流すと、いつもの走るスピードでは考えられないような速さで、姫野の方に駆け抜ける。銃声が、その廃工場に轟く。半端でない数の弾が、東海林に向かつて放たれる。走りながら、東海林は一つ一つをはじいて行く。

走り出したのを見ると、雄大はバースーンを演奏し始める。青龍は水の剣を振りかざし、ライカンは青龍と反対方向に向かつていく。大介と緑龍は、小さくではあるが、通る声で香奈に言った。

「香奈ッ、来いッ」

聞いた香奈は、緑龍と大介の声がした方向に視線を向ける。銃を放っている奴らは、そんな声には目もくれず東海林や雄大に弾を浴びせていた。

香奈は聞くと、少しばかり逡巡する。そして、黄龍の方に視線を向ける。黄龍は、さつきと同じように、倒れている。まだ出血が多いことを、香奈はその時知る。

少しばかり息を小さく吸う。そして香奈は、黄龍を肩に担いで、少しばかり急ぎ足で大介と緑龍のいるところに向かつ。

丁度みんなの死角になつてている場所だつた。ここから聞こえてくるのは、滅茶苦茶に響いた銃声と、それからバースーンの音だけだ。香奈は一瞬、よくあんな場所にいて、あの声が聞こえたな、と感心する。

「黄龍のけがは……？」

緑龍が、香奈に聞いた。

それを聞いた香奈は、口を堅く紡ぐ。そして、肩に担いだ黄龍をあおむけに寝かせる。

腹から、滅茶苦茶な出血をしている。見ると、肺のあたりからも出血していることが分かる。緑龍は、小さく息をのむ。そして、首筋に指をあてた。

そして、納得する。

「まだ大丈夫…」

小さく言うと、香奈は少しばかり目を丸くする。

緑龍は、黄龍の方に手を重ねる。そして小さく目を閉じる。辺りに、新鮮な風がまとつてくるのが、香奈でもわかる。

その風は、黄龍に柔らかく纏い、傷口を優しくなでていく。どんどんと、傷口が直つて行くように、香奈は見える。

「…！」

涙が零れそうな、そんな勢いだった。しかし、声が出せないことを踏まえると、香奈は、あえて涙を流すことを堪えた。

「何とかこれで、応急処置は出来ましたけど、まだ、黄龍を起さないでくださいね？」

緑龍は言った。

それを聞いた香奈は、少しばかり疑問そうな、そんな視線を緑龍に向ける。

緑龍は、小さく微笑む。黄龍に微笑んだようにも見えだし、香奈に微笑んだようにも、それは取れた。

「だつて、起きたら一人とも、きつと東海林さんと参戦してしまうでしょ？少しばかり、自重お願いたします」

緑龍は言うと、大介の方に視線を向ける。

大介は、黄龍の首筋に手を軽く当てる。「異常はないな、ちょっと脈が弱いけど」と大介は言つ。

「ちょっと、

だつたら、大丈夫かもしれない。香奈は思える。ちょっとなら、

黄龍を今から起して、自分のごたごたに巻き込まれてしまった東海林を、助けることが出来るかもしれない。香奈は考えてしまつ。しかし、思いとどまる。

さつき言われたばかりだつたことを、香奈は思い出す。黄龍は今、かなり体力を削つてしまつたのだ。今黄龍に必要なのは、十分な休養だ。

それを、香奈は十分に理解していた。

香奈は小さく息を吸うと、「分かつた」と黄龍に言つた。そして小さく、こうつぶやくことにした。

まだ終わつてはいない。

しかし、終わつていないからと言つて、言つてはいけない言葉ではない。

「…ありがとうね、黄龍君…」

どこか、心温まる言葉だつた。

それを聞いた黄龍は、少しばかり顔を朗らかにする。そして、香奈にこうつぶやいた。「そもそも、それが僕の役割ですし。けがをしたらこうつぶやく、ここに来て手当をする。きっと銃声で、みんな聞こえないでしょ？」黄龍はどこか、あつけらかんと言つた。

しかし、次の言葉は、少しばかり深かつた。

「それに、当然のことをしたまでです」

どこまでも黄龍は黄龍は黄龍で、それ以外の何物でもなかつた。

なんとなく、懐かしいような感覚を仄めかせながら、ライカンは走つていた。相手を錯乱させるようなそんな感覚でライカンは走つてた。

ライカンに向けて、銃を向けてきているのが数人。

しかしその数人とも、ライカンたちと同じく、ライカンを狙つように、と役割を言い渡された奴らだのだ。

ライカンは考える。全く、進歩しないな。

思いながら、東海林のない方に走つて行く。それからどんどん

と、どこか嘲笑しながら、どんどんと別の方に視線を向かわせていく。

咄嗟に身を屈めると、その弾は、仲間の体を少しばかり掠るようにして、通りすぎていいく。

「キヤツ！」

声が聞こえてくる。ライカンに、罪悪感は無い。

そもそも、殺していないだけましだと思う。ライカンはいつも、無感情さに身を任せているわけではなかった。

しかし、ライカンは走らなければならなかつた。走りながら、何かをするといふことも可能なのだ。ただそれだけで、それが人出来ない、と言つだけのことだ。ライカンは考えながら、再び身を屈める。

そして、若干の悲鳴が聞こえてくる。

ライカンは、なんとなく懐かしいような、そんな感覚で走つているだけに過ぎない。ただ、そう言つた役を割り振られた、と言つだけともいえる。

雄大のバースーンは、青龍の力を補佐していく。音がする度に、その水の剣は形状を変えて、そして相手に切りかかる。

しかし、水だからと言つこともあるからか、それが物を切る、と言つところには至らない。ただ『その痛みを擬似的に与えている』に過ぎないのだ。どちらかと言つと、効果は幻術に近い。

青龍は、少しばかりつまらなさそうに、弾が来ているのを見る。時々、雄大の方にも弾が行くことを認識しつつ、青龍は水で、防御を固めていく。幾つも同時に、水を操るのはそんなに難しい話でもない。雄大がいれば、簡単にできる話だ。

銃声とともに、青龍の脳が素早く反応する。水がバリアのような働きをして、その弾は形を失う。なんとなく変な感覚はしていたが、特に気にすることは無い。そう思いながら、青龍は更に、水で人の『痛覚を刺激』していく。ただそれだけだ。

痛みを受けた奴らは、その痛みに悶える。

まだ死なないだけましだ、と青龍は思いながら、別の方に視線を向ける。そこからも、別の銃声が聞こえてくる。見ると、ライカンがちよろちよろと動き回って、仲間が撃つている弾を使って、そのまま相手を攻撃しているような、そんな戦法をとっていた。

少しばかり気にくわないが、まあいい。

青龍は心中で思いながら、銃声を聞く。自分に向けられたものだ。

容易に察知すると、バースーンの音が聞こえてくる。そのまま水が、バリアのように働いて行く。

「……」

少しばかり視線を細めて、青龍はそいつらに水の剣を向ける。そいつらの顔に、恐怖も何もなことが、何となく青龍には分かる。とりあえず、東海林に危害を加えさせなければいいだけのことだ。青龍は考えながら、駆け抜ける。その人の波の中を潛り抜けて、痛覚だけを刺激していく。ただそれだけだ。

本当に切つたりはしない。甘いことに。

青龍は、つまらなさそうな表情をしながら、人に『痛覚』を『え』していく。どんどんと、人が悶え倒れていく。

「青龍やる~」

雄大は、どこかふざけたような口調で、青龍にそう言った。

聞いた青龍は、雄大の方に一瞬視線を向けると、東海林の方に視線を向ける。

東海林の太刀筋を、何とか姫野は避けていく。そして、隙のよつな場所に銃を向け、引き金を引く。

それに反応して、東海林はすぐに剣をその方向に向ける。一体何分経つたのか、東海林には気になつて仕方がなかつた。それに、赤龍が痛がつていなかどうか。

香奈が、傷ついていいかどうか。

東海林には、気になることばかりだった。

「あなた、随分やるのね」

姫野は言った。

聞いた東海林は、姫野を睨み返す。少しばかり、姫野はどんな反応をしていいのか、よく分からなくなつてくる。

仕方なく、姫野は更に銃口を向ける。

そして、どんどんと弾を撃ち出してくる。東海林はそれを、避けて、持つている剣ではじき返す。

さつきから、同じことの繰り返しだ。

姫野も東海林も、気付いていた。さつきから何一つ、お互にがやつていることが変わつていい、と。

これ以上の発展は、期待できない、と言つことだ。

姫野は少しばかりつまらなさそうに、そして面倒くさそうな視線をしながら、東海林の方に拳銃を向ける。引き金を引くころには、もう既に、そこには東海林はいなくなつてている。別の方向から、東海林の剣が風を切り、それを姫野がよける。

面倒くさくなつてくる。

姫野は思うと、いつたん手を擧げる。

「待つて、」

聞いた東海林は、剣を構えたままだつた。もしここで、剣を下した状態で引き金なんてひかれたら、たまつたものではない。そういうことだ。

「…、随分と用心深いのね」

少しばかり姫野はがつかりする。

そして、東海林に説明するよつに、呴いた。

「これじやあ埒が明かないわ。私が撃つてあなたが防いで、そしてあなたが切つて私がよける。こんなんじや、いつまでたつても何も変わりはしないわ」

言つているのが、マフィアのリーダーだということを、東海林は忘れてはいられない。

さつきから、警戒を怠つてはいない。

しかし、姫野の視線は本当だった。しかも、その視線が真っ直ぐなものだつたということを、東海林が理解できないはずがなかつた。

「だから、一騎打ちしましょう？」

一瞬、

東海林には、姫野が何を言つてゐるのか分からなかつた。「一騎打ち…？」と東海林は言つ。『とな…？』と赤龍が、どこか気楽そくな雰囲氣で言つた。

「そう、今のは序の口だけど、私の本氣の弾がよけられて、銃が壊されたら私の負け。あなたが銃に打たれたら、私の勝ち。まあ、私が勝つたらあなたたちを、多分打ち殺すでしそうけれど」

脅しているのか、それがどうなのかは分からなかつた。

しかし、姫野の視線は、冗談めいてはいなかつた。表情はどこか、いたずら氣な笑みを孕んではいるが、視線に、そんなものは混ざつていなかつた。

まざりつけのない、純粹な。

思つと、東海林は尋ねる。

「どこで」

聞いた姫野は、「工場の外。この辺りは住宅地でもなんでもないわ。ただたくさん工場があるだけ。だから、外でどんちゃん騒ぎしても、気付かれはしないわ」

姫野は言つた。

東海林は、それでも警戒を怠る氣はさらさらなかつた。そもそも警戒を怠つたら、その時点で姫野に打ち殺されそうで、そんな気がして、東海林は警戒を怠れなかつた。

「…、条件がある

東海林は言つた。

聞いた姫野は、少しばかりつまらなさそうな表情を東海林に向ける。「何かしら」と姫野は尋ねる。

手に、汗のようなものが伝つていく。しかし、それが汗ではない

と分かると、少しばかり気持ちが悪くなつてくる。しかし、それは仕方のないことだった。

「もし俺が外に出て、その瞬間にお前が俺を殺したり、隙を見て攻撃はしないことだ。勿論他の奴も同じ」

東海林は言った。

少しばかり、姫野は口を窄める。「それだけ?」と東海林に尋ねる。これは、聞いてみる価値がありそうだ。

「絶対に姑息な手は使わない。もしお前が姑息な手を使つたら、俺は容赦しない」

聞いた姫野は、どこか意外そうな口調で尋ねる。「あら、それじゃあ今までのは、容赦があつたってことかしら?」「どこかいたずら気な、そんな口調。

東海林は、黙つてはいない。

「勿論、容赦はしてない。今度は、その容赦のなさを向ける相手を、変えるだけだ」

東海林は言いながら、横田で、銃を撃ちあつてている少女たちを少しばかり見る。勿論、警戒は怠つていらない。それはビンビンと、赤龍の中に伝わってきた。息が詰まるくらいの、警戒だつたことを、赤龍は理解している。

「…」

姫野は、少しばかり目を細める。

「…、分かつたわ。条件を飲みましよう」

姫野は言った。少しばかり、面倒くさいような、そんな気しか姫野にはしていなかつた。それは仕方のないことかもしれないが、姫野にとつて、面倒くさいことこの上なかつた。

東海林は警戒を解かない。姫野は外に、一歩ずつ踏み出してく。そして、ときどき東海林の隙を伺うが、そこに隙なんてものは存在しない。姫野は、とてつもなく面倒くさい相手と、戦いを挑んでいるようだった。

姫野は思つ。

廃工場の門の前に歩いていくと、東海林の方に振り返る。東海林は、さつきから、どこから取り出してきたのかよく分からぬ剣を、鱗だけの手で持っていた。勿論、構えている。

姫野には、それが変なものにしか見えなかつた。

東海林は、姫野が立ち止まつた瞬間に、警戒を強めた。

視線はきつくなり、東海林の目には姫野しか映つていない。しかし、周りの音が東海林には聞こえてくる。それは、面白いくらい、誰がどこにいるのか、手に取るように分かつてしまつた。

「随分と、鱗だけなのね。あなた」

姫野は言つた。

聞いた東海林は、それを聞き逃した。ただ、どこかに流れて言ったような言葉だ。

雨が、降つていた。

しかも、土砂降りだつた。

しかし、そんなことに構つていられるような余裕は、どこにも無かつた。今油断したら、絶対に大変なことになる。ある種の緊張と、恐怖だつたのかもしれない。

「：随分と、冷静なのね。殺されるかもしれないのよ？」

聞いた。

姫野の声だつた。

東海林は、無感情に言い返すだけだつた。

「もう、そんなことは承知の上だ」

もう全員、分かつてゐるはずだ。

雄大は、はつきり言つて分かつてゐるのかどうだかわからないが、しかし、大介や緑龍、青龍やライカンは、それを理解してついてきた、と東海林は考へてゐる。

だから東海林は、何もためらつてはいない。だから、真つ直ぐ見つめているだけなのだ。視界が悪いことこの上なかつた。

後ろからは、銃声が聞こえてくる。ただ、それが東海林に向けら

れたものでないだけだ。もし今、東海林に弾が向けられても、東海林はそれに反応できる自信があった。どこからか、バスーンの音も聞こえてくる。そう言えば、雄大はバスーンを使ってたな。

東海林は思つ。

思うと、東海林は再び姫野の方に視線を向ける。姫野は、さつきからあまり話していない。笑みも、あまりよくはない。

少しばかり、睨まれいるような、そんな感覚に近い。

しかし、それはお互い様、と言う物だ。東海林も、姫野を睨んでいる。姫野が睨む前から、それはずっとそうだった。

雨の音が、ますます増していくような、そんな気がしてならなかつた。

とても、重々しい雨が、東海林の肩に打ち付けていた。真つ暗な世界に、真つ暗な雨だつた。廃工場だつた。

東海林は、小さく息を整える。

真つ直ぐと、相手をただ見つめている。相手がいつ、攻撃を仕掛けてくるか、それが分からぬ。しかし、ここでは不意打ちをした方が有利となる。つまり、不意打ちを取つた方が、勝つ確率が高くなる、と言うことだ。

しかし、とも東海林は考へている。

剣と言うのは、不意打ちをするとき、かなり大振りな動作を、遅かろうが早かろうがしなければならない。いくら東海林が速かつたとしても、いくら、赤龍の力を借りて早くなつていても、東海林に、不意打ちを取ることは難しかつた。

しかし、

拳銃は、簡単だ。

ただ相手に向けて、引き金を引けばいいだけなのだ。それですべてが終わる。ジ・エンドだ。しかし、それをよけられたらそこでもまた、引き金を引けばいい。

どちらが有利か、

東海林は冷静だつた。

姫野は、東海林の方にゅっくりと、銃口を向ける。東海林は、姫野を見つめている。

「…、」

冷たく滯った時間が、そこに流れしていく。雨だけが、どんどんと東海林の肩に当たつては、流れしていく。そう、雨だけが。

一瞬だった。

姫野は東海林に引き金を引いた。

つまり、そういうことだつた。

東海林は姫野を見ていた。しかし、不意打ちを仕掛けようなんて気はさらさらなく、東海林は、姫野が攻撃をするのを待っていたのだ。

こちらから攻撃してしまつと、姫野に隙を突かれるのはまず間違いない。経験の差だ。

しかし、こちらにも経験と言つ物がある。

東海林は、じつと待つていただけだ。

今の東海林なら、きっと後ろから飛んできた弾も、剣で弾き返すことが出来る、そう本気で思つたからこそ、東海林は姫野の弾をよけることが出来た。

剣で弾き返したりはしない。

時間が一気に流れ出す。

東海林は駆け抜ける。雨の中を、通り抜けるようにして、東海林は姫野の方に駆け抜ける。姫野は、それを見ながら引き金を引き続ける。東海林は少しばかり隙を作つた。それは、端つている際に仕方のないことだった。

流石に、リーダーは他の奴と違う。

東海林は思いながら、前から飛んでくる弾を剣で弾き返す。一つが東海林の頬をかすめる。東海林は、顔色一つ変えない。

「…、」

あら、面白いじゃないの。

姫野は心の中で、小さく呟くだけだった。

東海林は大きく、剣を振る。

銃声が鳴る。

剣を振り下ろす。

少しばかり、鈍痛を感じたことは間違いない。東海林の手に、命中とまではいかないが、かすめたよりも大きな感触が、一気に東海林へと伝わつて行く。

少しばかり、東海林は顔をしかめるが、東海林が剣を奮うことはもう間違いないことだつた。

「…」

まあ、いいかしら。

姫野は思った。

小さく田をつぶつた。

姫野の銃が、東海林の剣で粉々になつた。

「…？」

『…ぬ』

姫野も、赤龍もその東海林の行動に疑問を持つた。しかし東海林は、それ以外にすることを、考えすらしなかつた。東海林の考えていたことは、うまく言つたのだ。

「…、あなた、どういう…」

本当に驚いたのは、初めてかもしない。姫野は思いながら、東海林の方に視線を向ける。東海林は、姫野の方に、さつきよりは幾分朗らかな、そんな視線を向けていた。

「俺、思うんだ」

東海林は言った。

「はつきり言って、今香奈が、マフィアのリーダーになんてなりたくない、って言えば、それで全部おしまいになる話だと思うんだ。今はお前がリーダーなんだし、きっとどんなやつだって、仕方がないと思うさ。今、お前がリーダーなんだからな」

東海林の右手が、光で包まる。

東海林の手に握られているものは携帯電話で、東海林の隣にいるのは、赤龍だつた。東海林の携帯電話は、開いているのに、全く光を放つていなかつた。

電池が切れたのだ。

しかし、そんなことははつきり言つて、問題にすらなりはしなかつた。問題なんてものではない。そんなの、はつきり言つてありえない。

東海林が、あまりにもはつきりとした、そんな解決策を提案したからだ。

「お前もそう思うだろ？」

東海林は聞いた。

赤龍は答える。

「うむ！勿論じや」

聞いた東海林は、少しばかり顔を沈ませる。「かーっ」東海林は言つ。

「お前の声のせいだ、雰囲気が台無しだな……」

聞いた赤龍は、「むッ……」と小さく呟く。「それは、東海林が赤龍を必要としていない、ということかの？」

いじけたような、それかいたずら気な口調だつた。

聞いた東海林は、少しばかり目を細めて、赤龍の方に視線を向ける。東海林は答える。

「そーかもなー」

東海林は言った。

赤龍は、少しばかり視線を沈ませる。東海林には分からぬ程度に。

その瞬間だつた。

「お前がいなかつたら、こんな野暮で、危なつかしくて、」

こんなにスリリングな場面には、出合えなかつたよ。

一瞬、赤龍は顔を上げる。

東海林の顔は、止んだ雨と、顔を出したで、いつもよりかは輝いているように見えた。

「…ッ」

途端に、何と言つていいのか分からなくなる。

赤龍は、こう言つた場面に遭遇したことがない。はつきり言つて、何と言つていいものか、赤龍には分からぬ。

「…全く、東海林はいつまでたつてもあほじやな。そんなことを、わざわざ赤龍が聞くとなんて思ったか。今のは付加疑問文と言つ奴じや」

強引に、

しかしどこか楽しそうに、赤龍は言つた。

「…」

姫野は、面倒くさそうな、そんな感覚で見つめるしかなかつた。

そこに声が響いた。

「やめ！」

それは、姫野の声だつた。

その声が、廃工場に響き渡つた。そして、それはとても、どこか穏やかな声だつたことは、確かだつた。

聞いた一同は、姫野の方に視線を向ける。姫野は、面倒くさそうな視線をしながら、仕方がない、と言つような雰囲気で、廃工場の中に入つてくる。勿論、びしょ濡れだつた。

東海林たちも、姫野の後に続いて、廃工場の中に入つてくる。東海林は、周りを見つめる。訳が分からぬ、と言わんばかりの表情を、青龍や、緑龍や大介は向けていた。雄大とライカンは、特に何の感情も、抱いている風には見えなかつた。

「オソノの娘はいるかしら？」

姫野は言った。

一瞬、香奈の背筋に冷たいものが走る。さもざまな思考が、頭の中で巡つて行く。黄龍が、少しばかり目を固く閉じる。

「…」「

香奈は、黙りながら東海林の方に視線を向ける。

東海林は赤龍と一緒に、どこまでも、すがすがしい顔をしていた。香奈は、一瞬何が何だか、よく分からない。どうしてそんな顔をしていらっしゃるのか、香奈には不思議でならなかつた。

しかし、東海林は香奈の方に視線を向けると、小さく微笑む。

一度、頷く。

さらに、香奈の中では意味が分からなくなつてくる。

姫野は、辺りを見回してもう一度、香奈に言った。

「出てきて頂戴、言つてほしいことがあるの」

姫野は言った。

そんなことを言われたら、更に出て行きたくなくなるのは、きっと氣のせいではない。香奈の中で、確實な警戒心が、組み立てられていく。

しかし、

香奈の方に向けられている、東海林の笑顔の意味が分からない。

香奈は思いながら、小さく吐息を吐いた。そして、小さく息を飲み込む。大介は、香奈の方に視線を向ける。

「一体、どういう…」

緑龍が、小さく呟いた。

香奈は立ち上がり、姫野の方に歩いて行く。東海林の姿が、しつかりと自分の視界に入つてくる。

そして、姫野の姿も香奈の視界に入る。

小さく息を飲み込んだ。

姫野は、少しばかりつまらなさそうな、そんな視線を香奈に向ける。香奈は、少しばかり警戒を解こうとは思えなかつた。

姫野は、香奈に言つた。

「あなたに言つてほし」ことがあるんだけれど、いいかしら?」

聞いた香奈は、「…、何」と小さく呟く。

聞いた姫野は、はつきりとこつ尋ねた。

「私は、『タンクラス(TANCLAS)』のリーダーになるつもりはない、つて」

何を言つているのか。

一瞬、香奈には分からなかつた。しかし、香奈は別に、それを言うこと自体に抵抗を覚えているわけではない。香奈は、別に『タンクラス(TANCLAS)』のリーダーにも、そもそもどんなマフィアのリーダーにもなる気がないのだから。

「…駄目?」

姫野は聞いた。

聞いた香奈は、「それを私が言つたら、どうなるの」と尋ねる。

「あら、随分と警戒心が旺盛なのね」姫野は、小さく呟いた。

「あなたは、『タンクラス(TANCLAS)』の後を継ぐ権利がなくなる。そして、私たちから狙われる理由がなくなる、つてところかしら?」

それは、色々な意味で、寝耳に水だつた。

はつきり言つて、そんなことを言え、だなんて、言われたことは無かつた。少なくとも、姫野には、殺すか殺されるか、するかされるかを覚悟していた。

「よく考えたら、簡単な話なのよね。あなたがリーダーになりたくないっていうんなら、きっと他のメンバーだつて、納得するはずよ。それが、オジサン推進派だつたとしてもね?だから、そうなれば私たちは、もう無駄な労力を使わなくていいわけ。分かつた?」

香奈は聞いた。

話としては通つてゐるし、矛盾もしてない。香奈も、はつきり言つてその通りだと思える。しかし、どこか引っかかる。

そのわだかまりの解き目に、東海林がいることを香奈は理解する。

東海林が、つまり『タンクラス(TANCLAS)』のリーダー

である姫野と、交渉をしたのだ。

喉の奥から、言葉が詰まる。

しかし、それは仕方のないことだった。あまりにも仕方のないことで、それが一番の解決策だと分かっているのだけれども、それが香奈にはどうしても納得することがうまく出来そうもなくて、逆に、心の中の靄のような変な気持ちの悪いものが、もくもくと煙のよう立ち込めていくだけだった氣もしなくてはなかった。

しかし、それは、最善の策だった。

要するに、お互に誤解していただけなのだ。ただ、それだけなのだ。

「どう？」

姫野は聞いた。

なんとなく、悲しくなつてくる。

しかし、それは仕方のないことなんだとも思つ。

最善の策に従つまでだ。香奈は、自分に言い聞かせた。

「…、私は、」

『タンクラス（TANCLAS）』のリーダーにはならない。

はつきりと、香奈はそう言つた。

言つただけで、それに感情がこもつていたかどうか、それはまた別問題だった、と言つことを、香奈だけは理解できていた。

「聞いた？みんな」

姫野は言つ。

全員は、姫野の方から視線を変えない。ただ、どこまでも淡々としているだけだ。姫野はとも、すがすがしいような、どこか癪なような、そんな表情をしていた。

「これで、リーダーは私になつたわ。いつも通り、いつもの場所に集合すること！」

姫野がそう言つて、手を宙に擧げる。姫野は手をたたく。

一瞬にして、『タンクラス（TANCLAS）』のメンバーがいなくなり、そこには姫野だけが残つていた。

どこか面倒くさそうな、そんな表情をしながら、姫野は言った。

「全く、どこまでも癪ね、あなた」

姫野は言つ。

それは東海林に向けられたものだつた。

そんなことを言われても、東海林には何が癪なのか、全く分から

ない。小さくではあるが、東海林は息をのんだ。

「そんなのお前の勝手だ」

そう言つた時だつた。

その時には、姫野はもう既に、そこにはいなかつた。もつとつくに、廃工場を出て行つた後だつた。

東海林にも、どこか癪な気分が移つた。

雨が止んでいたが、それは東海林には、もつ既に意味がないことだつた。

## 申し訳ないよつな、そんな気分

結局、いつになつてしまつた。

結果としては、いいことなかもしれない。香奈は考える。しかし、それ自体が持つ本質は、香奈にとっては、非常につらいものに他ならなかつた。何故、あんなことになつてしまつたのか、それ自体が、香奈を不安感に陥れた。

今もまだ、香奈は不安に打ちひしがれているも、同然だつた。

東海林と軽い挨拶を心無く交わし、香奈は、どこまでも頭の中で取り巻いて行く、よく分からぬ物に苛まれていた。

黄龍は、香奈の肩に担がれて、香奈は、自室に向かつていった。今のところ誰にも会つていなかつて、きっと大丈夫だろつ。香奈は思ひながら、自室のドアを開けて、そして、黄龍を床に寝かせると、自分はベッドの上に倒れ込む。

泣きたくなつてくる。

香奈は、どうしても泣きたい気持ちになつてくる。当たり前だつた。

自分自身で決めたことを、何一つ守れなかつたのだ。

何が他人を傷つけたくないだ。何が他人を巻き込みたくないだ。

何が笑顔だ。

香奈は思ひながら、ベッドの上でうつぶせになる。枕が、何かで湿つて行くよつな、そんな感覚を覚える。心も体も、どんどん悲しくなつてくる。

「…」

香奈は、言葉なく呟いた。

ただの靄だつた、と言えばそつなるかもしれない。香奈は思つ。もしかしたらただの靄なだけで、そんなのは言葉ではなかつたのかもしれない。

自分の目の前にあるのは、どこまでも真つ黒で、どこまでも暗澹

でひしめき合つた、そんな絶望にも似たものだつた。全くと言つていいほど、もう香奈には、周りが見えていなかつた。もしかしたら香奈は、もう何も、見えないかもしだい。

そう考えた。

香奈は、泣いていた。

泣きたくなつてゐるのではなく、泣いていた。

じりえきれない、申し訳ないような、そんな気分が、自分の中から流れ出していく。東海林の顔が、香奈の中で笑つてゐる。東海林の顔が、あまりにも輝いていて、香奈には咽かえりそうなくらい、それは微笑んでいた。

香奈は、小さく息を飲んだ。

そして、小さく顔を上げた。

田の前にあるのはただの壁で、東海林ではない。

それを理解すると、再び自分が、本当に馬鹿だと思えてきて、本当に嫌になつてきた。香奈は、香奈の中でどこまでも、馬鹿だつた。小さく、しゃくりあげた。

香奈は、泣いていた。

悲しくて、悔しかつた。東海林に、会わせる顔がなくなつてしまつた氣が、そんな氣がした。それが、香奈には悲しかつた。

「…」

小さく、しゃくりあげる。

その時だつた。

「…、どう、したの…？」

黄龍の声だつた。

氣絶から、回復したのだ。

香奈はそれを知ると、小さく黄龍の方に視線を向ける。しかし、香奈は香奈のままだつた。香奈は、黄龍の声を聞いてゐるにもかかわらず、小さくしゃくりあげた。

香奈は、どこまでも申し訳なかつた。

どこまでも、香奈は謝罪するしかなかつた。

「…、私…」

香奈は言つた。

「どうやつたら、東海林君に顔を合わせる」とが出来るの…？」

聞いた黄龍は、少しばかり息を詰まらせて、顔を上げる。香奈の顔が、ベッドの中に沈んでいて、その顔を見ることが出来ない。

香奈は、続ける。

「私…、東海林君を笑顔にしたかつただけなのに…、なのに、…私…、巻き込んでしゃつた…、巻き込んでしゃつた…」

さらに、小さく息をのむ。もつ自分が、しゃくりあげていることすら、香奈にはよく分からぬ。

「私、だれも傷つけたくないと思つたのに…、東海林君に、迷惑かけちゃつた…、…どうすればいいの…」

香奈は言つた。

真つ暗だつた。その先は、ただ真つ暗だつただけだつた。香奈にとつて、その先は真つ暗だつた。日の前すら、香奈にとつては真つ暗で、何もないと同然だつた。はつきりと言える。もう、自分の目の前は真つ暗で、さつきまで見えていたものすら、見えなくなつてしまつたみたいだ。

しかし、声は聞こえた。

「…、何、的外れなこと、言つてゐるのよ…」

それは、黄龍の声だつた。

聞いた香奈は、はつとなつた。そして、黄龍の方に視線を向ける。さつきまで、床でどぐろを巻いていたくせに、今は床の上に、ちよこんと座つてゐる。しかし、その黄龍の視線は、どこか空うだつた。それでも黄龍は、座つていた。

「…、」

香奈は、悲しそうな視線で、黄龍の王に視線を向ける。黄龍はただ、香奈の方に視線を向けている。ただ、それだけの話だ。

「東海林は、香奈のことが心配だつたのよ。みんなそう。香奈が思つてゐるよつに、東海林だつて…、香奈のことを考えているのよ。

そうでなかつたら、香奈があそこにこもつて気付けなかつたもの

黄龍は言つた。

「…、でも」

香奈は言つた。

涙を浮かべながら、香奈は、枕の方に顔をうずめようとする。

「私は、東海林君を、関係ないことに巻き込んで…、それで…」

香奈は言つた。

黄龍は言つた。

「…、香奈が巻き込んだんじゃないわ」

はつきりと。

香奈は、その言葉の意味が理解できる気がしなかつた。黄龍は、何を言いたがつていいのか、それすら香奈には、よく分かつていなかつた。

「東海林は、自分から香奈を助けに行こうと思つたの。だから、香奈は何もしていいし、これについては、誰のせいでもない。香奈のせいじゃないわ、」

絶対に。

黄龍は言つた。

もう、訳が分からなかつた。何と言つていいのか、香奈には分からなくなつてきていた。はつきりと、もう香奈の中で、意味不明な文字の羅列が、さつきから右から左に流れていくようにも見えた。しかし、それは徐々に、香奈の中で翻訳されていく。

「…、私は、どんな顔をして…、東海林君と会えばいいの…？」

香奈は言つた。

聞いた黄龍は、少しばかり視線を細める。

小さく黙ると、黄龍は、少しばかり小さく息をつく。黄龍は小さく、どこか呆れるような雰囲気で、香奈に言つた。

「…そんなの、」

いつも通りでいいじゃない。

…

…ツ！

香奈は小さく、しゃくりあげた。また、枕が少しだけ湿ったのを、香奈は感じた。そんなことは関係なくて、香奈の中では、さつきよりも妙な感覚が、どんどんと膨れ上がつて行くを感じた。ただそれだけのことだつた。

「香奈のいつもの顔が、東海林のお気に入りのはずよ……？」

黄龍は言つた。

一瞬の出来事だつた。

黄龍が、あまり体調がよくない、と言つともあってなのか、香奈の動きについて行くことが出来なかつた。いつもなら、どんなに早くても、銃の弾くらいなら田に見えるはずなのに、その香奈の動きは、全くと言つていいほど見えなかつた。それに、黄龍はそれに、気付もしなかつた。

香奈はベッドから降りて、黄龍にしがみついていた。

泣いていた。

肩にうずくまって、小さくしゃくりあげながら、香奈は涙を流していた。黄龍には、それがあまりにも、一瞬の出来事のよつな、そんな感覚に近かつた。

香奈は、声を少し枯らして言つた。

「…ありがとう…ツ、黄龍ツ…」

香奈は言つた。

黄龍はそれを聞くと、また小さく、どこか呆れたよつな、そんな雰囲気で香奈に言つた。

「それは、もう少し先…」

小さく、どこかいたずら気に、自分の肩で泣いている香奈に、小さく言つた。さつきと違つ、どこか温かいものが、香奈の中であふれたのは、確かなことだつた。

蒼空にはたくさんの星が輝いて、大きな月が光つていた。何処にもいかないそれは、海に映りながら、何か別の物を、影のように、

光り輝かせながら、映し出していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9761w/>

---

蒼空への扉.GGM

2011年9月23日19時28分発行